埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第239集

上尾市

稲荷台遺跡

埼玉県総合リハビリテーションセンター増設工事用地内

埋蔵文化財発掘調査報告

2000

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

稲荷台遺跡調査区遠景

稲荷台遺跡第65号住居跡出土遺物

序

埼玉県総合リハビリテーションセンターは、障害の早期発見・早期療養、そして障害者の社会的生活能力の向上を目的として、昭和57年３月に開設されました。

その後、平成６年３月に、リハビリテーション医療の需要増大とその内容の多様化に対応するために、病床を増設し、専門医療体制を一層整備して、現在の埼玉県障害者リハビリテーションセンターとなりました。

このたびは、リハビリテーション医療に対する社会的な需要のより一層の増大にともない、利用者の利便性を高めるために、隣接地に新たに駐車場の増設を行うこととなりました。

埼玉県総合リハビリテーションセンターの事業地内には、稲荷台遺跡の所在が確認されており、過去３回の発掘調査が行われています。今回の駐車場増設工事に当たっても、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむをえず記録保存の措置を講じることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県の委託を受けて実施しました。

今回報告します稲荷台遺跡は、上尾市の南西に位置する遺跡であります。

発掘調査の結果、稲荷台遺跡では縄文時代早期の炉穴、古墳時代の前期の住居跡等が検出され、縄文土器や土師器をはじめとするさまざまな遺物が発見されました。稲荷台遺跡から発見された古墳時代の住居跡は、千六百年以上前の人々の生活をうかがい知ることができるものです。

これらの成果をまとめた本書を埋蔵文化財の保護・普及の資料として、また、学術の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県健康福祉部障害福祉課、埼玉県総合リハビリテーションセンター、上尾市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成12年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒　井　　桂

例言

1．本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。
遺跡名：稲荷台遺跡（注記略号INRDI）
所在地：上尾市大字西貝塚148－1番地他
指示通知
平成10年1月7日付け　教文第2－175号
遺跡コード番号：14－066

2．発掘調査は埼玉県総合リハビリテーションセンター駐車場建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3．発掘調査は当事業団の新屋雅明・田中広明が担当して、平成10年1月1日から平成10年3月31日まで実施した。
整理報告書作成作業は大屋道則が担当し、平成11年11月1日から平成12年3月31日まで行った。

4．写真は発掘調査時の撮影を各発掘担当者が行い、遺物の撮影は大屋が行った。

5．出土遺物の実測は、縄文時代早期の土器を金子直行が、中期の土器と石器を上野真由美が、古墳時代の土器を石坂俊郎と大屋が行った。

6．本書の執筆は、Ⅰ－1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、縄文時代早期の土器を金子が、中期の遺物を上野が、古墳時代の遺物を石坂と大屋が、他を大屋が行った。

7．本書の編集は、資料部資料整理第一担当の大屋が行った。

8．本書にかかる資料は平成11年度以降県立埋蔵文化財センターが保管する。

9．本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。
上尾市教育委員会

凡例

1．X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。

2．縮尺は原則として以下のとおりである。

全測図	1：500	住居跡	1：60
竪穴状遺構	1：60	土　壙	1：60
溝　跡	1：80　1：160　1：320		
炉　穴	1：60		
縄文土器実測図	1：4		
縄文土器拓影図	1：3		
石器実測図	1：3		

3．全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。

住居跡	SJ	土　壙	SK
炉　穴	FP	溝　跡	SD
ピット	P		

4．遺物観察表の凡例は、以下の通りである。
計測値が（　）で囲まれたものは、推定値を示す。
胎土は、以下の記号で示した。

A石英	B白色粒子	C長石
D角閃石	E赤色粒子	F黒色粒子
G雲母	H片岩	I白色針状物質
J砂粒	Kチャート	L小礫

焼成を、風化具合から次のように判断した。

1硬質で緻密なもの	2良好なもの
3普通のもの	4やや不良なもの
5軟質で脆弱なもの	

5．遺物の赤色塗彩は実測図の網掛けで表現した。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
図版目次
表 目 次
I 調査の概要 …… 1
1．発掘調査に至る経過 …… 1
2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
3．発掘調査、整理・報告書作成の組織 …… 3
II 遺跡の立地と環境 …… 4
III 遺跡の概要 …… 8
IV 縄文時代の遺構と遺物 …… 10
1．竪穴状遺構 …… 10
2．土壙 …… 12
3．炉穴 …… 20
4．ピット群 …… 33
5．遺構外出土遺物 …… 34
V 古墳時代の遺構と遺物 …… 42
1．住居跡 …… 42
VI 中世から近世の遺構 …… 65
1．溝 …… 65
VII 結 語 …… 69

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図 …… 4
第2図 周辺の遺跡 …… 5
第3図 稲荷台遺跡の調査区 …… 6
第4図 稲荷台遺跡既調査範囲全体図 …… 7
第5図 稲荷台遺跡D区全体図 …… 9
第6図 第1・2号竪穴状遺構 …… 10
第7図 第1・2号竪穴状遺構出土遺物 …… 11
第8図 第1～15号土壙 …… 13
第9図 第16～23号土壙 …… 15
第10図 第1～5号土壙出土遺物 …… 16
第11図 第6～17号土壙出土遺物 …… 17
第12図 第23号土壙出土遺物 …… 18
第13図 第1・2号炉穴群 …… 21
第14図 第3号炉穴群 …… 22
第15図 第4～9号炉穴 …… 23
第16図 第1号炉穴群出土遺物(1/2) …… 24
第17図 第1(2/2)・2号(1/3)炉穴群出土遺物 …… 25
第18図 第2号炉穴群出土遺物(2/3) …… 26
第19図 第2(3/3)・3号(1/4)炉穴群出土遺物 …… 27
第20図 第3号炉穴群出土遺物(2/4) …… 28
第21図 第3号炉穴群出土遺物(3/4) …… 29
第22図 第3(4/4)・4・5号炉穴出土遺物 …… 30
第23図 ピット群 …… 33
第24図 遺構外出土遺物(1/6) …… 36
第25図 遺構外出土遺物(2/6) …… 37
第26図 遺構外出土遺物(3/6) …… 38
第27図 遺構外出土遺物(4/6) …… 39
第28図 遺構外出土遺物(5/6) …… 40
第29図 遺構外出土遺物(6/6) …… 41
第30図 第60号住居跡出土遺物(1/2) …… 42
第31図 第60号住居跡 …… 42
第32図 第60号住居跡出土遺物(2/2) …… 43
第33図 第61号住居跡 …… 43
第34図 第61号住居跡出土遺物 …… 44
第35図 第62号住居跡出土遺物 …… 44
第36図 第62号住居跡・遺物出土状況 …… 45
第37図 第63号住居跡 …… 46
第38図 第63号住居跡掘り方 …… 47
第39図 第63号住居跡出土遺物 …… 47
第40図 第64号住居跡・掘り方 …… 48

第41図　第64号住居跡出土遺物……………………48
第42図　第65号住居跡・掘り方……………………49
第43図　第65号住居跡出土遺物……………………50
第44図　第66号住居跡　…………………………51
第45図　第66号住居跡出土遺物……………………51
第46図　第67号住居跡　…………………………52
第47図　第67号住居跡遺物出土状況　……………53
第48図　第67号住居跡出土遺物……………………53
第49図　第68号住居跡　…………………………54
第50図　第68号住居跡出土遺物……………………54
第51図　第69号住居跡　…………………………54
第52図　第70号住居跡　…………………………55
第53図　第70号住居跡出土遺物……………………55
第54図　第71号住居跡　…………………………55
第55図　第72号住居跡　…………………………56
第56図　第72号住居跡遺物出土状況・掘り方　……56
第57図　第72号住居跡出土遺物……………………57
第58図　第73号住居跡　…………………………58
第59図　第74号住居跡・掘り方……………………59
第60図　第74号住居跡出土遺物……………………59
第61図　第75号住居跡・遺物出土状況・掘り方　…60
第62図　第75号住居跡出土遺物……………………61
第63図　第76号住居跡　…………………………62
第64図　第76号住居跡出土遺物……………………62
第65図　第77号住居跡・掘り方……………………63
第66図　第77号住居跡出土遺物……………………63
第67図　第78・79号住居跡　………………………64
第68図　第79号住居跡出土遺物……………………64
第69図　第１号溝跡　……………………………65
第70図　第２・３号溝跡　………………………66
第71図　第４・６・７号溝跡………………………67
第72図　第５・８号溝跡　………………………68
第73図　周辺の遺跡(1)　…………………………70
第74図　周辺の遺跡(2)　…………………………71
第75図　稲荷台遺跡出土野島式土器　……………74
第76図　稲荷台遺跡出土鵜ガ島台式土器　…………75
第77図　野島式新段階から鵜ガ島台式への変遷図…77
第78図　稲荷台遺跡と周辺地域の出土土器(1)……80
第79図　周辺地域の出土土器(2)　………………89
第80図　周辺地域の出土土器(3)　………………90
第81図　稲荷台遺跡出土の台付甕　………………91
第82図　稲荷台遺跡全体図…………………………92
第83図　遺構分布詳細図(1)　……………………93
第84図　遺構分布詳細図(2)　……………………94
第85図　同時焼失住居の配列
（左：月の輪平遺跡　右：尾山台遺跡）…96
第86図　稲荷台集落の土器群　……………………98

図版目次

図版１　調査区全景
調査区全景

図版２　第１・２号竪穴状遺構
第５号土壙遺物出土状況
第８～14号土壙
第23号土壙
第１号炉穴群
第１号炉穴群遺物出土状況
第１号炉穴群出土遺物
第２号炉穴群

図版３　第３号炉穴群
第４号炉穴群
第６号炉穴
ピット群
第60号住居跡
第60号住居跡遺物出土状況
第61号住居跡
第61号住居跡出土遺物

図版４　第62号住居跡
第62号住居跡遺物出土状況
第62号住居跡出土遺物
第62号住居跡出土遺物
第62号住居跡出土遺物
第63号住居跡
第63号住居跡出土遺物
第64号住居跡

図版５　第65号住居跡
第65号住居跡遺物出土状況
第65号住居跡出土遺物
第65号住居跡出土遺物
第65号住居跡出土遺物
第66号住居跡
第66号住居跡遺物出土状況
第67号住居跡

図版６　第67号住居跡遺物出土状況
第67号住居跡炭化材出土状況
第67号住居跡柱穴断面
第68号住居跡
第68号住居跡出土遺物
第69号住居跡
第70号住居跡
第71号住居跡

図版７　第72号住居跡
第72号住居跡遺物出土状況
第72号住居跡出土遺物
第72号住居跡出土遺物
第73号住居跡
第74号住居跡
第75号住居跡
第75号住居跡遺物出土状況

図版８　第75号住居跡出土遺物
第75号住居跡出土遺物
第76号住居跡
第77号住居跡
第１号溝跡
第２号溝跡
第３号溝跡
第４号溝跡

図版９　第１号竪穴状遺構出土遺物 表
第１号竪穴状遺構出土遺物 裏

図版10　第２号竪穴状遺構出土遺物 表
第２号竪穴状遺構出土遺物 裏

図版11　第４号土壙出土遺物 表
第４号土壙出土遺物 裏

図版12　第５号土壙出土遺物 表
第５号土壙出土遺物 裏

図版13　第12・13号土壙出土遺物 表
第12・13号土壙出土遺物 裏

図版14　第１号土壙出土遺物
第23号土壙出土遺物

図版15　第１号炉穴群出土遺物(1/2) 表
第１号炉穴群出土遺物(1/2) 裏

図版16　第１号炉穴群出土遺物(2/2) 表
第１号炉穴群出土遺物(2/2) 裏

図版17　第２号炉穴群出土遺物(1/2) 表
第２号炉穴群出土遺物(1/2) 裏

図版18　第２号炉穴群出土遺物(2/2) 表

第２号炉穴群出土遺物(2/2) 裏

図版19　第３号炉穴群出土遺物(1/2) 表
第３号炉穴群出土遺物(1/2) 裏

図版20　第３号炉穴群出土遺物(2/2) 表
第３号炉穴群出土遺物(2/2) 裏

図版21　遺構外出土遺物(1/9) 表
遺構外出土遺物(1/9) 裏

図版22　遺構外出土遺物(2/9) 表
遺構外出土遺物(2/9) 裏

図版23　遺構外出土遺物(3/9) 表
遺構外出土遺物(3/9) 裏

図版24　遺構外出土遺物(4/9) 表
遺構外出土遺物(4/9) 裏

図版25　遺構外出土遺物(5/9) 表
遺構外出土遺物(5/9) 裏

図版26　遺構外出土遺物(6/9) 表
遺構外出土遺物(7/9) 裏

図版27　遺構外出土遺物(8/9) 表
遺構外出土遺物(9/9) 裏

図版28　第62～65号住居跡出土遺物

図版29　第65～72号住居跡出土遺物

図版30　第72～75号住居跡出土遺物

図版31　第60～62号住居跡出土遺物

図版32　第65号住居跡出土遺物

図版33　第67～72号住居跡出土遺物

図版34　第72～77号住居跡出土遺物

図版35　第60～65号住居跡出土遺物

図版36　第65～77号住居跡出土遺物

表目次

表１　遺構名異動一覧表
表３　住居跡属性一覧……………………………………91
表２　ピット群を構成するピットの一覧表　………33

表１　遺構名異動一覧

調査時	報告時	内容
第１号不明遺構	第１号炉穴群	縄文時代早期の炉穴
第２号不明遺構	第２号炉穴群	縄文時代早期の炉穴
第３号不明遺構	第1号竪穴状遺構	縄文時代早期の竪穴状遺構
第４号不明遺構	第2号竪穴状遺構	縄文時代早期の竪穴状遺構
第５号不明遺構	第３号炉穴群	縄文時代早期の炉穴
第６号不明遺構	第４号炉穴群	縄文時代早期の炉穴
第１号土壙	第１号土壙	縄文時代中期の土壙
欠番	欠番	
第３号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第４号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第５号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第６号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第７号土壙	第５号炉穴	縄文時代早期の炉穴
第８号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第９号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第10号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第11号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第12号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第13号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第14号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第15号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第16号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第17号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第18号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第19a号土壙	第６号炉穴	縄文時代早期の炉穴
第19b号土壙	変更なし	縄文時代早期の土壙
第20号土壙	第７号炉穴	縄文時代早期の炉穴
第21号土壙	第８号炉穴	縄文時代早期の炉穴
第22号土壙	第９号炉穴	縄文時代早期の炉穴
第23号土壙	変更なし	縄文時代中期の土壙

調査時	報告時	内容
ピット群	変更なし	縄文時代早期のピット群
第60号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第61号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第62号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第63号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第64号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第65号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第66号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第67号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第68号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第69号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第70号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第71号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第72号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第73号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第74号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第75号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第76号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第77号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第78号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第79号住居跡	変更なし	古墳時代の住居跡
第１号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第２号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第３号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第４号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第５号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第６号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第７号溝跡	変更なし	中世から近世の溝
第８号溝跡	変更なし	中世から近世の溝

I　調査の概要

1．発掘調査に至る経過

埼玉県では、健やかで安心して暮らせる自立生活の推進を目指して、リハビリテーション提供体制の整備を進めている。

特に高齢化の進展や障害の重度化など需要増大に対応するため県総合リハビリテーションセンターの整備・充実が急務となっており、その一環として同センター内に駐車場建設が計画された。

埼玉県教育生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成２年６月18日付け障福第534号で、埼玉県健康福祉部障害福祉課から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成２年７月18日付け教文第448号で、稲荷台遺跡の取扱について次のように回答した。

1　埋蔵文化財の所在

工事予定地内には以下の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

名称(No.)	種別	時代	所　在　地
稲荷台遺跡 (14-066)	集落跡	縄文 古墳 平安	上尾市大字西貝塚

2　取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の３の規定に基づく文化庁長官当ての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施期間である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と障害福祉課及び文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成10年１月１日から３月31日までの期間で実施することになった。

埼玉県知事から文化財保護法第57条の３の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、調査に先立ち、第57条１項の規定による発掘調査届けが財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

稲荷台遺跡

平成10年１月７日付け　教文第２－175号

(文化財保護課)

2．発掘調査・報告書作成の経過

調査

稲荷台遺跡の調査は、平成10年1月1日から平成10年3月31日まで行った。調査面積は約2800㎡であった。

調査にあたっては、掘削廃土を場内処理する必要から、調査区を北東部と南西部に2分割して順次調査を行った。期間の前半に北東部、後半に南西部の調査をそれぞれ実施した。

発掘調査の実施経過は、以下のとおりである。

本格的な調査に先立って、平成9年12月に準備を行った。

12月上旬には、作業の開始に際して、調査方法・日程に関して埼玉県総合リハビリテーションセンターとの打ち合わせを行った。また、隣接地の家屋調査も実施した。

12月中旬には現場事務所のユニットハウスを設置し、重機による調査区北東部の表土掘削を開始した。また、調査区内に基準杭・方眼杭の設置を委託して実施した。

1月上旬、補助員による作業を開始した。

遺溝精査を行ったところ、北東部には古墳時代前期の住居跡が密に分布することがわかった。また、縄文時代早期の炉穴群、近世の溝などが確認された。

調査区内の表土中には、縄文時代早期後半の条痕文系土器が分布していた。

1月中旬から下旬にかけて降雪の影響を大きく受けながらも、北東部の遺構精査を行った。

2月上旬から中旬には遺構の掘り下げ、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影、平面図作成などを行った。

調査区内の主体的な遺構は、縄文時代早期の炉穴群・包含層、古墳時代前期の住居跡などであった。縄文時代の土壙、近世の溝なども検出した。

2月中旬に調査区北東部の航空写真撮影を委託して実施した。

航空写真撮影終了後、調査区南西部の掘削を開始するために、南西部に積み上げた掘削土を調査区の北東部に移動した。

2月下旬、南西部の遺構精査を実施した。

南西部からも縄文時代早期の炉穴群、古墳時代前期の住居跡が確認されたが、遺構分布の主体は北東部にあったことが明らかとなった。南西部には近世の溝が集中して確認された。

3月上旬から中旬には確認した遺構について、順次、精査・測量等を行った。また航空写真撮影を委託して実施した。

3月下旬、遺構の写真撮影、平面図作成を終了した。現場事務所の撤去・器材搬出を行い、3月末日をもって、稲荷台遺跡に関する発掘調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成11年11月1日から平成12年3月31日まで実施した。

整理・報告書刊行の経過は、以下のとおりである。

11月、遺物の確認・水洗・注記、遺構図面の確認・整理を開始した。

12月、遺物の接合・復元を行った。土師器については、復元が終了した個体から順次実測を開始し、機械実測と手実測を平行して行った。縄文時代早期の土器片は拓影図を作成し、断面の実測を行った。遺構図面については、必要な修正と編集を加えながら、第二原図の図化を行った。また、土層注記についても入力を行った。

1月、遺物図面、遺構図面のトレースをおこなった。遺物図面については、トレース後に50～67%縮小して、版組用の原稿とした。遺構図面については、トレースを終了したものから順次、インレタ、スクリーントーン、各種シールの張り込みを行った。

2月、遺構図面・遺物図面の版組を行い、その後に、図版の大まかな割付を行った。平行して原稿執筆も開始し、順次割付に挿入した。遺物については、石膏復元と着色が終了した個体から写真撮影を行った。

2月末、随意契約を行った。

3月、入稿の後、校正作業を行い、写真図版の印刷時に立ち会った後、3月末に本書を刊行した。

3．発掘調査、整理・報告書作成の組織

主 体 者　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進

管 理 部

専門調査員兼経理課長	関野　栄一
主任	江田　和美
主任	福田　昭美
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中　裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚　雄二

調 査 部

調査部長	谷井　彪
調査部副部長	水村　孝行
調査第二課長	杉崎　茂樹
主任調査員	新屋　雅明
主任調査員	田中　広明

(2) 整理事業（平成11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓

管 理 部

管理部副部長兼経理課長	関野　栄一
主任	福田　昭美
主任	腰塚　雄二
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中　裕二
主任	江田　和美
主任	長滝美智子

資 料 部

資料部長	高橋　一夫
専門調査員兼資料部副部長	石岡　憲雄
主任調査員	大屋　道則

II　遺跡の立地と環境

稲荷台遺跡は、ＪＲ高崎線上尾駅から南西に約５km ほど離れた、上尾市大字西貝塚148－1番地に所在する。遺跡は、大宮台地の西縁部にあり、西側眼下には、荒川と入間川が併流し、約３km南で合流している。

大宮台地西縁部は、荒川に注ぐ小河川による開析谷が樹枝状に発達した複雑な地形が見られ、稲荷台遺跡も、北側を湧水を源とする中堀川、南側を同じく湧水流による支谷に挟まれて南西方向に突出する舌状台地のほぼ先端部に立地している。遺跡付近の標高は、海抜15ｍ前後であり、荒川低地との比高差は約６ｍである。

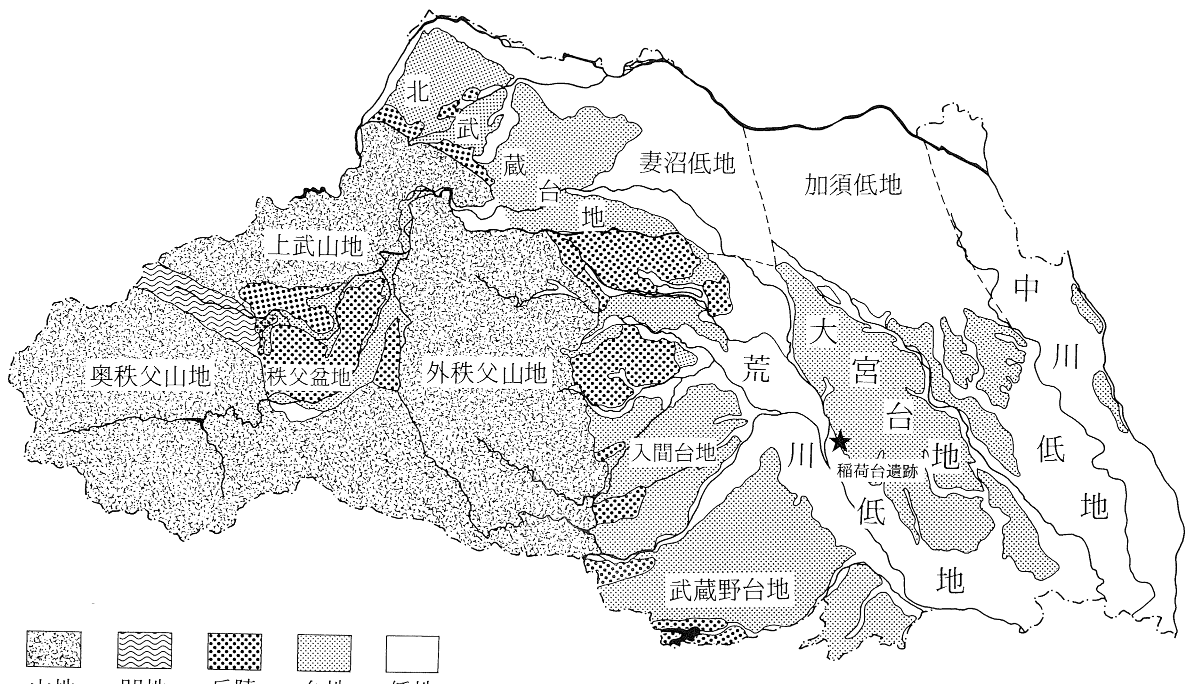
稲荷台遺跡の現在までの調査では、縄文時代早期鵜ガ島台式期の炉穴群、ヤマトシジミ主体の貝層を伴う土壙、縄文時代前期関山式期の集落跡、古墳時代初頭の集落跡、五領式期末の住居跡、平安時代の集落跡等が検出されている。以下では、周辺の遺跡の状況について概観する。

縄文時代早期では、稲荷台遺跡の北西約200ｍ、中堀川の開析谷の対岸には、縄文時代早期末に形成されたヤマトシジミを主体とする平塚貝塚が所在する。また、遺跡の南西約50ｍには、早期茅山期の住居跡内でヤマトシジミ単独の貝層が検出された、薬師耕地前遺跡が所在する。

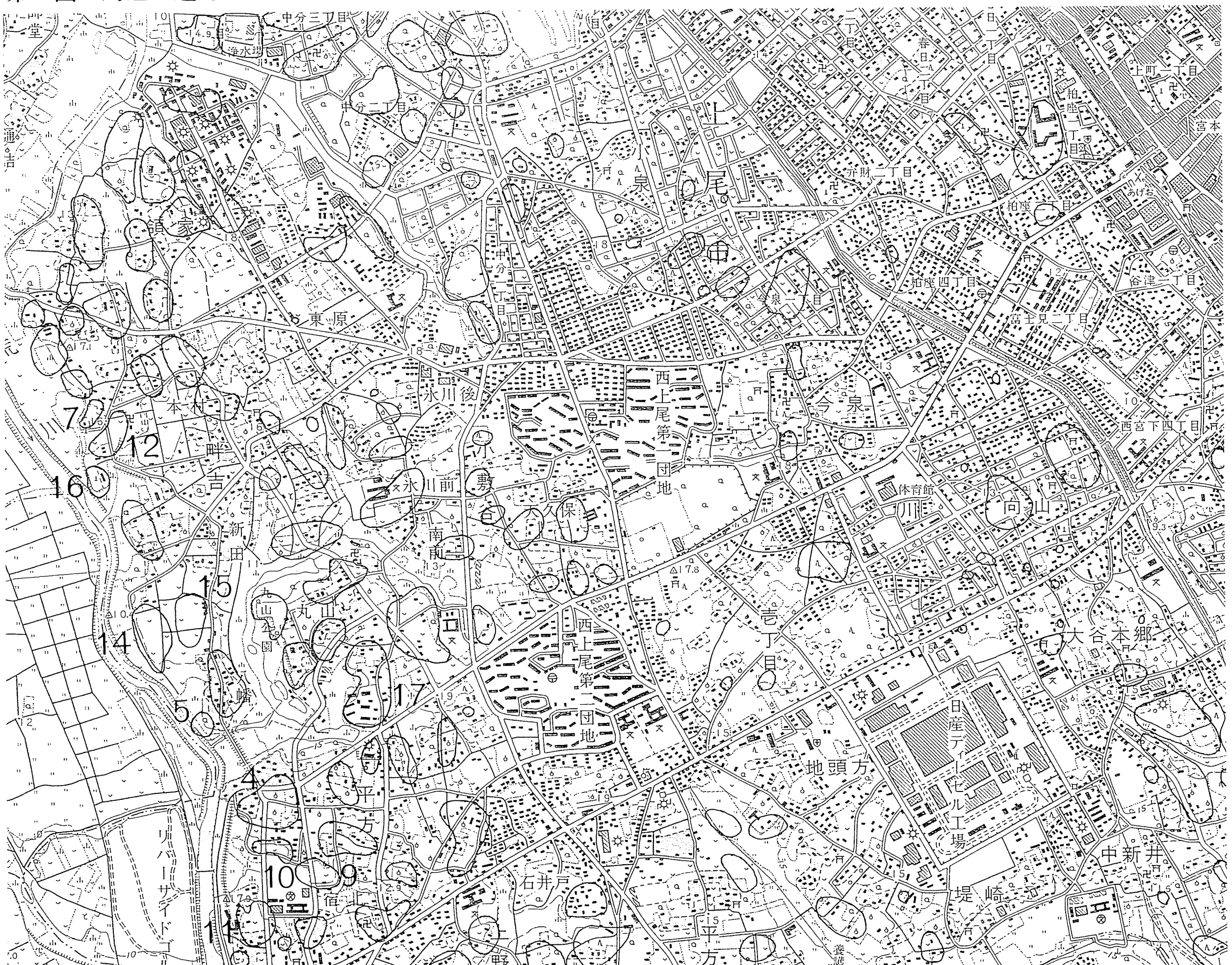
縄文時代早期後半の条痕文系土器群を伴う集落跡等についても貝塚と同様に、その大半が荒川低地及びその支谷に臨む場所に立地している。野島期では、天沼遺跡で住居跡が検出されている。鵜ガ島台期では、殿山遺跡で住居跡と炉穴群が、桶川市狐塚遺跡で住居跡が、それぞれ検出されている。茅山期では、薬師耕地前遺跡、大宮市Ｃ－26遺跡、桶川市小在家遺跡で住居跡が検出されている。

弥生時代終末から古墳時代では、薬師耕地前遺跡の方形周溝墓群に先行する集落跡、雨沼Ｉ遺跡の集落跡等が見られる。畔吉遺跡では、稲荷台遺跡よりも若干先行する住居跡が３軒検出されている。薬師耕地前遺跡の方形周溝墓群は、稲荷台遺跡とほぼ同段階と考えられる。雲雀遺跡の住居跡及び殿山遺跡の方形周溝墓群は、稲荷台遺跡に後続する段階のものである。

第１図　埼玉県の地形図



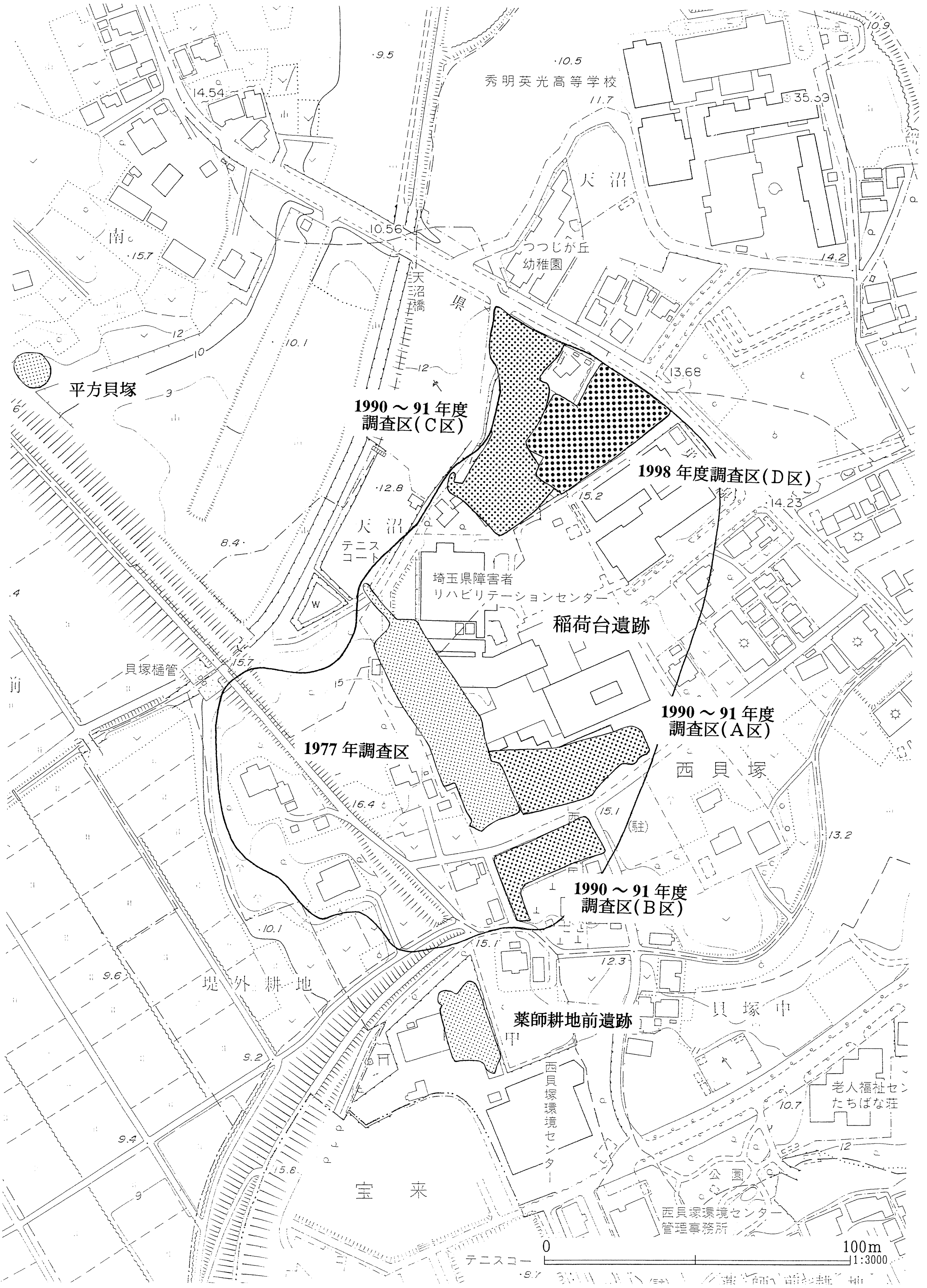
第２図　周辺の遺跡



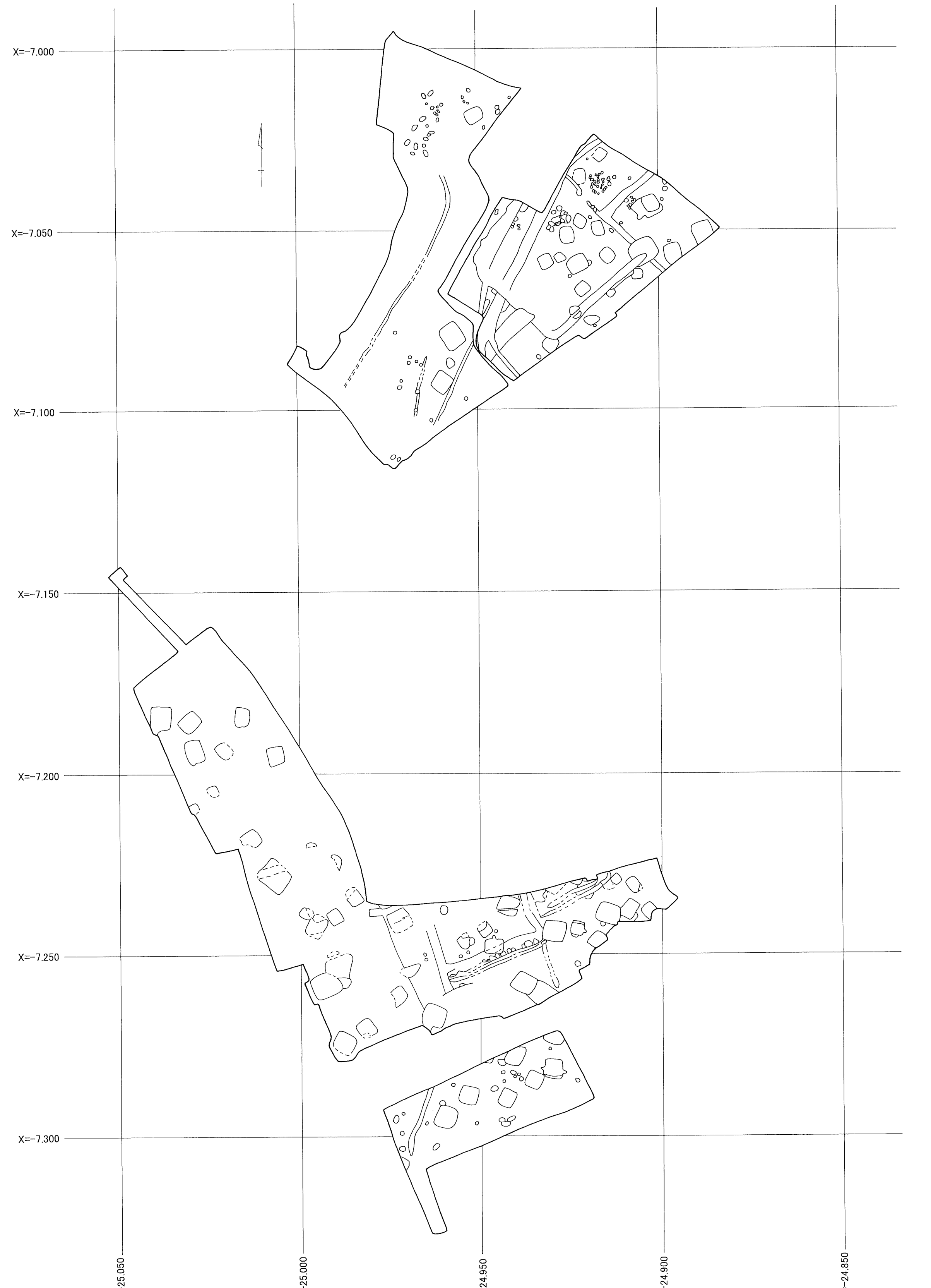
周辺の遺跡

１．稲荷台遺跡　２．平方貝塚　３．薬師耕地前遺跡　４．箕輪貝塚　５．畔吉貝塚　６．天沼遺跡
７．殿山遺跡　８．大宮市Ｃ－26遺跡　９．宿北II遺跡　10．箕輪II遺跡　11．箕輪Ｉ遺跡　12．雲雀遺跡
13．雨沼Ｉ遺跡　14．畔吉遺跡　15．江川山古墳　16．殿山古墳　17．在家遺跡

第３図　稲荷台遺跡の調査区



第４図　稲荷台遺跡既調査範囲全体図



III　遺跡の概要

稲荷台遺跡は、上尾市大字西貝塚148－1番地他に所在する。

大宮台地の西縁で、荒川低地に向かって南西に突出する一舌状台地のほぼ先端部に位置し、南北には湧水による開析谷が入り込んでいる。遺跡の標高は15m前後、荒川低地との比高差は約6mであった。

本遺跡から北西約200mの対岸には平方貝塚が、南西約50mには、弥生時代末の集落及び古墳時代初頭の方形周溝墓群等が検出された薬師耕地前遺跡が、北北東約80mには、縄文時代早期野島式末、古墳時代前期和泉式期の竪穴住居跡等が検出された天沼遺跡が所在している。

稲荷台遺跡では、過去に3回調査が行われている。

1回目は、埼玉県障害者リハビリテーションセンターの新設に伴い、1977年に上尾市稲荷台遺跡調査会によって行われたものであり、2、3回目は、埼玉県障害者リハビリテーションセンター増床事業に伴って、1990年度、91年度に埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われたものである。

前者の調査会による調査では、約3,900㎡が調査され、縄文時代早期の炉跡2基、縄文時代前期関山期の竪穴住居跡7軒、古墳時代初頭の竪穴住居跡14軒、五領期末の竪穴住居跡1軒、時期不詳の竪穴住居跡2軒が検出された。

後者の埋文事業団によって行われた調査では、1990年度に約2,600㎡、1991年度に約4,000㎡が発掘され、縄文時代早期鵜ガ島台期の炉穴9基、縄文時代の土壙20基、古墳時代初頭の竪穴住居跡33軒、同時期の土壙1基、平安時代の竪穴住居跡4軒、近世以降の井戸跡、溝跡等が検出された。

また、この時に、調査区の表土から、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期撚糸文～後期加曽利B式各期の土器、石器、縄文時代晩期の土偶、近世の陶磁器等が検出されている。

今回の発掘調査は、前回調査したC区の東側に隣接した地区で、埼玉県総合リハビリテーションセンターの駐車場増設に伴う発掘調査である。調査前は、宅地及び畑地・雑木林等であった。

調査区は、台地北側斜面に位置していたため、当初遺構が比較的希薄と予測されたが、予想を上回る数の遺構が検出できた。

調査の結果、検出した遺構は以下の通りである。

縄文時代の遺構は、早期後半の竪穴状遺構2基、炉穴9群、土壙18基である。

竪穴状遺構は平面形態が方形で、古墳時代の住居跡に壊され全体は検出できなかった。その形状と柱穴と考えられるピットの存在から、住居跡の可能性も考えられたが、住居跡であると断定しなかった。第2号竪穴状遺構からは、炉の可能性が考えられる被熱痕跡を検出したが、炉穴と重複している可能性が考えられたため、炉であると断定できなかった。

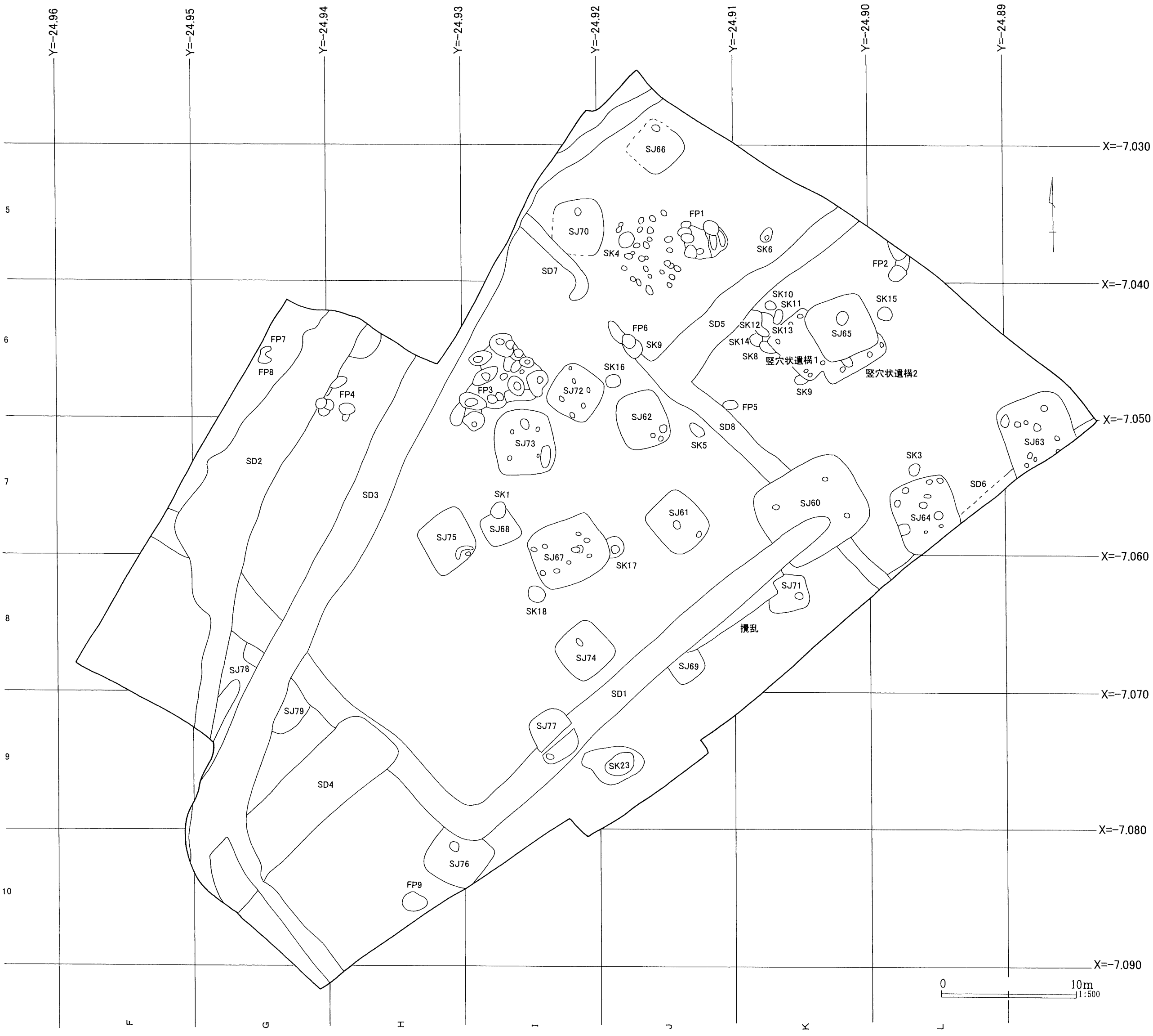
調査時にSX 3としたものを第1号竪穴状遺構とし、SX 4としたものを第2号竪穴状遺構として、それぞれ名称変更した。

土壙は、18基検出した。この中で、第1、4、5、12、13、23号土壙からは、比較的まとまった縄文土器を検出した。第1、23号土壙からは縄文時代中期の土器が、他の土壙からは、早期の土器が検出できた。

調査時には、第1号から23号まで命名した。この中で、第2号土壙は欠番で第19号土壙はa、bの2基が重複していた。これらの中で、SK 7を第5号炉穴とし、SK19aを第6号炉穴とした。また、SK20～22までのそれぞれを、第7～9号の炉穴とした。その結果、土壙は18基となった。

炉穴は9群検出した。1、2号炉穴群はそれぞれ2基以上、3号炉穴群は11基以上、4号炉穴群は7基以上の炉穴がそれぞれ重複していると考えられた。また、5～9号炉穴は単独であると考えられた。炉穴からの出土遺物は、早期後半の貝殻条痕文系土器などであった。

第５図　稲荷台遺跡Ｄ区全体図



第１号炉穴群はSX １から、第２号炉穴群はSX ２から、第３号炉穴群はSX ５から、第４号炉穴群はSX ６から、第５号炉穴はSK ７から、第６号炉穴は、SK19から、第７～９号炉穴はSK20～22から、それぞれ名称変更した。

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構は、竪穴住居跡21軒を検出した。

住居跡は調査区の中央から東側に多く確認でき、大型住居跡１軒（SJ60)、小型住居跡３軒（SJ68、69、71)を含んでいた。この中からは、焼失住居も５軒（SJ62、66、72、67、75）検出できた。とくにSJ67は、炭化材の残りがよく、梁・柱・桁材などと考えられる材が認められた。

遺物は、土師器の台付甕・器台・甕・壺・高坏などの他、ミニチュア土器や土錘などが出土した。

中・近世の遺構として、溝10条を確認した。これらの複数の溝は、台地の縁辺で南から東に向かって存在していた。溝の開削時期は判然としないが、板碑の破片や近世の焼き物が一部出土しており、近世の畑の区画溝と考えられた。

なおこの他に、旧石器時代の尖頭器２点を表土や攪乱の中から検出した。縄文土器も検出されており、早期の条痕文系土器群以外にも、前期の土器群や中期終末から後期初頭にかけての土器群が検出された。

IV　縄文時代の遺構と遺物

1．竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第６図）

第１号竪穴状遺構は、Ｊ－５グリッドから検出した。

平面形態は方形と考えられる。主軸方位はＮ－48°－Ｗで、規模は不明、深さは約20㎝程度であった。

第１号竪穴状遺構は、SJ65、SK９と重複していた。重複関係はSJ65に切られて、第２号竪穴状遺構とSK９を切っていた。

遺物は、縄文時代早期の土器片が覆土から出土した。

第１号竪穴状遺構は、住居跡の可能性も考えられたが、積極的な根拠に乏しいために、住居跡としての断定を避けた。

第２号竪穴状遺構（第６図）

第２号竪穴状遺構は、Ｊ－５グリッドから検出した。

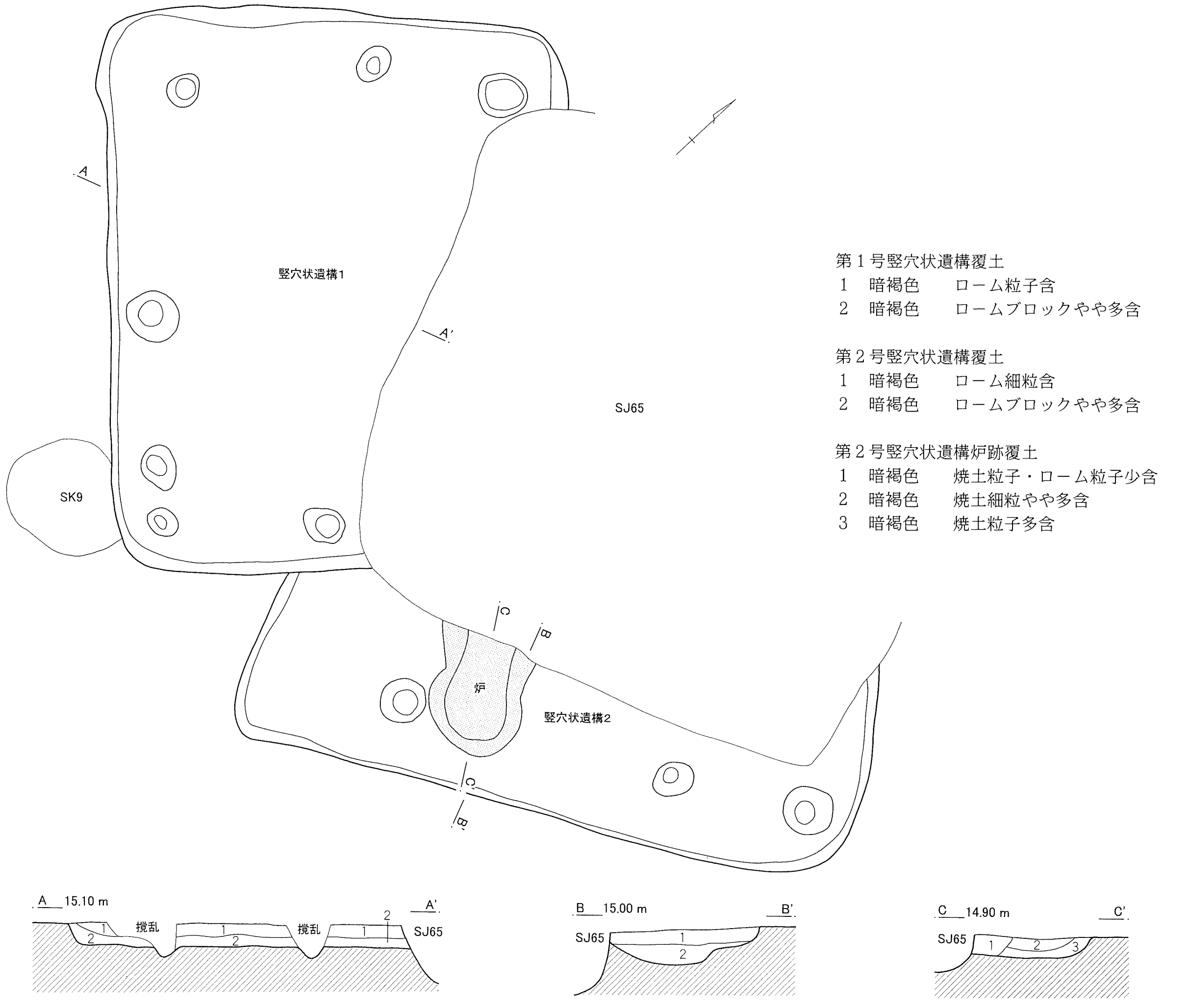
平面形態は方形と考えられる。主軸方位はＮ－33°－Ｗで、規模は不明、深さは約30㎝程度であった。

第２号竪穴状遺構は、SJ65、第１号竪穴状遺構と重複していた。重複関係はSJ65と第１号竪穴状遺構に切られていた。

遺物は、縄文時代早期の土器片が覆土から出土した。

第２号竪穴状遺構は、壁の周囲にめぐるピットに加えて炉も検出したが、炉穴と重複している可能性も考えられ、住居跡であると断定できなかった。

第６図　第１・２号竪穴状遺構

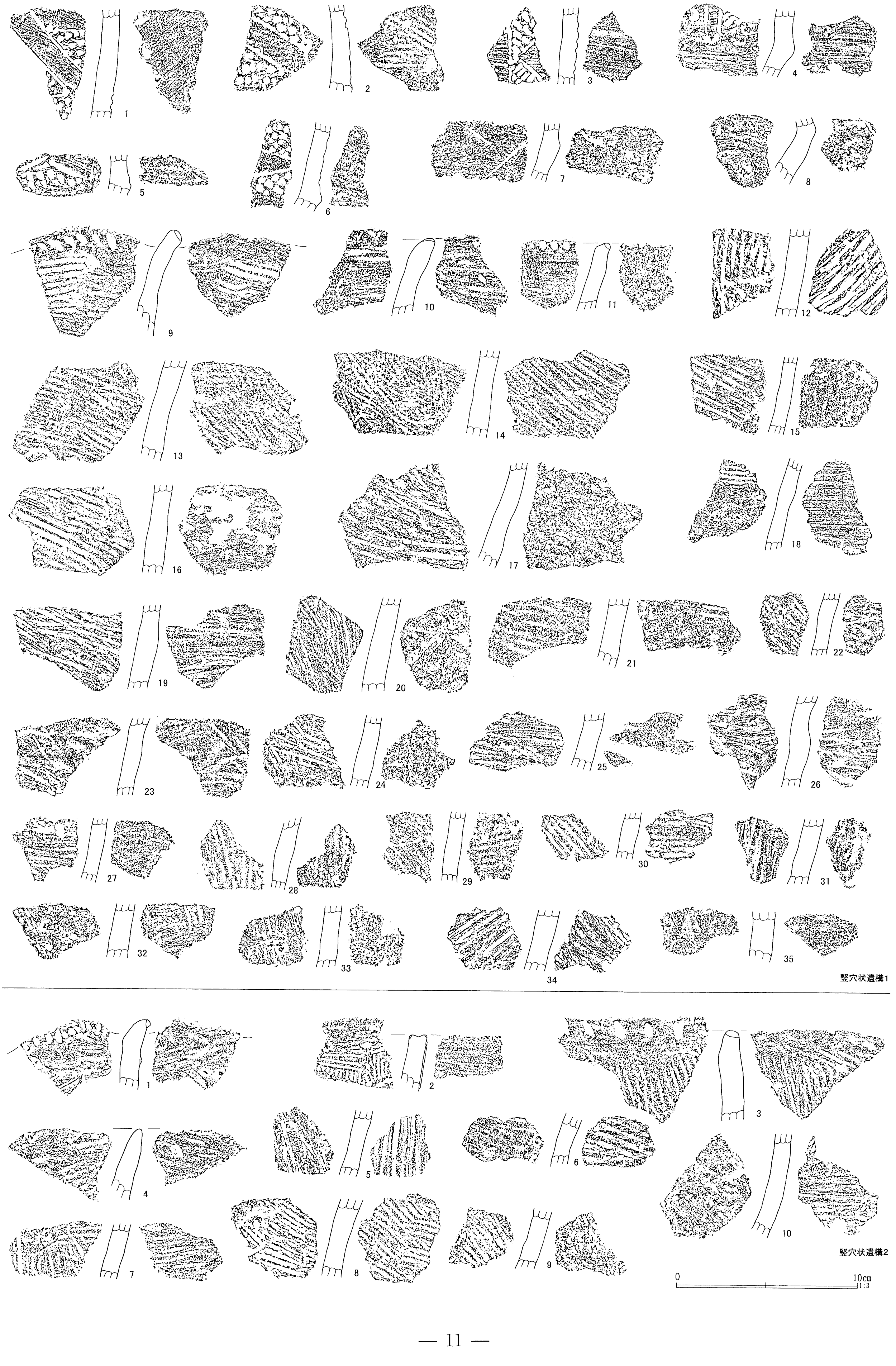


第１号竪穴状遺構覆土
1　暗褐色　　ローム粒子含
2　暗褐色　　ロームブロックやや多含

第２号竪穴状遺構覆土
1　暗褐色　　ローム細粒含
2　暗褐色　　ロームブロックやや多含

第２号竪穴状遺構炉跡覆土
1　暗褐色　　焼土粒子・ローム粒子少含
2　暗褐色　　焼土細粒やや多含
3　暗褐色　　焼土粒子多含

第７図　第Ｉ・２号竪穴状遺構出土遺物



第１号竪穴状遺構出土土器（第７図）

１～９は縄文時代早期後葉の繊維を少量含み、貝殻条痕を施す条痕文系土器群で、鵜ガ島台式に比定される有文土器である。１～６は細沈線の襷状区画内に、集合結節沈線を充填施文するものである。１、２は併行細沈線で区画を施し、３、６は縦位分割内を単沈線で区画する手法を採る。１は結節沈線と円形刺突文を同一工具で行い、２／３截程の竹管状工具を使用する。円形刺突文部分は、工具をやや斜位に刺突し、ほぼ円形状の圧痕を作り出している。２は区画交点に完全な円形刺突文を施し、結節沈線文もほぼ同じ太さのため、同一工具で施文した可能性が高い。３、４は截竹管状工具で刺突文を施すもので、４は縦位に垂下する３本沈線で文様帯を分割する。刺突文と充填結節沈線文とは、施文具を変えている。７、８は文様帯下端の屈曲する部分で、細沈線の区画文の末端が辛うじて観察される。

９～35は条痕文のみ施文する無文土器で、９～11は口縁部破片、12～35は胴部破片である。９は緩い波状口縁で、外反する口唇部上面に斜位の刻みを、10は内削状の口唇部に細い刻みを、11は内削状角頭口唇外端部に、押圧状の刻みを施す。11は繊維を殆ど含まず、擦痕状の整形を施す。他の胴部破片は、少量ではあるが繊維を含み、貝殻条痕を施している。12のみ、部分的に貝殻背圧痕文が残っている。

第２号竪穴状遺構出土土器（第７図）

１は緩い双頭の波状口縁を呈し、外削状口唇部外端に刻みを施す。口縁部を細隆起線で区画し、波状部下に縦位沈線を垂下して文様帯を分割する。２は角頭状口唇内外端に細かな刻みを施し、細隆起線で文様帯分割を行う。３は内湾気味に開く肉厚の土器で、丸頭状口唇部上に押圧状の刻みを施す。４は口唇部が先細り状を呈する。５～10は胴部破片で、内外面に条痕文を施す。

いずれも繊維を少量含み、その特徴から早期後葉条痕文系土器群の鵜ガ島台式に比定される。

２．土壙

第１号土壙（第８図）

第１号土壙は、Ｈ－６グリッドから検出した。

平面形態はやや正方形に近い円形で、主軸方位はＮ－60°－Ｅであった。

規模は、直径1.2ｍ、深さ約70㎝程度であった。

土壙は、SJ68と重複していた。重複関係は、SJ68に切られていた。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第３号土壙（第８図）

第３号土壙は、Ｉ－５グリッドから検出した。

平面形態は、円形であった。

規模は、長軸長0.9ｍ、短軸長0.8ｍ、深さ約25㎝程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第４号土壙（第８図）

第４号土壙は、Ｉ－４グリッドから検出した。

平面形態は、楕円形で、主軸方位はＮ－82°－Ｗであった。

規模は、長軸長1.3ｍ、短軸長1.2ｍ、深さ20㎝程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第５号土壙（第８図）

第５号土壙は、Ｉ－６グリッドから検出した。

平面形態は、惰円形で、主軸方位はＮ－50°－Ｅであった。

規模は、長軸長1.4ｍ、短軸長0.7ｍ、深さ約10㎝程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆

土中から検出した。

第6号土壙（第8図）

第6号土壙は、J－4グリッドから検出した。

平面形態は、不整円形で、主軸方位はN－82°－Wであった。

規模は、長軸長1.2m、短軸長0.8m、深さ約30cm程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第8号土壙（第8図）

第8号土壙は、J－5グリッドから検出した。

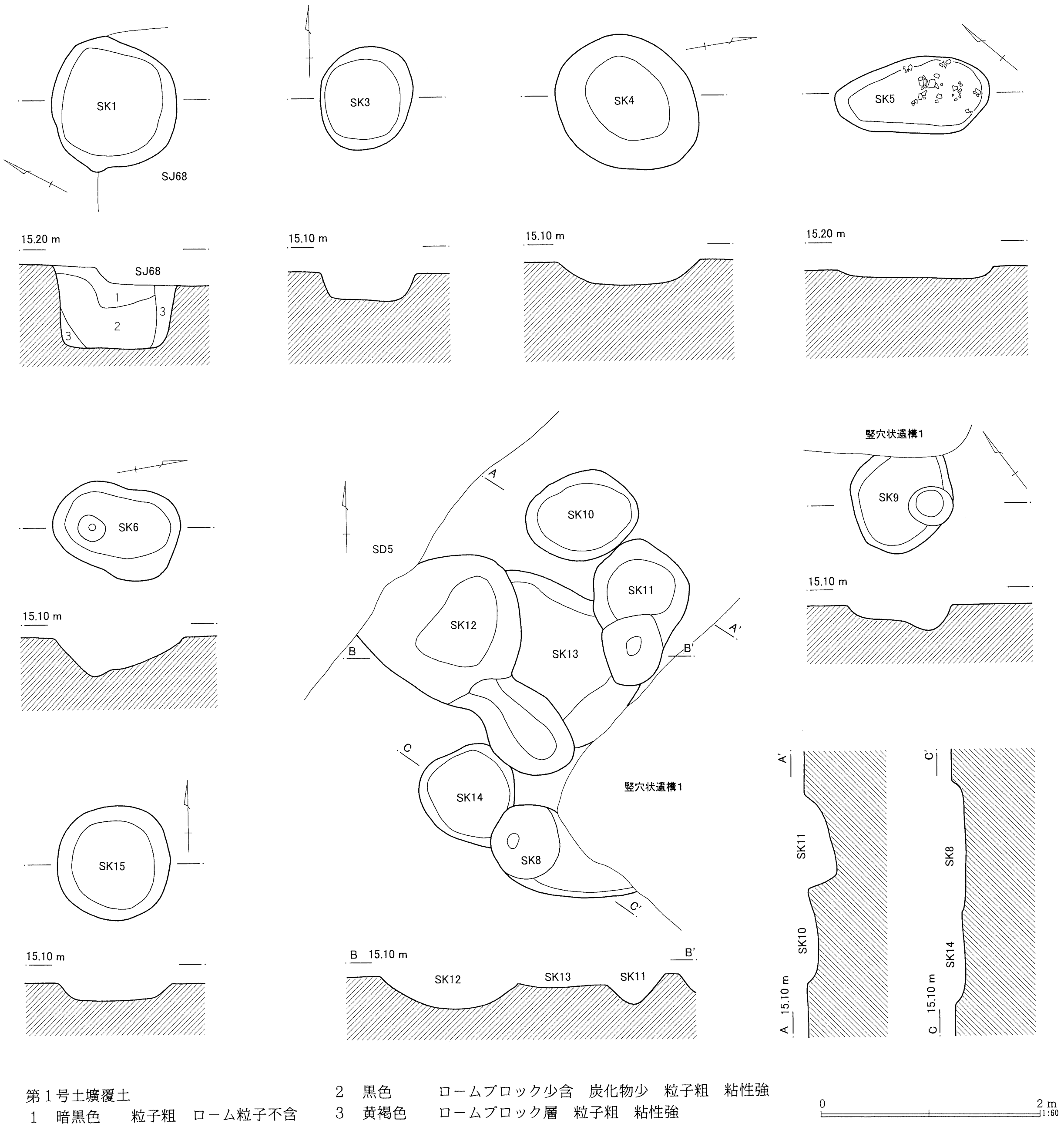
平面形態は、円形であった。

規模は、長軸長0.7m、短軸長0.6m、深さ約10cm程度であった。

土壙は、SK14と重複していた。重複関係は、明らかに出来なかった。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆

第8図　第1～15号土壙



第1号土壙覆土
1　暗黒色　　粒子粗　ローム粒子不含
2　黒色　　ロームブロック少含　炭化物少　粒子粗　粘性強
3　黄褐色　　ロームブロック層　粒子粗　粘性強

土中から検出した。

第９号土壙（第８図）

第９号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、不整円形で主軸方位はN－40°－Eであった。

規模は、直径0.9m、深さ約20cm程度であった。

土壙は、第１号竪穴状遺構と重複していた。

重複関係は、明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第10号土壙（第８図）

第10号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、惰円形で、主軸方位はN－0°－Eであった。

規模は、長軸長1.0m、短軸長0.8m、深さ10cm程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第11号土壙（第８図）

第11号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、不整円形であった。

規模は、長軸長0.9m、短軸長0.7m、深さ約25cm程度であった。

土壙は、SK13と重複していた。重複関係は、明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第12号土壙（第８図）

第12号土壙は、J－５グリッドから検出した。

土壙の北西側は攪乱のため、検出できなかった。

平面形態は、不整形であった。南東側に細長く延びたテラスをもつ、略円形の土壙としてとらえることも可能であった。

規模は、長軸長不明、短軸長1.3m、深さ30cm程度であった。

土壙は、SK13と重複していた。重複関係は、明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第13号土壙（第８図）

第13号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、不整形であった。

規模は、長短軸長不明、深さ約10cm程度であった。

土壙は、SK11、SK12と重複していた。重複関係は、明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

縄文時代早期の土器片を検出したが、その帰属位置は、重複しているSK12と明確に識別できなかった。

第14号土壙（第８図）

第14号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、不整円形であった。

規模は、長軸長不明、短軸長0.9m、深さ約10cm程度であった。

土壙は、SK８と重複していた。重複関係は、明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第15号土壙（第８図）

第15号土壙は、J－５グリッドから検出した。

平面形態は、円形であった。

規模は直径1.0m、深さ16cm程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第16号土壙（第９図）

第16号土壙は、I－５グリッドから検出した。

平面形態は、円形であった。

規模は、直径1.1m、深さ約30cm程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第17号土壙（第9図）

第17号土壙は、I－6グリッドから検出した。

平面形態は、円形と考えられた。

主軸方位はS－78°－Wであった。

規模は、長軸長1.5m、短軸長不明、深さ約30cm程度であった。

土壙は、SJ67と重複していた。重複関係は、SJ67に切られていた。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第18号土壙（第9図）

第18号土壙は、H－7グリッドから検出した。

平面形態は、円形であった。

規模は、長軸長1.3m、短軸長1.2m、深さ10cm程度であった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第19号土壙（第9図）

第19号土壙は、I－5グリッドから検出した。

平面形態は、惰円形と考えられた。

主軸方位はN－16°－Wであった。

規模は、長軸長不明、短軸長1.3m、深さ約30cm程度であった。

土壙は、FP6、SD8と重複していた。重複関係は、SD8に切られ、FP6とは明らかに出来なかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第23号土壙（第9図）

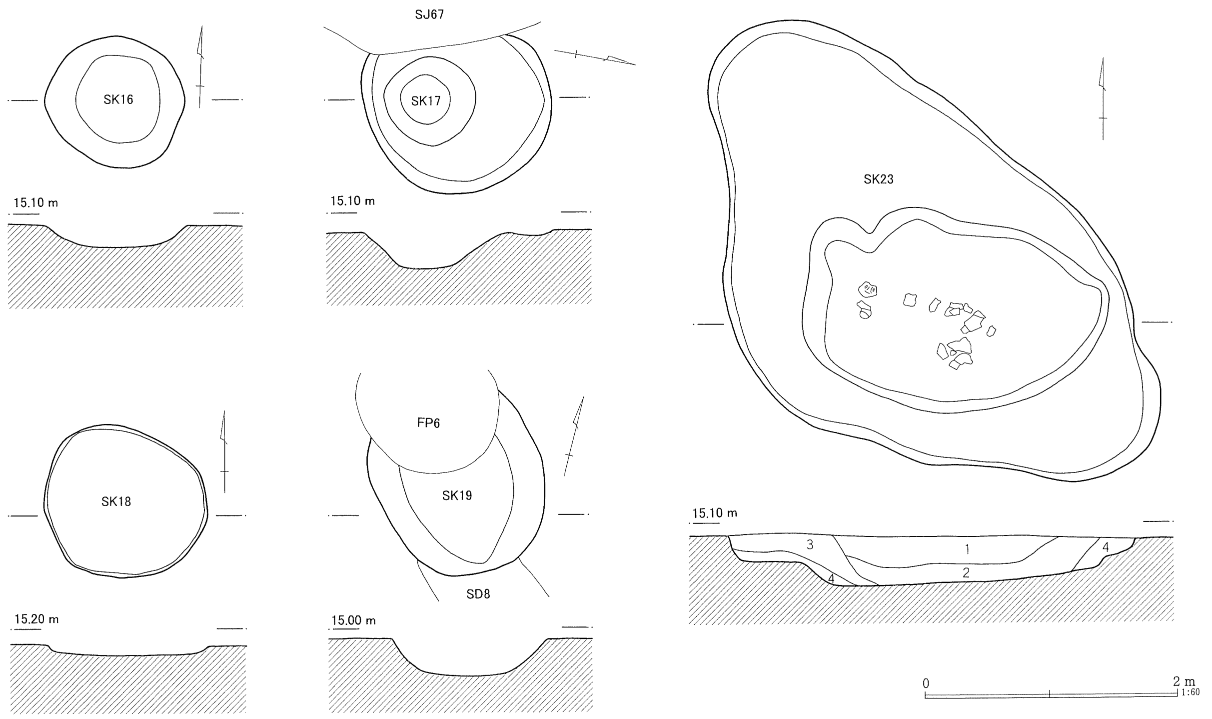
第23号土壙は、H－8・I－8グリッドから検出した。

平面形態は、不整形であった。

規模は、長軸長4.6m、短軸長2.7m、深さ約40cm程度であった。

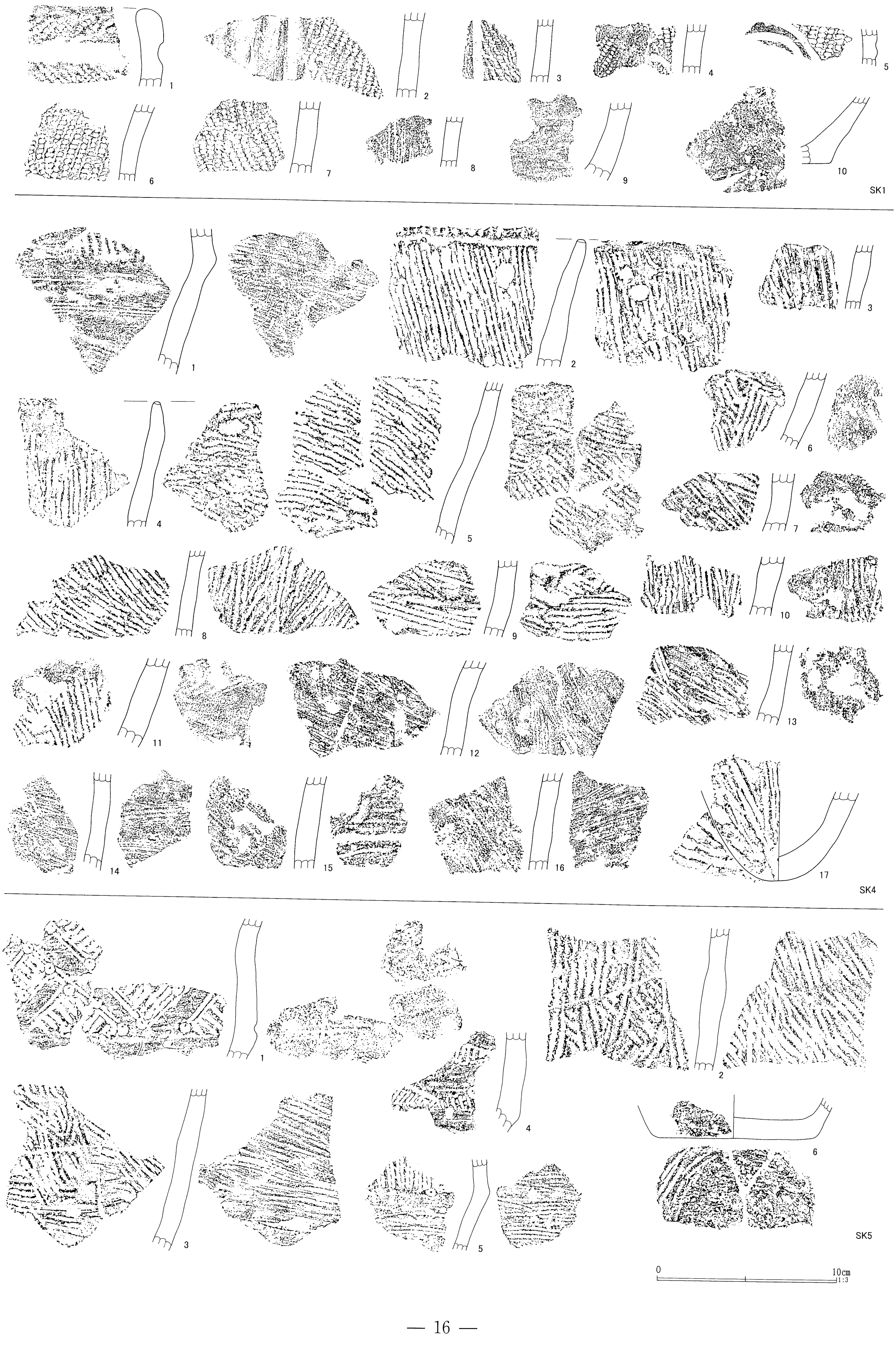
土壙の中央付近には、より深い窪みが認められ、こ

第9図　第16～23号土壙

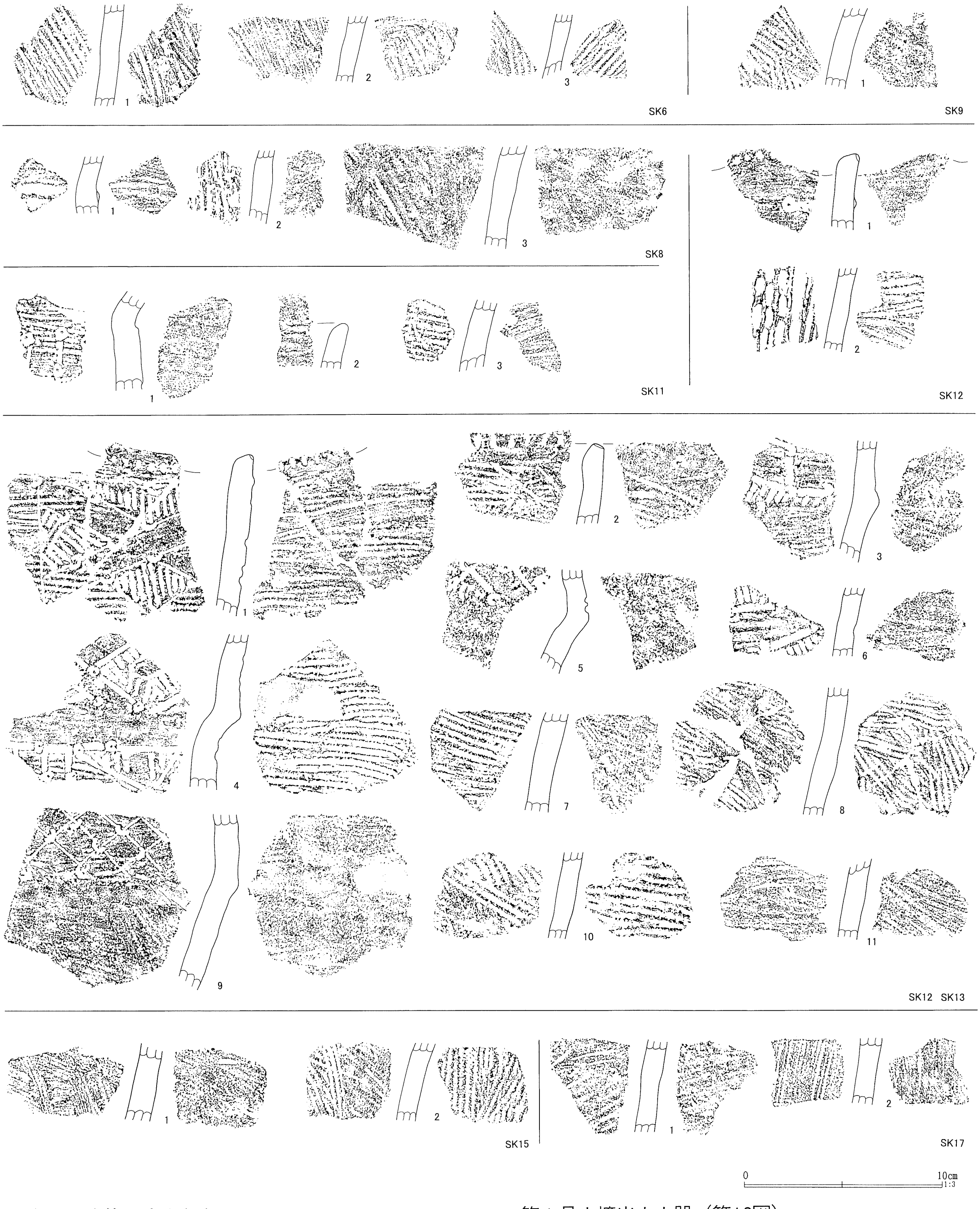


第23号土壙覆土
1　黒褐色　　ロームブロック少含
2　黒褐色　　ロームブロック1よりやや多含
3　暗褐色　　ロームブロック・ローム粒子含　ローム層への漸移層的を色調
4　黄褐色　　ローム粒子・ロームブロックやや多含

第10図　第１～５号土壙出土遺物



第11図　第６～17号土壙出土遺物



の中から遺物が出土した。

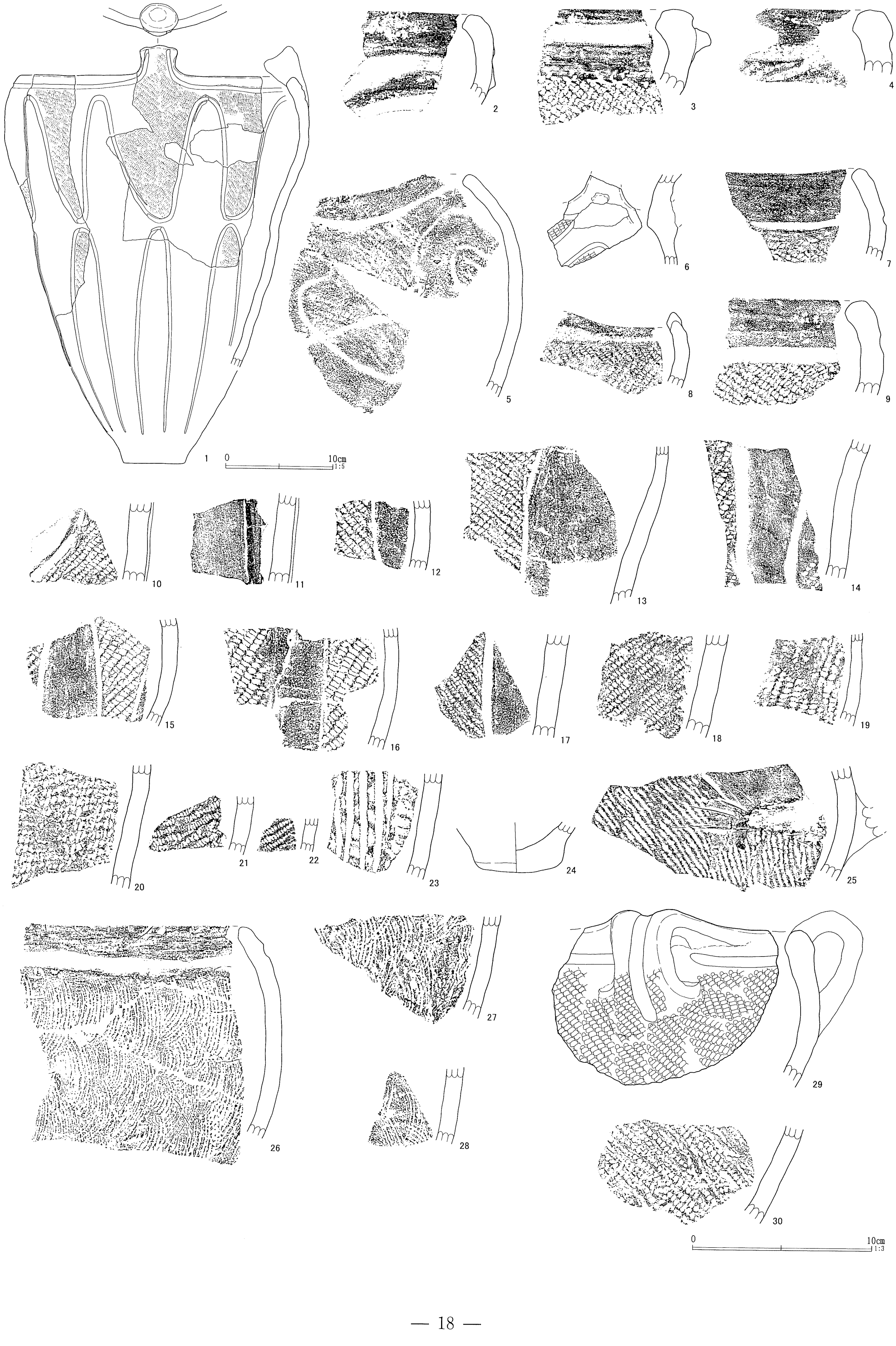
覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

実測可能な遺物として、縄文時代中期の土器片を覆土中から検出した。

第１号土壙出土土器（第10図）

出土土器は全て縄文中期末葉の土器群であり、加曽利EⅢ式に比定される。１は鉢形土器のやや内湾して開く口縁部を、太い凹線状の沈線で区画する。口唇部直下は無節Ｌを横位に、胴部で縦位に施文する。２、

第12図　第23号土壙出土遺物



3は磨消懸垂文を施す破片で、地文は2が単節RL、3がLRである。4、5は磨消縄文の弧線文を描く破片で、連弧文系の土器群と思われ、地文はいずれも単節RLである。6、7は地文縄文単節RLを施すもので、8は条線文、9は無文、10は底部破片である。

第4号土壙出土土器（第10図）

出土土器は縄文早期後葉の条痕文系土器群で、鵜ガ島台式に比定される。1は胴部の屈曲部分で、沈線区画内に集合結節沈線を充填施文する。区画線と充填文は同一工具による。2～10は内外面に擦痕整形を施すものである。2は口縁部内外面に縦位の条痕文を施文し、角頭状の口唇部には刻みを施す。4は口縁部が若干内湾し、外面縦位、内面横位の条痕文を、口唇部上には斜位の刻みを施す。11、13は外面に明瞭な条痕を、内面に擦痕状の整形を施す。12、14～16は内外面とも擦痕状整形を施す。17は条痕文を施す底部破片である。

第5号土壙出土土器（第10図）

出土土器は早期終末の条痕文系土器群で、鵜ガ島台式に比定される土器群である。1は半截竹管による2本対の併行沈線文で区画を行い、集合結節沈線文を充填施文する。区画線の交点部には円形竹管文を施す。4は細隆起線で区画を行い、細隆起線に沿って強い沈線状のなぞりを施す。区画内には集合沈線文を充填する。文様帯下端部の段帯部上に、太い竹管文による押圧を部分的に施す癖がある。5は細集合結節沈線文を縦位に垂下するモチーフを採り、屈曲部上に円形竹管文を施す。2、3は表裏面に明瞭な条痕を施すものである。6は底部破片で、推定底径9㎝を測る。

第6号土壙出土土器（第11図）

出土土器は早期後葉の条痕文系土器群で、1～3は表裏面に明瞭な条痕を施す胴部破片である。

第8号土壙出土土器（第11図）

出土土器は、早期後葉の条痕文系土器群である。1はII文様帯上端部分の破片で、文様帯を細隆起線で分帯し、集合結節沈線文を施文する。鵜ガ島台式に比定される。2、3は表裏面に明瞭な条痕を施す。

第9号土壙出土土器（第11図）

図示し得るのは1点のみで或るが、早期末葉の条痕文系土器群の胴部破片である。

第11号土壙出土土器（第11図）

出土土器は早期後葉の条痕文系土器群で、鵜ガ島台式に比定される土器群である。1はII文様帯上端部の破片で、沈線で分帯し、分帯線から円形竹管文を繋ぐ沈線が垂下する。2は無文土器の口縁部破片で、丸頭状口唇部が開く器形を呈する。3は外面に条痕、内面に擦痕状の整形を施す。

第12号土壙出土土器（第11図）

出土土器は早期後葉の条痕文系土器群で、鵜ガ島台式に比定される。1は双頭の緩い波状口縁を呈し、文様帯上端を細隆起線で分帯する。分割、区画は細沈線で行い、区画内に集合結節沈線文を充填する。分帯の細隆起線上には、円形竹管文を、内削状の口唇外端部には刻みを施す。2は太沈線区画内に、同方向の太集合結節沈線文を充填する。

第12・13号土壙出土土器（第11図）

出土土器は早期後葉の条痕文系土器で、鵜ガ島台式に比定される。

1は双頭の緩い波状口縁を呈するものと思われ、内削状口唇部外端に刻みを施す。文様帯は上端部を細隆起線で分帯し、併行細沈線文で分割区画を行い、区画内には太目の結節沈線文を充填施文する。区画の交点部には、半截竹管の刺突文を施す。2は口唇部上面に刻みを施し、縄文地文上に浅い沈線文でモチーフを描く。3は文様帯下端部の破片で、太沈線区画内に太集合結節沈線を充填する。区画交点には、半截竹管の刺突文を施す。4はI、II文様帯が窺える破片で、I帯下端の分帯は段帯部で、II帯上端は太沈線で分帯し、併行沈線の区画内に、集合結節沈線文を充填施文する。5は併行沈線区画内に、半截竹管の内面を使用する集合併行結節沈線を充填する。6は区画交点に半截竹管の刺突文を施す。9は細沈線で斜格子目文を描き、沈線交点に半截竹管の刺突文を施す。他の破片は、内外

面に明瞭な条痕を施す胴部破片である。

第15号土壙出土土器（第11図）

出土土器は縄文早期の条痕文系土器で、1、2とも内外面に明瞭な条痕を施す胴部破片である。

第17号土壙出土土器（第11図）

集都度土器は全て早期の条痕文系土器で、1、2とも内外面に明瞭な条痕を施す胴部破片である。

第23号土壙出土土器（第12図）

1は胴上部にゆるやかなくびれをもつキャリパー形の深鉢である。口縁部には円筒状の波長部から口縁部に沿って沈線を巡らしており、波長部の両側に沿う沈線は、そのまま頂部で終点となり結ばれない。そのため波長部ごとに、単位を区切るものと考えられる。胴部にはくびれを境として、上下にわかれて文様が施されている。胴上部の文様は波状に連なるもので、胴下部は逆V字状に施されている。残存部分より単位は8単位と考えられる。地文は無節Lの縄文である。

2～9は深鉢の口縁部の破片である。2、4は低い隆帯に沿って、幅広の沈線が施されている。5～8は波状口縁で、5は口縁部に沈線を巡らし、湾曲する胴上部には沈線によって渦巻状の文様を施文すると考えられる。6は波長部分で、破損しているが残存部から類推すると、ややねじれている把手がつくものと考えられる。7～9は口縁部に沈線を巡らすもので、口縁部文様帯はもたないものである。地文は3は複節ＬＲＬの縄文である。8は短節ＲＬ、5～7、9は短節ＬＲの縄文を施している。

10～23は深鉢の胴部の破片である。10、11は文様が微隆帯で施されるもので、10は渦巻き文の一部と考えられる。11は微隆帯で区画された幅広の無文部をもつバケツ形の深鉢の破片である。12～17は沈線で文様を施しているもので、12～14は胴上部、15～17は胴下部の破片で1と同様に、連弧状や、逆Ｖ字や逆Ｕ字状の文様が施されるものと考えられる。18～22は地文のみの胴部の破片で、20は撚りの緩い複節ＲＬＲの縄文を、また21、22はＲＬ多条の縄文を施文している。23は胴部の破片で、縦方向に沈線を施文している。24は底部の破片である。

25～30は浅鉢の破片である。25は把手部分が欠損しているものである。地文は無節Ｌの縄文を縦方向に施されている。26～28は同一個体の破片で、口縁部に沈線を巡らしている。地文は櫛歯状の細い沈線を、流水状に施文している。29、30は同一個体で、29は把手部分である。把手はやや斜めにねじれて貼り付けられるもので、把手の表面中央に浅い沈線が施文されている。

時期は後期初頭が主体である。23は後期前葉の堀之内式期のものである。

3．炉穴

第1号炉穴群（第13図）

第1号炉穴群は、I－4グリッドから検出した。

全体は1つの大きな窪みと、6つの小さな窪みから構成され、2基以上の炉穴を含んでいた。

大きさは約2.9m×3.8mの不整形であった。

被熱痕跡は2箇所から検出した。

焼土直上の覆土中から遺物を検出した。

第2号炉穴群（第13図）

第2号炉穴群はK－4グリッドから検出した。

全体は1つの大きな窪みと、2つの小さな窪みから構成され、2基の炉穴を含んでいた。

炉穴の北東側は、調整区域外のため形状を明らかに出来なかった。南東側は一部が攪乱を受けていた。

調査部分は約3.0m×1.5mの不整形であった。

被熱痕跡は2箇所から検出した。

実測可能な遺物は、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第3号炉穴群（第14図）

第3号炉穴群はG－5・6グリッドから検出した。

全体は1つの大きな窪みと、16の小さな窪みから構成されており、今回の調査区から検出した炉穴の中では、最も規模が大きく、11基以上の炉穴を含んで

いた。

全体の大きさは約5.6m×7.8mの不整形であった。

被熱痕跡は12箇所から検出した。

実測可能な遺物は、縄文時代早期の土器片を覆土中から検出した。

第4号炉穴群（第15図）

第4号炉穴群はG・H－5グリッドから検出した。

全体は2箇所に別れ、片方は5つの小さな窪みから、もう片方は1つの大きな窪みと、2つの小さな窪みから構成され、7基以上の炉穴を含んでいた。

調査終了時点での炉穴の形状は、二つに分離してしまったが、遺構確認時のより上面からの観察では、覆土の差異化が困難であった。

炉穴の西側はSD 2に、東側は撹乱によって切られていた。

残存部分の大きさは西側が約3.5m×1.5m、東側が約3.2m×1.5mの不整形であった。

被熱痕跡は7箇所から検出した。

実測可能な遺物は、縄文時代早期の土器片を覆土中から微量検出した。

第5号炉穴（第15図）

第5号炉穴はI・J－5グリッドから検出した。

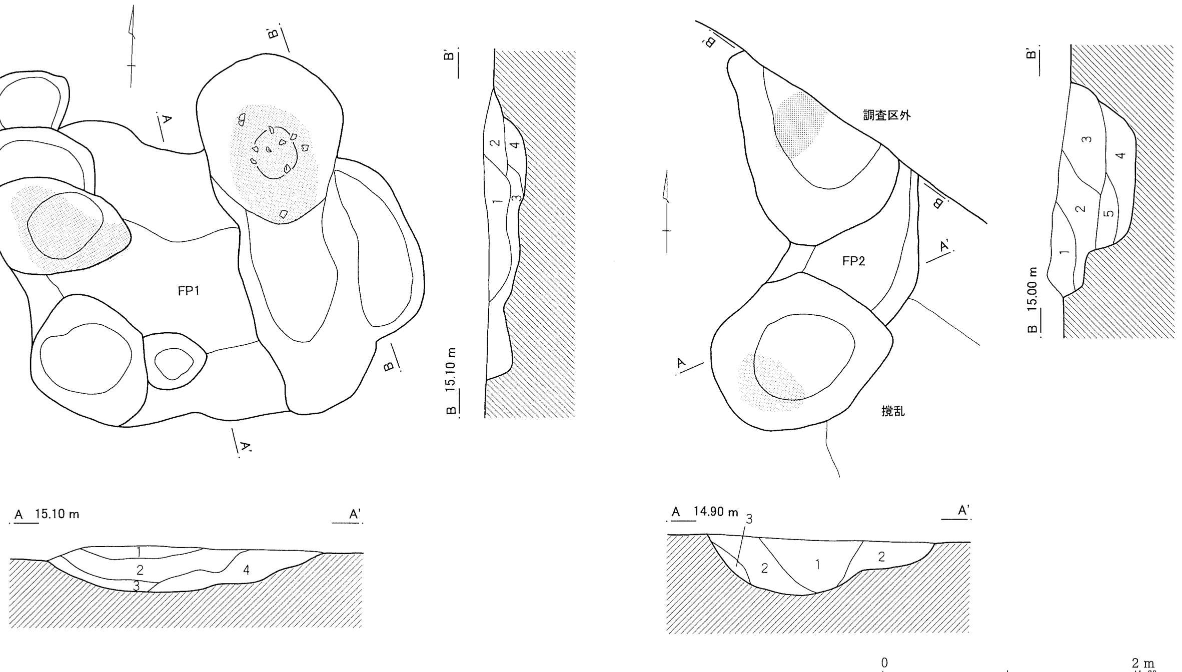
全体は1つの小さな窪みから構成されていた。

全体の大きさは約0.8m×1.2mの楕円形であった。

被熱痕跡は1箇所から検出した。

実測可能な遺物は、縄文時代早期の土器片を覆土中から微量検出した。

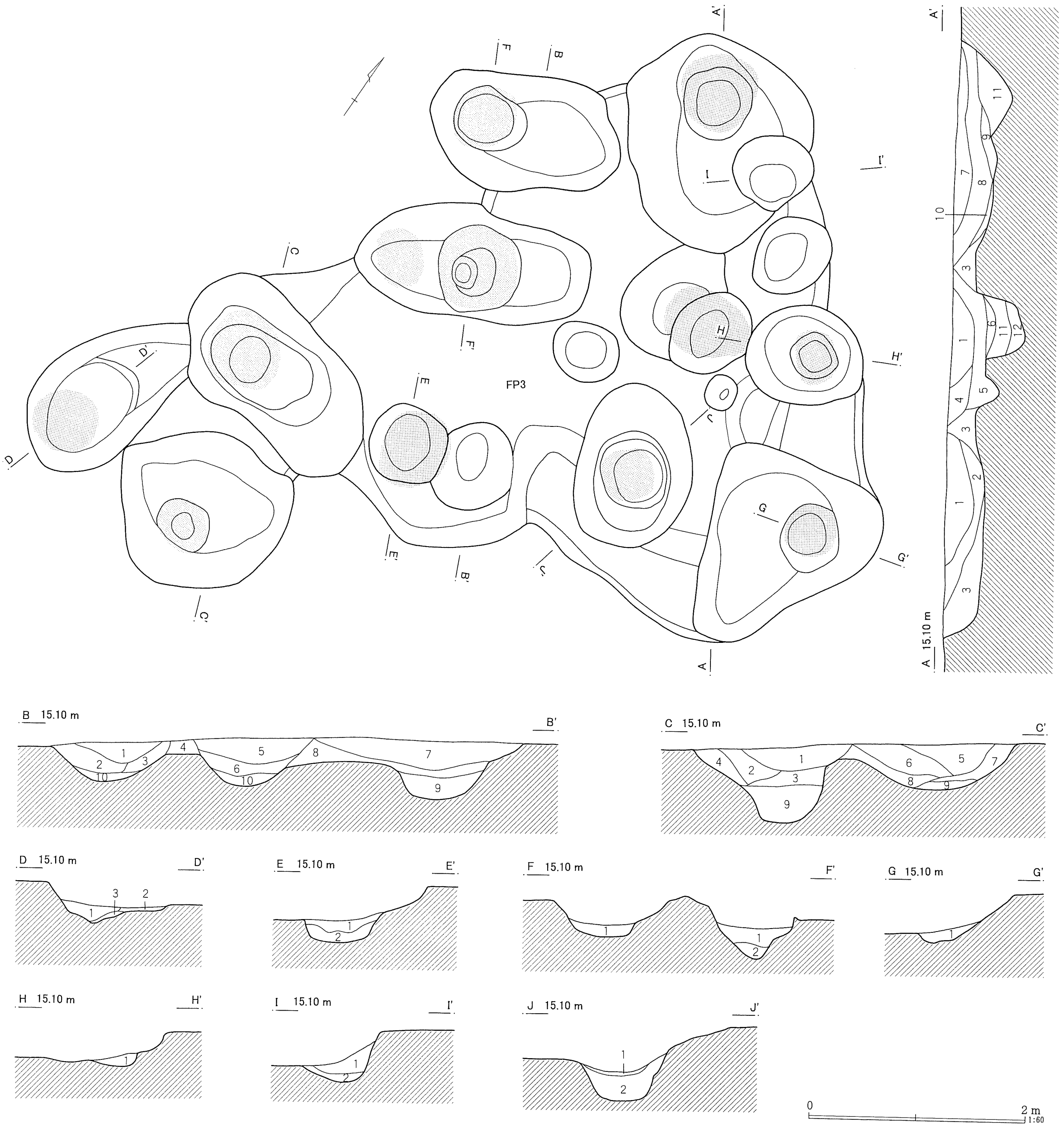
第13図　第1・2号炉穴群



FP1覆土
A－A'
1　黒褐色　ローム・焼土微細粒少含
2　明褐色　ローム細粒・焼土細粒含
3　明褐色　ローム細粒・焼土細粒含　ロームブロック含
焼土粒子径2～4mm少含
4　黄褐色　ロームブロック多含　焼土粒子少含
B－B'
1　暗褐色　ローム・焼土細粒含
2　黄褐色　ローム細粒やや多含　焼土粒子微含
3　明褐色　ローム・焼土細粒1よりやや多含
4　黄褐色　ロームブロック多含　焼土粒子微含

FP2覆土
A－A'
1　暗褐色　焼土微細粒多含
2　黒褐色　焼土粒子(微細粒～2mm程度)多含
ロームブロック含
3　黄褐色　ロームブロック多含　焼土粒子少含
4　暗褐色　ロームブロック少含
5　暗褐色　焼土粒子・焼土ブロック多含
B－B'
1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少含
2　黄褐色　ロームブロック含　焼土粒子少含
3　黄褐色　ロームブロック多含

第14図　第３号炉穴群



ＦＰ３覆土　A－A'

1　黒褐色　　ローム・焼土細粒 多含
2　暗褐色　　１層よりローム・焼土粒 少含
3　暗褐色　　ロームブロック多含
4　黒褐色　　１層よりローム多含
5　黒褐色　　焼土ブロック・ローム粒子含
6　黒褐色　　ローム・焼土粒子５層より多含
7　暗褐色　　ローム・焼土細粒やや多含
8　黒褐色　　ローム・焼土細粒含
9　黒褐色　　焼土粒子多含
10　暗褐色　　ローム多含　焼土粒子少含
11　黒褐色　　ローム細粒・ブロック多含
12　暗黄褐色　ロームブロック多含

B－B'

1　黒褐色　　ローム・焼土粒子含
2　黒褐色　　１よりローム・焼土粒子多含
3　黄褐色　　ローム多含　焼土粒子少含
4　黄褐色　　ロームブロック多含
5　黒褐色　　ローム粒子・焼土粒子含
6　黒褐色　　ローム・焼土粒子やや多含
7　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
8　黄褐色　　ローム粒子やや多含　焼土粒子少含
9　黄褐色　　ロームブロック多含
10　黒褐色　　細粒～ブロック焼土多含

C－C'

1　黒褐色　　ローム・焼土粒子含
2　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
3　黒褐色　　ローム・焼土粒子多含
4　黄褐色　　ロームブロック・ローム粒子多含
5　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
6　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
7　暗褐色　　ロームブロック含　焼土粒子多含
8　黄褐色　　ロームブロック多含　焼土粒子微含
9　黒褐色　　焼土細粒～径5mmのブロック多含

D－D'

1　赤褐色　　焼土細粒多含
2　黄褐色　　ローム含　焼土粒子少含
3　赤褐色　　焼土ブロック多含

E－E'

1　赤褐色　　焼土・ローム粒子多含
2　黄褐色　　ロームブロック多含

F－F'

1　赤褐色　　焼土粒子・ブロック多含
2　黄褐色　　ロームブロック多含

G－G'

1　赤褐色　　焼土粒子・ブロック多含

H－H'

1　赤褐色　　焼土粒子・ブロック含

I－I'

1　赤褐色　　焼土粒子・ブロック多含
2　黄褐色　　ロームブロック含

J－J'

1　赤褐色　　焼土粒子・ブロック多含
2　黄褐色　　ローム多含　焼土粒子少含

第６号炉穴（第15図）

第６号炉穴はⅠ－５グリッドから検出した。

全体は１つの小さな窪みから構成されていた。

炉穴の北西側はSD８に切られ、南東側ではSK19と重複していたが、SK19との新旧関係は明らかに出来なかった。

全体の大きさは約1.1ｍ×1.2ｍの円形であった。

被熱痕跡は１箇所から検出した。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第７・８号炉穴（第15図）

第７・８号炉穴はＦ－５グリッドから検出した。

全体は１つの大きな窪みと、２つの小さな窪みから構成されていた。

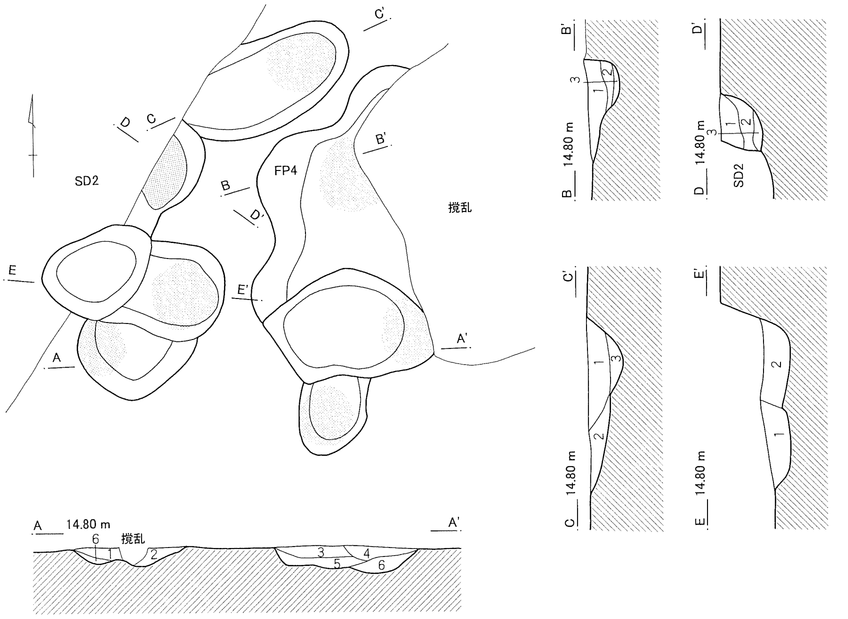
調査終了時点での炉穴の形状は、一つに融合してしまったが、遺構確認時のより上面からの観察では、個別の炉穴と判断した。

全体の大きさは約1.2ｍ×0.8ｍの不整形であった。

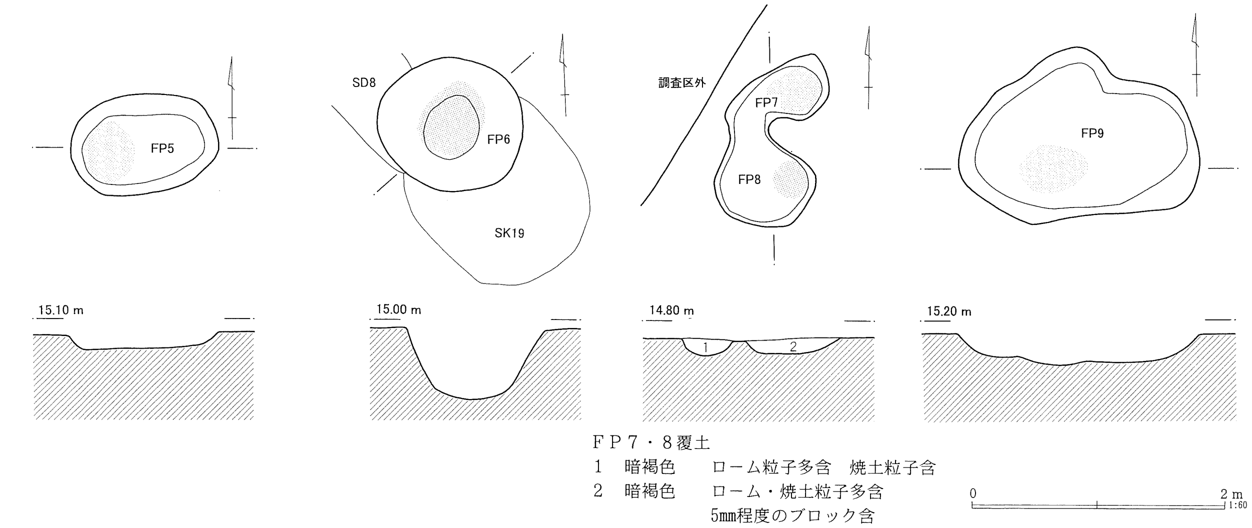
被熱痕跡は２箇所から検出した。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第15図　第４～９号炉穴



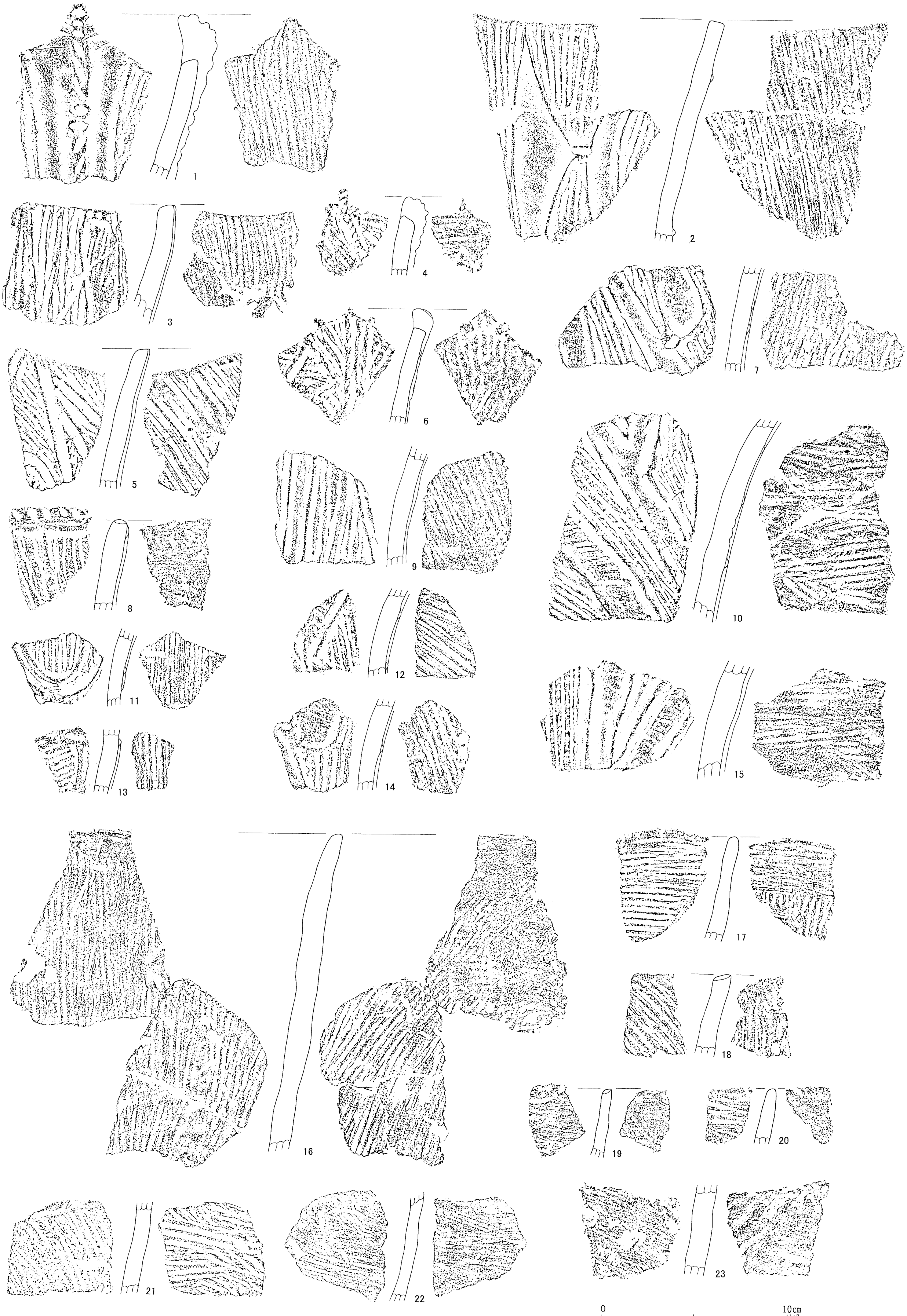
ＦＰ４覆土
Ａ－Ａ’
１　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
２　黒褐色　　ローム・焼土粒子少含
３　黒褐色　　ローム・焼土粒子含
４　黄褐色　　ローム多含　焼土粒子少含
５　黒褐色　　焼土細粒・ブロック多含
６　黒褐色　　焼土ブロック多含
Ｂ－Ｂ’
１　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
２　暗褐色　　ローム・焼土粒子多含
３　暗褐色　　焼土粒子・焼土ブロック多含
Ｃ－Ｃ’
１　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
２　暗褐色　　ロームブロック多含
３　暗褐色　　焼土粒子・焼土ブロック多含
Ｄ－Ｄ’
１　暗褐色　　ローム・焼土粒子含
２　暗褐色　　ローム・焼土粒子多含
３　暗褐色　　焼土ブロック多含
Ｅ－Ｅ’
１　黄褐色　　ロームブロック多含
２　黒褐色　　焼土粒子・ブロック多含



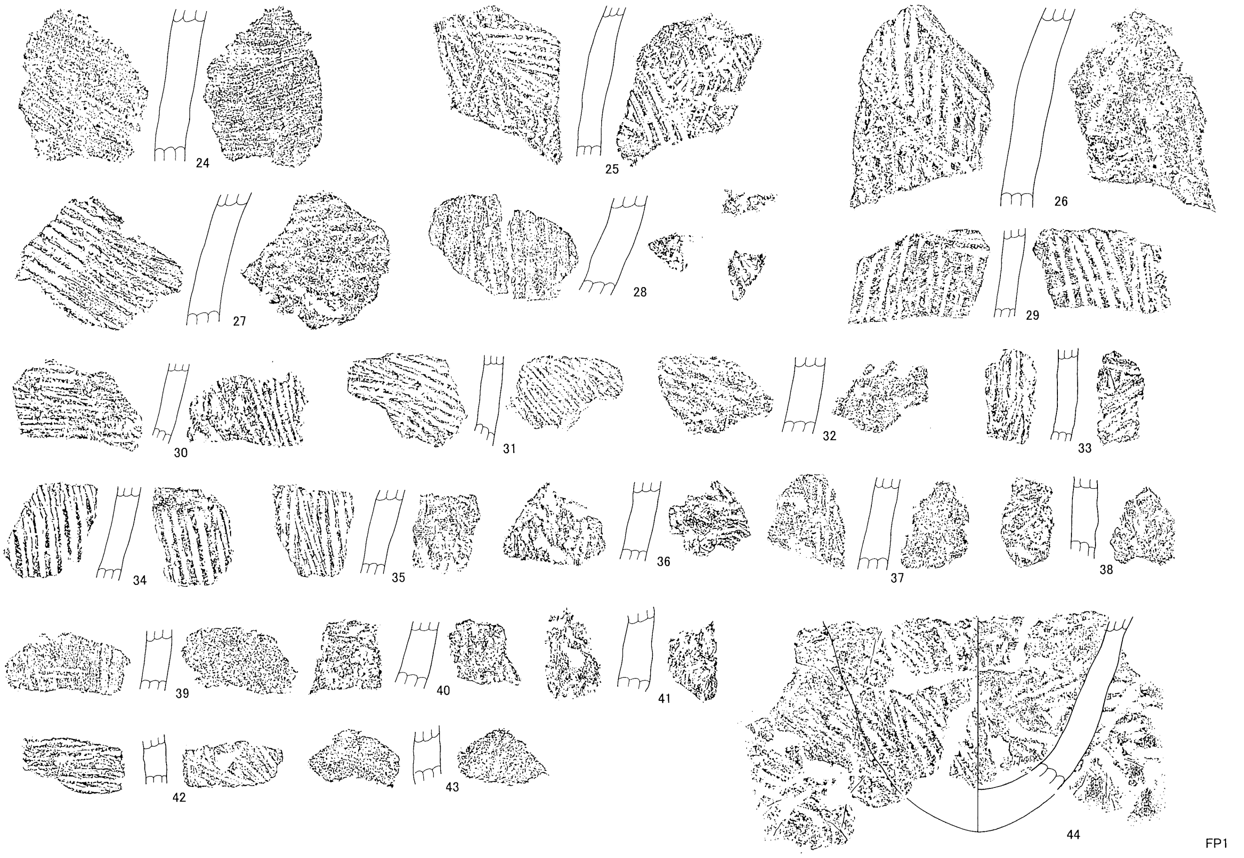
ＦＰ７・８覆土
１　暗褐色　　ローム粒子多含　焼土粒子含
２　暗褐色　　ローム・焼土粒子多含
　　　　　　　5mm程度のブロック含

0　2 m　1:60

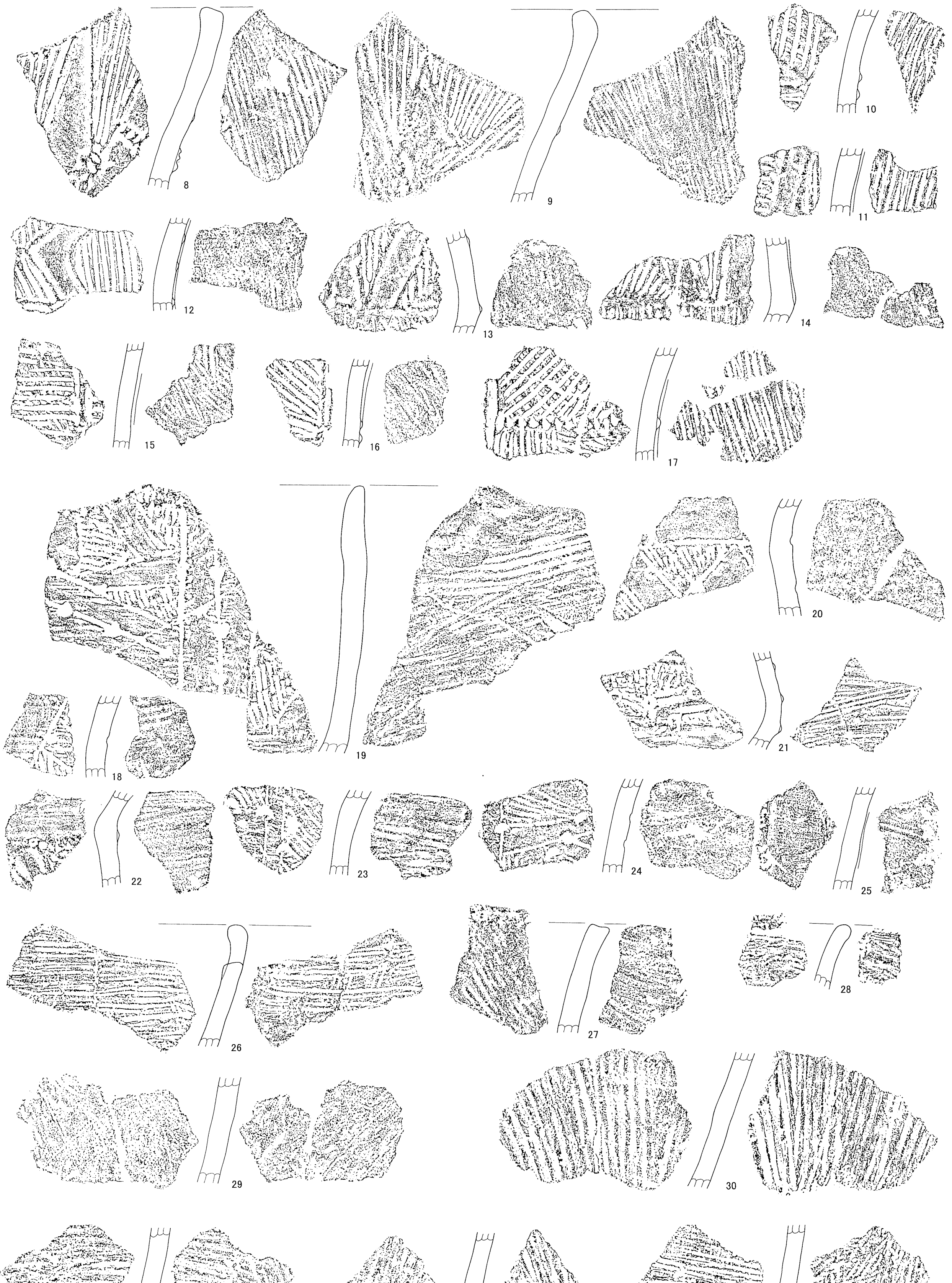
第16図　第Ｉ号炉穴群出土遺物（1/2）



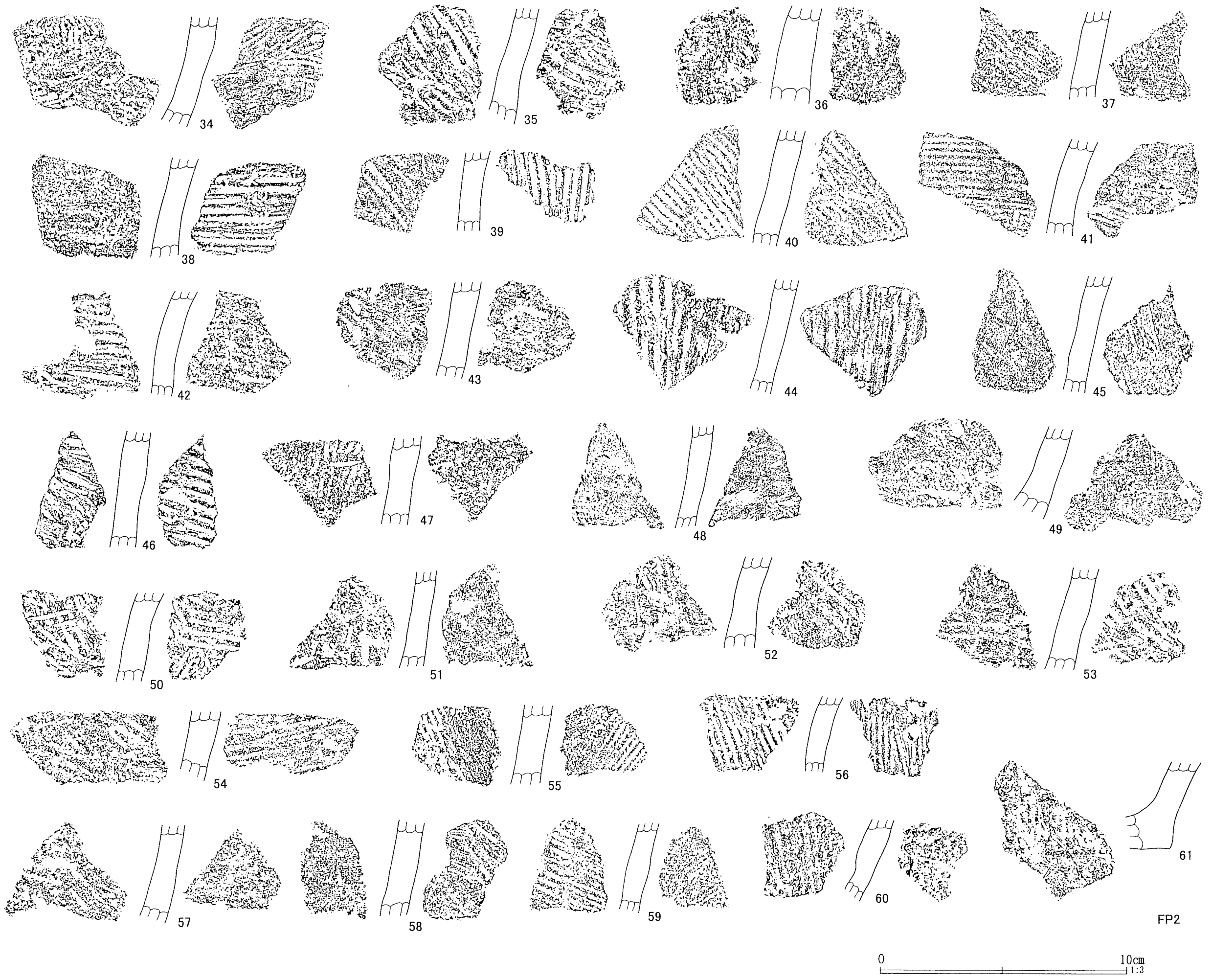
第17図　第Ⅰ（2/2）・２号（1/3）炉穴群出土遺物



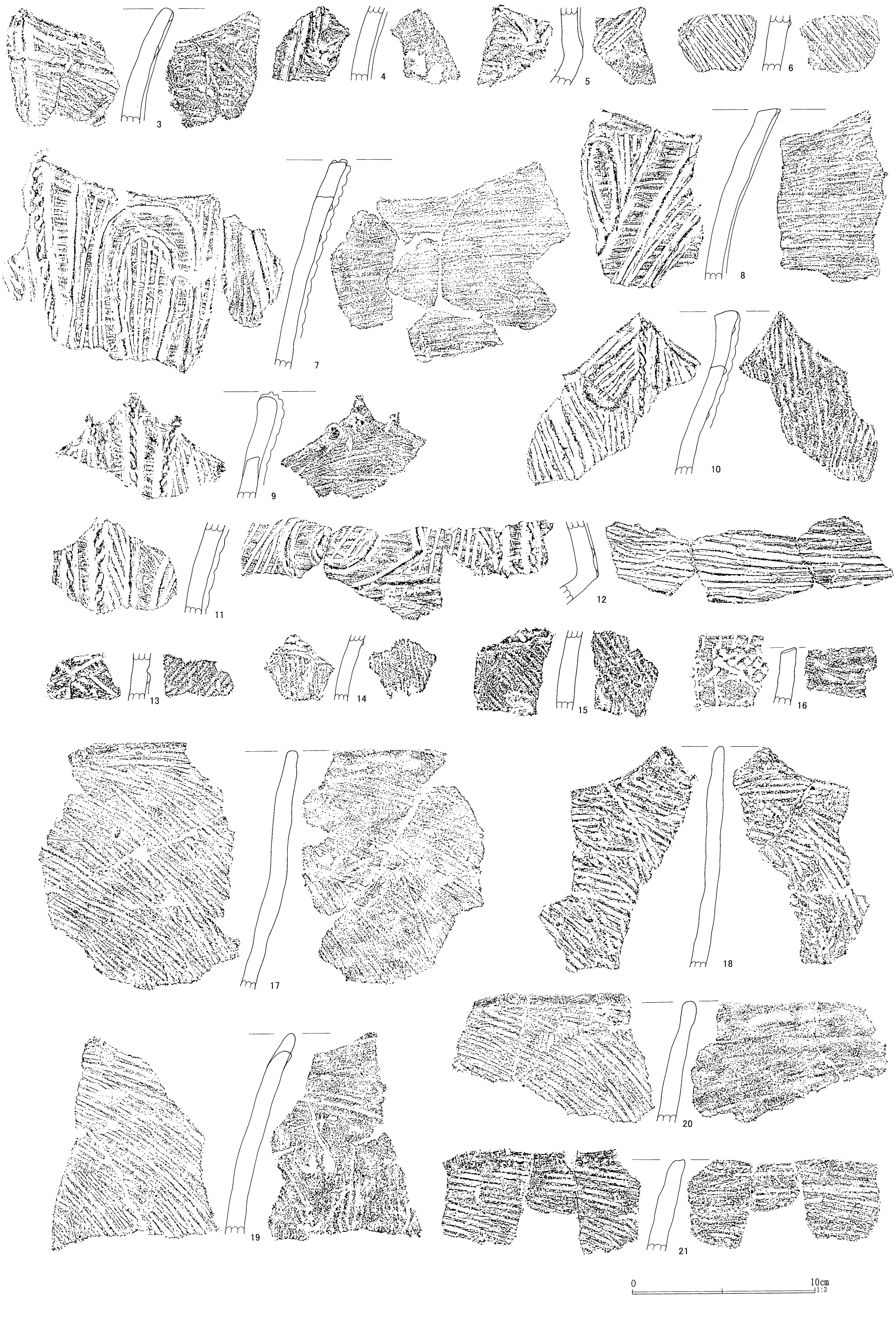
第18図　第２号炉穴群出土遺物（2/3）



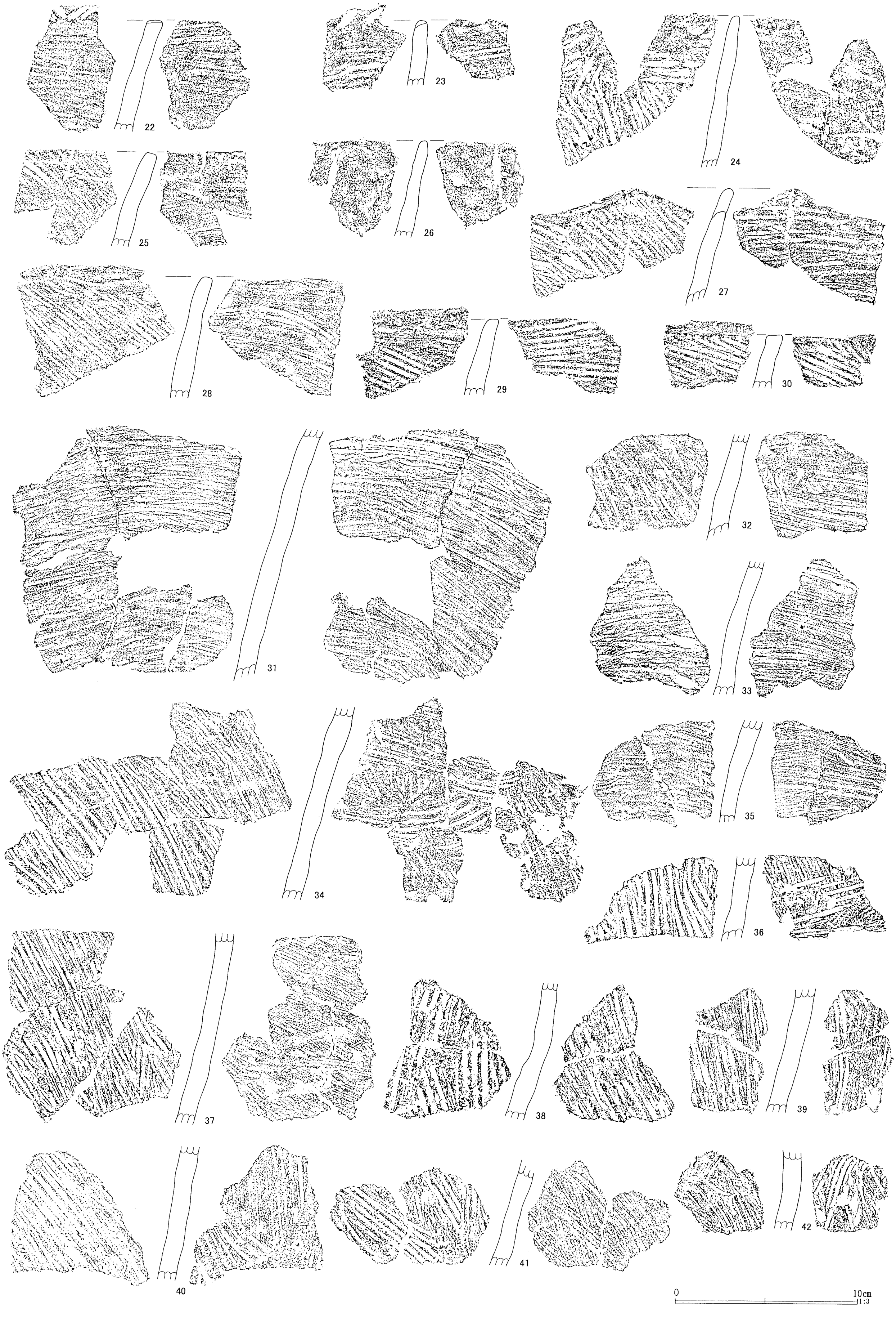
第19図　第２（3/3）・３号（1/4）炉穴群出土遺物



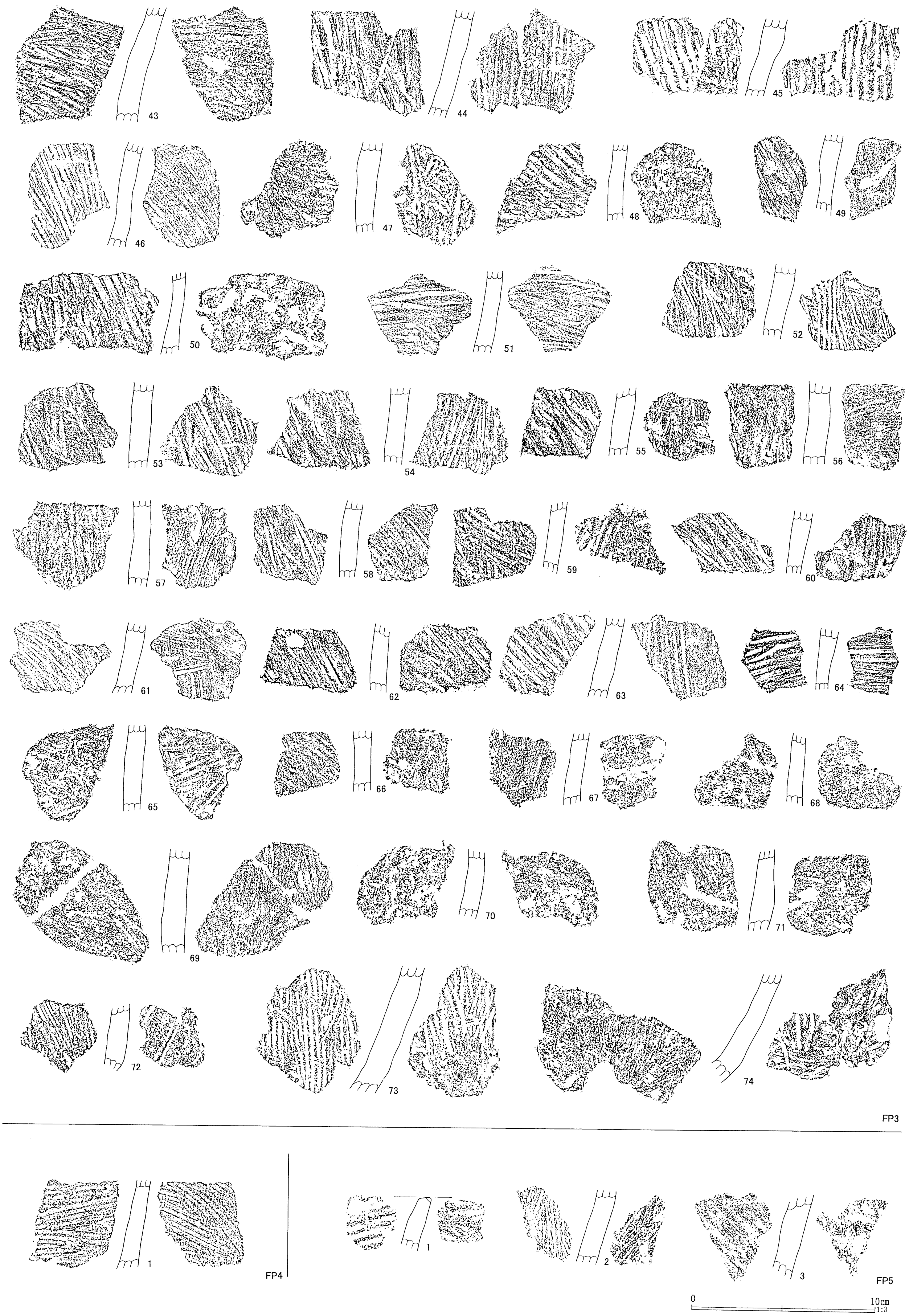
第20図　第３号炉穴群出土遺物（2/4）



第21図　第３号炉穴群出土遺物（3/4）



第22図　第３（4/4）・４・５号炉穴出土遺物



第９号炉穴（第15図）

第９号炉穴はG－９グリッドから検出した。

全体は１つの大きな窪みから構成されていた。

全体の大きさは約1.4ｍ×1.9ｍの不整形であった。

被熱痕跡は１箇所から検出した。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

以上のように、縄文時代早期の炉穴については、９基を確認した。この中で、第４号炉穴は二つの炉穴に別れる可能性が、７・８号炉穴は同一の炉穴である可能性も考えられた。

第１号炉穴群出土土器（第16～17図）

出土土器は全て縄文早期末葉の、条痕文系土器群である。

１、２、７は同一個体である。

１は波状口縁の波項部から隆帯が垂下し、隆帯上には２連の横位の刻みを境にして、上下に異方向の刻みを施す。文様帯は口唇部直下から２の様に、カーテンを束ねた様なモチーフを細隆起線で展開し、束ねの部分に横位の刻みを施す。

７は曲線状区画との交点に刻みを施す。区画内には集合沈線文を区画と同一方向に充塡施文し、内面に縦位の条痕を、外面には条痕の磨り消を施す。

３は１と同一個体の可能性もあるが、口縁部がやや内湾し、細隆起線の曲線区画が口唇部と接する部分には縦位２連の刻みを施す。区画内には、区画方向に沿う沈線文を充塡施文する。

４、６は波項部を中心として左右に突起を貼付し、突起から隆帯が垂下するモチーフを描く。垂下隆帯は文様帯分割線として施文され、細かな刻みを施す。

６は左側に突起を施して、左右対称形を整えているが、左側の突起からは分割隆帯は垂下しない。

５はやや太い対の細隆起線で文様帯を分割、区画し、区画内に太集合沈線文を充塡施文する。細隆起線間に太いなぞり状の整形を施す。

８は口唇部直下に隆起線を巡らせて口縁部を区画し、同種の隆帯を垂下させ、隆起線1本で区画を行う。区画内には集合沈線を充塡する。口唇上に、押圧状の刻みを施す。

９～15は２本対の細隆起線で区画を行い、区画内に集合沈線を充塡するもので、11、14は曲線的な区画を施す。

16～35は内外面に明瞭な条痕を施文するもので、16～20は口縁部、他は胴部破片である。口唇部は丸頭状を呈するものが多く、17は波状口縁で、18、19の口唇部にはきざみを施す。

36～43は擦痕状の整形を施すもので、44はやや鈍角な尖底である。

第２号炉穴群出土土器（第17～19図）

出土土器は早期末葉の条痕文系土器群で、野島式と鵜ガ島台式に比定される土器群である。

１、５～９、13、14は同一個体で、第１号炉穴群出土の１～３、７とも同一個体である。

１は第１号炉穴群の１と同様に、波項部から異方向の刻みを施す隆帯を、胴部の屈曲部まで垂下して文様帯を分割し、細隆起線で縦位構成の区画文を施す。区画内には集合沈線文を充塡施文し、区画交点には横位２連の刻みを施す。文様帯下部は、縦位の条痕文を施文する。

３は角頭状口唇部が開く器形で、口唇上に刻みを施し、口唇直下に細隆起線を巡らせて口縁部を分帯する。区画は曲線的な細隆起線で施し、集合沈線文を充塡施文する。

10～12、15～17は細隆起線区画内に集合沈線文を充塡施文する破片で、11、15は横位の集合沈線文を施す。

17は区画の細隆起線に、刻みを施す。以上、野島式に比定される有文土器である。

２は内削状口唇部外端に刻みを施し、細隆起線の区画を施すもので、区画内には結節沈線を充塡する。

４は内削状の口縁部に沈線文を巡らせて、幅狭口縁部文様帯を区画し、集合鋸歯状文を施文する。

19は双頭の緩い波状口縁を呈し、内削状の口唇部外端に刻みを施す。波項部から３本沈線を垂下して文様帯を分割し、２本対の平行沈線で細区画を行う。大

きな区画は分割線と同様に３本沈線で行い、３本沈線の中の線上と区画交点に半截竹管の刺突文を施す。区画内には竹管外面使用の２連刺突文を充塡施文する。

20はⅡ文様帯上端部で、沈線文の区画内に２連の結節沈線文を施文する。

18、23、24は沈線区画内に結節沈線を充塡施文するもので、区画交点に半截竹管の大きな刺突文を施す。

21、22、25は細隆起線の区画を施すもので、21、22は区画交点に円形竹管文を施し、25は半截竹管刺突文を施す。以上、鵜ガ島台式の有文土器である。

26～61は条痕文を施文する無文土器で、26～28は口縁部、29～60は胴部、61は平底の底部破片である。

26は緩い波状縁で、角頭状の口唇部を呈する。

27は角頭状の口縁部がやや外反する器形で、28は丸頭状口唇部を呈する。いずれも刻みは認められない。胴部破片は内外面とも条痕を施文するものが多いが、29、45、48、49、52、57、58は擦痕整形を施す。

大半の破片が野島式の無文土器と思われるが、61の平底は鵜ガ島台式である。

第３号炉穴群出土土器（第19～22図）

出土土器は早期末葉の条痕文系土器で、野島式の新しい土器群を主体とする。復元される大形破片が２個体出土した。

１は口縁部から底部付近までが残存する破片で、口唇部が面取り状の丸頭状を呈する砲弾形の尖底土器である。内外面に縦位方向の条痕を施す。推定口径12.5cm、現存高14cmを測る。

２は底部付近まで現存する胴部破片で、現存高27.6cmを測る。内外面とも縦位方向の条痕を施す。

３～５は細隆起線のみで区画を施すもので、３は波状口縁の波頂部から細隆起線を垂下し、口縁部に１状の細隆起線を巡らせて区画する。口唇部は内削状を呈し、口唇部直下にも細隆起線を巡らす。

４、５は細隆起線のみで区画を行うもので、５は文様帯下端部が屈曲する器形である。

６は細隆起線区画内に、集合沈線文を充塡施文する。

７～９、11は同一個体である。

７は９を波頂部とする波状口縁、内削状の口唇部が開く器形を呈する。文様帯は波頂部を対とする刻みを施す３本の隆帯を垂下して分割し、併行の細隆起線で区画を行い、曲線的なモチーフを表現する。区画内は集合沈線文を充塡施文する。内外面に横位の擦痕状整形を施し、文様帯内では擦痕が地文状となる。

10は波頂部がやや内湾するが、７とほぼ同様の器形で、裏面に条痕整形を施す。波頂部から刻みを施す１本の隆帯が垂下して文様帯を分割するが、左右でシンメトリーな構成を採らない。

12は強く屈曲する胴部破片で、併行して垂下する刻みのある隆帯で分割し、併行細隆起線でＪ字状の曲線モチーフを描く。内面に強い条痕を施文する。

13～15は細隆起線区画に沈線文を充塡施文する破片である。

以上、野島式の新しい段階の有文土器である。

16は１点のみ混入していた鵜ガ島台式の口縁部破片である。内削状の口唇部上に細い刻みを施し、細沈線の区画内に、角状工具による太い結節沈線文を施文する。

17～74は条痕や擦痕の施される無文土器である。

17～30は口縁部、31～72は胴部、73、74は底部破片である。口縁部は18、19、27が波状縁で、他は平縁である。

17～20は丸頭状、21～30が角頭から内削状を呈し、22には異方向の、23は斜位の刻みを施す。胴部では明瞭な貝殻条痕文を施文するものが多いが、31～33は強い擦痕状の整形である。

また、65～71はなで状の擦痕整形を施している。底部は尖底であるが、やや鈍い尖底となる。

第４号炉穴群出土土器（第22図）

図示し得たものは１点のみであるが、内外面に条痕を施文する胴部破片である。

第５号炉穴出土土器（第22図）

出土土器は早期後葉の条痕文系土器で、１は内削状口唇部外端に、細かな刻みを施す。

２は内外面に条痕を、３は擦痕状の整形を施す。

4．ピット群（第23図）

28本のピットが、I－4・5グリッドの一定の範囲から比較的まとまって検出できたので、ピット群としてとらえた。

ピット群の口径は、25～60cm前後で、30～40cmの範囲に集中が認められた。深さは10～30cm程度であった。

平面形態は、円形から楕円形のものが多く、P12、P14、P18、P23など隅丸方形に近いものも認められた。

分布範囲は、全体を一つの構造体としてとらえるならば、およそ東西4.5×南北6.0mの範囲に分布しており、P７、P９、P18、P２、P15、P１、P14、P27、P26、P28、P６をひとつのまとまりと認識し、P13、P25、P22、P23、P12、P11、P10、P20、P19、P８についても一つのまとまりとして認識するならば、前者はおよそ東西4.5m×南北3.0m、後者はおよそ東西3.0m×南北3.5mの二つの構造体となる。

ピットの覆土は、土壙の覆土と性状が一致したものが多かったので、縄文時代早期のものであると判断した。炭化物や焼土粒などは認められなかった。

覆土を慎重に精査したが、土器片や石器などの遺物は検出できなかった。

なお、ピット群の北西側にSK４が存在しているが、ピット群との関係は、明らかに出来なかった。

第23図　ピット群

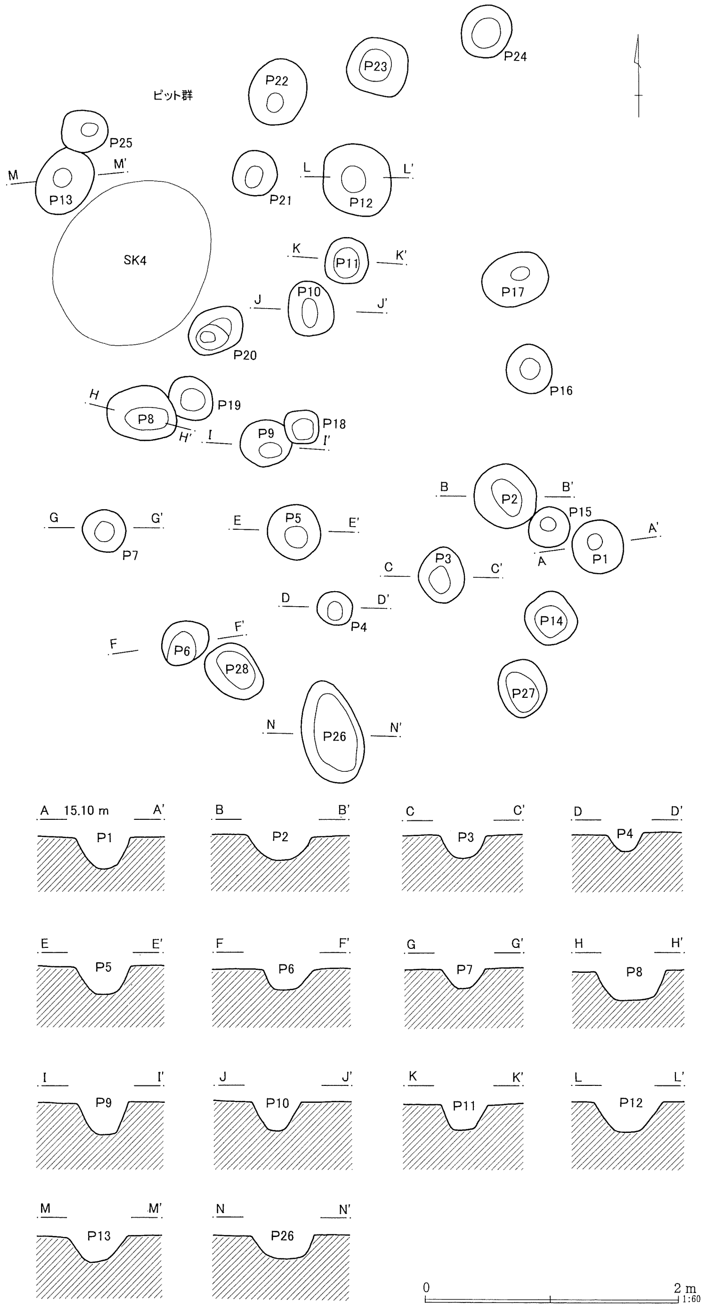


表２　ピット群を構成するピットの一覧表

番号	深さ/cm	グリッド	番号	深さ/cm	グリッド	番号	深さ/cm	グリッド	番号	深さ/cm	グリッド
1	25	I－4	8	20	I－4	15	15	I－4	22	30	I－4
2	20	I－4	9	25	I－4	16	15	I－4	23	15	I－4
3	20	I－4	10	20	I－4	17	20	I－4	24	20	I－4
4	15	I－4	11	20	I－4	18	20	I－4	25	15	I－4
5	20	I－4	12	20	I－4	19	10	I－4	26	20	I－4・5
6	15	I－4	13	20	I－4	20	20	I－4	27	20	I－5
7	15	I－4	14	20	I－4	21	15	I－4	28	10	I－4・5

5．遺構外出土遺物（第24～29図）

稲荷台遺跡出土の縄文土器は、早期から中期の土器群が存在するが、早期の条痕文系土器群を主体としている。前期はごく少量の破片が検出されており、中期では終末から後期最初頭にかけての土器群が出土している。

第Ⅰ群土器（1）

縄文早期初頭の撚糸文系土器群である。1点のみ出土したが、1は口唇部上面と外端部に縄文を施文する井草Ⅰ式である。口縁部には、指頭による爪形状の圧痕が認められる。

第Ⅱ群土器（2、3）

早期中葉の沈線文系土器群である。2は小さく繋ぐ様な斜位の沈線文で区画し、横位の併行沈線文を密に施文するものである。赤褐色を呈し、内面に強い縦位方向のなで整形を施す田戸下層式に比定されるが、横位密の併行沈線文構成は珍しい。3は底部付近の破片で、同心円状の横位の整形と、浅い沈線文が巡る。田戸下層式に比定される。

第Ⅲ群土器

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。

第1類土器（4～40）

野島式土器を一括する。

a種）細隆起線のみで区画、モチーフを描くものを一括する（4～8）。4、5とも波状口縁を呈する。4は内削状の角頭口縁が外反する器形で、口唇部直下と口縁部に細隆起線を巡らし、波頂部から細隆起線を垂下する。5は内削状の丸頭口縁を呈し、口唇部下に細隆起線を巡らして文様帯を分帯、2本の細隆起線を波頂部から垂下して分割する。6は屈曲の無い器形で、細隆起線による幾何学的なモチーフを描く。

7は細隆起線というよりも隆帯に近い隆起線を垂下するもので、地文の条痕がモチーフ状の効果を表わす。8は屈曲する器形で、屈曲部まで細隆起線が垂下する。a種の中で7、8は新しい段階に位置付けられよう。

b種）細隆起線区画内に、集合沈線を充填施文するものを一括する（10～25）。10、25は細かな刻みを施す対の細隆起線で文様帯を分帯・分割し、区画は対の細隆起線で行い、集合沈線文を充填施文する。16、19は間隔の狭い細隆起線で区画するもので、11、12、15、18、21は隆起線状の太い細隆起線を使用する。

c種）沈線文のみで区画、充填を行うものを一括する（26～33）。26は波状口縁に沿って沈線文を巡らせ、幅狭の口縁部文様帯を区画し、沈線文を充填施文する。口唇部直下には細隆起線を巡らし、強い整形で口唇端部を形成する。28は竹管外面を使用した太沈線文で区画し、やや太目の集合沈線文を充填施文する。他はほぼ同種の沈線文で区画、充填を行うものであり、地文に条痕が残るものも多い。

d種）押圧状の刻みを施す隆起線で分帯、分割し、沈線区画を行い、太沈線文を充填する土器群である（34～40）。34～40は同一個体と思われる。34は角頭状の口唇部に、押圧の刻みを施し、口唇部が小波状を呈する。文様帯は35の様に2本対の隆起線を垂下させて分割し、段部で分帯される。口縁部の区画は見られない。区画を細沈線で行い、竹管外面の太沈線文を充填する。充填文が短い場合は、刺突文状を呈する。隆起線上には等間隔で押圧状の刻みを施すが、区画交点を意識した区画は無いようである。薄手の土器で、擦痕状の整形を施す。野島式最終末から鵜ガ島台式への移行期の土器群と思われる。

第2類土器（41～98）

鵜ガ島台式土器を一括する。

a種）分帯、分割、区画に細隆起線文を使用するものを一括する（42～51）。42～46は口縁部破片で、大半が内削状の口唇部を呈し、その外端部に細かな刻みを施す。45は筒状の把手であり、刻みは施さない。文様帯の分帯や分割に細隆起線を使用し、区画には沈線文を使用するものが多く、充填文には結節沈線文を多用する。区画交点には円形竹管文や、半截竹管文の刺突を施す。

b種）区画、充填文に沈線文のみを使用するものを一括する（52～64）。52は区画に3本沈線文を使用し、

53～55、58、59は２本対沈線で行う。56、57は斜格子目状区画内に沈線充填文を施文するものである。60～64は斜格子目文を沈線で施文し、交点部毎に円形竹管文を施文するものと、部分的に施すものとがある。

ｃ種）沈線区画内に結節沈線文を充填施文するものを一括する（65～98）。65は外反する口縁部に矢羽根状の結節沈線文を施文する。66～78は内削状の口唇部を呈し、66、70、72、74～78は外端部に細かな刻みを施す。71、73は口唇部上に刻みを施す。68、72は幅狭無文帯を口縁部に区画するが、78は双頭の波状口縁部下のみ無文部を区画位する。区画の交点には円形竹管文を施文するものが多いが、斜位に刺突するため円形状を呈さないものもある。66～69、74、77、84等は明らかに半截竹管状の刺突文を施すものである。また、79の様に充塡に結節沈線文を使用していても、区画交点に刺突文を施さないものもある。

第３類土器（99～169）

条痕文のみ施文される無文土器を一括する。

ａ種）口唇部上面に刻みを施すものを一括する（99～103）。大半は角頭状口唇が外反する器形を呈し、口唇部上面に刻みを施すものである。103がやや内湾して開く器形を呈する。100は方向が異なる様に、押圧状の斜位刻みを施す。

ｂ種）外削状口唇部外端に細かな刻みを施すものを一括する。平縁土器と思われ、外削状口唇部外端への刻みが鵜ガ島台式土器の大きな特徴となることから、大半が鵜ガ島台式の無文土器と思われる。

ｃ種）口唇部に刻みを持たないものを一括する（109～114）。口唇部は角頭状から丸味の強いものまであり、112は波状を呈する。

ｄ種）胴部破片で、条痕文を施文するものを一括する（115～154）。明瞭な条痕文を内外面に施文するものであるが、124、126、129、137、144等は内面に擦痕状の整形を施す。

ｅ種）擦痕状の整形を施すものを一括する（155～166）。

ｆ種）底部を一括する（167～169）。167、168はやや鈍角な尖底を呈し、169は小形の平底を呈する。

第Ⅳ群土器

前期の土器群を一括する。170は「正反の合」による異条斜縄文を施文する底部破片で、関山Ⅱ式土器である。１点のみの出土である。

171～174は前期終末の土器群で、171は口縁部に扁平な浮線文で弧状のモチーフを描く。172～174は地文縄文上に結節浮線文を施文する土器で、171と合わせて、十三菩提式を構成する土器群である。

175は薄手の土器で、単節 RL を口縁部から施文するもので、諸磯式土器に比定されよう。

第Ⅴ群土器

中期から後期の土器群を一括する。

177、178は中期中葉の古い様相を示す土器で、177は阿玉台系の土器である。

188、189は中期後葉の深鉢の破片で、いずれも隆帯で文様が施文されている。

176、179～187は後期初頭の深鉢の破片である。176はゆるやかな波状口をもつもので、胴上部が大きく内湾する器形で、胴上部の文様は２本の沈線によって施文され、波長部分では、渦巻きの下方に逆向きの渦巻きが追加する形で施文されている。胴下部は逆Ｕ字状に沈線が施文されている。

190は後期前葉の堀之内式期の深鉢胴部の破片で、細い沈線によって施文されている。

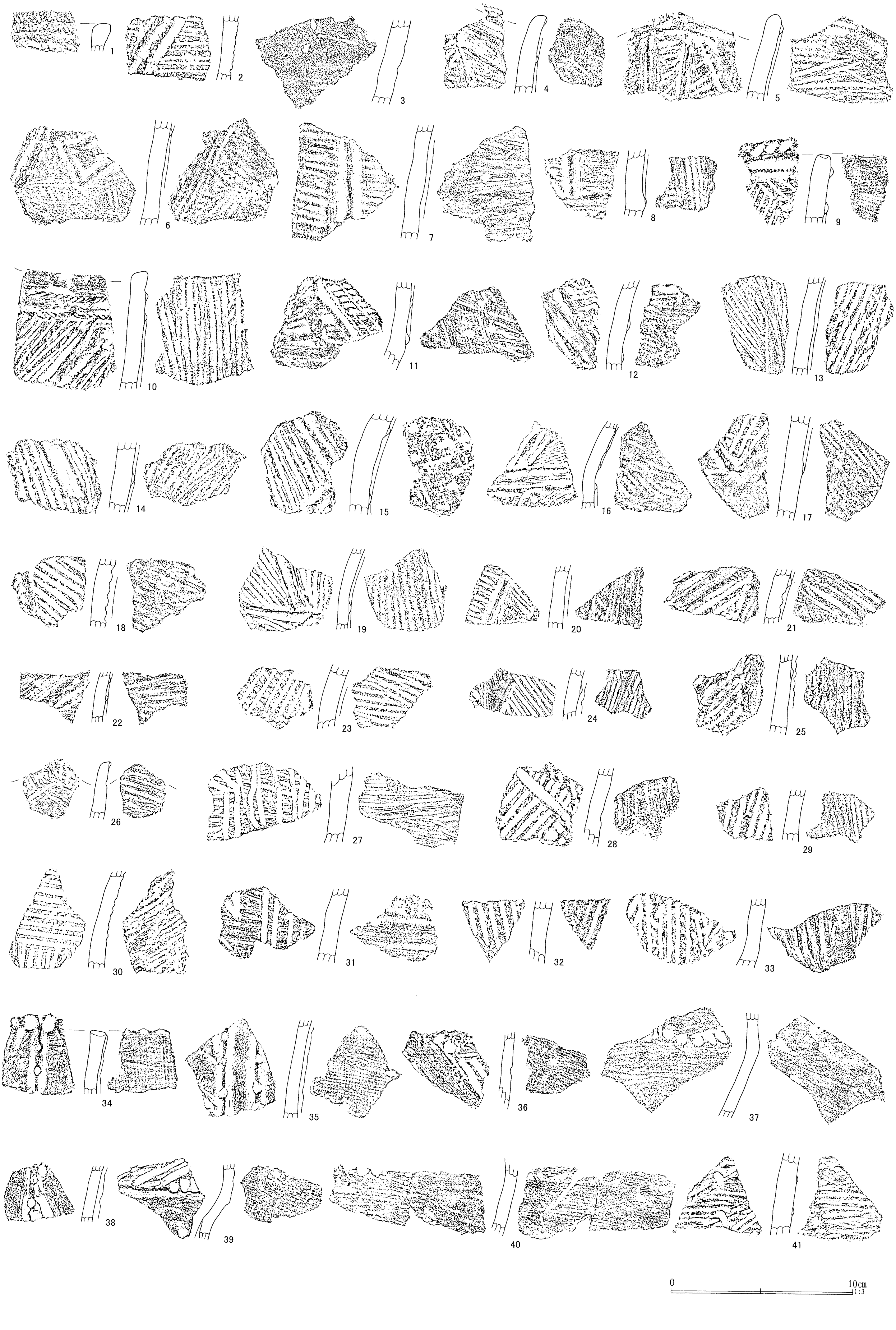
191、192は浅鉢の破片で中期末葉から後期初頭のものである。

グリッド出土石器

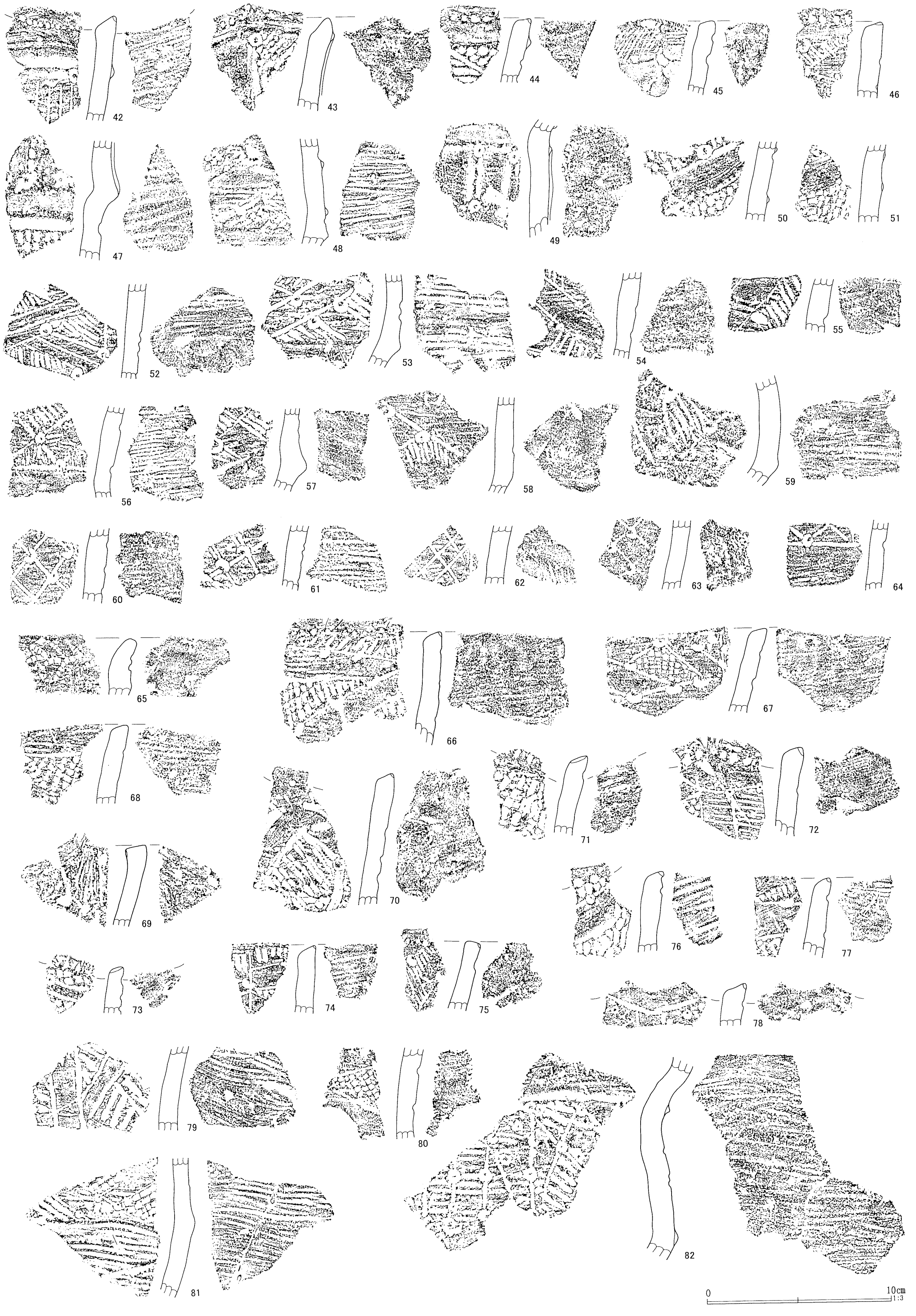
１～４は旧石器時代の所産で、１～３は尖頭器、４は篦状石器である。１は長さ6.2㎝、幅1.9㎝、厚さ0.7㎝、重さ7.7ｇ、石材はチャートである。

２は長さ3.8㎝、幅1.5㎝、厚さ0.7㎝、重さ3.6ｇ、石材はチャートである。３は長さ3.2㎝、幅1.7㎝、厚さ0.5㎝、重さ2.8ｇ、石材はチャートである。４は長さ4.9㎝、幅3.7㎝、厚さ1.3㎝、重さ26.8ｇ、石材は頁岩である。

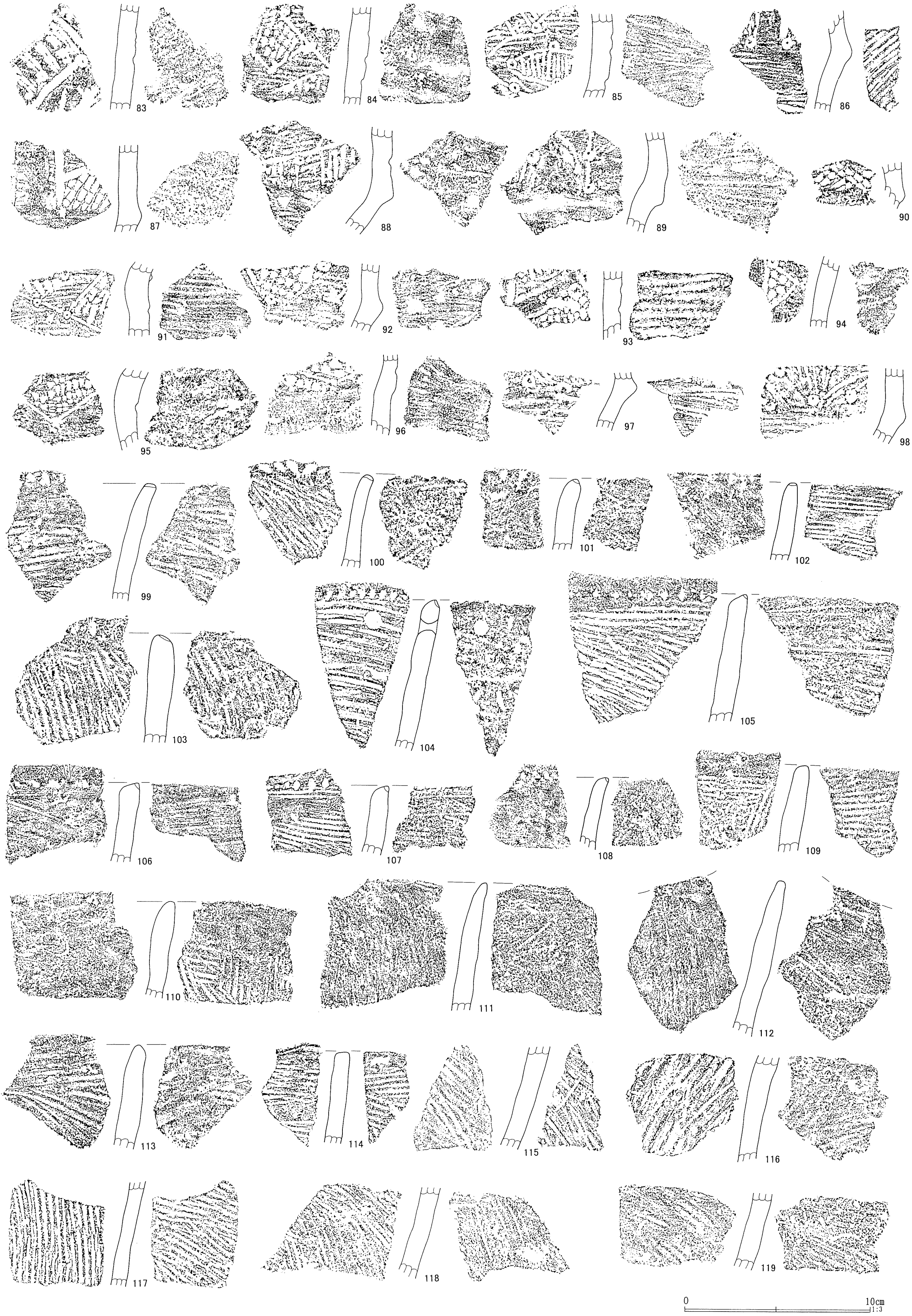
第24図　遺構外出土遺物（1/6）



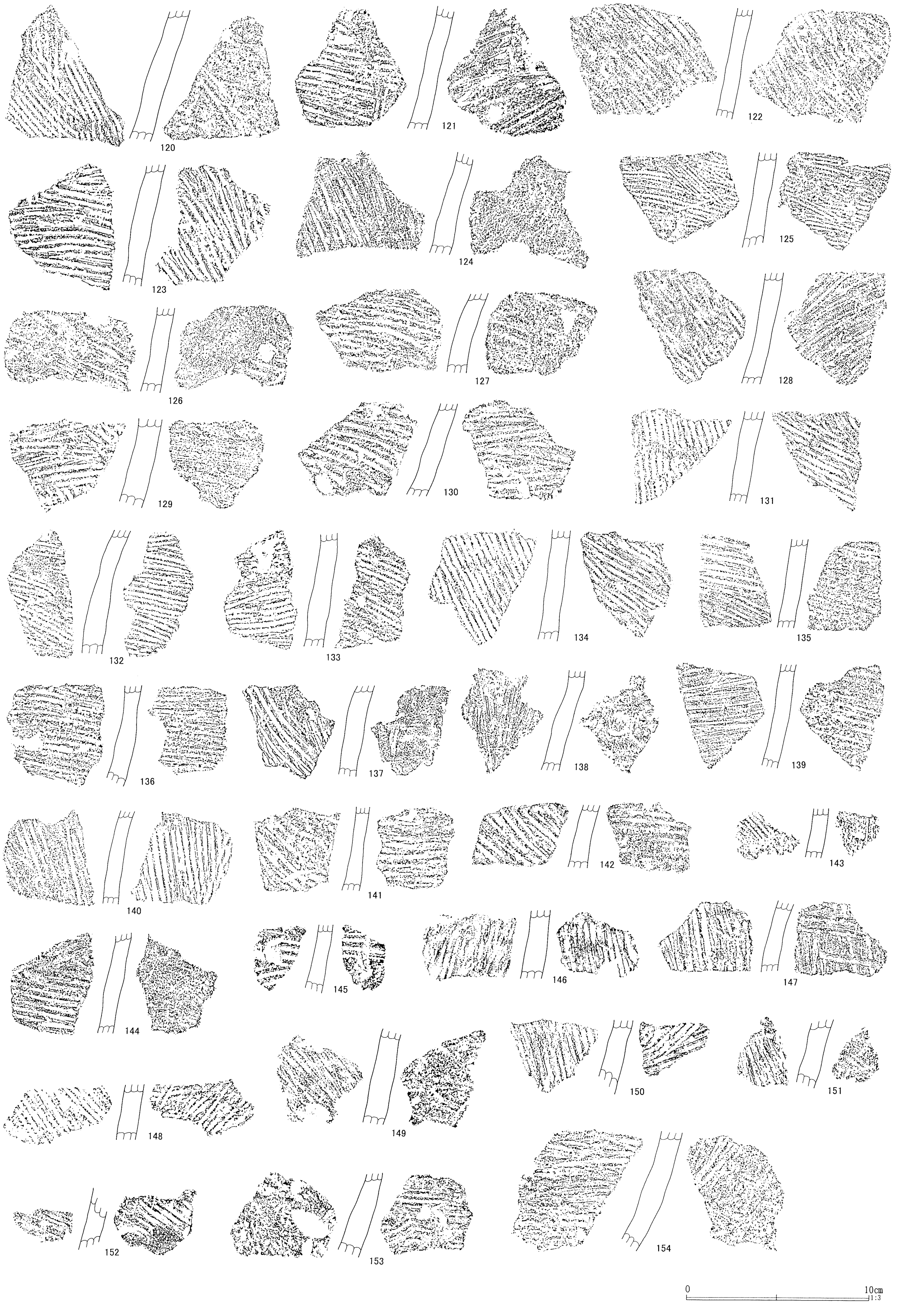
第25図　遺構外出土遺物（2/6）



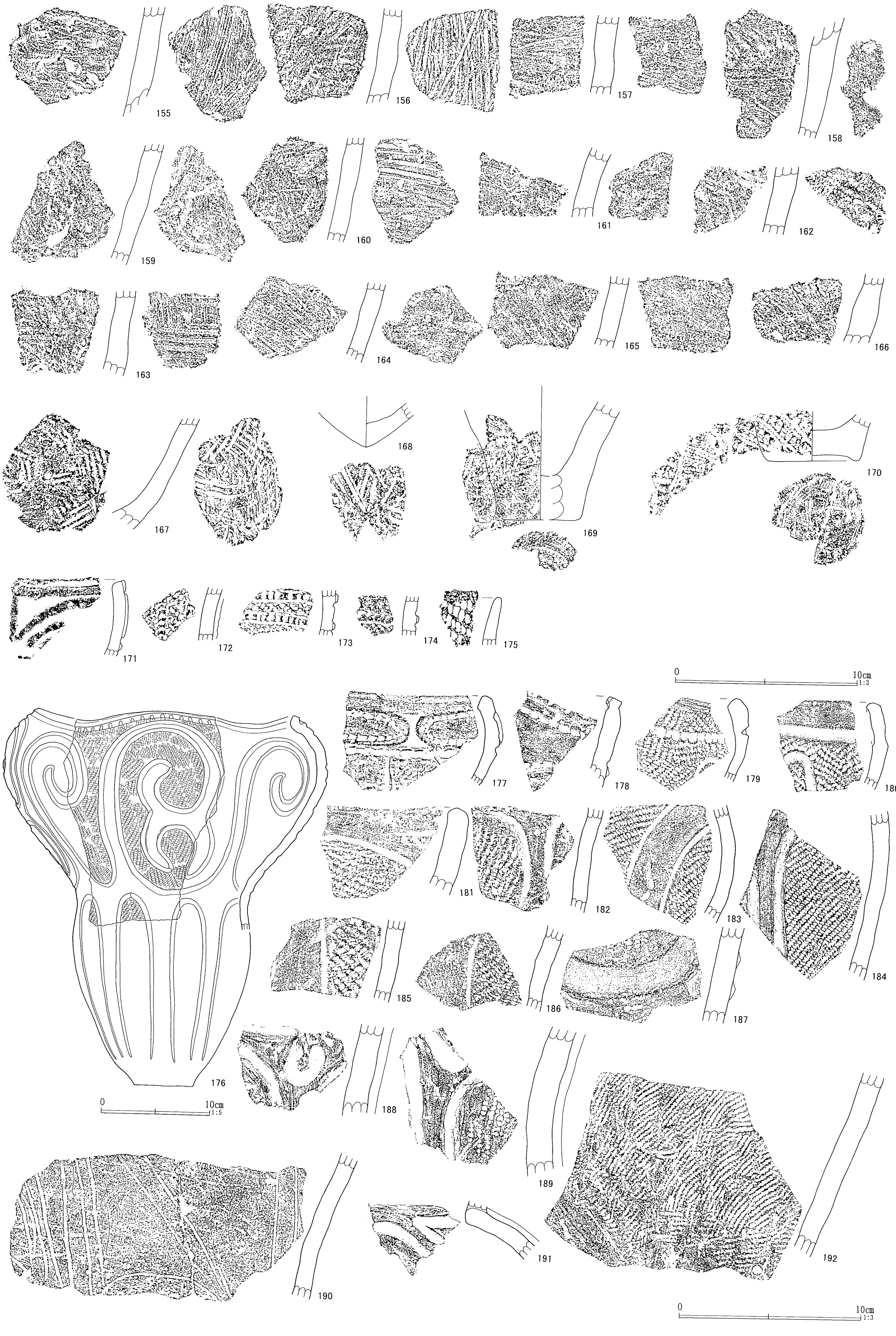
第26図　遺構外出土遺物（3/6）



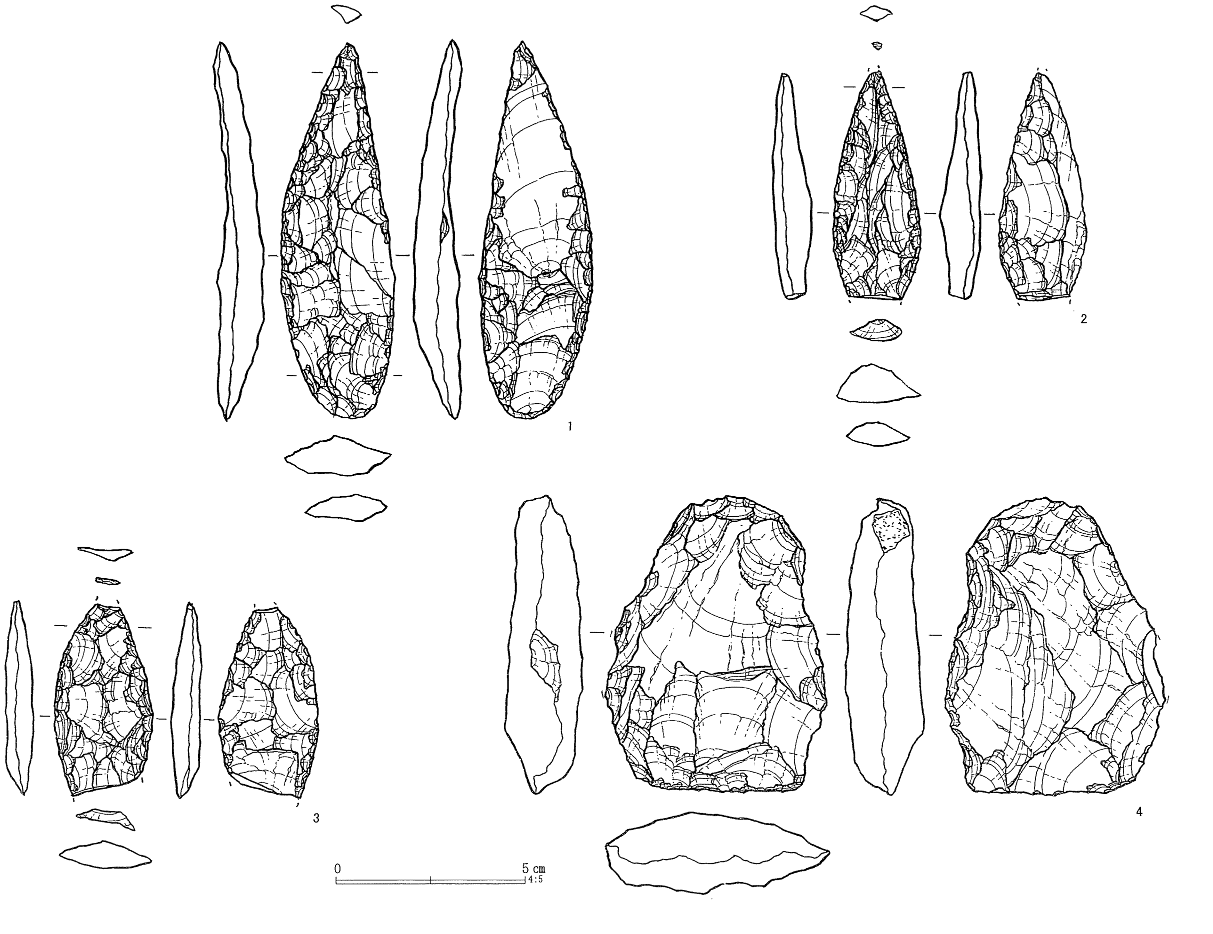
第27図　遺構外出土遺物（4/6）



第28図　遺構外出土遺物（5/6）



第29図　遺構外出土遺物（6/6）



5～9は縄文時代の所産で、5は無茎の石鏃で、重さ5.9ｇ、石材はチャートである。6、7は打製石斧で6は重さ123ｇ、石材はホルンフェルスである。7は重さ71ｇ、石材は泥岩である。8は石皿の破片で重さ486ｇ、石材は安山岩である。9は凹石で、重さ281ｇである。石材は安山岩である。

V　古墳時代の遺構と遺物

1．住居跡

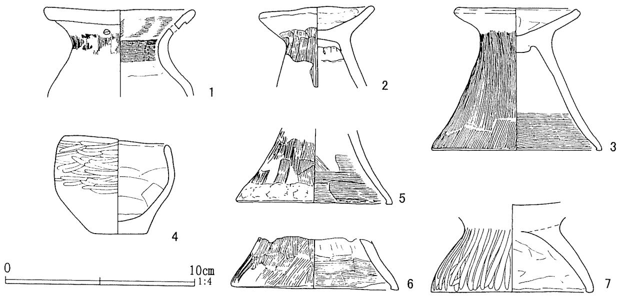
第60号住居跡（第30～32図）

第60号住居跡は、J－6・7、K－6グリッドから検出した。

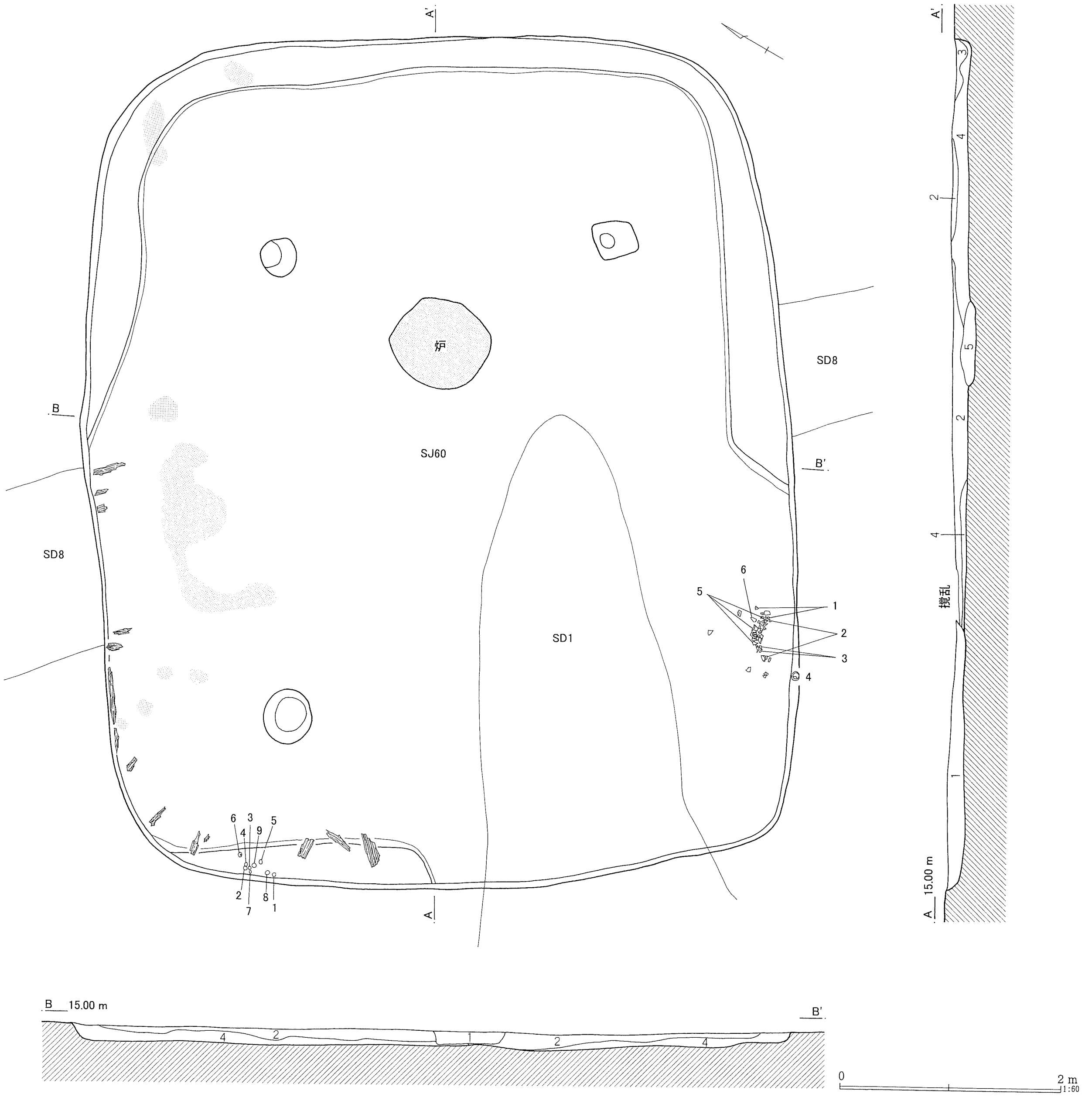
平面形態は方形で、主軸方位はN－60°－Eであった。

規模は、長軸長7.8m、短軸長6.5m、深さ15cm程度であった。

第30図　第60号住居跡出土遺物（1/2）



第31図　第60号住居跡



第60号住居跡覆土
1　淡灰色　　灰色粒子多含 ロームブロック含 客土
2　淡灰色　　灰色粒子多含 ロームブロック含 客土
3　黒色　　　粘性強 炭化物細粒含
4　暗褐色　　焼土粒子・炭化物含
5　暗赤褐色　焼土粒子多含 粒子粗 炭化物・ローム粒子含

壁は明瞭であり、中央部北東側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

北東壁側から北西壁側までと西南壁側の一部が、幅35cm、高さ10cm程度盛り上がっていた。

貼り床は不明瞭で、床面の断面観察では確認できなかった。

柱穴は３本検出できた。検出できなかった１本は、SD1によって壊されたと考えられた。

住居跡は、SD1、SD8と重複していた。

重複関係は、SD1、SD8に切られていた。

実測可能な遺物として、壺、器台、鉢、台付甕の脚部、土玉などを検出した。

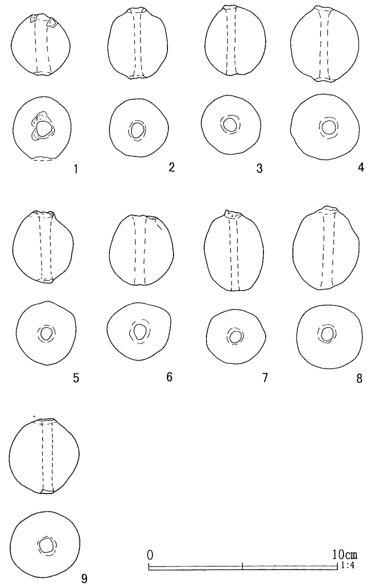
１～６は、住居跡南側の壁際からまとまって、出土した。

土玉は、西側のコーナー付近からまとまって検出した。

住居跡は、火災を受けており、西側の床面上からは、炭化材が検出できた。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

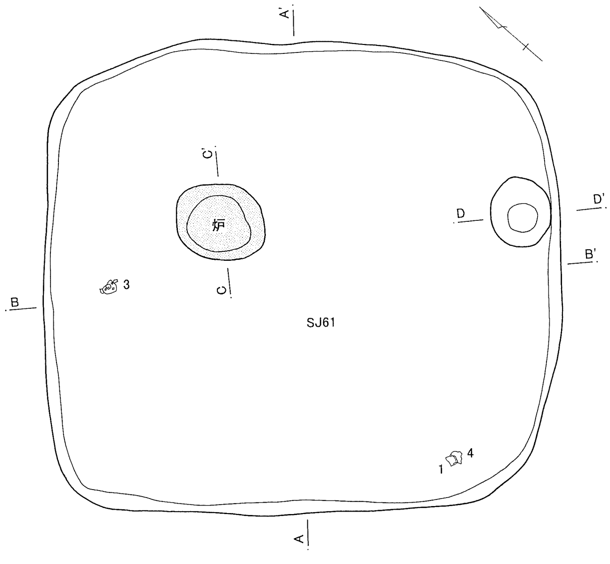
第32図　第60号住居跡出土遺物（2/2）

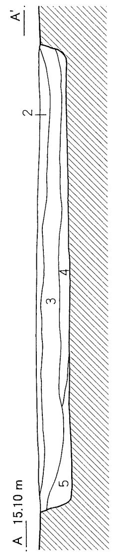


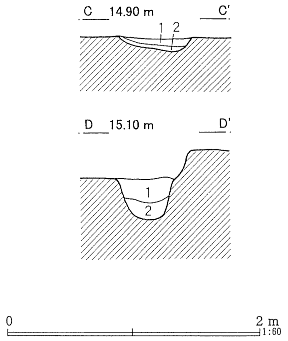
第60号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	7.8			B.F.L	3	褐　色	70	赤彩
2	器　台	(6.0)			B.E.F	3	褐　色	50	
3	器　台	6.8	7.5	(9.0)	B.E.F.L	3	褐　色	60	
4	鉢	5.5	5.2	3.0	B.E.G	3	褐　色	100	
5	台付甕			(8.0)	B.E.G	3	褐　色	40	
6	台付甕			(8.5)	B.D.E	3	褐　色	60	
7	台付甕			(8.3)	B.E.G.L	3	褐　色	30	

第33図　第61号住居跡

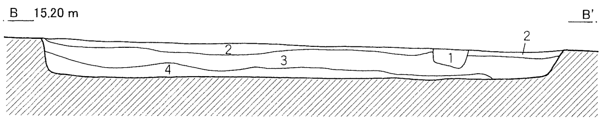






第61号住居跡炉跡覆土
1　暗褐色　　焼土微粒含
2　暗褐色　　焼土粒やや多含

第61号住居跡ピット覆土
1　暗褐色　　ローム微粒含
2　暗褐色　　ローム粒やや多含



第61号住居跡覆土
1　黒色　　粘性無 ローム微粒含 しまり無 ピット覆土
2　灰黒色　　粘性有 しまりやや有 硬質
3　暗褐色　　粘性無 ローム粒・ロームブロック含
4　暗褐色　　３層より暗 ローム粒含
5　暗褐色　　４層より暗 ローム微粒含

第61号住居跡（第33・34図）

第61号住居跡は、I－6グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－49°－Eであった。

規模は、長軸長4.1m、短軸長3.7m、深さ26cm程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北西側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

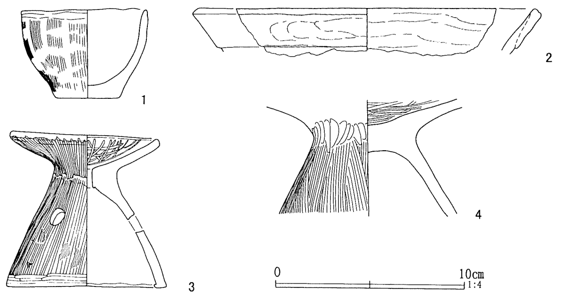
貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

柱穴は床面を精査したが、確認できなかった。

実測可能な遺物として、鉢、壺、器台、台付甕を検出した。１の鉢、４の台付甕脚部は住居跡南側のコーナー付近から、３の器台は住居跡北西から検出した。２の壺は、覆土中から検出した。

１の鉢は略完形で、外面にハケ目が、内面口唇部にハケ目の痕跡が認められた。２の壺は、赤彩された口縁部の破片で、内外面と端部は、ヨコナデ調整されていた。３の器台は、外面ハケ目の後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、脚部内面はナデ及びヨコナデ調整されていた。４の台付甕脚部は、脚部外面ハケ目の後接合部分を中心にヘラミガキ、甕部内面はヘラミガキ調整されていた。

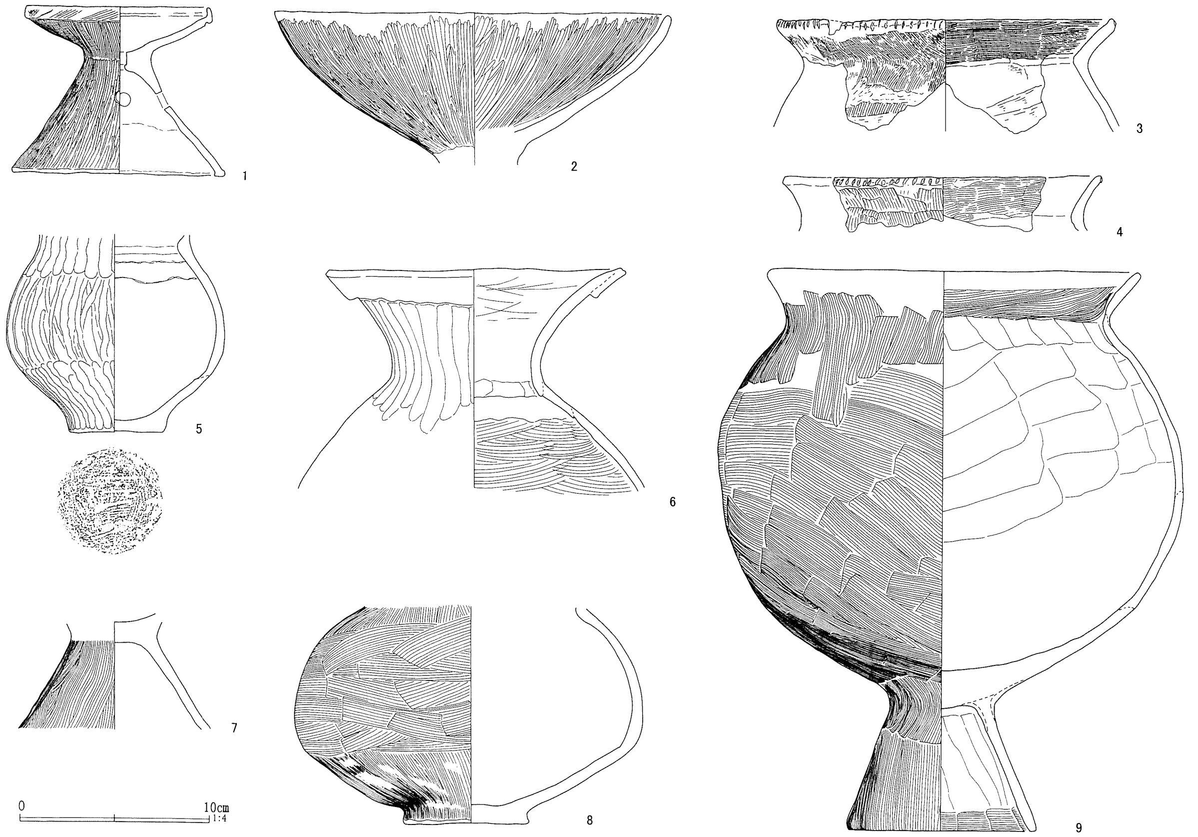
第34図　第61号住居跡出土遺物



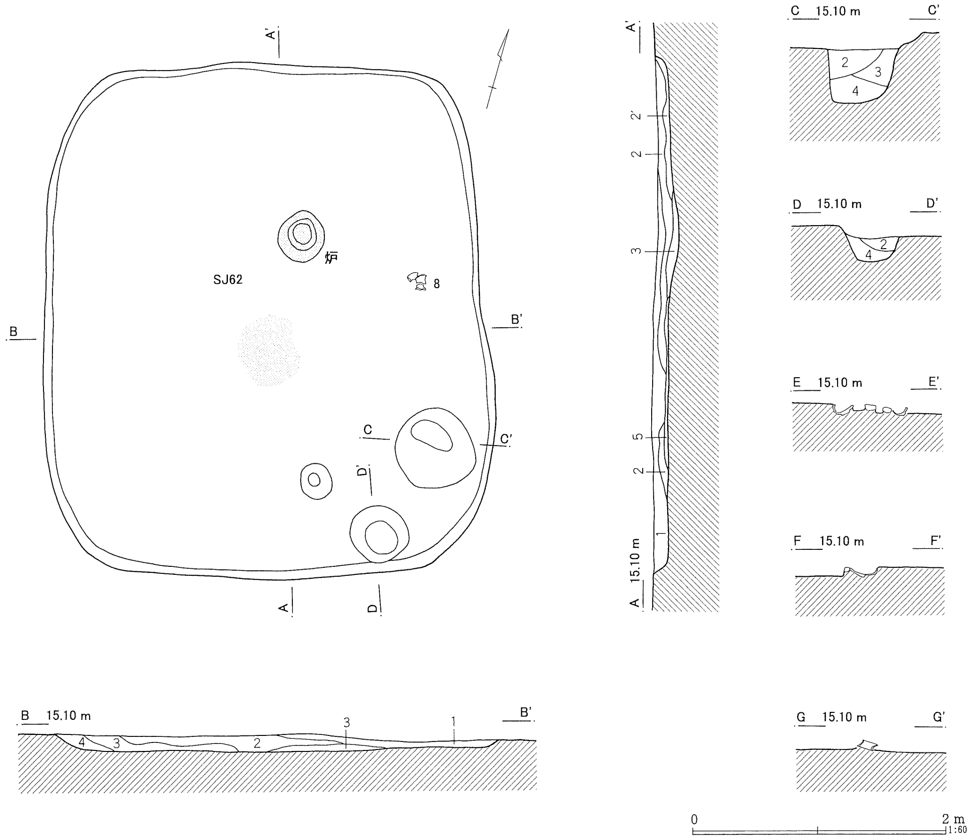
第61号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	鉢	(6.6)	4.6	3.2	B.E.F.G.L	3	褐　色	80	赤彩
2	壺	(17.9)			B.D.L	3	褐　色	10	
3	器　台	(7.7)	8.2	7.9	B.E.F.L	3	褐　色	90	
4	台付甕				B.E.G.L	3	褐　色	50	

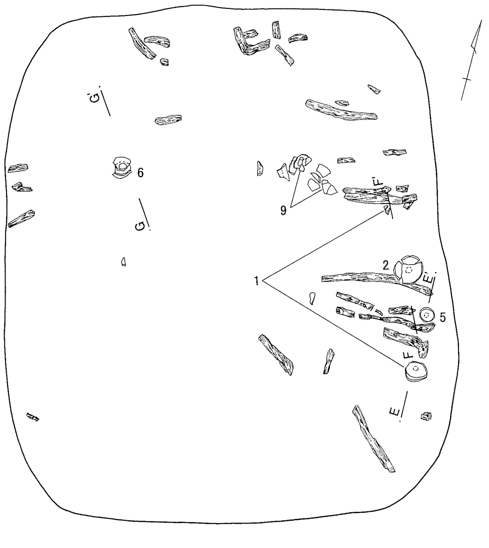
第35図　第62号住居跡出土遺物



第36図　第62号住居跡・遺物出土状況



第62号住居跡覆土
1 暗黒色
　粘性無
　焼土粒子含
　ローム微粒含
2 黒色
　粘性無
　焼土粒子含
　ローム粒含
　炭化物含
3 赤褐色
　粘性有
　焼土層やや固
4 暗褐色
　粘性強
　粒子粗
　ローム粒含
　ロームブロック含
5 暗褐色
　炭化物層
　粒子粗
　焼土含



第62号住居跡（第35・36図）

第62号住居跡は、Ⅰ－5・6グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－17°－Wであった。

規模は、長軸長4.1m、短軸長3.5m、深さ17cm程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

床面からピットが3本検出できたが、明らかに柱穴と断定できるものは認められなかった。

住居跡の床面上から炭化材を検出したので、いわゆる焼失家屋と考えられた。

実測可能な遺物として、器台、高坏、壺、甕、台付甕などを検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

2の高坏、5の広口壺、9の台付甕は住居跡東側の炭化材の間から、8の広口壺は東側の炭化材の下から、6の壺は西側からそれぞれ検出した。

2の高坏坏部は、内外面ヘラミガキと赤彩が施されていた。5の広口壺は、胎土が粗く砂粒が多量に含まれていたが、器表面はやや粗いヘラミガキと赤彩が施されていた。6の壺は、外面が粗なヘラナデ、内面が砂粒の移動を伴った強めのヘラナデ調整されていた。

9の台付甕は、外面と内面口縁部がハケ目、脚部内面は、下半のみハケ目調整されていた。

第62号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	器　台	9.6	8.9	10.7	B.F.G.L	3	褐　色	95	赤彩
2	高　坏	21.0			B.E.L	3	褐　色	90	
3	甕	17.6			E.G.L	3	褐　色	10	赤彩
4	甕	(16.5)			E.L	3	褐　色	10	
5	広口壺			(4.9)	B.E.L	3	褐　色	60	赤彩
6	壺	(15.4)			B.C.E.F.G	3	褐　色	80	
7	台付甕				B.E.L	3	灰褐色	60	
8	広口壺			6.5	B.E.F.L	3	褐　色	50	
9	台付甕	19.6	29.6	9.6	B.E	3	暗褐色	70	

第63号住居跡（第37～39図）

第63号住居跡は、K－5・6、L－5・6グリッドから検出した。

住居跡の南側は調査区外のため、検出できなかった。

平面形態は方形で、主軸方位はN－19°－Wであった。

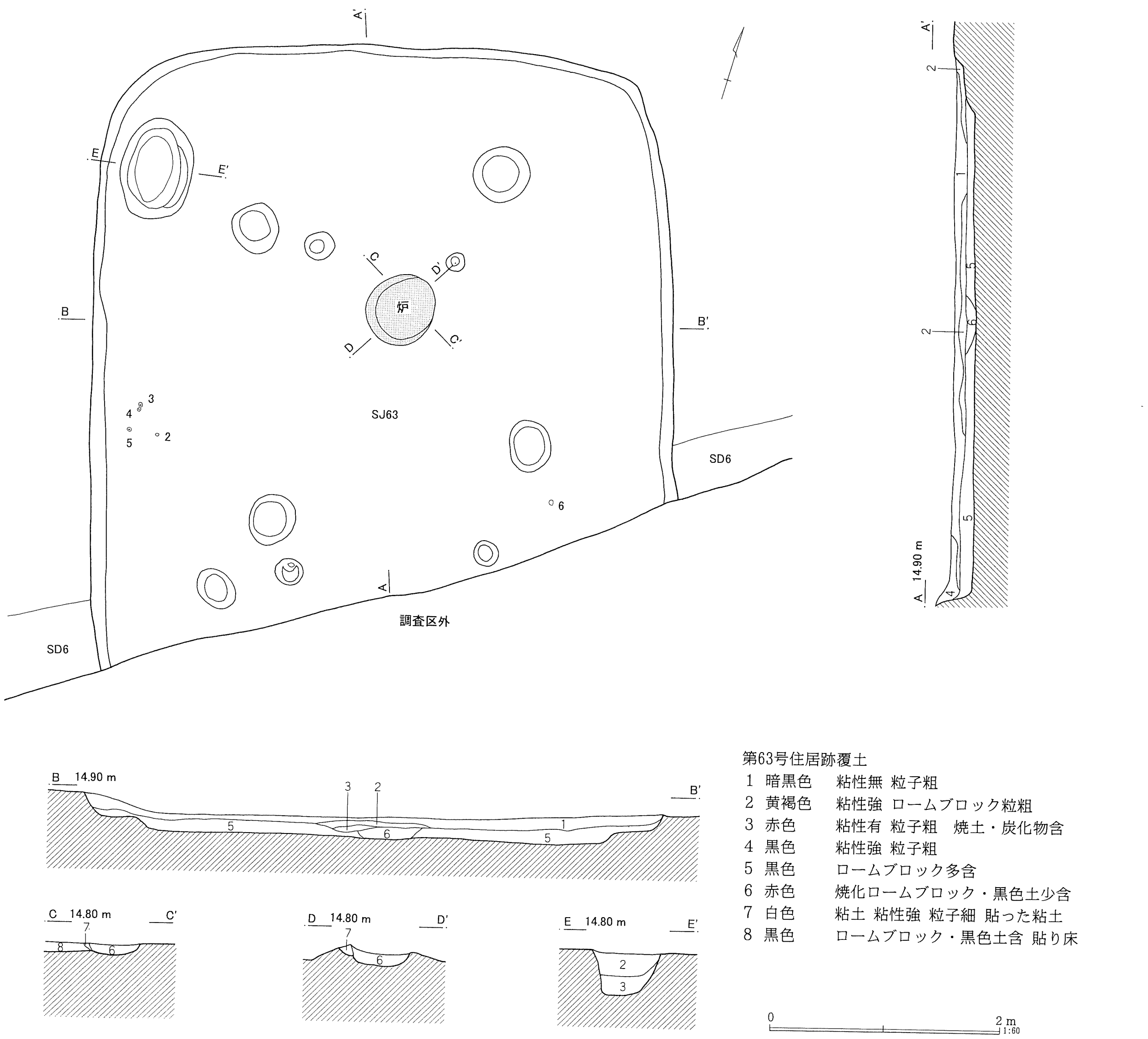
規模は、長軸長不明、短軸長5.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、ほぼ中央から炉が検出できた。

床面は明瞭で、壁側から幅約60cm、高さ約10cm程度の盛り上がりが全周していた。

貼り床は明瞭で、断面観察では一部で７cm程度の厚さが検出できた。

第37図　第63号住居跡



第63号住居跡覆土
1 暗黒色　粘性無 粒子粗
2 黄褐色　粘性強 ロームブロック粒粗
3 赤色　粘性有 粒子粗　焼土・炭化物含
4 黒色　粘性強 粒子粗
5 黒色　ロームブロック多含
6 赤色　焼化ロームブロック・黒色土少含
7 白色　粘土 粘性強 粒子細 貼った粘土
8 黒色　ロームブロック・黒色土含 貼り床

柱穴は４本検出できた。

住居跡は、SD6と重複していた。

重複関係はSD6に切られていた。

実測可能な遺物として、壺の口縁部破片、土玉などを覆土中から検出した。

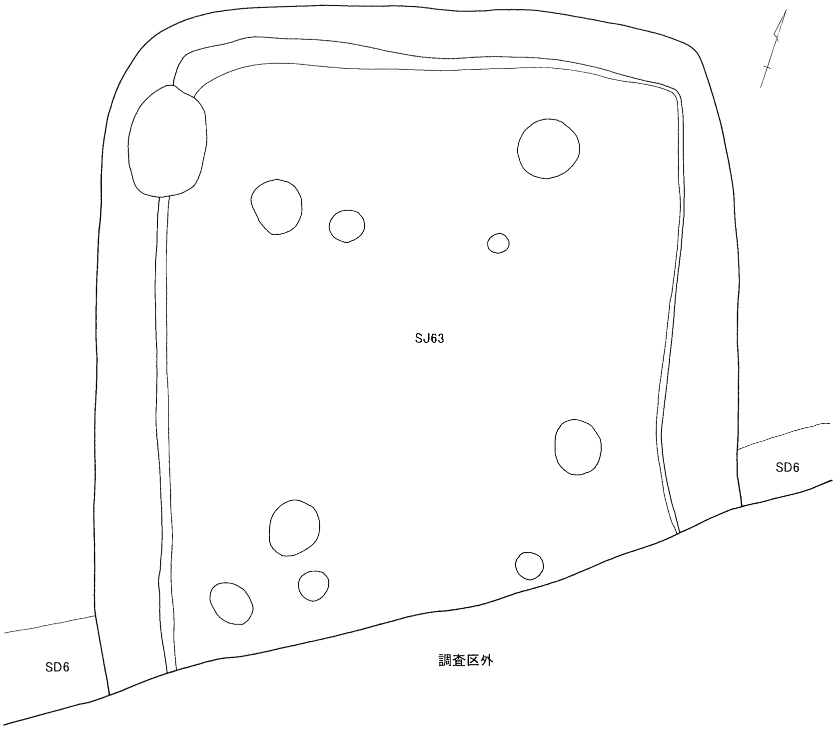
２～５の土玉は、住居跡西側の壁際からまとまって、６のみを東側から単独で検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

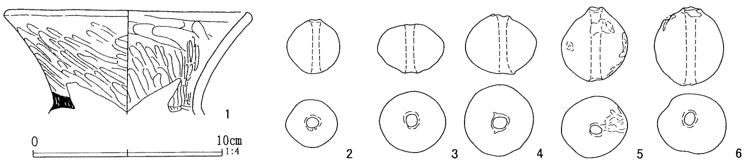
１の壺は、口縁部のみの破片で内外面雑なヘラミガキで調整され、赤彩が施されていた。

土玉はいずれも完形品で、６には僅かに、５には多少の剝落が認められた。３、４は縦方向に扁平であり、６は横方向に扁平であった。各個体の重さは、２は16.8ｇ、３は24.1ｇ、４は37.0ｇ、５は35.4ｇ、６は37.8ｇであった。

第38図　第63号住居跡掘り方



第39図　第63号住居跡出土遺物



第63号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	(13.0)			B.L	3	褐　色	20	赤彩

第64号住居跡（第40・41図）

第64号住居跡は、K－６グリッドから検出した。

住居跡の東南側は調査区外のため検出できなかった。

平面形態は方形で、主軸方位はN－72°－Eであった。

規模は、長軸長不明、短軸長4.6m、深さ45cm程度であった。壁は明瞭であり、東側から炉が検出できた。

床面は明瞭で、貼り床は断面観察では５cm程度の厚さで確認できた。

床面からピットは９本検出できたが、柱穴の断定はできなかった。

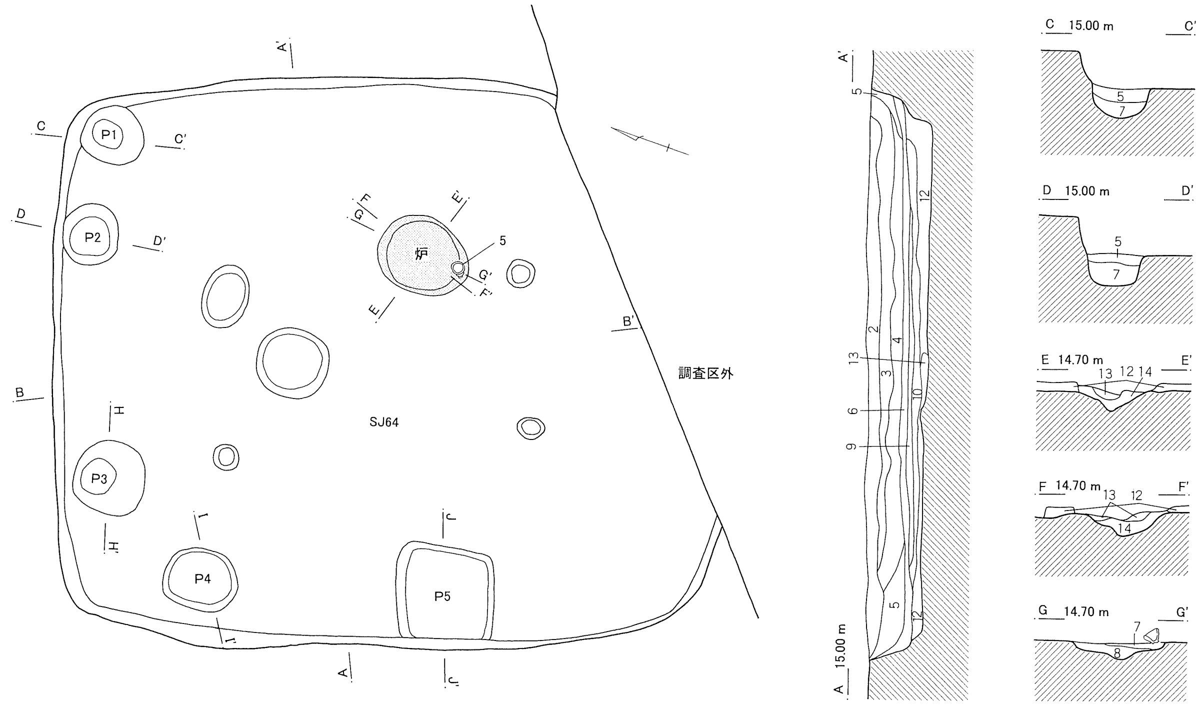
住居跡は、SD6と重複していた。重複関係は、SD6に切られていた。

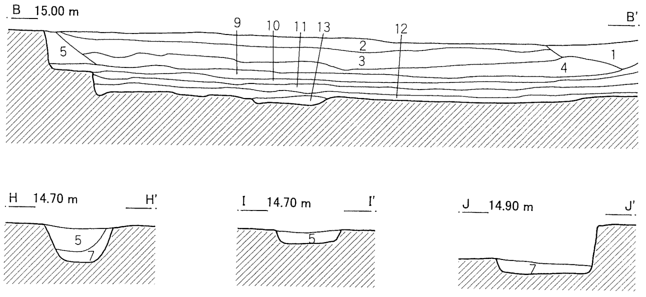
実測可能な遺物として、高坏、器台、甕、台付甕などを覆土中から検出した。

第64号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	高　坏	(13.4)			B.G	3	褐　色	10	赤彩
2	甕	(7.2)			E.G	3	灰褐色	10	
3	甕	(13.7)			B.E.G.L	3	褐　色	20	
4	器　台	7.2	7.8	9.2	E.G	3	褐　色	80	
5	台付甕			11.5	B.G.L	3	褐　色	95	
6	台付甕			9.1	B.E	3	褐　色	60	

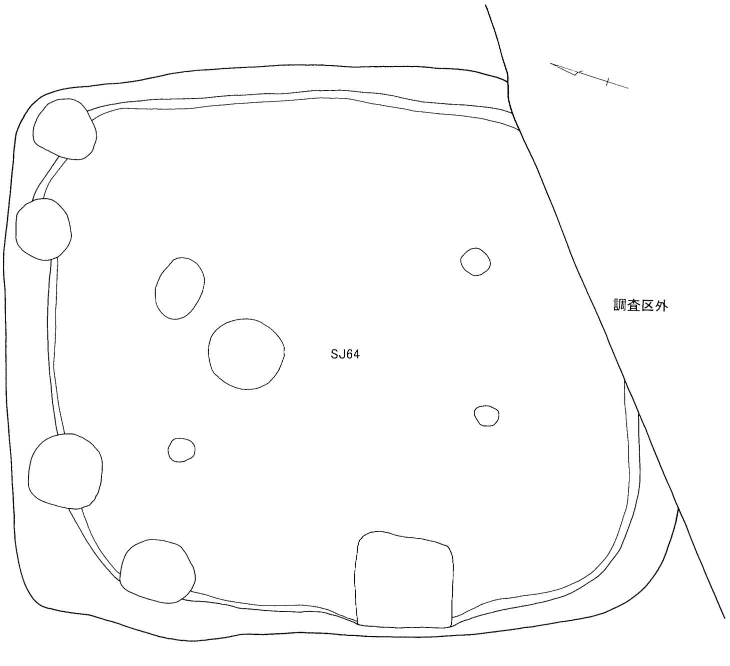
第40図　第64号住居跡・掘り方



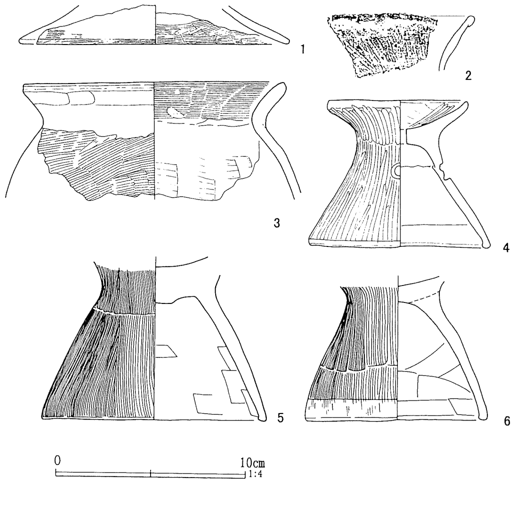


第64号住居跡覆土

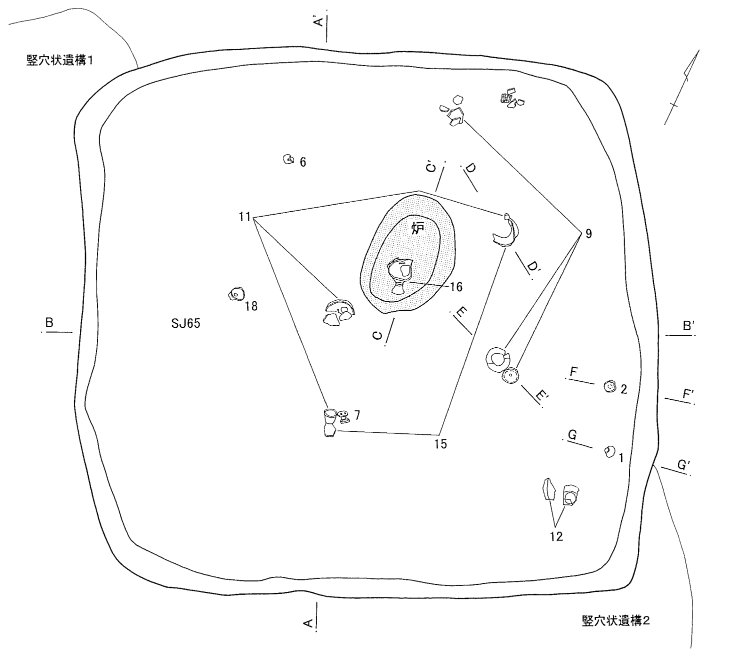
1	灰褐色	粘性強 粒子粗
2	黒色	粒子粗
3	黒色	粘性弱 ロームブロック含 粒子細
4	黒色	３層より明 ロームブロック多含
5	黒色	ロームブロック多含 粒子粗 炭化物・焼土粒子細
6	黄褐色	ロームブロック多含 粘性有 やや固締
7	黄褐色	ロームブロック多含 固締
8	赤褐色	焼土・焼土ブロックやや固締 粒子粗
9	黄褐色	ロームブロック含 黒色土主体 貼り床
10	黄褐色	ロームブロック含 貼り床下の堀り方埋土
11	黒色	ローム粒微含
12	黒色	ローム粒不含
13	赤褐色	硬化焼土
14	赤褐色	焼土粒少含 炉焼土

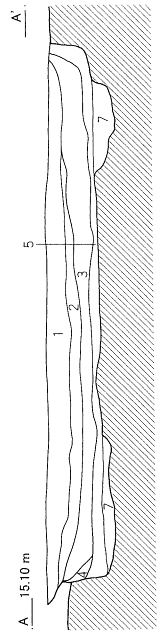


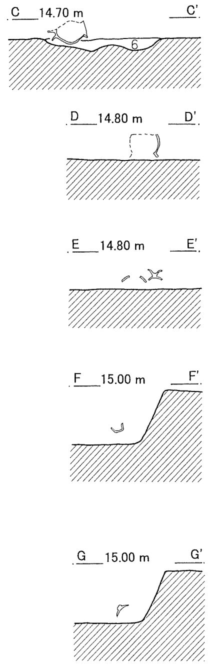
第41図　第64号住居跡出土遺物

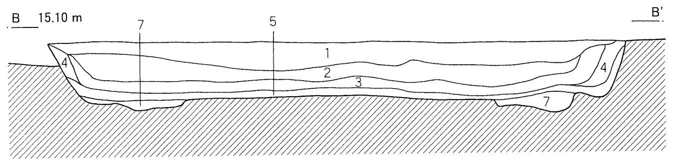


第42図　第65号住居跡・掘り方



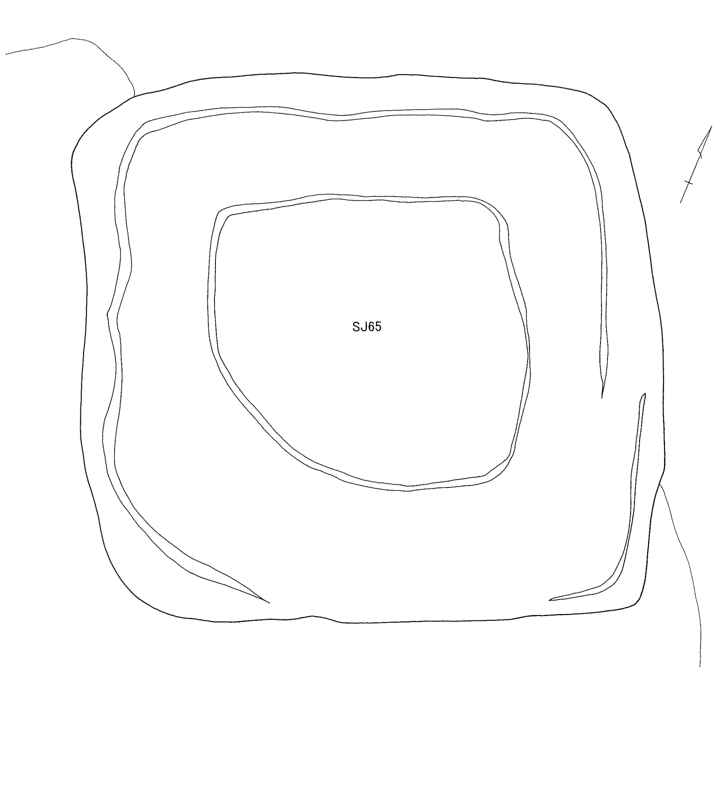






第65号住居跡覆土
1 黒色　　ローム・炭化物不含
2 黒色　　1層より暗 ローム粒子・炭化物不含 焼土粒子含
3 茶褐色　粒子粗 焼土粒子含
4 黄褐色　ロームブロック含 粘性・粒子粗
5 黄褐色　粘性有 炭化物・焼土粒子含
6 赤褐色　炉跡焼土ブロック 硬化
7 黒褐色　ロームブロック含　掘り方内埋土

0　2 m 1:60



第65号住居跡（第42・43図）

第65号住居跡は、J・K－5グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－24°－Wであった。

規模は、長軸長4.6m、短軸長4.2m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

掘り方の形態は、住居跡の中央を残し気味にして、ドーナツ状に掘りくぼめていた。

住居跡は、第1号竪穴状遺構、第2号竪穴状遺構と重複していた。

重複関係は、第1・2号竪穴状遺構を切っ

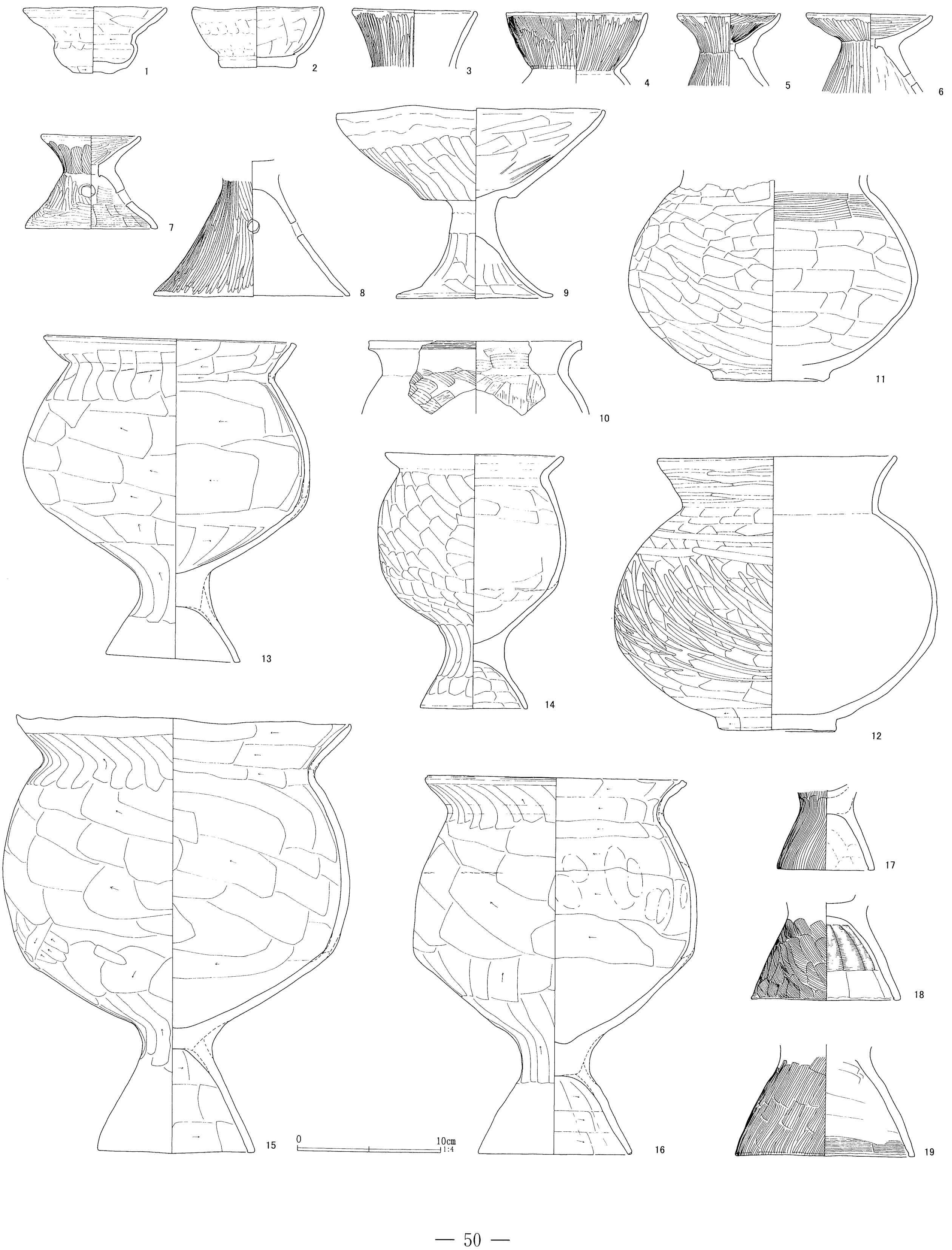
ていた。

実測可能な遺物として、小型坩、高坏、器台、鉢、壺、台付甕などを検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

1の小型坩、2の鉢、6、7の器台、9の高坏、11、12の広口壺、15、18の台付甕などの大半の遺物は、炉の周辺から東側にかけて、16の台付甕は、炉の中からそれぞれ出土した。

第43図　第65号住居跡出土遺物



第65号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	小型坩	10.0	4.8	2.9	B.E.G	3	褐　色	100	
2	鉢	9.0	4.3	5.2	E	3	褐　色	100	
3	壺	8.5			B.F.L	3	褐　色	90	
4	壺	9.8			B.D.L	3	褐　色	90	
5	器　台	7.0			B.E.G	3	褐　色	90	
6	器　台	8.7			D.E.F.G	3	褐　色	80	
7	器　台	6.9	6.6	8.8	F.G.L	3	褐　色	80	
8	高　坏			13.5	A.B.C.G	3	褐　色	80	
9	高　坏	18.7	13.4	11.0	B.E	3	褐　色	95	
10	甕	15.0			B.E	3	褐　色	5	
11	広口壺			(7.5)	E	3	褐　色	50	
12	広口壺	16.6	19.2	8.2	B.C.E.L	3	褐　色	80	
13	台付甕	17.5	22.8	(9.0)	B	3	暗褐色	60	
14	台付甕	12.4	17.8	(7.3)	B.E	3	暗褐色	80	
15	台付甕	23.4	30.7	10.5	B.F.G	3	褐　色	90	
16	台付甕	17.9	26.4	10.5	B.E.G	3	褐　色	85	
17	台付甕			(6.3)	C.D.E.G	3	褐　色	50	
18	台付甕			9.9	E.F.G	3	褐　色	100	
19	台付甕			(12.1)	B.C.E.F	3	褐　色	40	

第66号住居跡（第44・45図）

第66号住居跡は、I－3・4グリッドから検出した。

住居跡の北側コーナーから西側は削平のため、検出できなかった。

平面形態は方形と想定され、主軸方位はN－41°－Eと考えられた。

規模は、長軸長不明、短軸長3.5m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、炉は検出できなかった。

床面は不明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

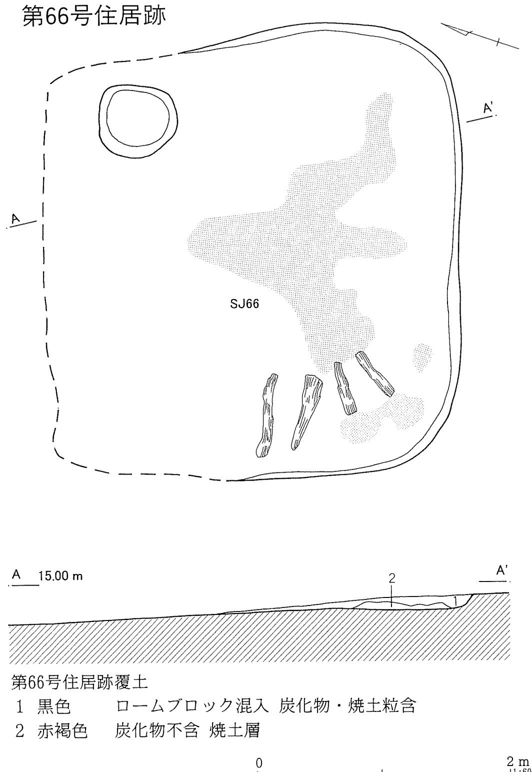
柱穴は検出できなかった。

実測可能な遺物として、壺、台付甕などを覆土中から検出したが、いずれも小破片で、住居跡との帰属関係は、必ずしも明確にできなかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

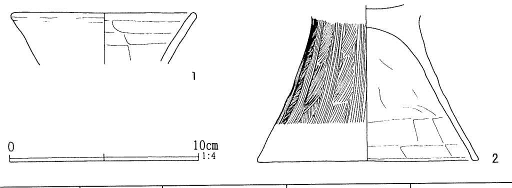
住居跡の床面からは、炭化材が検出できたので、いわゆる焼失家屋と判断できた。

第44図　第66号住居跡



第66号住居跡覆土
1　黒色　　ロームブロック混入 炭化物・焼土粒含
2　赤褐色　炭化物不含 焼土層

第45図　第66号住居跡出土遺物



第66号住居跡出土遺物観察表

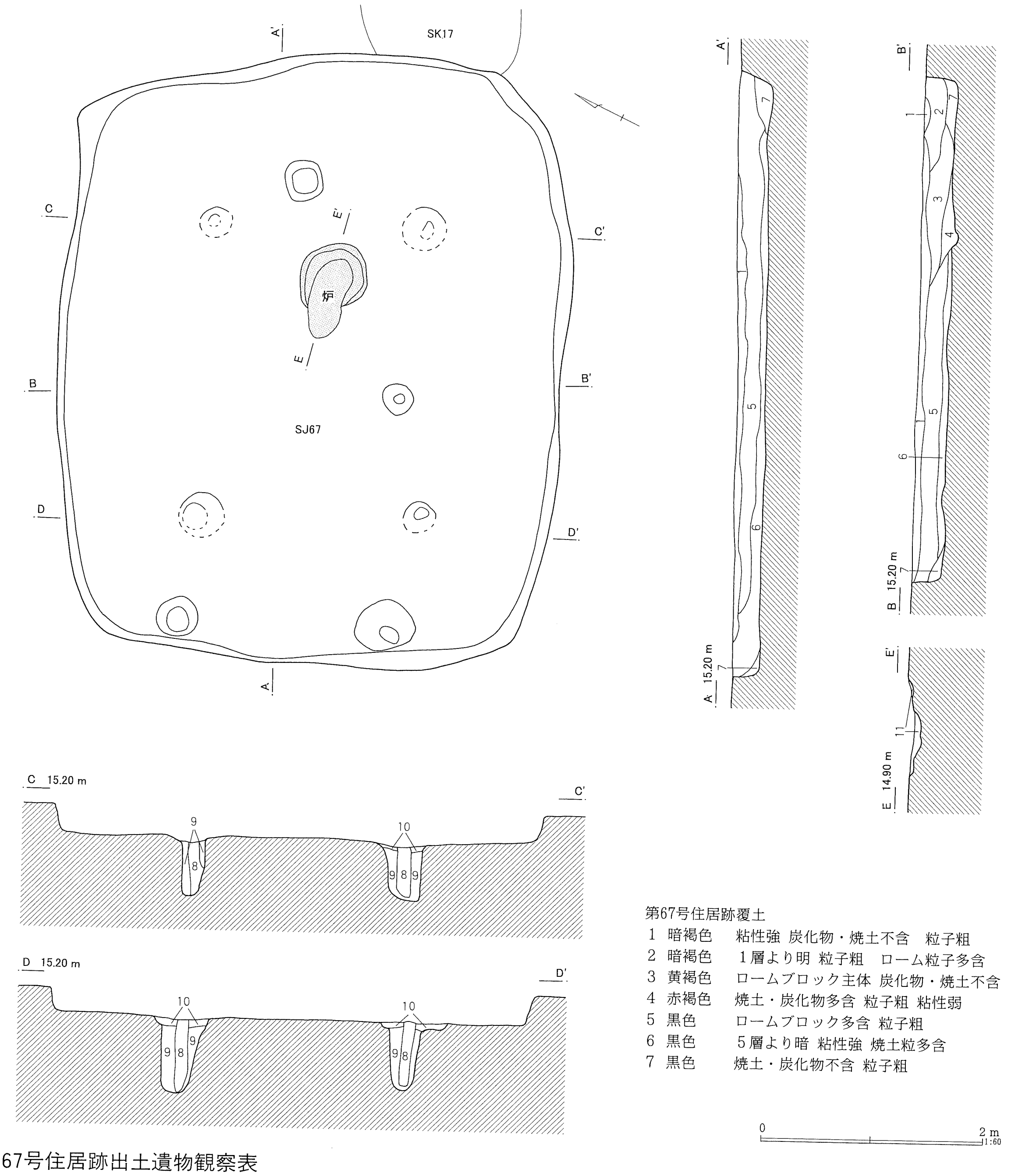
No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	(9.6)			E.F.G	3	淡褐色	40	
2	台付甕			(11.4)	B.E	3	褐　色	40	

第67号住居跡（第46～48図）

第67号住居跡は、H・I－6・7グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－65°－Eであった。規模は、長軸長5.5m、短軸長4.6m、深さ30cm程度であった。

第46図　第67号住居跡

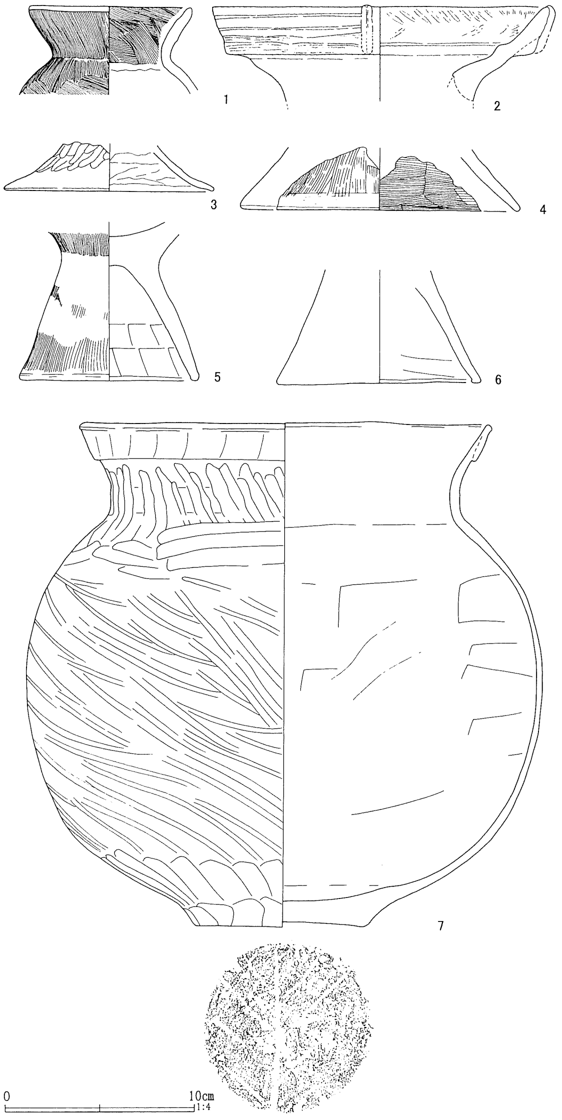


第67号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	(8.6)			E	3	褐　色	50	
2	壺	(17.8)			L	2	白　色	25	赤彩
3	高　坏			(11.1)	E	2	褐　色	20	赤彩
4	高　坏			(14.7)	E	3	褐　色	10	
5	台付甕			9.1	B.E.G	3	褐　色	100	
6	台付甕			(10.5)	B.E	3	褐　色	70	
7	広口壺	21.7	26.7	8.8	B.E.F.G	3	褐　色	80	

第47図　第67号住居跡遺物出土状況

第48図　第67号住居跡出土遺物



壁は明瞭であり、中央部東側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

柱穴は４本検出できた。

住居跡は、SK17と重複していた。

重複関係は、SK17を切っていた。

実測可能な遺物として、壺、高坏、台付甕などを床面上から検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

１の壺は、口縁部外面に細かいハケ目調整が縦方向に施され、口縁部と体部の境界の屈曲部分で一度ハケ目調整が停止し、体部はやや斜めのハケ目調整が施されている。内面は、口縁部では斜めのハケ目調整が施され、体部ではナデ調整が施されている。２は、在地のものとは形態も胎土も異なる壺の口縁部破片で、胎土は白色で極めて脆弱で、内外面共に赤彩されている。３は、高坏の裾部破片で、やや薄く作られている。外面は赤彩されている。外面調整は、この赤彩のために不明瞭であるが、裾部上半は、やや粗いヘラナデ調整が施されていると考えられる。内面はナデ調整が施されている。４も高坏の裾部破片で、外面はやや粗いハケ目調整の後に、端部を指ヨコナデ、内面もやや粗いハケ目調整の後に、端部が指ヨコナデされている。５の台付甕脚部は、外面のハケ目調整はかなり不明瞭であるが、内面では、横位に回しながらのハケ目調整が明瞭である。６の台付甕脚部は、外面ではナデ調整、内面では、ナデ調整の跡に僅かに横位のハケ目調整が認められる。７の広口壺は、外面が、やや疎なミガキに近いヘラナデ調整、底部の近くでは、ヘラケズリに近いヘラナデ調整が認められた。

第68号住居跡（第49・50図）

第68号住居跡は、H－6グリッドから検出した。

住居跡の北側はSK1のため、検出できなかった。

平面形態は方形で、主軸方位はN－25°－Wであった。

規模は、長軸長2.5m、短軸長2.5m、深さ20cm程度であった。

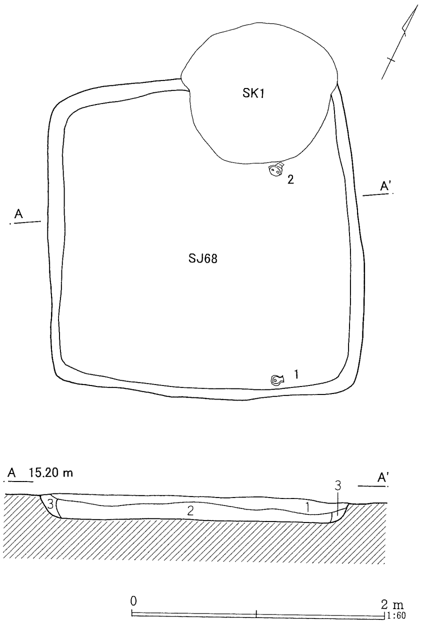
壁と床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

住居跡はSK1と重複し、SK1を切っていた。

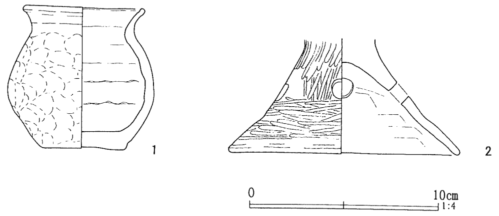
実測可能な遺物として、高坏、壺などを覆土中から検出した。

第49図　第68号住居跡



第68号住居跡覆土
1 暗褐色　ローム粒少含
2 暗褐色　ローム粒１層よりやや多含 ロームブロック少含
3 暗褐色　ローム粒・ロームブロックやや多含

第50図　第68号住居跡出土遺物



第68号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	(6.3)	7.6	4.3	B.E.G	3	褐　色	50	
2	高　坏			12.0	E.F	3	褐　色	95	赤彩

第69号住居跡（第51図）

第69号住居跡は、Ｉ－7グリッドから検出した。

住居跡の北側はSD1と撹乱のため、検出できなかった。

平面形態は方形と想定され、主軸方位はS－54°－Wであった。

規模は、長軸長不明、短軸長2.6m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、南西側のややコーナー寄りから炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

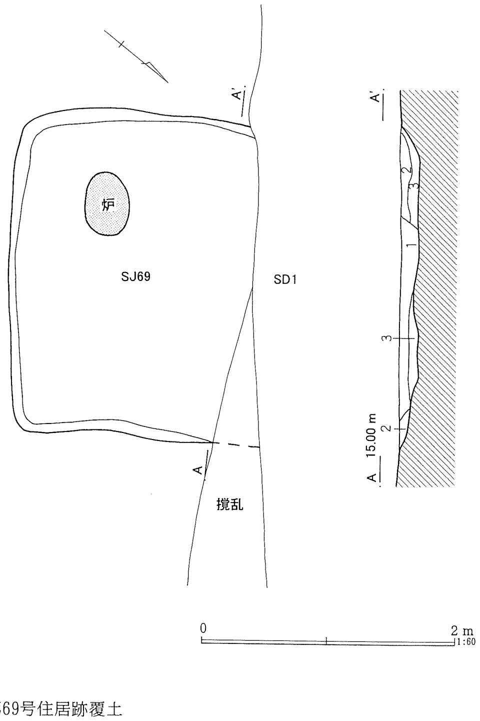
調査時に床面を慎重に精査したが、柱穴は一本も検出できなかった。

住居跡は、SD1と重複していた。

重複関係は、SD1に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第51図　第69号住居跡



第69号住居跡覆土
1 灰褐色　粘性弱 粒子粗 溝の覆土
2 黒色　ローム粒・ロームブロック含 粘性やや有 粒子細
3 黒色　２層より暗 粘性強 ロームブロック含

第70号住居跡（第52・53図）

第70号住居跡は、H・I－4グリッドから検出した。

住居跡の西側の半分以上は削平によって、南西コーナー側はSD7のため検出できなかった。

平面形態は隅丸方形と想定され、主軸方位はN－0°－Eであった。

規模は、長軸長不明、短軸長4.2m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側から炉が検出できた。

床面は不明瞭であった。

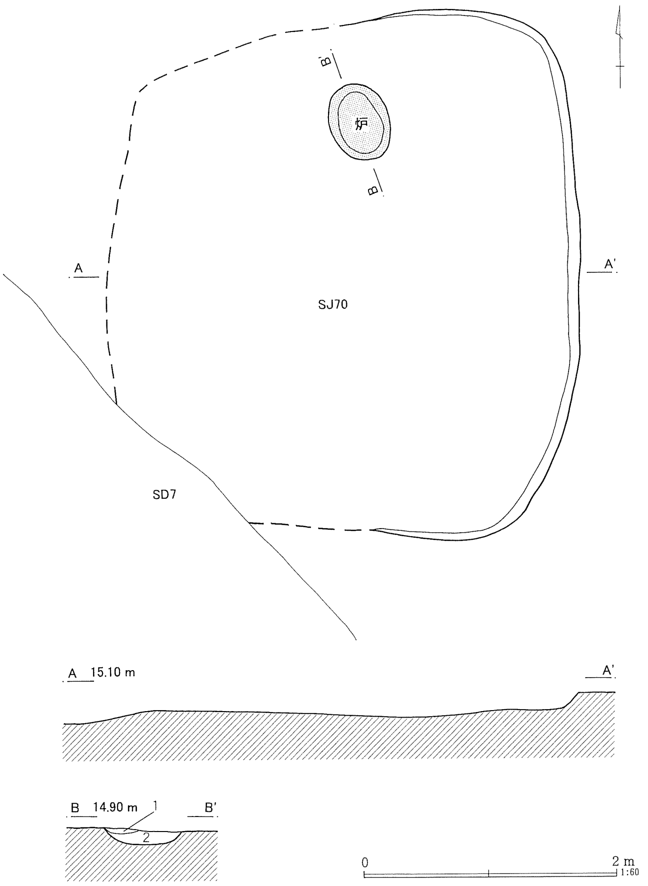
貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

住居跡は、SD7と重複していた。

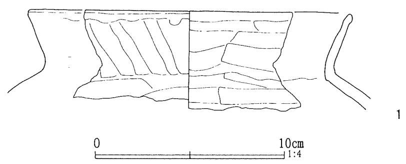
重複関係は、SD7に切られていた。

実測可能な遺物として、甕などを覆土中から検出した。

第52図　第70号住居跡



第53図　第70号住居跡出土遺物



第70号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	甕	(17.0)			B.E	3	褐　色	10	

第71号住居跡（第54図）

第71号住居跡は、J－7グリッドから検出した。

住居跡の大半は削平されており、更に北西コーナーから西側は撹乱のため、検出できなかった。残存している南側半分も、削平の影響を受けていた。

平面形態は方形で、主軸方位はN－87°－Eであった。

規模は、長軸長不明、短軸長2.8m、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であり、やや東側の壁に偏って炉が検出できた。

床面は不明瞭であった。

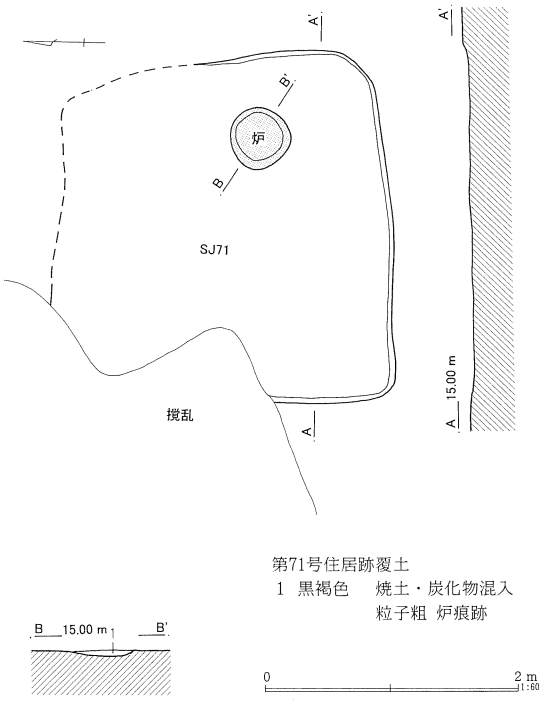
貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

柱穴は検出できなかった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

第54図　第71号住居跡



第72号住居跡（第55～57図）

第72号住居跡は、H－5・6、I－5グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－37°－Eであった。

規模は、長軸長3.6m、短軸長3.5m、深さ20㎝程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北東側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は明瞭で、断面観察では5㎝程度の厚さが検出できた。

柱穴は4本検出できた。

掘り方は、壁際から約80㎝、幅約1mで全周していた。

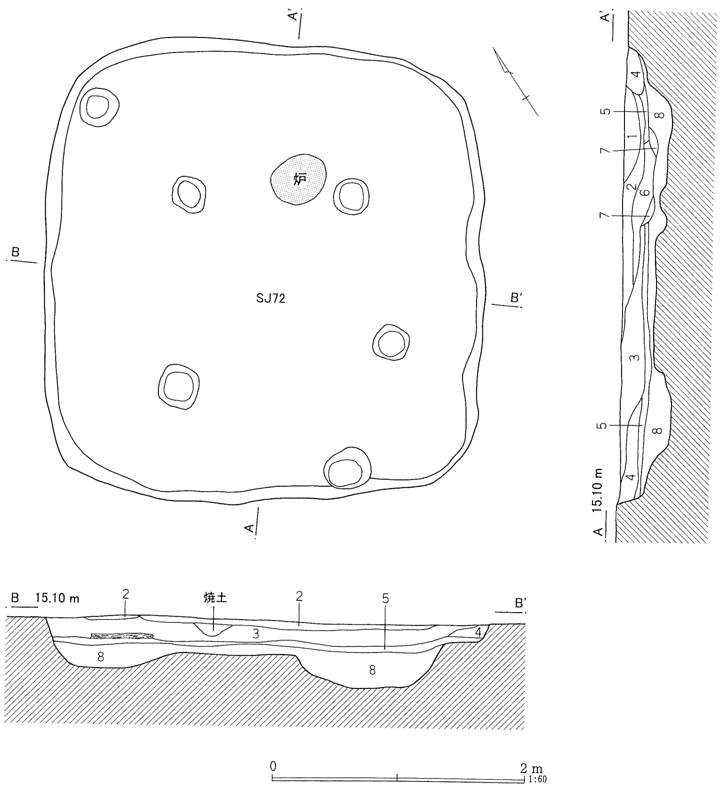
実測可能な遺物として、ミニュチュア壺、器台、壺、広口壺、台付甕などを覆土中から検出した。

住居跡の床面からは、炭化材が検出できたので、いわゆる焼失家屋と判断できた。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

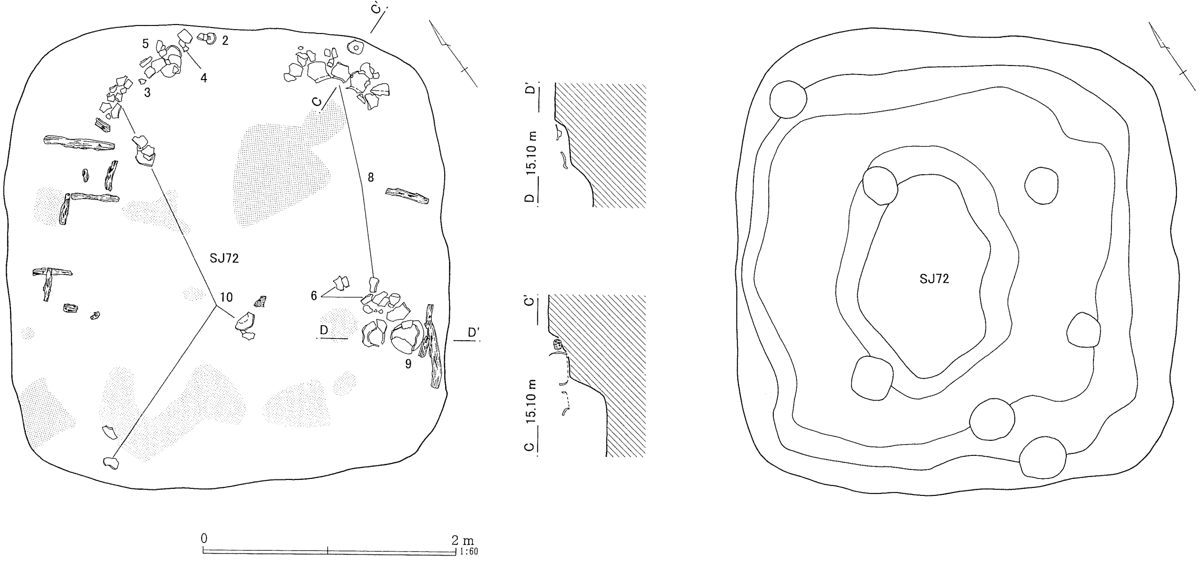
大半の遺物は、住居跡床面の外周部分から検出した。住居跡の中央部分からは、僅かに10の壺の破片が検出できた。

第55図　第72号住居跡

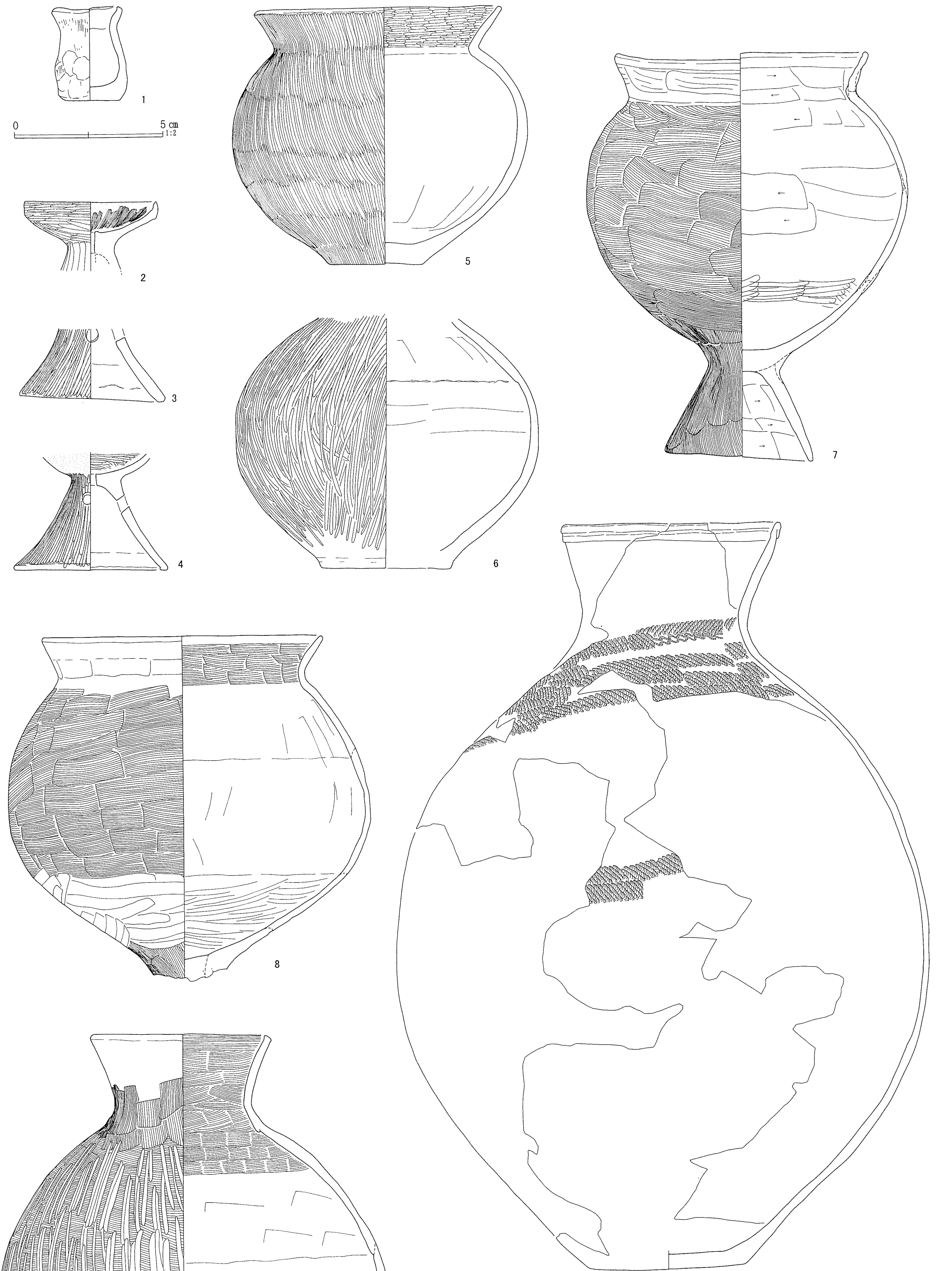


第72号住居跡覆土
1 黒褐色　粗粒焼土粒含 炭化物不含
2 黒褐色　焼土粒含 粗粒炭化物含 粘性有
3 黒褐色　焼土粒多含 部分的に焼土ブロック混入 炭化物・炭化材含
4 赤黒色　焼土多含 炭化物・ロームブロック含
5 暗黄褐色 粒子粗 ロームブロック多含 貼り床
6 赤褐色　焼土粒子多含 炭化物微含 炉跡覆土
7 黒色　ローム粒・焼土・炭化物不含
8 黄褐色　ローム粒・ロームブロック含 堀り方充填土

第56図　第72号住居跡遺物出土状況・掘り方



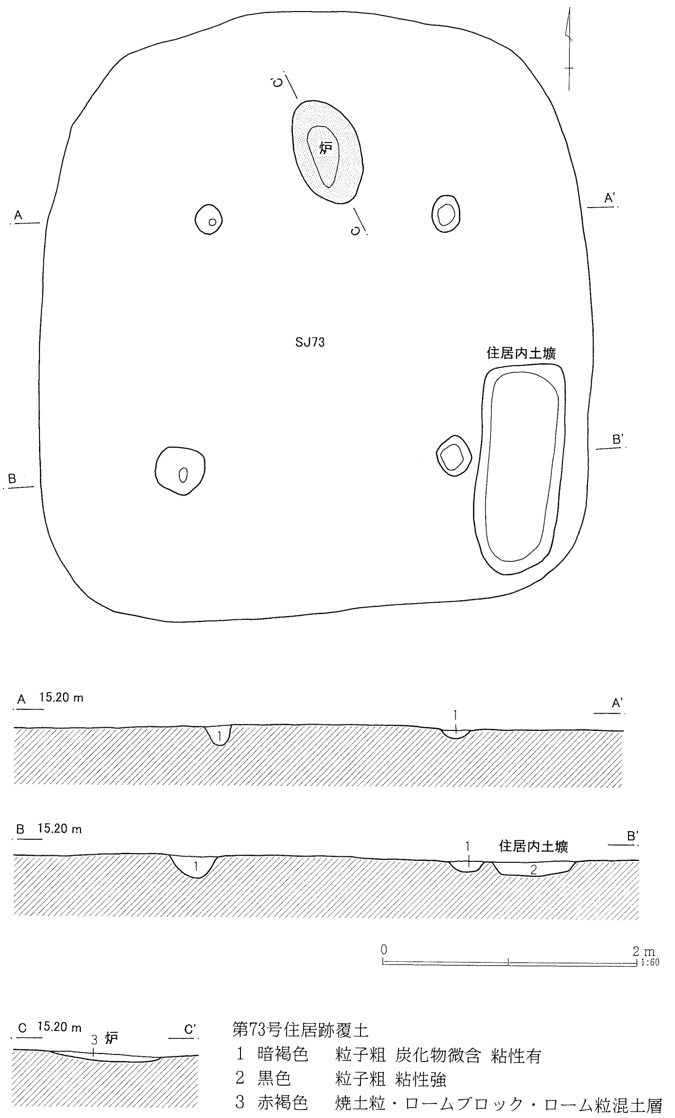
第57図　第72号住居跡出土遺物



第72号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	ミニュチュア壺	2.2	3.2	1.7	E	3	褐　色	80	
2	器　台	8.9			A.D.E	3	暗赤褐色	95	
3	器　台			9.4	D.E	3	暗褐色	50	
4	器　台			10.0	A.B.E	3	褐　色	50	
5	広口壺	16.5	17.3	6.4	E.F	3	褐　色	80	
6	壺			(8.7)	B.E	3	暗褐色	40	
7	台付甕	16.8	27.3	9.7	E.F.G.L	3	褐　色	90	
8	台付甕	18.8			B.G	3	褐　色	95	
9	壺	11.8			B.F.G.L	3	褐　色	80	
10	壺	14.6	50.1	10.3	B.C.E.F.G.L	2	褐　色	40	

第58図　第73号住居跡



第73号住居跡（第58図）

第73号住居跡は、H－5・6グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－0°－Eであった。

住居跡は、削平を受けており覆土は残存していなかった。

規模は、長軸長4.7m、短軸長4.4m程度であった。

壁は不明瞭であったが、僅かな土色の違いから、住居跡の範囲を確定することができた。

北側から炉が検出できた。

床面も不明瞭であったが、前述のように、地山と住居範囲との色調の違いから、その範囲だけは確定できた。

貼り床は不明瞭で、断面観察でも確認できなかった。

柱穴は4本検出できたが、いずれも極めて浅かった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

住居跡の南東側コーナー付近から土壙を検出したが、住居跡との関係は明らかに出来なかった。

第74号住居跡（第59・60図）

第74号住居跡は、H･I－7グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－43°－Wであった。

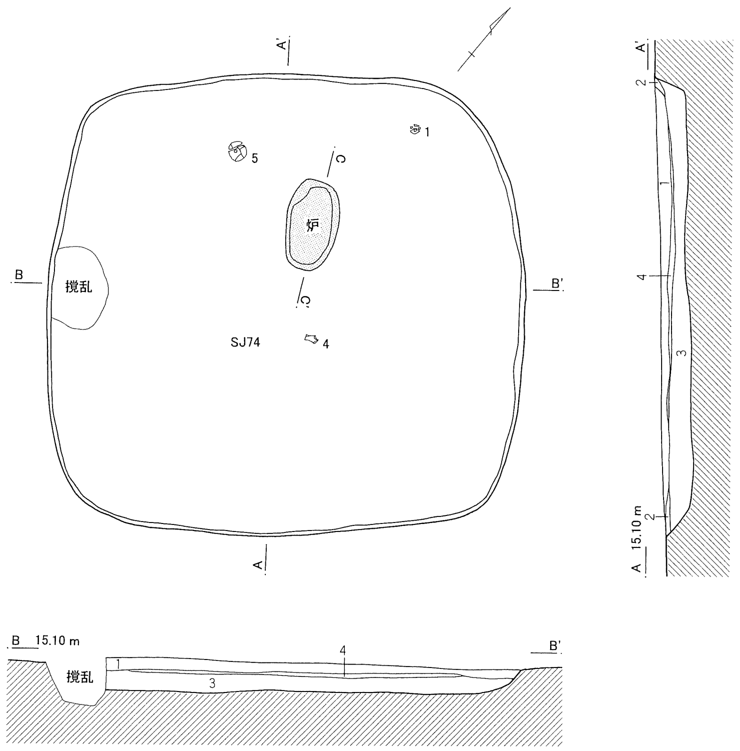
規模は、長軸長3.8m、短軸長3.6m、深さ25cm程度であった。

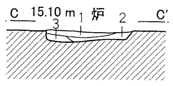
壁は明瞭であり、中央部北側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は明瞭で、断面観察では5cm程度の厚さが検出できた。

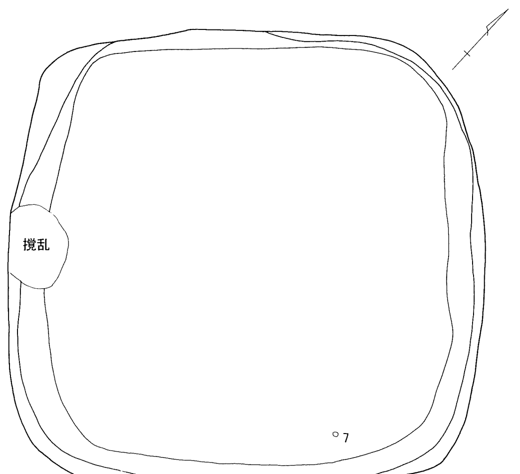
第59図　第74号住居跡・掘り方





第74号住居跡　炉跡覆土
1 黒褐色　焼土粒子含
2 黒褐色　焼土ブロック多含 ローム細粒含
3 黄褐色　ロームブロック含

第74号住居跡覆土
1 黒褐色　ローム粒・ロームブロック含 焼土粒子微含 炭化物粒子含
2 黒褐色　ロームブロックやや多含
3 黒褐色　ロームブロック含 掘り方充填土
4 茶褐色　ロームブロック・粘土固締 貼り床



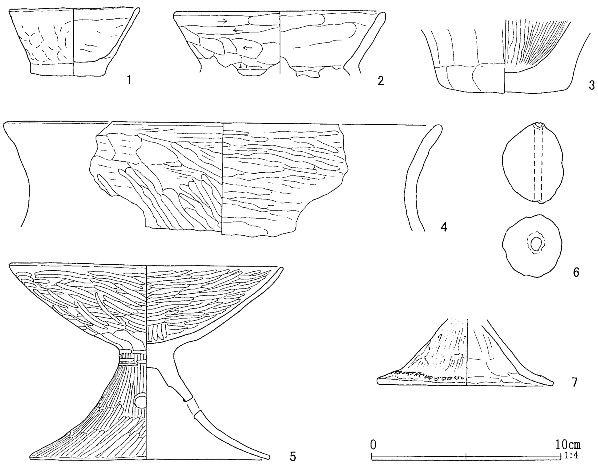
掘り方は、壁際の幅約30cm程度を除いて、他の部分から検出できた。

実測可能な遺物として、ミニュチュア鉢、高坏、壺、甕、土玉などを床面上と、覆土中から検出した。

1のミニュチュア鉢は北側のコーナー付近から、4の甕は中央付近から、5の高坏は北西の壁寄りから、他は覆土中からそれぞれ検出した。

1のミニュチュア鉢は、内外面共にナデ調整されていた。2の壺の口縁部破片は、内外面共にヘラナデ、口唇部は指ヨコナデ調整されていた。3の壺底部は、外面はヘラナデ、内面もやや密なヘラナデ調整されていた。4の甕口縁部破片は、外面はややヘラナデに近いヘラミガキで、内面は、ヘラミガキ調整、口唇部は、指ヨコナデ調整されていた。5の高坏は、坏部外面は、やや疎なヘラミガキ調整、内面はやや密なヘラミガキ調整、脚部外面は縦方向やや密なヘラミガキ調整、内面はナデ調整、端部は指ヨコナデ調整、坏と脚の接合部分は横位のヘラミガキで調整されていた。6の高坏裾部は、内外面共にナデ調整ののち、外面には赤彩が施されていた。また端部は指ヨコナデで調整されていた。

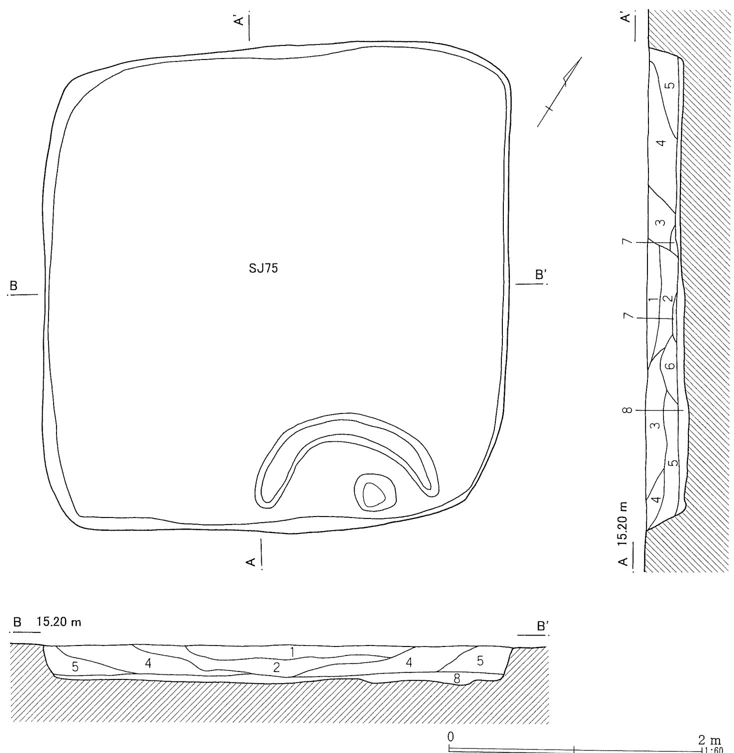
第60図　第74号住居跡出土遺物



第74号住居跡出土遺物観察表

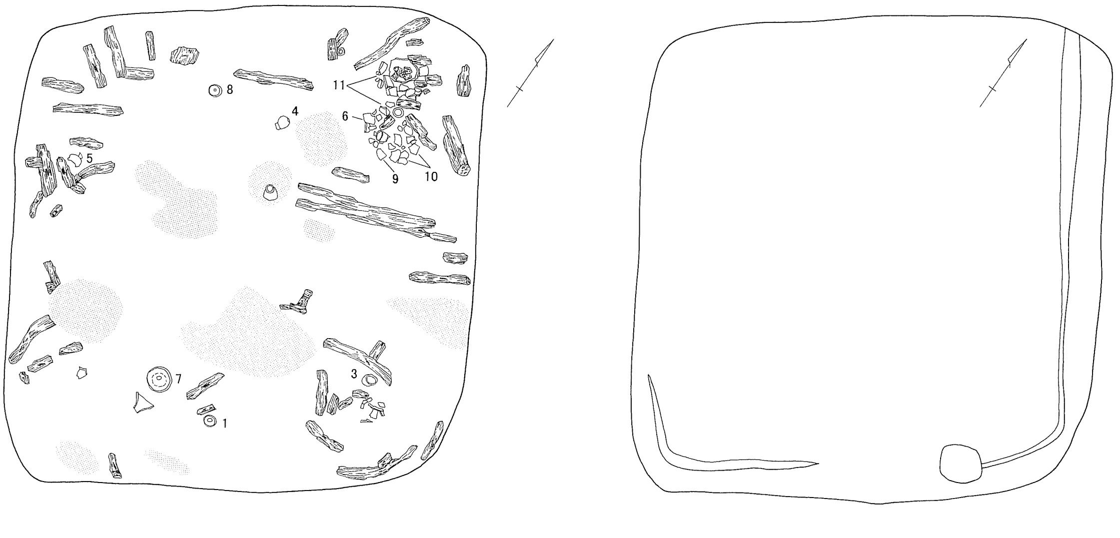
No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	ミニュチュア鉢	6.8	3.7	3.9	B.G.L	3	褐　色	100	
2	壺	(11.2)			E.F	3	褐　色	10	
3	壺			(6.3)	B.G	3	褐　色	20	
4	甕	(22.8)			B.F.G	3	褐　色	15	
5	高　坏	14.4	10.4	(12.6)	E.F.G.L	3	褐　色	70	
6	高　坏			(9.3)	D.G	3	褐　色	25	赤彩

第61図　第75号住居跡・遺物出土状況・掘り方



第75号住居跡覆土

1 暗褐色	粘性弱 粒子粗 炭化物・焼土不含	5 黒色	炭化物・焼土多含 粘性強
2 暗褐色	ロームブロックやや含	6 赤褐色	焼土多含 炭化物含 粘性強
3 暗褐色	ローム含 炭化物微含 粘性弱	7 赤色	焼土 被熱部固締
4 褐色	炭化物・焼土やや含 粒子粗	8 黒色	ロームブロック多含



第75号住居跡（第61・62図）

第75号住居跡は、G･H－6･7グリッドから検出した。

平面形態は方形で、主軸方位はN－32°－Wであった。

規模は、長軸長3.9m、短軸長3.7m、深さ30cm程度であった。

壁と床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

柱穴は確認できなかった。

住居跡の床面からは、炭化材が検出できたので、いわゆる焼失家屋と判断できた。

実測可能な遺物として、鉢、壺、台付甕、などを覆土中から検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

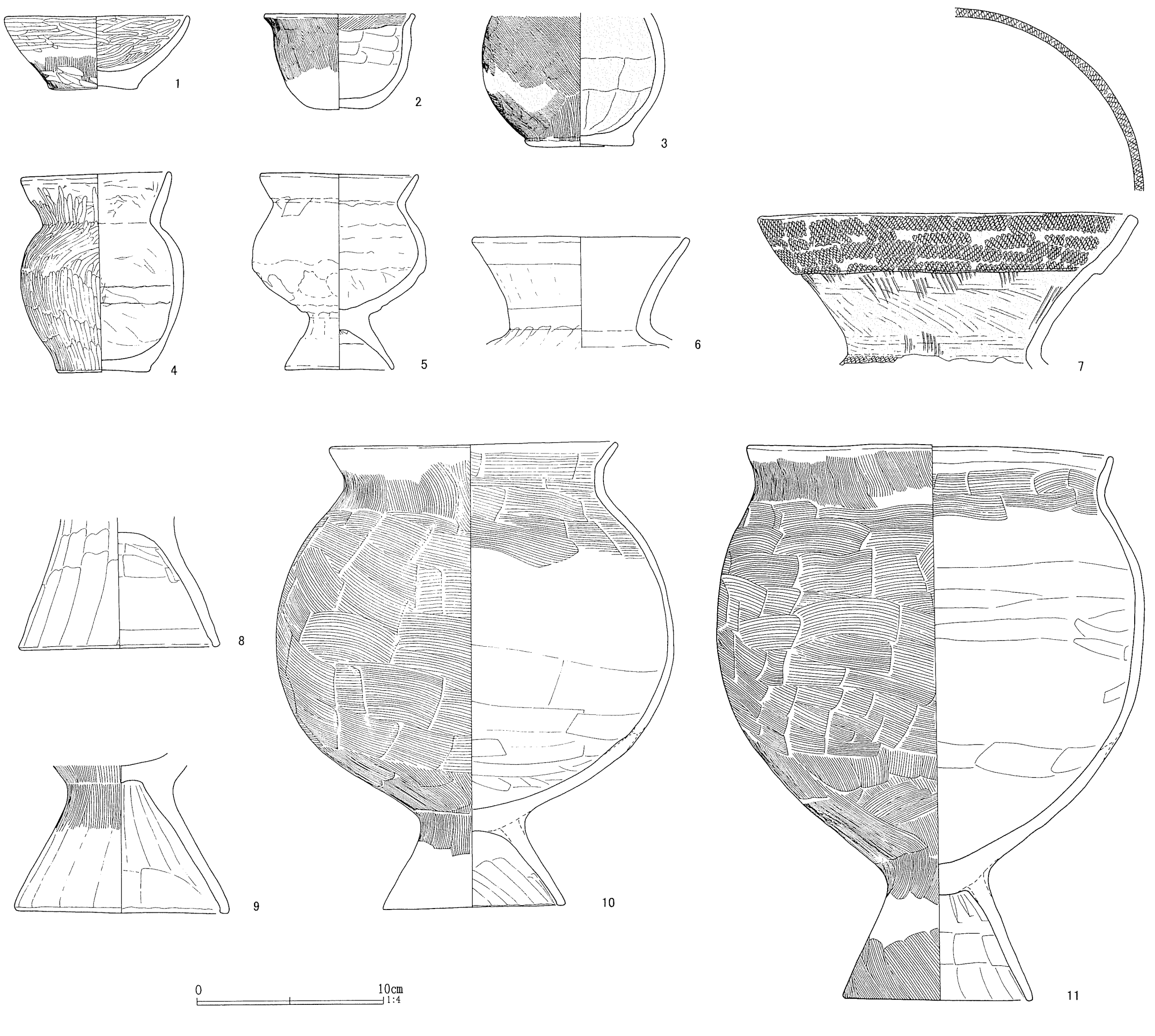
1の鉢と7の壺は南側から、4、6の壺、8～11の台付甕は北側から、3の壺は東側から、5の台付甕は西側から検出

した。

1の鉢は、外面は疎なハケ目調整のあと、横位のヘラミガキで、内面は、やや疎なヘラミガキで調整されていた。2の鉢は、外面はやや密なハケ目で、内面は、口縁部がやや密なハケ目で、体部がヘラナデで調整されていた。4の壺は、外面がヘラミガキで、内面がヘラナデで調整されていた。

10、11の台付甕は、外面体部がハケ目、脚部がハケ目とナデ、内面体部上方がハケ目、下方がヘラナデ、脚部がヘラナデで調整されていた。

第62図　第75号住居跡出土遺物



第75号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	鉢	9.8	5.0	4.7	B.C.G	3	暗褐色	95	
2	鉢	(7.9)	5.2	3.2	B.G	3	褐　色	50	
3	壺			5.4	B.E.F.G	3	褐　色	100	赤彩
4	壺	7.8	10.7	4.7	E.G	3	褐　色	100	
5	台付甕	(8.3)	15.0	(5.8)	B.G	3	褐　色	80	
6	壺	11.3			E.G	3	褐　色	100	
7	壺	19.8			B.C.D.F.G.L	3	褐　色	95	赤彩
8	台付甕			10.7	G.L	3	褐　色	100	
9	台付甕			11.0	E.G.L	3	褐　色	100	
10	台付甕	15.3	24.8	9.5	B.C.D.F.G.L	3	褐　色	85	
11	台付甕	19.6	29.6	9.4	B.G.L	3	褐　色	95	

第76号住居跡（第63・64図）

第76号住居跡は、G・H－９グリッドから検出した。

住居跡の北側はSD1のため、検出できなかった。

平面形態は方形で、主軸方位はN－55°－Wであった。

規模は、長軸長不明、短軸長4.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北西側から炉が検出できた。

床面は明瞭で、壁溝は検出できなかった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

床面を精査したが、柱穴を検出することができなかった。

住居跡は、SD1と重複していた。

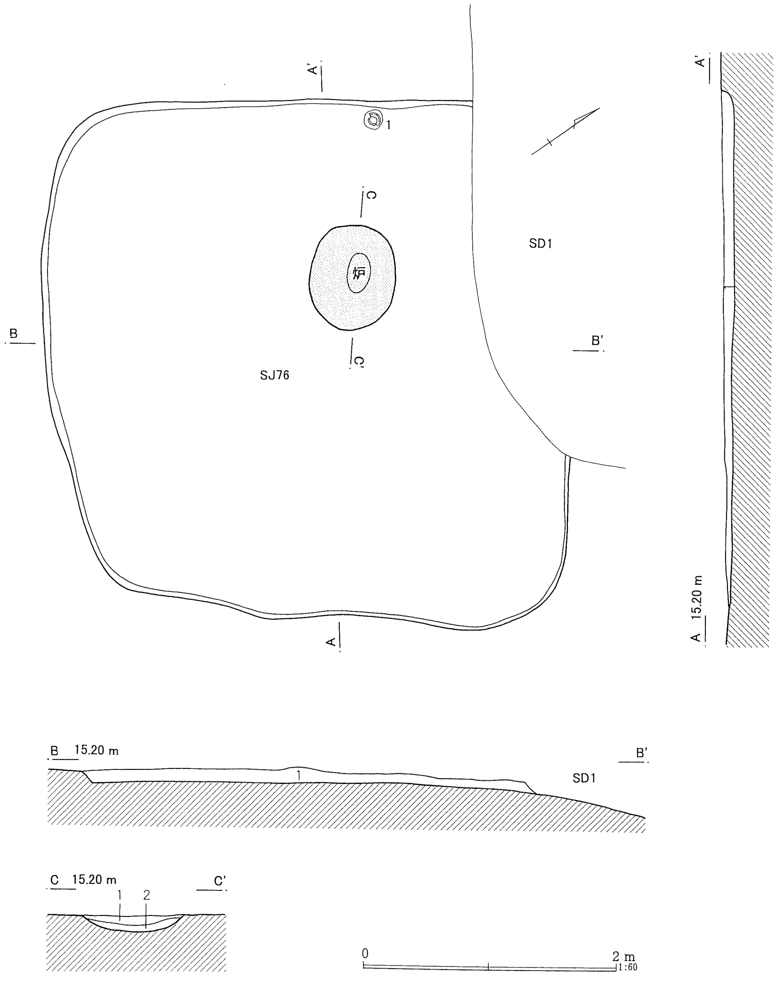
重複関係は、SD1に切られていた。

実測可能な遺物として、壺などを北西壁際の床面上から検出した。

覆土は自然堆積の状況を呈していた。

１の壺は、口縁部外面ナデ、肩部ヘラナデ、内面口縁部疎なヘラミガキ、肩部はナデで調整されていた。

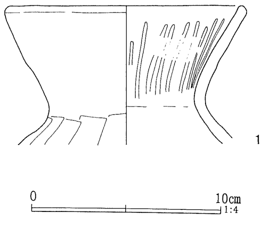
第63図　第76号住居跡



第76号住居跡覆土
1 黒色　粘性弱 粒子粗
　　　　炭化物・ローム含

第76号住居跡炉覆土
1 黒褐色　焼土粒・ローム粒含
2 黒褐色　焼土ブロック多含

第64図　第76号住居跡出土遺物



第76号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	12.6			B.D.F.G	3	褐　色	100	

第77号住居跡（第65・66図）

第77号住居跡は、H－８グリッドから検出した。

住居跡の中央部はSD1のため、検出できなかった。

平面形態は方形で、主軸方位はN－28°－Wであった。

規模は、長軸長3.7m、短軸長3.0m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、中央部北側から炉が検出できた。

床面は明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

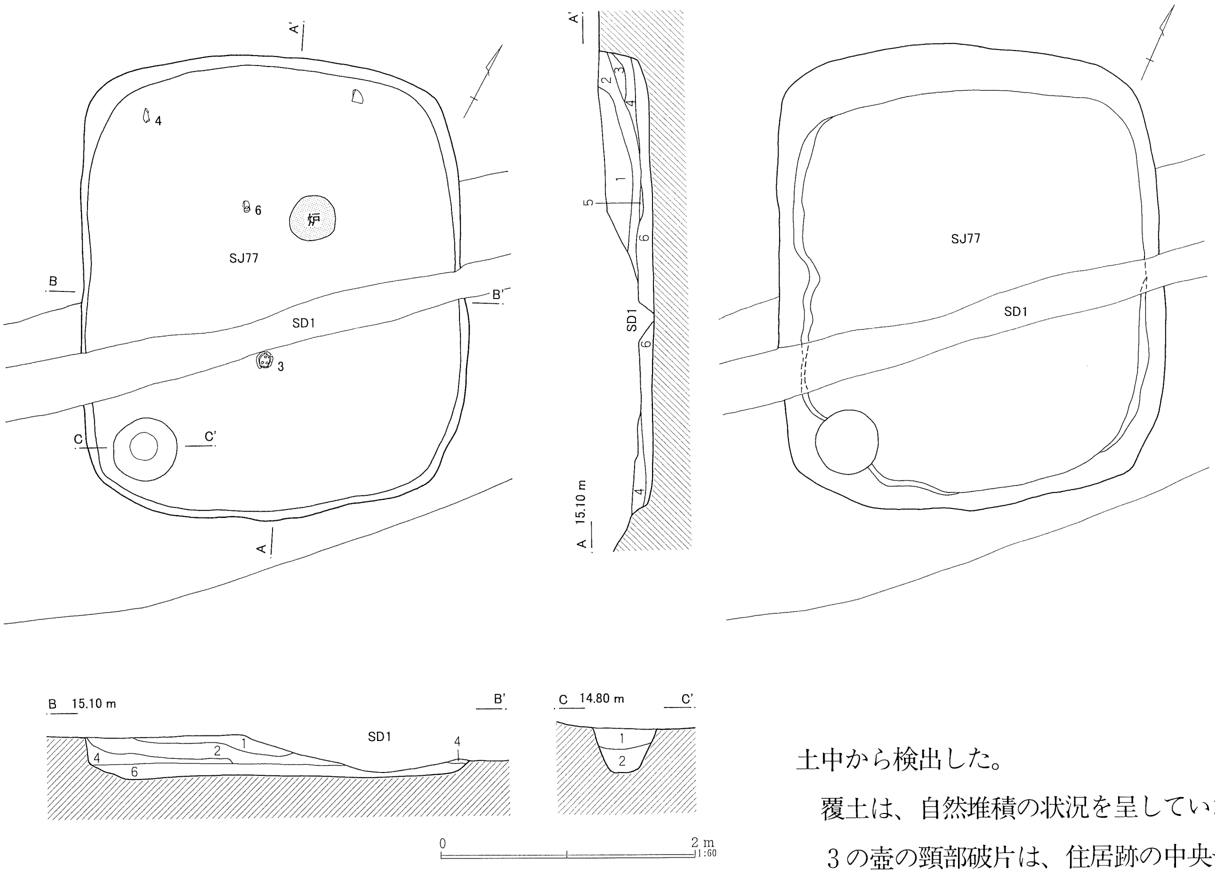
柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SD1と重複していた。

重複関係は、SD1に切られていた。

実測可能な遺物として、壺、甕、台付甕、などを覆

第65図　第77号住居跡・掘り方



第77号住居跡覆土
1 黒色　　ロームブロック少含 粒子粗 粘性
2 黒色　　1層より明 ロームブロック多含 炭化物やや含
3 黒色　　ロームブロック不含 炭化物微含
4 暗褐色　粘性強 粒子粗 ロームブロック微含 土器片含 焼土ほぼ不含
5 赤褐色　粘性弱 粒子粗 焼土層 炉跡覆土
6 暗褐色　ロームブロック多含 炉の周辺硬化

第77号住居跡柱穴覆土
1 黒色　　ローム細粒～径10cmブロック含
2 黒色　　ローム細粒～径3cmブロック多含

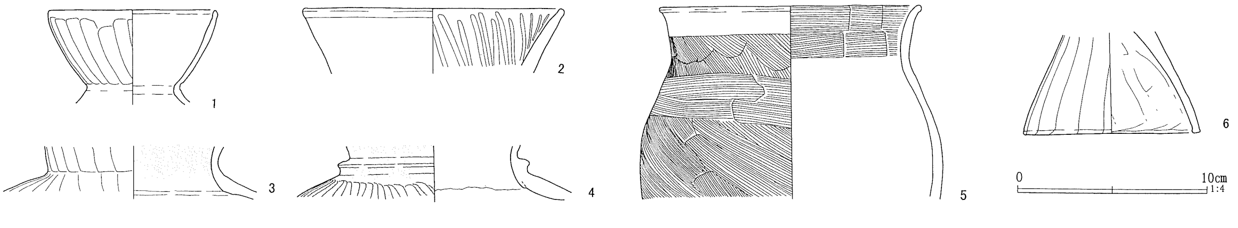
土中から検出した。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

3の壺の頸部破片は、住居跡の中央やや東南側から、4の壺の肩部破片は、住居跡西側のコーナー付近から、6の台付甕の脚部破片は、住居跡中央やや北西側から検出した。

5の甕は、外面口縁部から胴部にかけてハケ目、内面口縁部はハケ目、胴部はヘラナデ、口唇部は指ヨコナデで調整されていた。

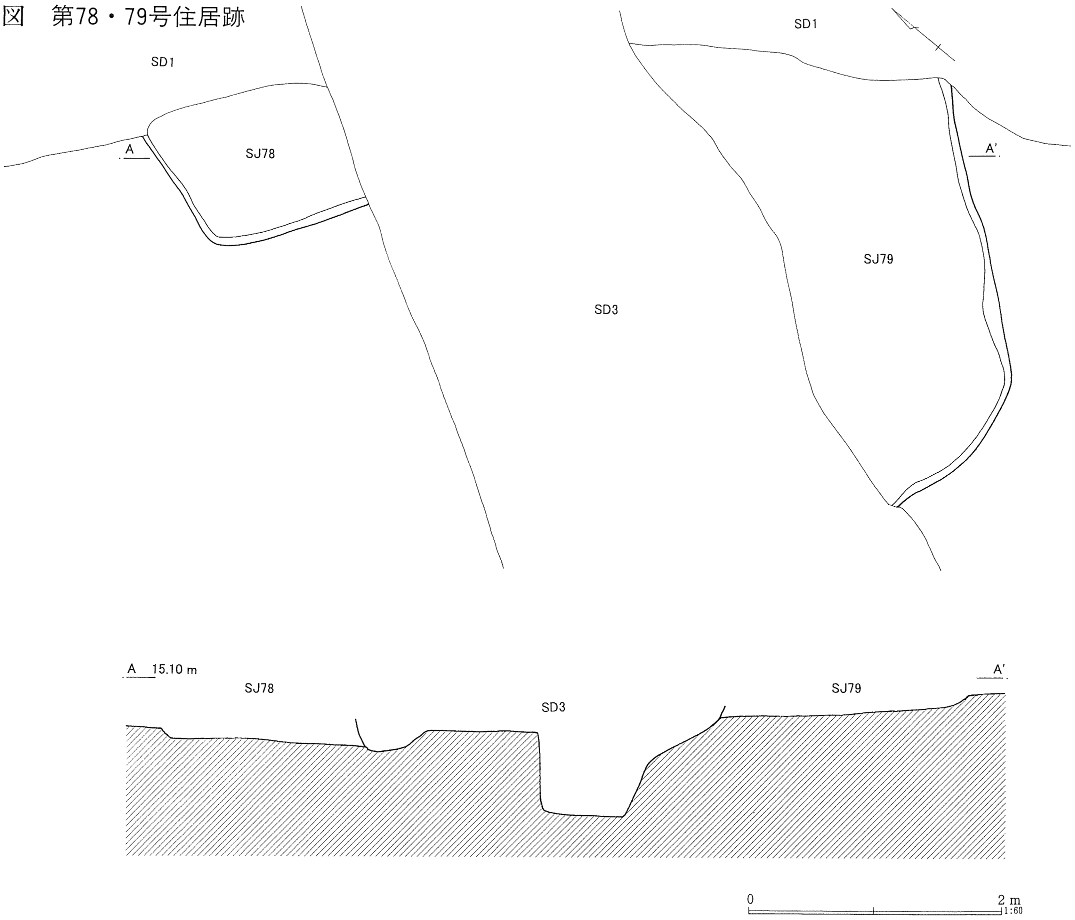
第66図　第77号住居跡出土遺物



第77号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	壺	(8.7)			E.F	3	淡褐色	25	
2	壺	(13.5)			G.L	3	褐　色	15	
3	壺				E.F.G	2	褐　色	95	
4	壺				D.E.G.L	3	褐　色	30	
5	甕	(13.7)			D.F.G.L	3	褐　色	15	
6	台付甕			(9.0)	B.D.F.G.L	3	褐　色	40	

第67図　第78・79号住居跡



第78号住居跡（第67図）

第78号住居跡は、Ｆ－７グリッドから検出した。

住居跡の大半はSD1とSD3のため、検出できなかった。

平面形態は方形と推定された。主軸方位はＮ－50°－Ｅであった。

規模は長軸、短軸とも不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であった。

床面は不明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

住居跡は、SD1、SD3と重複していた。

重複関係は、SD1とSD3に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第79号住居跡（第67・68図）

第79号住居跡は、Ｆ－８グリッドから検出した。

住居跡の大半はSD1とSD3のため検出できなかった。

平面形態は方形と推定された。

規模は長軸、短軸とも不明、深さ10cm程度であった。

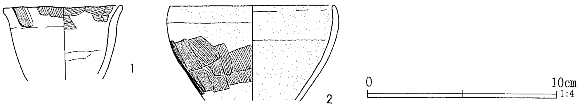
壁は明瞭で、床面は不明瞭であった。

貼り床は不明瞭で、断面観察では確認できなかった。

住居跡はSD1、SD3と重複し、切られていた。

実測可能な遺物として、鉢、壺などを覆土中から検出した。

第68図　第79号住居跡出土遺物



第79号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎　土	焼成	色　調	残存率／%	備　考
1	鉢	(6.3)			G	3	暗褐色	25	
2	壺	(8.6)			G	3	褐　色	20	赤彩

VI　中世から近世の遺構

1．溝

第１号溝跡（第69図）

第１号溝跡は、Ｅ－６グリッドからＪ－９グリッドにかけて検出した。

延長形態は、北東から南西へ延びていた。

検出範囲の距離は68m、幅は2～3m、深さは30cm程度であった。

延長方位は概ね、Ｎ－41°－Ｅであった。

溝跡は、SJ76、SJ77、SD2、SD3と重複していた。

重複関係は、SD2、SD3、SD4とは不明であり、SJ60、SJ69、SJ76、SJ77を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第２号溝跡（第70図）

第２号溝跡は、Ｅ－６グリッドからＧ－８グリッドにかけて検出した。

溝跡の北東側は調査区外のため、検出できなかった。

延長形態は直線で、検出範囲の距離は、24.5m、幅は3.0～5.5m、深さは1.2m程度であった。

延長方位は概ね、Ｎ－30°－Ｅであった。

溝跡は、SD1、FP4と重複していた。

重複関係は、SD1とは不明であり、FP4を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第３号溝跡（第70図）

第３号溝跡は、Ｆ－３グリッドからＩ－９グリッドにかけて検出した。

溝跡の北側は調査区外のため、検出できなかった。

延長形態は曲線で、検出範囲の距離は65m、幅は１.5～4.0m、深さは約75cm程度であった。

延長方位は概ね、Ｎ－29°－Ｅであった。

溝跡は、SD1、SD4と重複していた。

重複関係は、明らかに出来なかった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第４号溝跡（第71図）

第４号溝跡は、Ｆ－８・９グリッドからＧ－８グリッドにかけて検出した。

溝跡の南西側は調査区外のため、検出できなかった。

延長形態は直線で、検出範囲の距離は17.0m、幅は4.5m、深さは1.0m程度であった。

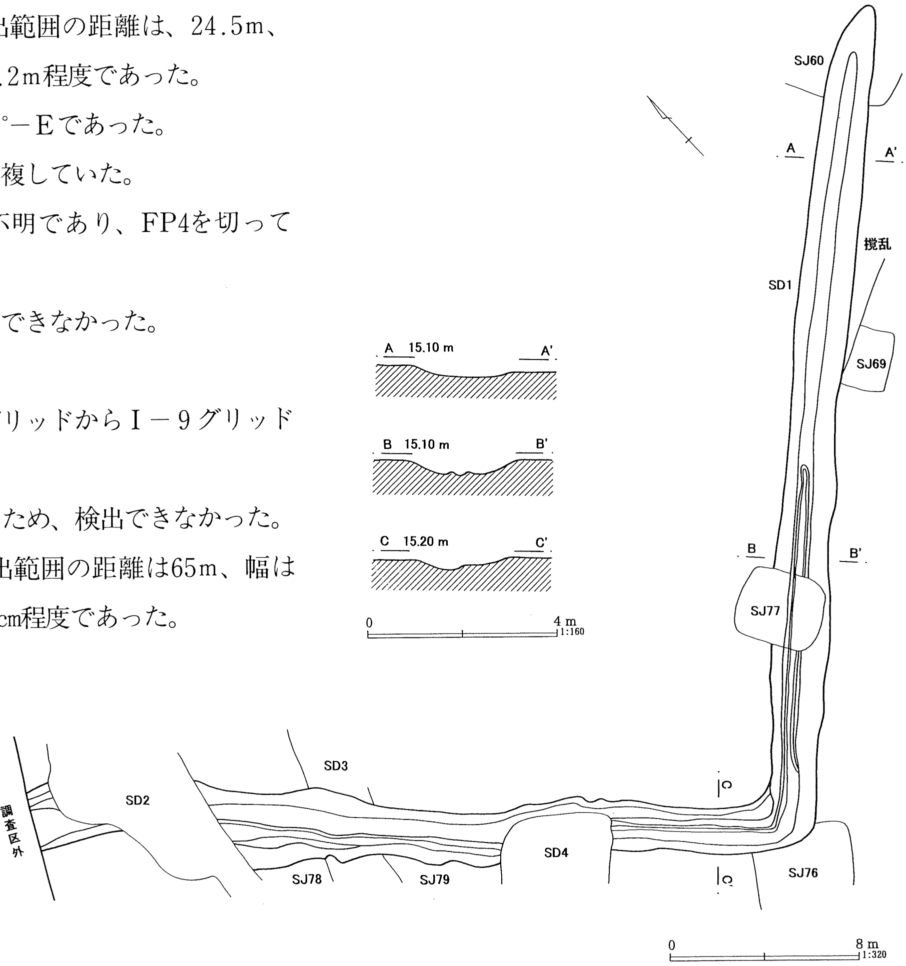
延長方位はＮ－50°－Ｅであった。

溝跡は、SD3と重複していた。

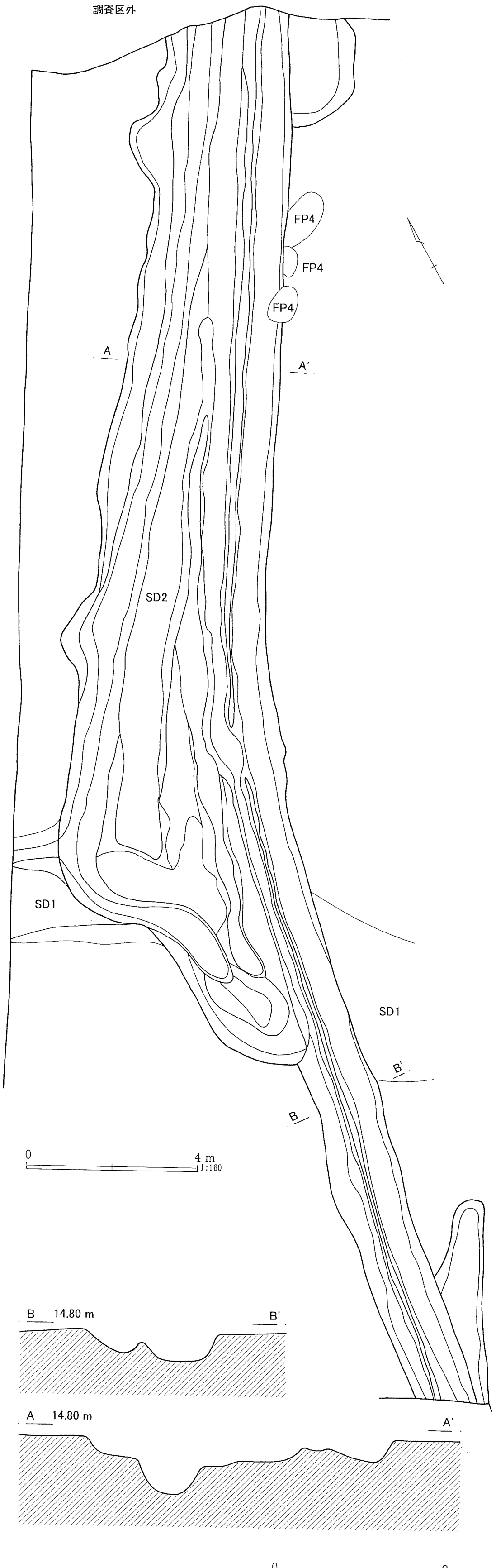
重複関係は、明らかに出来なかった。

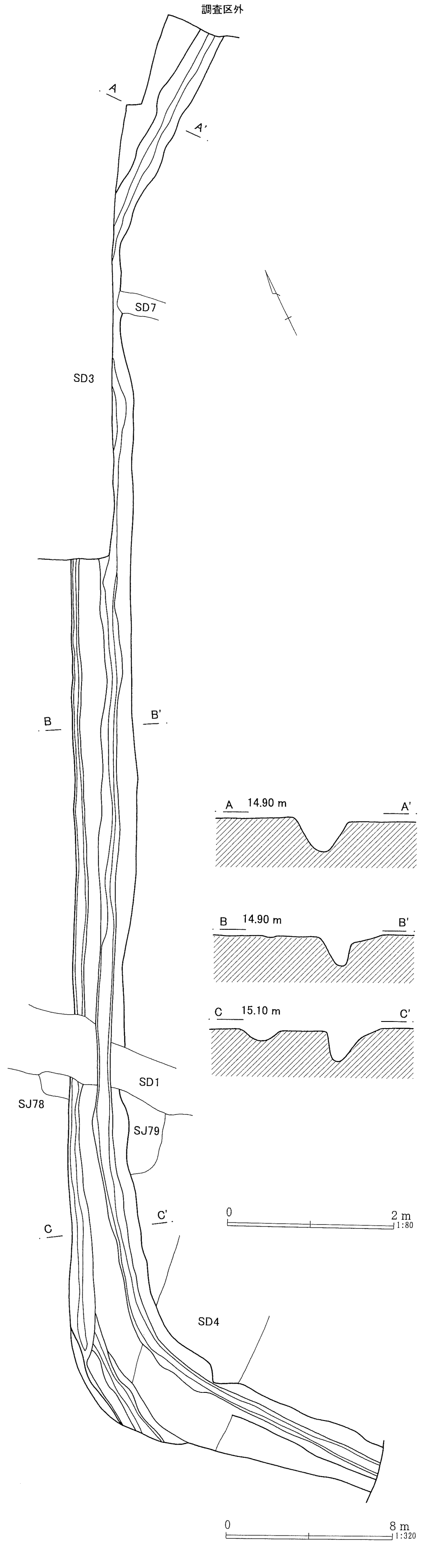
実測可能な遺物は、検出できなかった。

第69図　第１号溝跡



第70図　第２・３号溝跡


調査区外
FP4
FP4
FP4
A
A'
SD2
SD1
SD1
B'
B
0
4 m
1:160
B 14.80 m
B'
A 14.80 m
A'
0
2 m
1:80


調査区外
A
A'
SD7
SD3
B
B'
A 14.90 m
A'
B 14.90 m
B'
C 15.10 m
C'
SD1
SJ78
SJ79
C
C'
0
2 m
1:80
SD4
0
8 m
1:320

第６号溝跡（第71図）

第６号溝跡は、Ｋ－６・７グリッドからＬ－６グリッドにかけて検出した。

溝跡の南東側は調査区外のため、検出できなかった。

検出範囲の距離は19.5m、幅は0.6m、深さは20cm程度であった。

延長方位はＮ－51°－Ｅであった。

溝跡は、SJ63、SJ64と重複していた。

重複関係は、SJ63、SJ64を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第７号溝跡（第71図）

第７号溝跡は、Ｈ－４グリッドからＨ－５グリッドにかけて検出した。

溝跡の北西側は調査区外のため、検出できなかった。

検出範囲の距離は7.0m、幅は0.6～1.0m、深さは約60cm程度であった。

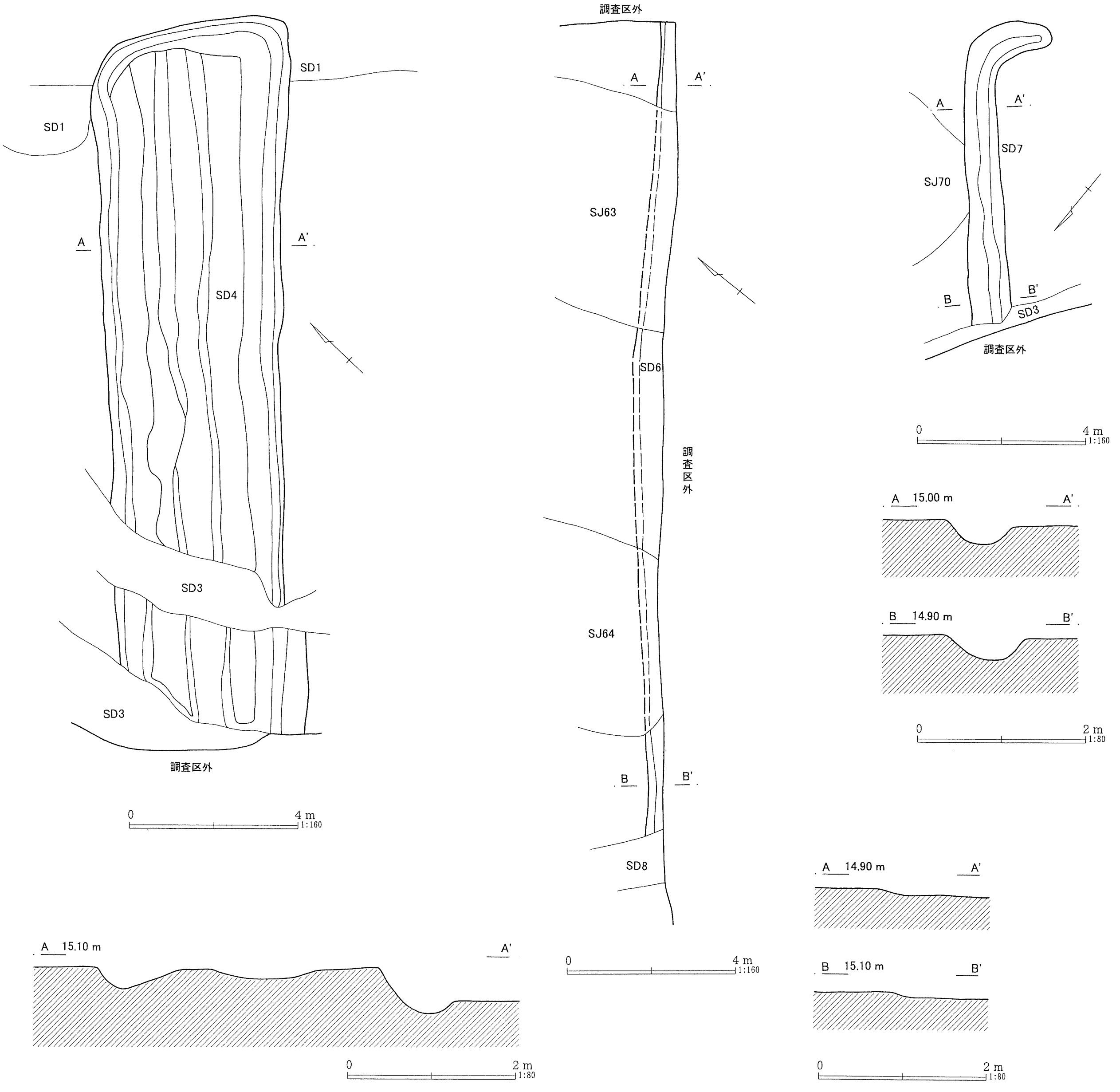
延長方位はＮ－40°－Ｗであった。

溝跡は、SJ70と重複していた。

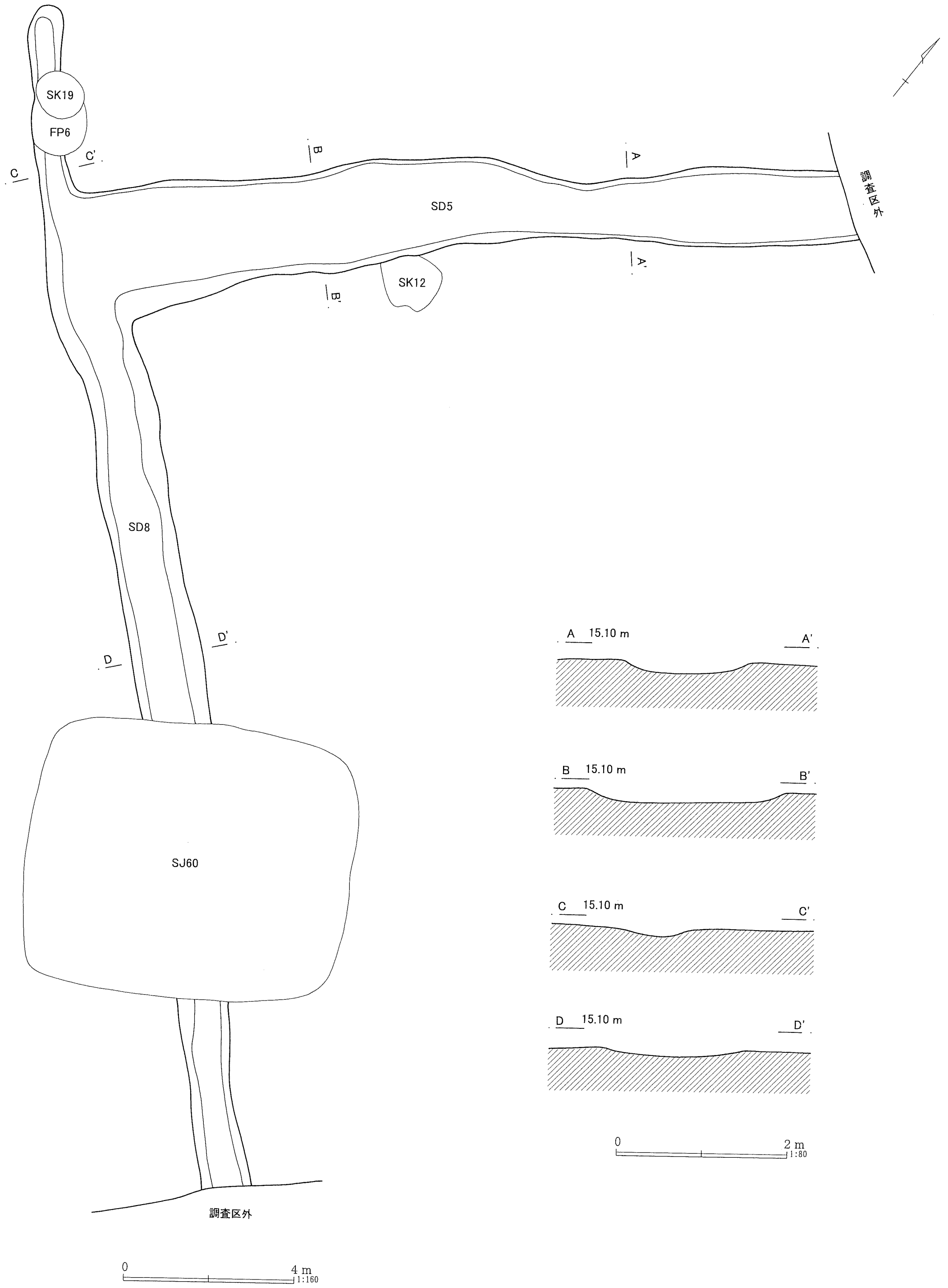
重複関係は、SJ70を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第71図　第４・６・７号溝跡



第72図　第５・８号溝跡



延長方位はN－39°－Wであった。

溝跡は、SD8と重複していた。

重複関係は明らかに出来なかった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

第５号溝跡（第72図）

第５号溝跡は、Ｉ－５グリッドからＪ－４・５グリッドにかけて検出した。

溝跡の北東側は検出できなかった。

延長形態は直線で、検出範囲の距離は、17.5m、幅は約1.5～3.0m、深さは約30cm程度であった。

第８号溝跡（第72図）

第８号溝跡は、I－５・6、J－6・7、K－7グリッドから検出した。

溝跡の南東側は調査区外のため、検出できなかった。

延長形態は直線で、検出範囲の距離は28m、幅は1.0～1.5m、深さは20cm程度であった。

延長方位はN－39°－Wであった。

溝跡は、SD 5、SJ60と重複していた。

重複関係はSD 5とは不明であり、SJ60を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈していた。

Ⅶ 結　語

1．稲荷台遺跡の縄文早期野島式から鵜ガ島台式期の様相について

a）遺構について

稲荷台遺跡出土の縄文土器は、早期の撚糸文系土器群、沈線文系土器群、前期の土器群も少量出土しているが、早期後葉の条痕文系土器群が主体を占めている。該期の遺構も、竪穴状遺構２軒、土壙11基、炉穴９群が検出されるなど、大きな成果を得ることができた。早期後葉の野島式新段階と、鵜ガ島台式の貴重な遺構と土器群を得ることができたため、周辺遺跡の類例と比較しつつ、その位置付けなどについて若干の検討を行いたい。

第１号竪穴状遺構は炉などが無く、積極的に住居跡とする根拠が乏しいものの、柱穴状のピットも存在し、住居跡として認定される可能性は十分にある。また、第２号竪穴状遺構は、炉と推定される部分が、炉穴との重複の可能性もあり、やはり住居跡として断定し得ない。両竪穴状遺構は重複し、しかも古墳時代の住居跡とも重複しているため、竪穴状遺構同志の新旧関係は不明で、両遺構から鵜ガ島台式土器が出土しており、出土土器からではその関係を明瞭にし得ない。嵐山町金平遺跡（植木・金子1981）では地床炉を持つ住居跡が報告されているが、やはり重複して存在する。また、岩槻市諏訪山遺跡（昼間1971）、浦和市明花向遺跡（金子1984）など、各地域で住居跡状遺構でも炉を持たないものが多数存在するため、炉の有無を住居跡の絶対条件とし得ないものと思われるが、ここでは住居跡の可能性は高いものの、竪穴状遺構として取り扱うことにする。

稲荷台遺跡の存在する上尾市周辺は、野島式の新段階期から鵜ガ島台式期にかけての遺構が、比較的多く検出されている地域である。第73・74図に市内の遺跡を中心にして、周辺の遺跡を集成したが、やはり鵜ガ島台式期の遺構の方が多く検出されている。

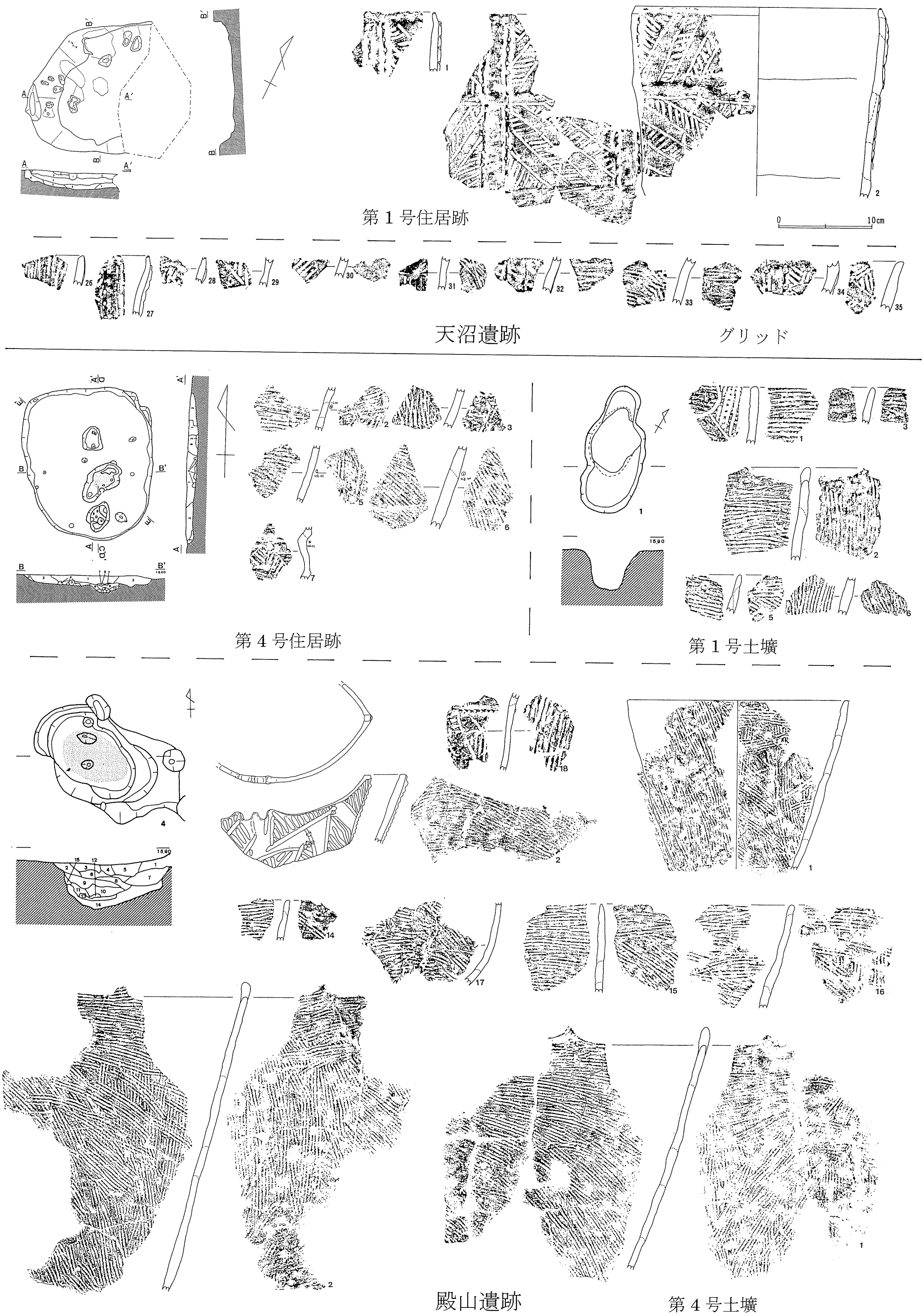
野島式新段階では天沼遺跡第１号住居跡（赤石1984)、殿山遺跡第１号土壙、第４号土壙（山崎1991）がある。鵜ガ島台式期では殿山遺跡第４号住居跡、畔吉遺跡第２号住居跡、第１号炉穴（小宮山1994）が挙げられる。

殿山遺跡第４号住居跡は隅丸長方形で、炉を持つことから良好な住居跡と認定されるが、天沼遺跡第１号住居跡、畔吉遺跡第２号住居跡は不整形プランで、大半が攪乱や削平を受けており、住居跡とは断定し得ないが、良好な土器群が出土しているため、稲荷台遺跡と同様に、竪穴状遺構として認識しておきたい。

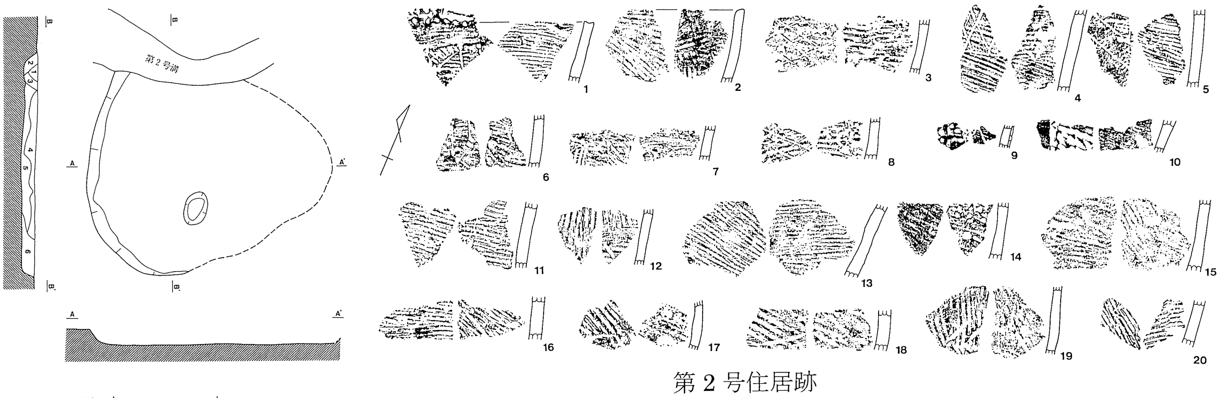
野島式段階では、天沼遺跡第１号住居跡からは、文様帯をⅡ帯持つ野島式から鵜ガ島台式にかけての土器が出土している。殿山遺跡第１号土壙からは、太沈線の円形モチーフを中心とした区画に集合沈線を充填する野島式新段階の土器（1）が、第４号土壙からは、口縁部の形状が楕円形で、太沈線の細かな区画内に太沈線を充填し、区画線上に部分的な刻みを施す野島式新段階の土器（2）が出土している。

鵜ガ島台式段階では、殿山遺跡第４号住居跡からは２段の屈曲を持ち、沈線区画の交点に円形刺突文を施す鵜ガ島台式土器（7）が出土している。畔吉遺跡第２号住居跡からは細隆起線で区画を行うもの（1）や、格子目状のモチーフ（3、4)、結節沈線文を使用するもの（9、10）などが、第１号炉穴からは、細沈線区画に太沈線を充填する土器（1）と共に、細隆起線区画の土器（3、4）も出土している。他に、稲荷台遺跡の南側に位置する薬師耕地前遺跡（赤石1978）では、稲荷台遺跡と同様に、野島式の新段階から鵜ガ島台式にかけての土器群が出土している。浦和市明花上ノ台遺跡第１号住居跡（金子1984）では、円形刺突文を施す細隆起線のみでモチーフを描くもの（1、2）と細隆起線と沈線（9）及び結節沈線が複合する

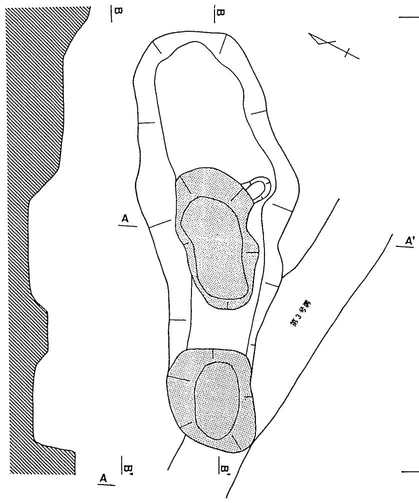
第73図　周辺の遺跡（1）



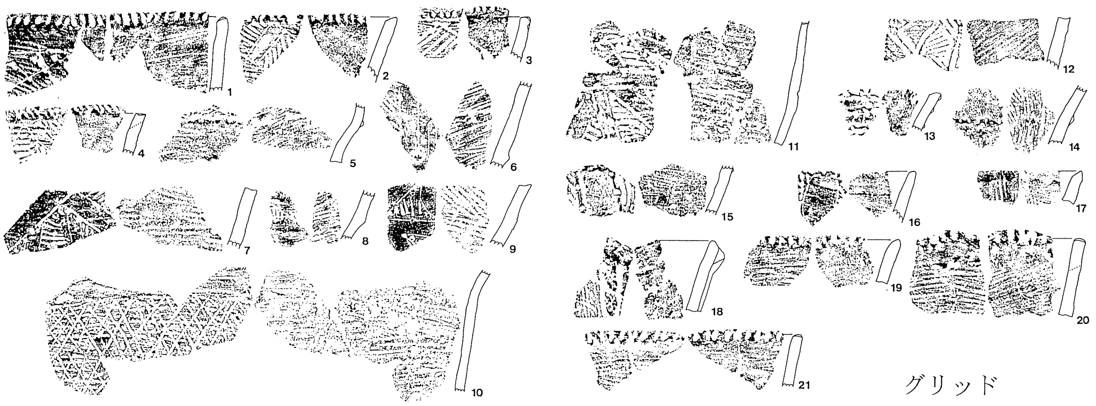
第74図　周辺の遺跡（2）



第２号住居跡

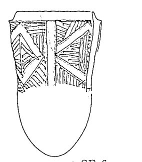


第１号炉穴



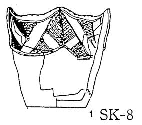
グリッド

畔吉遺跡

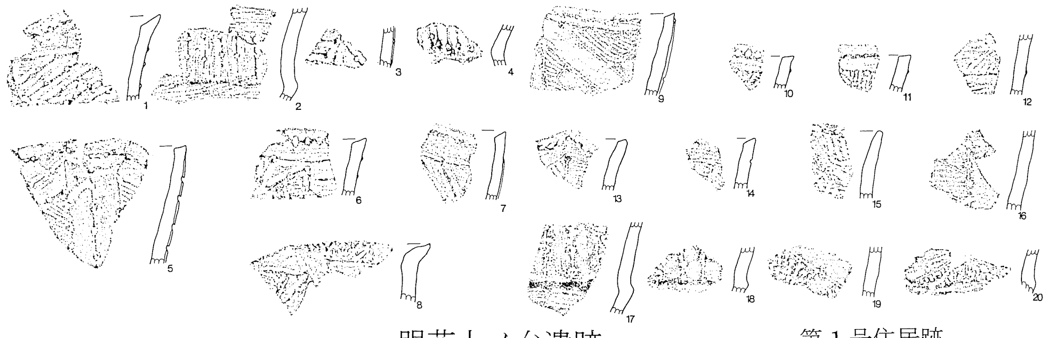


² SF-6

明花向Ｃ遺跡



¹ SK-8



明花上ノ台遺跡　　第１号住居跡

もの（6、11）等が出土している。

b）稲荷台遺跡出土土器の検討

周辺遺跡の土器群を含めて、稲荷台遺跡出土の野島式新段階から鵜ガ島台式にかけての土器群を検討していくが、稲荷台遺跡の土器群は次のように分類された。なお、説明の都合上、第75・76図に稲荷台遺跡出土土器群の主だったものを、第77図に関連する各地の土器群を纏めた。

稲荷台遺跡の条痕文系の第III群土器は以下のように分類される。

第III群土器

第1類…野島式土器（第75図1～28）

　a種）細隆起線のみを使用するもの（1～4、21）

　b種）細隆起線区画＋沈線充填のもの（5～20、22）

　c種）沈線のみを使用するもの

　d種）刻み隆帯＋太沈線を使用するもの（23～28）

第2類…鵜ガ島台式土器（第76図29～51）

　a種）細隆起線を使用するもの（29～36、50）

　b種）沈線区画＋沈線充填のもの（38、44、51）

　c種）結節沈線を充填するもの（37、39～43、45～49）

第3類…条痕のみの無文土器

　a種）口唇部上面に刻みを持つもの

　b種）内削状口唇部外端に刻みを持つもの

　c種）口唇部に刻みを持たないもの

　d種）条痕整形の胴部破片

　e種）擦痕整形の胴部破片

　f種）底部破片

第1類a種の細隆起線のみ使用する土器群は、1、2の様に口縁部に1条の細隆起線を巡らし、さらに口縁から細隆起線を垂下する、比較的古い文様構成を持つ土器群から、3、4の様な通常の野島式の文様構成を持つものもあり、また、地文条痕上にやや太い隆帯状の細隆起線を垂下する21もあり、バリエイションがある。それぞれは時間差に置き換えられる可能性が高いが、細片のため詳細は不明である。1の破片の右端には斜位の細隆起線の痕跡があり、3の文様構成と同一段階の可能性もある。21に関しては、胎土整形等新しい段階の土器群に通じるものがあり、細隆起線の使い方が、刻みは無いものの新しい段階の手法に近い。従って、野島式後半段階に位置付けられるものと思われる。

b種では、2種類の文様描出効果が観察される。5～12の同一個体に見られるカーテンを束ねたような文様は、細隆起線の区画がモチーフを構成し、区画内に集合沈線が充填されて文様が強調される構成を採る。従って、磨り消される無文部ではなく、沈線充填部が浮き出る構成となる。これに対して、15～17は本来区画を施す2本対の細隆起線が、独自に曲線的な意匠文を構成し、その余白に集合沈線文が充填される構成を採る。従って、無文部が文様として強調されるわけであり、2本対の細隆起線が曲線文を主体とした自由なモチーフ描くこととなる。この様に、7と15・17はモチーフこそ異なるが、文様効果がポジとネガの関係になるものと把握される。

文様帯を横帯に区画する手法を分帯、縦位に区画する手法を分割、文様を描く手法を区画として表現するが、本遺跡のb種は波頂部から刻みのある隆帯を垂下して、文様帯を分割するものが多い。そして、文様帯分割線は3本単位が多く、7は刻みを施す隆帯の両脇にモチーフを描く細隆起線の一部が垂下し、分割線と化している。結果的に、波状口縁部から3本区画線が垂下する構成となり、この構成は13、15、17に共通して認められる。

13、15は同一個体と思われ、波頂部を中心に細かな刻みを施す同種の隆帯を3本垂下し、文様帯を分割する構成を採る。明らかに、波頂部を中心とした対称形が意識されており、垂下隆帯の先端が口唇部上まで迫り上がり突起状のアクセントを呈する。同様の対称突起は13にも付けられているが、13は波頂部を中心に右側の隆起線のみ垂下し、左側は突起が付くのみで

ある。従って、対称形を意識するものの、左右は対称的なモチーフ構成にならず、同様なものに18がある。

b種は細隆起線の区画交点に、隆帯上の刻みと同様な刻み1～2個を施すものがあり、この刻みは鵜ガ島台式に見られる刺突文とは異なるが、その祖形となるものである。金平遺跡でも、類似した刻みを持つ細隆起線区画土器が出土している。殿山遺跡第4号土壙第73図2は区画の太沈線上に刺突状の刻みが施されるが、細隆起線区画と同種の刻みと認識される。また、2本対の分割細隆起線上に施す刻みは、方向の異なる斜めの刻みを施すものが多く、対称的な構成となる。刻みを施す細隆起線は、文様帯の分割に使用される場合が多い。20は刻みを施す2本対の細隆起線を、口縁部の分帯線として使用している。

さらに、19の様に2本対の細隆起線の間隔が狭いものがあり、これはグリッド出土の第24図28の凹線状太沈線区画と同様の効果を持つものと思われる。

b種の口唇部は角頭状か内削状を呈し、上面への刻みは存在するが、口唇外端部に刻みを施さない点を特徴とする。

c種の沈線文のみ使用する土器群は、量的にも少なく、その全体像を把握できるものがない。本遺跡では検討の対称と成り得ないが、鵜ガ島台式土器への系譜関係として、殿山遺跡第1号土壙出土の沈線文土器（第73図1）や叺原遺跡出土土器（第77図4）の様な、野島式の新しい段階の沈線文土器を明らかにしていく必要があろう。

d種はほぼ1個体分の土器と思われ、刻みを施す隆帯を垂下して文様帯を分割し、細沈線区画内に太沈線を充填することを特徴とする。角頭状の口唇部上に押圧状の刻みを施し、口縁部が小波状を呈する。胴部に屈曲があり、文様帯がII帯構成になる可能性が高い。26が分帯部分であるとすると、I帯とII帯の間隔が開くことになるが、区画交点には鵜ガ島台式特有の刺突文は施されていない。刻みのある隆帯分割や、太沈線を使用する点で、天沼遺跡第1号住居跡出土土器（第73図2）に類似する。d種はI・II帯の間隔が広く、区画に細沈線を使用することから判断すると、型式学的にはより鵜ガ島台式に近い様相として捉えられる。

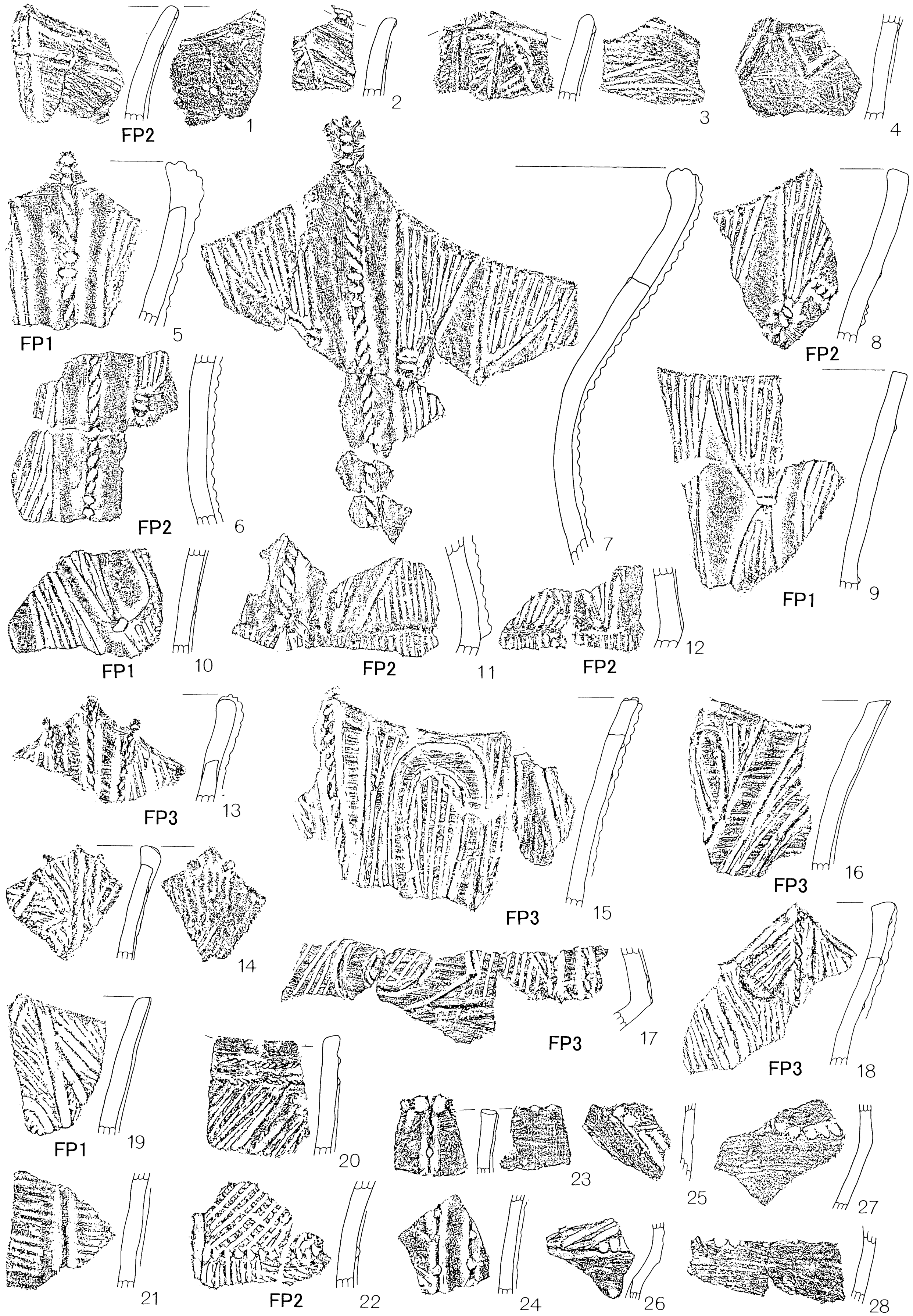
また、天沼遺跡第73図2は口唇部が先細り状に内折して、幅狭の無文部を設けており、明花向遺跡C区第6号炉穴出土土器（第74図2）と共通する特徴を持つ。明花向遺跡C区例は、文様帯はI帯であるが、分帯と分割を細隆起線で行い、対になる太沈線区画内に集合太沈線を充填施文しており、要素においても天沼遺跡例や第77図10と良く類似している。型式学的に、同段階の土器群と認識される。

第2類の鵜ガ島台式土器は、a種の細隆起線を複合するもの、b種の沈線文のみのもの、c種の結節沈線文を使用するもの等の文様要素で分類したが、相互に大きな相違はなく、全体的に区画文が細かくなる傾向にあり、比較的整然とした区画文を施す等、鵜ガ島台式の中でも古い様相を示している。

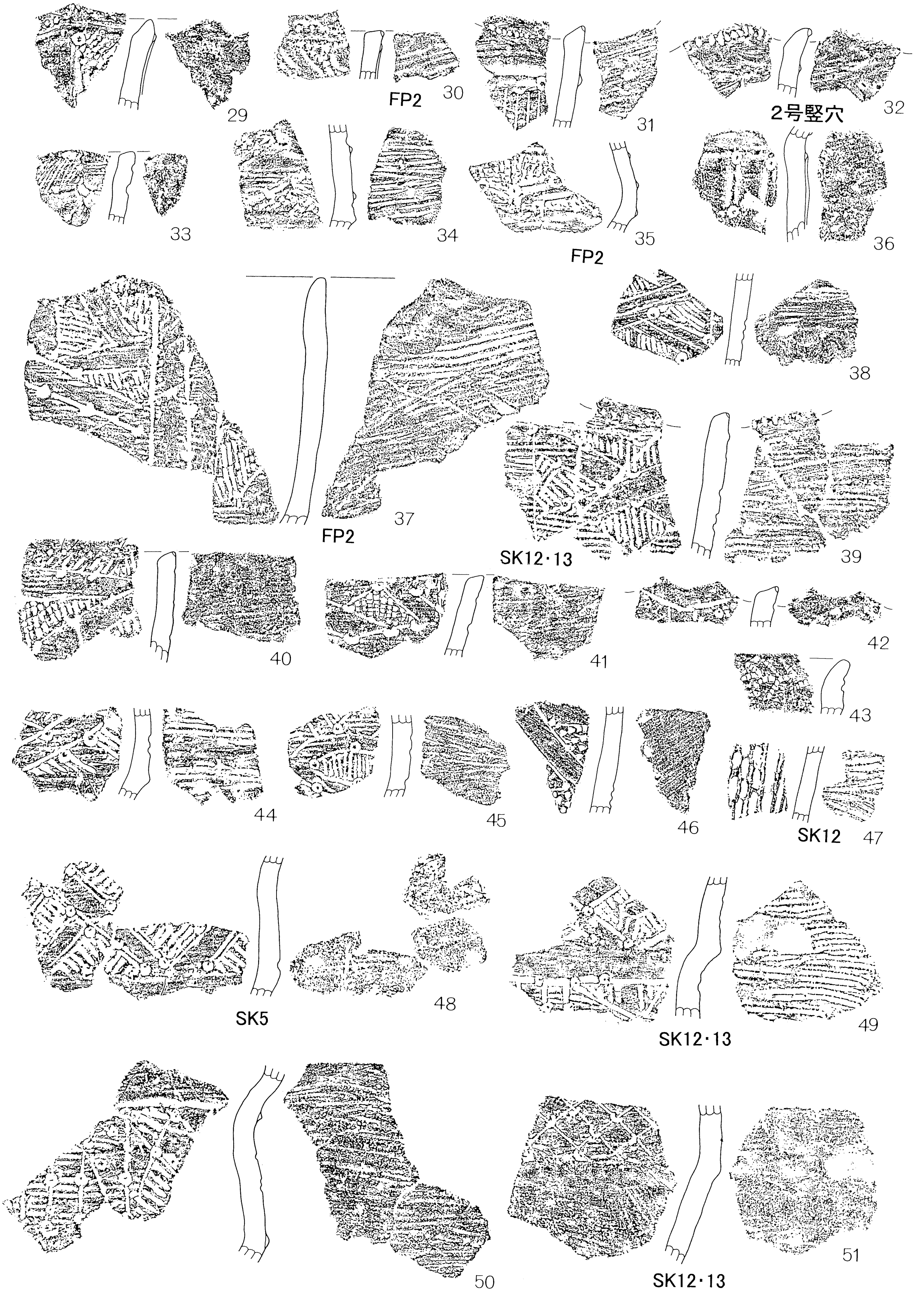
29～32の細隆起線で分帯する土器は、口縁部に無文部を設ける場合が多く、37、40、41等の沈線区画の土器では口縁部無文帯は設置されていない。細隆起線分帯の土器が緩い波状縁であるのに対して、沈線分帯土器は波状が強い傾向にある。両者の折衷的な様相を持つ土器として42があり、波頂部下のみ無文帯を区画している。両者ともモチーフ的に大きな相違は無く、この相違は土器群の系統差に起因するものと考えられる。

第2類の区画は2本対の沈線で行うことを基本とするが、37の双頭の波頂部下には3本沈線の分割線を垂下し、区画文にも一部3本沈線を使用する。中央の沈線にのみ刺突文を施している。同様なものに38がある。これ等の3本沈線文が、野島式新段階の13の様な構成に系譜が認められるのは明らかである。また、充填文の沈線や結節沈線は、時間的な差異を表わしているものではなく、要素の系統差として認識される。畔吉遺跡第2号住居跡、第1号炉穴（第74図）、明花上ノ台遺跡第1号住居跡（第74図）においても、鵜ガ島台式の古相の土器には、細隆起線、沈線、結節沈線の全ての要素が含まれている。千葉県桜井平遺跡

第75図　稲荷台遺跡出土野島式土器



第76図　稲荷台遺跡出土鵜ガ島台式土器



（蜂屋1998）の様に鵜ガ島台式の新段階にまで細隆起描出が強固に残存するなど、これ等の要素はいずれも鵜ガ島台式の新しい段階まで継続するものであり、地域によって、または系統差によってそれぞれ発現の差異が現れてくるものと推察される。

第３類の所謂無文土器は、口唇部形態や刻み形態の差異に型式差が看取される。角頭状もしくは内削状口唇部の外端部のみに細かな刻みを施すものは鵜ガ島台式に比定されるものが多く、同形態の口唇部でも刻みのないものは野島式の新段階に比定される傾向が強い。一般的に、口唇部上面に刻みを施すものは、切り込む様な刻みは野島式に、押圧状の丸味を帯びた刻みは鵜ガ島台式に多い傾向がある。また、野島式新段階では、摘みあげる様な小波状口縁を呈する無文土器も目立つ。地文の条痕は、整然とした明瞭な深い条痕は鵜ガ島台式に多く、底部は平底及び丸底状に近い鈍角な尖底土器が鵜ガ島台式の特徴となる。

以上、稲荷台遺跡出土の土器群を検討してきたが、第75、76図を比較した場合、区画交点に刺突文を施す手法や、３本線で分割することなどに系統性が窺われるが、文様構成等にヒアタスがある。野島式の新段階は流動的及び創造的なモチーフ構成がみられる一方で、鵜ガ島台式では襷状区画を基本とした細区画が施されている。鵜ガ島台式の中で流動的なモチーフ構成がみられるのは、むしろ茅山下層式に近い新段階になってからであろう。従って、稲荷台遺跡で看取された文様構成上のヒアタスは、若干の時間的隔絶を示唆しており、本遺跡の鵜ガ島台式が最古段階に位置付けられないことを示している可能性も考えられる。しかし、野島式新段階における流動的ではない襷状区画文を持つ土器が存在している以上、このヒアタスは系譜、系統上の相違として認識されるべきであり、何故この差異が稲荷台式遺跡でみられるのかを、時系列な断絶性をも射程に入れながら、検討していくことこそが必要とされよう。

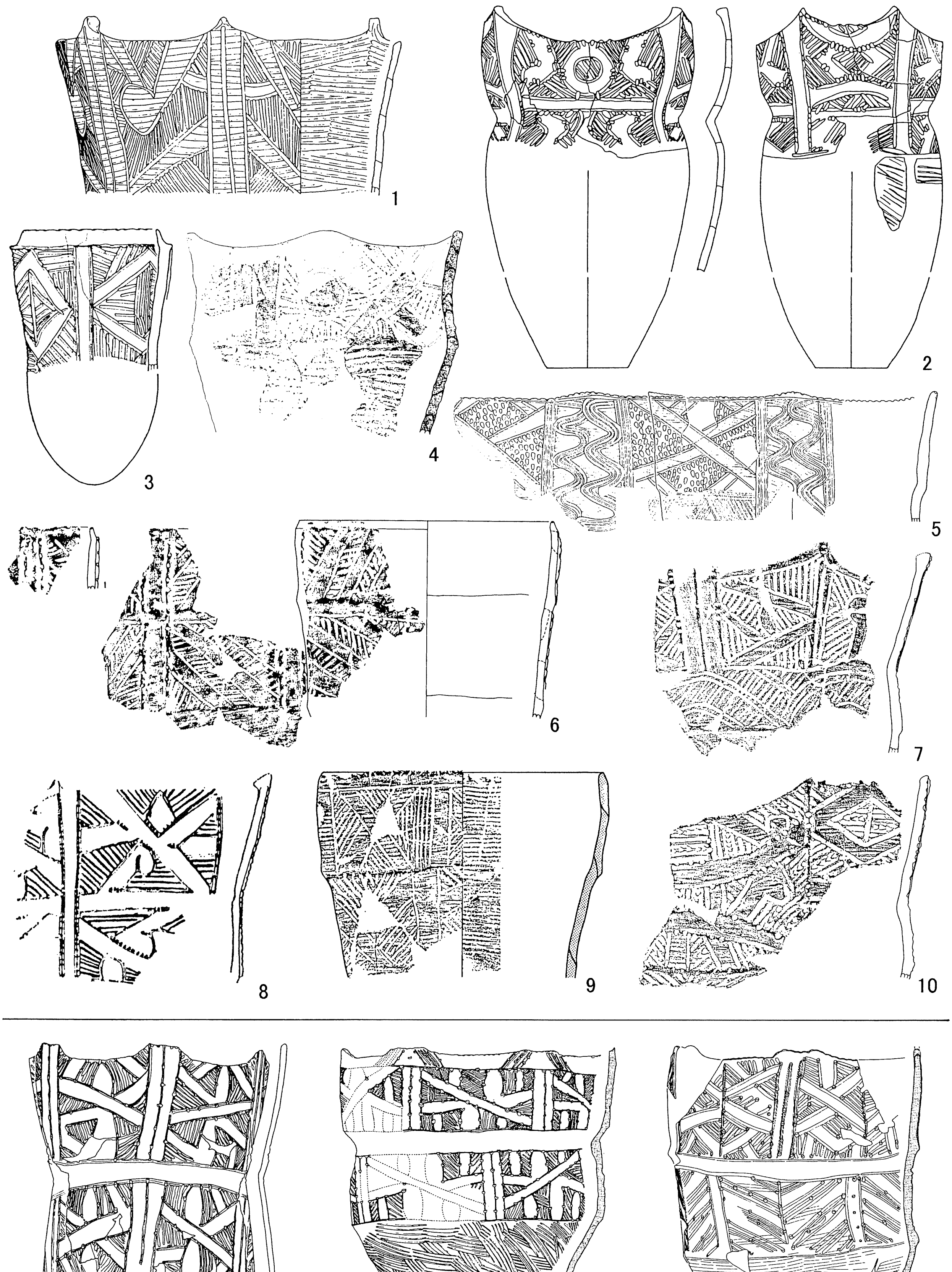
ｃ）鵜ガ島台式への変遷について

稲荷台遺跡出土の土器群を中心にして、野島式新段階から鵜ガ島台式にかけての土器群を検討してきたが、ここでは、３本分割線や、文様、文様帯の系統等の観点から、野島式と鵜ガ島台式の画期について若干の検討を加えてみたい。尚、各地の該期土器群を、第77図に纏めた。

野島式新段階の波状口縁は、第77図１、２、７の様に摘み出す様な口唇部形態を採るのが特徴で、鵜ガ島台式にはこの種の波状口縁は少ない様である。鵜ガ島台式に見られる台形状、もしくは緩やかな双頭状波状口縁は、２や10に見られる野島式の楕円形口縁部の短辺部が、更に間隔を狭めて双頭化することが一要因となっている様に思われる。２の短径部分は、５の蛇行沈線が垂下する部分と相同の関係にあり、その部分の口縁部が山形状を呈するのと同じ効果である。さらに、波頂部から垂下する隆起線を中心とする対称形原理も、双頭化を促している。２のモチーフ構成は、波状部の間隔が広いところでも、狭いところでも対称形的な文様を描いている。中央部に見られる円形モチーフは、１、７のＲ字状文の先端部が独立したものと捉えるよりも、野島式古段階以来継承される伝統的なモチーフと考えられるのではなかろうか。ただし、円文モチーフと曲線構成の相乗効果の結果であることは間違いないであろう。

文様帯を分割する３本線の要素は、２本線分割・区画技法に波頂部から垂下する隆帯を加えることによって成立する可能性が高いことを指摘した。中央の沈線に刻みを施すのは、垂下する隆帯上の刻みの名残と認識される。１は波頂部を中心として３本沈線で分割する構成であるが、４は沈線で、７は隆起線でそれぞれ波底部を分割している。本来、１の構成が基本であるが、波頂部と波底部が交換可能の関係になっている状況を推測できる。また、１の様に波頂部を中心とする左右の区画が対称形のモチーフを構成するものと、２、５、７、10の様に区画内相互で独立したモチーフが、

第77図　野島式新段階から鵜ガ島台式への変遷図



1.駒込(井上1997)　2.赤羽台(下津1990)　3.明花向Ｃ区(金子1984)　4.吹原(吉田1987)
5.稲荷前ﾏｳﾝﾄﾞＦ(中島1979)　6.天沼(赤石1984)　7.10.11.城ノ台南(井上1994)　8.鳥込東(関野1980)
9.三里塚No.14(中山1971)　12.下鶴谷(前原1988)　13.岩名第14(岡田1944)

分割線を越えて対称形にならない構成との両者の存在が理解される。

1、3は幅広のⅠ帯構成と思われるが、2、5は幅狭のⅡ帯を持つⅠ・Ⅱ帯構成で、6～9は上下で類似したモチーフを持つⅠ・Ⅱ帯構成であり、7のみⅠ帯とⅡ帯で異なるモチーフ構成を採る。さらに、2、5は分割線がⅡ帯にまで貫かれており、6、8はⅠ帯とⅡ帯の間に間隔を開けるが、分割線が貫かれている。また、7はⅠ帯とⅡ帯の分帯は明瞭であるが、器形的な括れのみで、文様帯間は連続している。

鶉ガ島台式になると、Ⅰ帯とⅡ帯の分離は明瞭で、Ⅰ・Ⅱ帯を貫く分割線も存在しなくなる。波状の単位数は多くなるが、波頂部を基本にして3本沈線で分割し、Ⅰ帯において11～13の様な左右対称的なモチーフを構成する。Ⅱ帯は11の様に上下の分割ラインを揃えて上下に同様な区画を施すもの、12の様に半山づつずらして上下に同様なモチーフを施すもの、13の様に半山づつずらして上下で異なる区画を施すもの等が存在する。

3本沈線分割の系譜、上下Ⅰ・Ⅱ帯を合わせる区画構成は系譜的な変化として明瞭であり、Ⅰ帯とⅡ帯で異なるモチーフを描く構成も系譜的な変化として捉えられる。しかし、野島式段階では、7の様に異なるモチーフ構成であるならば、文様帯を重ねても上下で干渉することはないが、2、5、6、8の様に縦位分割線がⅠ・Ⅱ帯を貫くものでは、上下の文様帯が左右にずれることはなく、分割線が楔の役割を果たしている。その点に、野島式と鶉ガ島台式を画する可能性を見出せるのではなかろうか。

では、何故野島式から鶉ガ島台式にかけての段階に、この様な現象が生じるのであろうか。

それは、野島式古段階から見られる円環的等価区画配列構成から、円環的可変区画交換配列構成が生成された結果によるものと認識される。円環的可変区画交換配列構成は、波頂部の主導的区画優位行為から解放されることによって、つまり、波頂部と波底部との交換性が可能となることによって、7の様に波状形態を基準とするものの、区画意識が左右に反山づつずれることが可能になる。また、波頂部から解放される配置構成や、Ⅰ帯とⅡ帯が分離することによって、縦位に貫く分割線の縛りから解放されることは、波状を呈しているものの、文様の割り付けが平縁の分割を指向していることを意味している。縛りの解放と、平縁区画の指向はやがて器形の大型化とともに、波状の小型化と円環的区画の多単位化を促し、鶉ガ島台式の文様区画の多単位化とⅠ・Ⅱ帯モチーフのねじれ現象を生むもとになる。この半山のねじれ現象、対称形のモチーフ構成、上下に異なる文様を配置する構成等が、やがて鶉ガ島台式独自の文様構成を生成していくものと思われる。

具体的には、Ⅰ帯とⅡ帯が分離しかけているものに6、8がある。8は分割隆起線が無文帯上を貫通しているが、6は隆起線が途切れていて繋がってはいない。また、9はⅠ・Ⅱ帯は連続するものの、上下の区画が分割線の幅分だけ左右にずれている。6、9には鶉ガ島台式に比定し得る明瞭な根拠は見られず、むしろ野島式として包括される特徴を具有する。しかし、今まで述べてきたことを基準とすれば、型式論的にその境界に位置付けられる土器であることは間違いない。以前、6、9を中間的な様相を持つとして鶉ガ島台式最初頭に位置付けたことがある（金子1982）が、ここに訂正するとともに、型式学的に検討して、6、9の土器に画期を見出し、それ以降の土器群について鶉ガ島台式土器と認識していきたいと思う。

鶉ガ島台式土器は文様構成の把握される個体が増加しつつあり、また、分布範囲も野島式に比較して広汎に亘るため、今後、他の文様構成の系統性や、地域性及びその変容性等を検討しながら、条痕文系土器群前半期の中における鶉ガ島台式土器の位相を検討していきたいと考えている。　（金子直行）

引用・参考文献
赤石光資 1978「薬師耕地前遺跡」上尾市文化財調査報告第４集
赤石光資 1984「天沼遺跡－第１～３次調査－」上尾市文化財調査報告第21集
井上　賢 1994「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」千葉大学文学部考古学研究報告第１冊
井上　賢 1997「野島式土器二細分論」『人間・遺跡・遺物』３
印旛郡市文化財センター 1992「印旛郡市文化財センター年報８」
植木弘・金子直行 1983「金平遺跡」嵐山町教育委員会
岡田光広 1994「野田市岩名第14遺跡」千葉県文化財センター調査報告第249集
金子直行 1982「野島式土器について－金平遺跡出土土器を中心として」『土曜考古』６
金子直行 1984「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
小宮山克己 1994「畔吉遺跡－第２次調査－」上尾市遺跡調査会調査報告書第13集
下津　弘 1990「赤羽台遺跡」東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
関野哲夫 1980「鵜ガ島台式土器細分への覚書き」『古代探叢』
千葉市史編さん委員会 1976「鳥込東遺跡」『千葉市史資料編』１
中島　宏 1979「入間郡日高町出土の早期縄文土器」『埼玉考古』第18号
中山吉秀 1971「三里塚」千葉県北総公社
蜂屋孝之 1998「干潟町諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡」千葉県文化財センター調査報告第321集
昼間孝次 1971「諏訪山遺跡」埼玉県遺跡調査報告第８集
前原　豊 1988「下鶴谷遺跡」『柳久保遺跡群Ｖ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
山崎広幸 1991「殿山遺跡－第2次調査－」上尾市文化財調査報告第36集
吉田健司 1987「叺原遺跡（先土器・縄文時代編）」川口市文化財調査報告書第23集

２．第23号土壙出土土器について

稲荷台遺跡第23号土壙から出土した土器は、従来は中期末葉と考えられていた土器群である。これらのような土器群については、近年再検討がなされてきている（橋本1994、細田1994、谷井・細田1995、谷井・細田1997)。また私的にはこの土器群いわゆる加曽利ＥⅣ式土器について、「宿北Ｖ遺跡」の分析からは後期初頭と考えている（上野1999)。

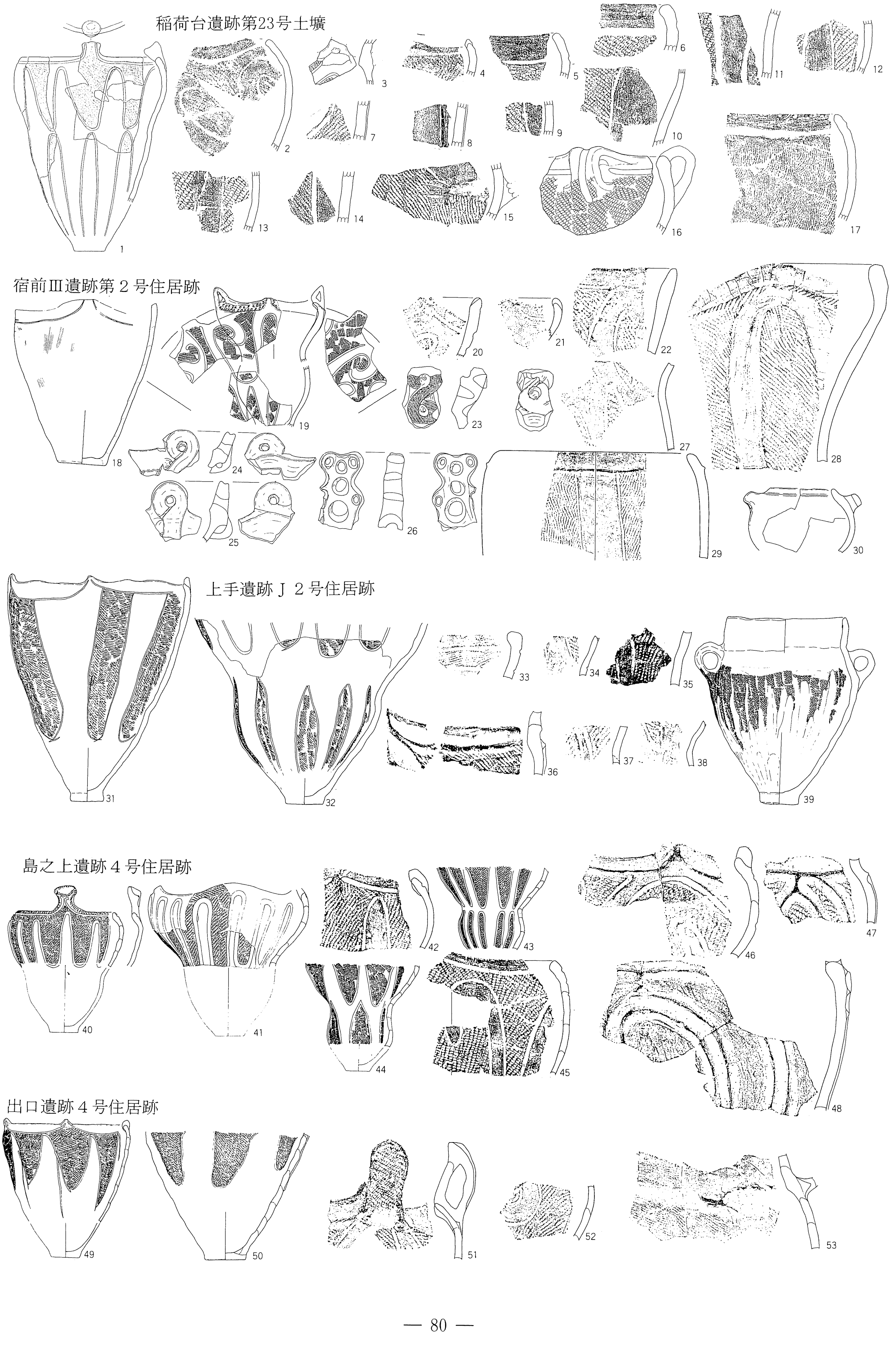
今回報告する稲荷台遺跡第23号土壙については、加曽利ＥⅢ式からＥⅣ式にかけての土器が出土しており、“加曽利ＥⅣ式土器”を後期とするならば、ちょうど中期末葉から後期初頭にかけての微妙な時期にあたる。そこで周辺の遺跡と比較しながら、検討をしていくこととする。比較に当たっては第23号土壙出土土器の全体像がわかるものは、復元実測した第78図１の土器のみであったため、その特徴である、把手や波状口縁部で区画するように口縁部を施文する沈線をもつ深鉢形土器を主眼とした。

また第78図１の口縁部を区画するように施される沈線文についても、若干の考察を加えることとする。

(1)　第23号土壙出土土器

第23号土壙からは、第78図１～17の土器が出土している。第78図１は口縁部に沿って施文される沈線が把手部の形に合わせて曲がってそのまま頂点でとぎれるもので、口縁部を区画するような効果を出している。第78図２は波状口縁をもち胴部に上下２段の文様を有すると考えられる土器で、上段の文様の一部が残存するものである。文様は沈線内を磨り消した文様が単位文様となるもので、修理山遺跡（吉田1995）第１号住で出土した「Ｊ」字状の渦巻文の区画内を縄文で充填している深鉢の、縄文部分と磨り消し部分が逆転する文様と考えられる。また修理山遺跡第１号住から出土した台付深鉢の把手部分には、２条の箆状沈線が施文されており、第78図１の把手部分と類似している。第78図３は口縁部の波状口縁の把手部分がねじれて添付されていたと類推されることから、称名寺式土器とも考えられるものである。他は上下２段に文様が施文される深鉢形土器の、口縁部や胴部の破片が出土している。また８は、微隆帯で区画する幅広の

第78図　稲荷台遺跡と周辺地域の出土土器(1)



無文部をもつ深鉢である。

(2) 周辺地域の土器

第78図と第79図は、稲荷台遺跡第23号土壙１の口縁部の文様に類する土器を、出土する遺構ごとに集成したものである。

そのうち第78図は埼玉県、第79図は千葉県と東京都の遺跡である。また第80図は、比較資料として図示したものである。

まず第78図と第79図に集成した遺構出土の土器について検討することとする。

宿前Ⅲ遺跡第２号住居跡（第78図18～30）

18は波状口縁の波頂部に向かって、２本の沈線が曲がりそのまま項部で途切れるもので、１と比較すると口縁部区画の沈線施文が類似するものである。ここからは19、27～29などの“加曽利ＥⅣ式土器”と、20、23～26の称名寺式土器が出土している。また30は瓢形土器の破片である。

上手遺跡Ｊ２号住居跡（第78図31～39）

31は平らな口縁部に４つの突起を持つもので、その突起ごとに４つに口縁部を区画して沈線を施文している。４つの沈線はそれぞれ独立して施文される。32は胴部に上下２段の文様を施文するもので、下段は逆Ｖ字状に沈線を施文する。36は岩坪類の口縁部である。“加曽利ＥⅣ式”を主体に出土するが、33の称名寺式土器も出土している。

島之上遺跡４号住居跡（第78図40～48）

40は１と類似している土器で、上半分が残存するが、１と同様に上下２段の文様を持つと考えられる。残存する上段の波状に施文される沈線は、把手部下では他の波項部よりも突出して施文され、そのため口縁部に施文される沈線が把手部分で押し上げられた形となっている。従来の加曽利ＥⅢ式と“加曽利ＥⅣ式”が、混在して出土している。

出口遺跡４号住居跡（第78図49～53）

49は31と同様に平らな口縁に４つの突起を持つもので、口縁部をその突起ごとに４つの区画に沈線を施文している。沈線は連結せず独立して施文される。“加曽利ＥⅣ式”を主体として出土している。

生谷堺堀遺跡９号住居跡（第79図54～62）

54は１、40と類似する土器で、40と同様に波状に施された沈線が、把手部分の下で波項部が突出するものである。把手部分で口縁部の沈線が押し上げられた形となっている。60は岩坪類、58、61は瓢形土器である。従来の加曽利ＥⅢ式土器が主体として出土している。

芳賀輪遺跡第134号住居跡（第79図63～70）

63は１、40、54と類似する土器であるが、40や54のように、把手部分の下で胴部の波状沈線文の波項部が突出することはない。把手部分の下には、橋状把手のなごりとも考えられる突起が残存している。従来の加曽利ＥⅢ式と“加曽利ＥⅣ式”が、混在して出土している。

前原遺跡４号住居跡（第79図71～76）

後期段階の加曽利Ｅ系土器とされたものである。71は波状口縁部を沈線で区画するもので、口縁部の沈線はお互い連結していない。

はけうえ９号住居跡（第79図77～81）

称名寺式土器が出土する住居跡である。77は71などのように、波状口縁部分に沿って沈線が区画して施文するもので、やはり区画した沈線は連結されず、独立して施文されている。

(3) 第23号土壙出土土器の時期について

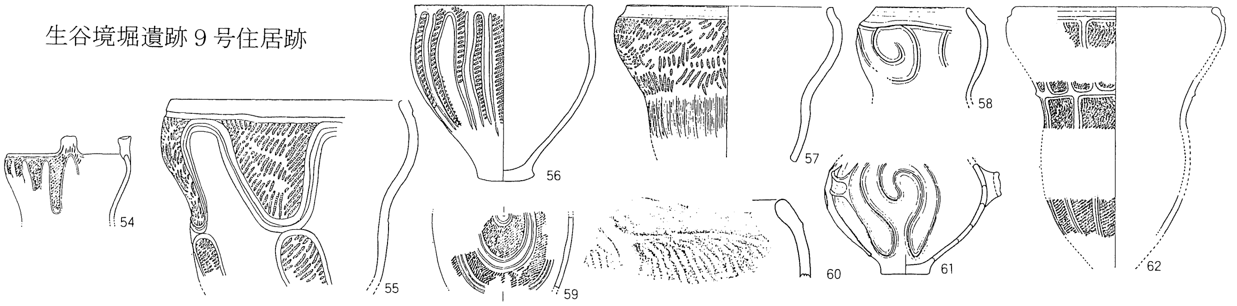
遺構ごとの出土土器について、個々に観察してきたが、ここでは第23号土壙出土土器の時期について考えていきたい。

まず１と類似する土器を出土するのは、島之上遺跡４号住居跡、生谷堺堀遺跡９号住居跡、芳賀輪遺跡第134号住居跡であるが、出土する土器は加曽利ＥⅢ式からＥⅣ式にわたるもので、稲荷台遺跡第23号土壙と同様に、中期末葉と後期初頭の微妙な時期の遺物が出土している。

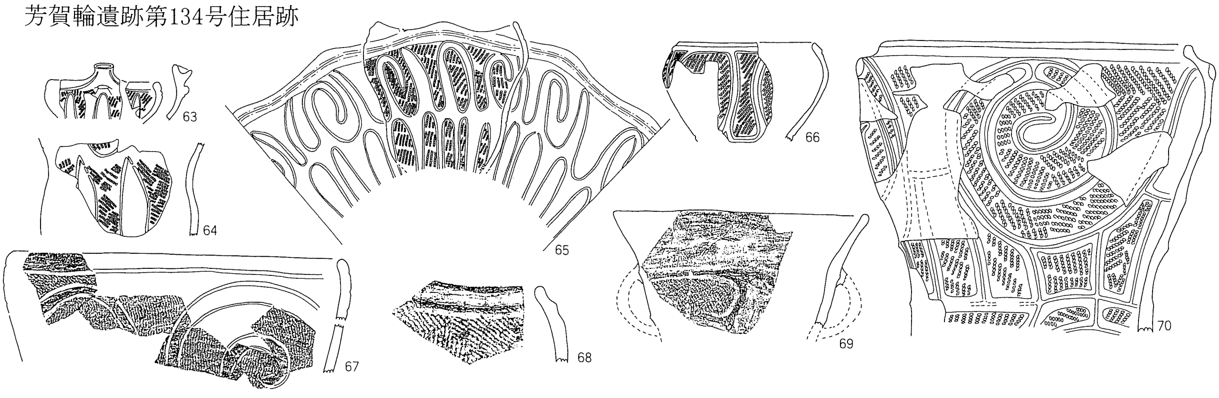
そこで第78図、第79図で挙げた遺跡の遺構との併

第79図　周辺地域の出土土器(2)

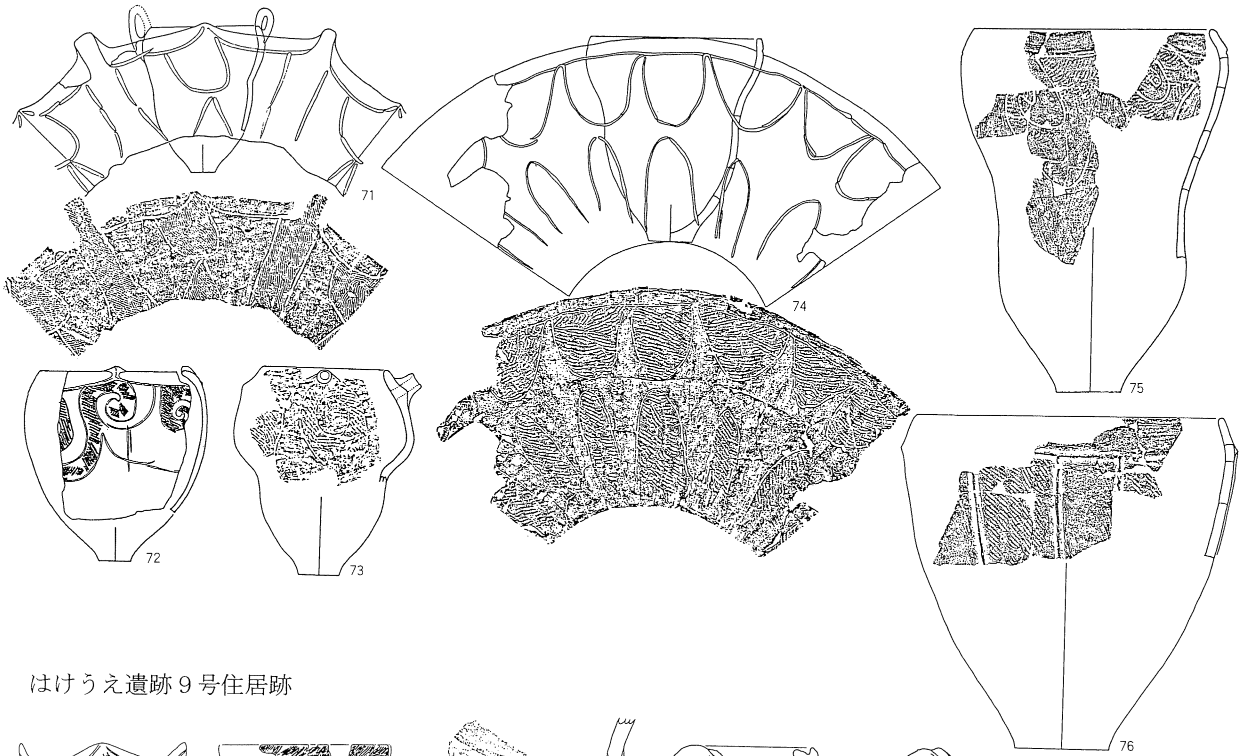
生谷境堀遺跡９号住居跡



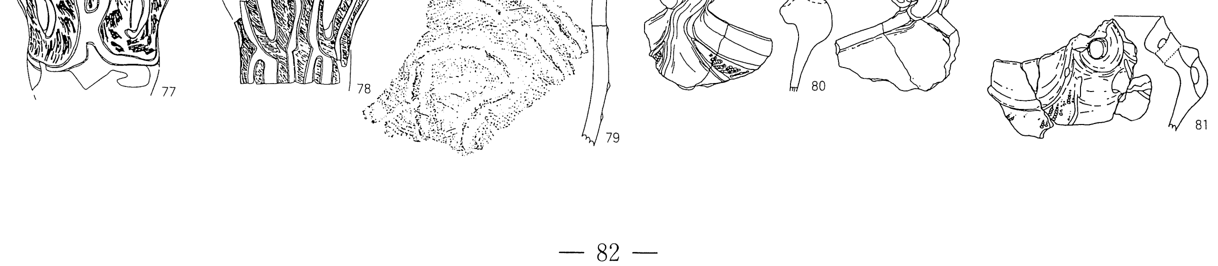
芳賀輪遺跡第134号住居跡



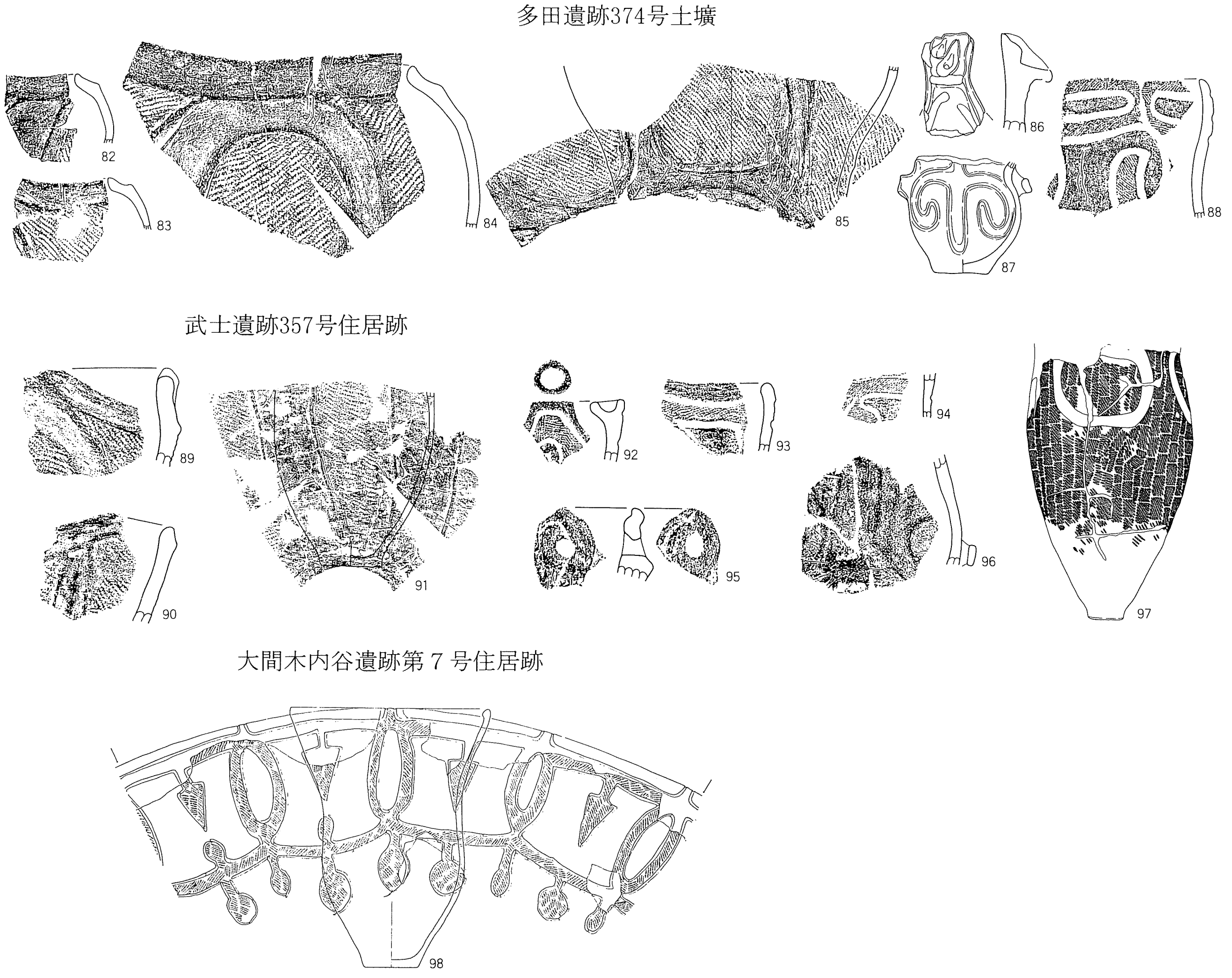
前原遺跡４号住居跡



はけうえ遺跡９号住居跡



第80図　周辺地域の出土土器(3)



行関係を考えながら、稲荷台遺跡第23号土壙の時期について検討していきたい。

第78図と第79図のうち宿前III遺跡第２号住居跡と、上手遺跡Ｊ２号住居跡からは、称名寺Ｉ式ａ類の20、33の土器片などが出土している。また、出口遺跡４号住居跡出土の31と49は口縁部に施される文様が似通っており、さらに31と50の胴部の文様から、上手遺跡Ｊ２号住居跡と、大きな時期差はないと考えられる。

はけうえ９号住居跡からは、称名寺Ｉ式ｃ類に近い土器を出土している。また後期加曽利Ｅ系といわれる土器を出土する前原遺跡４号住居跡については、筆者は称名寺Ｉ式ｂ類の段階と考えている（上野1999)。

まとめれば宿前III遺跡第２号住居跡、上手遺跡Ｊ２号住居跡、出口遺跡４号住居跡が、後期初頭の称名寺式の最古段階に近く、その後に前原遺跡４号住居跡、はけうえ９号住居跡が続くと考えられる。

以上を参考にして、稲荷台遺跡第23号土壙出土土器は、称名寺の最古段階に併行するのか、それとも先行するのか考えてみたい。１と類似する、54の土器を出土した生谷堺堀９号住居跡からは、58、61の瓢形土器が出土している。この瓢形土器は第80図の多田遺跡374号土壙から87が、第80図の武士遺跡からは96が出土している。また生谷堺堀９号住居跡からは60の岩坪類の口縁部片が出土しており、やはり多田遺跡374号土壙からは82、武士遺跡357号住居跡から89の岩坪類の土器が出土している。以上からすれば、これらの遺構の間には、大きな時期差は認められない。

ところでこの多田遺跡374号土壙、武士遺跡357号住居跡からは、宿前III遺跡第２号住居跡、上手遺跡Ｊ２号住居跡と同様、口縁部に窓枠状の区画文を施文す

る88や、92〜95の称名寺Ｉ式ａ類の土器が出土している。また武士遺跡357号住居跡からは、97の大木10式の古段階と考えられる土器が出土しているのである。

それらから考えると生谷堺堀遺跡９号住居跡は、称名寺式の最古段階にほぼ併行するということができる。同じ様相を示している稲荷台遺跡第23号土壙、島之上遺跡第４号住居跡、芳賀輪遺跡第134号住居跡もほぼ同じ時期と考えられる。

以上からすれば、稲荷台遺跡第23号土壙の時期は、称名寺式をもって後期とすれば、後期初頭の時期に位置づけられる。

(4) 口縁部に施文された沈線文について

稲荷台遺跡第23号土壙から出土した１の口縁部に施文された沈線文については、当初は中津類などの口縁部の窓枠状の区画文から派生することを考えていた。しかし島之上遺跡４号住居跡40や、生谷堺堀遺跡９号住居跡54では、胴部文様の波頂部の突出によって、把手に沿って押し上げられる形で施文されたと考えられ、窓枠状の区画文とは別に発生していたことがわかった。しかしながら、稲荷台遺跡第23号土壙１では、沈線が把手部分に方向を変えるとき直角に近い角度をつけて、沈線が方形状に施文される効果をあげており、他とは若干異なっている。

この口縁部を方形状に区画する土器は、称名寺Ｉ式ａ類にもみられる。稲荷台遺跡の周辺では、浦和市の大間木内谷遺跡第７号住居跡から出土した第80図98がある。口縁部を４つに区画する沈線文が、方形状に施されている。これは窓枠状の区画文を持つ中津類の影響と考えられる。しかし正面の口縁部を区画する沈線の真下には、楕円区画文が施文され、やや口縁部よりに突出しており、40や50の手法と類似している。

以上のことから１の口縁部に施文された沈線文については、40や54などの加曽利Ｅ式と98などの称名寺式の双方の要素が入っているとも考えられる。同じことが98でも言うことができる。これは１と98の時期差がほとんどないことを、示していると考えられる。

(5) まとめ

稲荷台遺跡第23号土壙出土土器について、検討してきた。比較検討した各遺跡の遺構からは、さまざまな要素をもった土器が入り混じって出土しており、広域的な視点を持ってのみ、各時期の動態が理解できると考えられる。その動態は細かい分類では捉えにくいため、ここでは比較的大きな枠組みで分類している。広域的な共伴関係を理解してからのち、細かな分類が可能になると考えるからである。

細かい分類をすれば、時期差を生じることは当然のことであるが、以上の観点から稲荷台遺跡第23号土壙、島之上遺跡第４号住居跡、生谷堺堀遺跡９号住居跡、芳賀輪遺跡第134号住居跡は、前段階の要素を残す土器も出土するが、ここではあえて後期初頭の土器群として分類することとした。

また埼玉県において、出土例が少ない後期初頭の最古の時期に“加曽利ＥⅣ式”が、併行して存在することが、ここでも明らかになった言える。今後はさらに広域的な視点から併行関係について、検討をしていきたい。また加曽利ＥⅣ式以降、つまり前原遺跡４号住居跡以降の段階の、加曽利Ｅ系と呼ばれる土器群の動態は、今後の課題としたい。　(上野真由美)

引用・参考文献

赤石光資他　1995「宿前Ⅲ遺跡」上尾市遺跡調査会調査報告書　第14集

青木義脩他　1985「大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第45集

伊藤冨治夫　1976「前原遺跡」国際基督教大学考古学研究センター

今井啓爾　1977「称名寺式土器の研究」(上下)『考古学雑誌』第63巻第１・２号

上野真由美　1999「宿北Ｖ遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第214集

加納　実　1998「市原市武士遺跡２」千葉県文化財センター調査報告　第322集

柿沼幹夫他　1989「北本市上手遺跡発掘調査報告書」

倉田義広他　1988「千葉市芳賀輪遺跡」(財)千葉市文化財調査協会
桑原　譲　　1977「飯重」
栗田則久他　1992「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区４）」(財)千葉県文化財センター
笹森健一他　1977「前畠・島之上・出口・芝山」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第12集
鈴木徳雄他　1990「調査研究集録　第７冊　特集　称名寺式時に関する交流研究会の記録」横浜市埋蔵文化財センター
谷井　彪・細田　勝　1995「関東の大木志木・東北の加曽利Ｅ式土器」『日本考古学』第２号　日本考古学協会
谷井　彪・細田　勝　1997「水窪遺跡の研究―加曽利Ｅ式時の編年と曽利式の関係からみた地域性―」『研究紀要　第13号』
中津由紀子他　1980「はけうえ」はけうえ遺跡調査会
橋本　勉　　1994「中妻三丁目遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第159集
吉田　稔　　1995「修理山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第158集

3．台付甕について

稲荷台遺跡Ｄ区からは、20軒の竪穴住居跡が検出され、その覆土中から、全形が想定可能な９個体の台付甕が出土した。

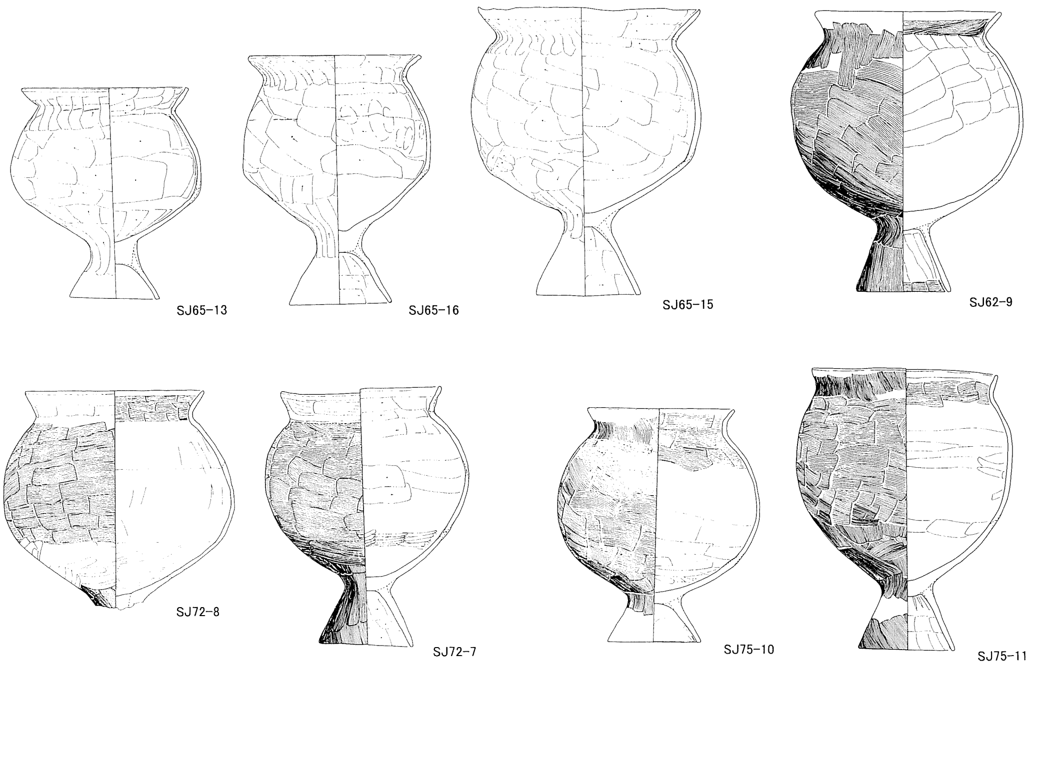
これらの台付甕を観察すると、１軒の住居跡から検出した複数のものについては、調整に関してある程度の個体差が存在するものの、形態的な特徴は概ね一致していた。一方、出土した台付甕を住居間で比較すると、形態的な特徴の一致が認められなかった。また、器台や高坏などの他の器種では、まとまった出土例が乏しかったが、いずれも、形態、調整の個体差が大きく、明確なまとまりを認識できなかった。

以下では、台付甕に認められた住居内での形態的な特徴の一致と、住居間での形態的な特徴の相違に関して、具体的に二個体以上の台付甕を出土した、SJ65、72、75について見てみる。

SJ65の３個体の台付甕（13、15、16）を観察すると、いずれも胴部下半が逆ハの字状に張り出し、その上に胴部上半がハの字状にのった形となっており、両者の境界が明瞭な屈曲として突出している。また、口縁部はかなり強く横に張り出している。

外面調整については、胴部ではまず、下半から脚部に向けて縦方向の調整が行われ、次いで胴部上位から屈曲点までの斜め方向の調整が行われている。そしてその後に、口縁部外面から体部にかけて、縦から斜め

第81図　稲荷台遺跡出土の台付甕



方向のヘラナデが行われている。

内面では、口縁部は横方向のヘラナデで調整されているが、胴部の調整は様々で個体差が認められる。13は上半と下半が横方向のヘラナデ、16は中位が横方向のヘラナデ、15では上半が斜め～横方向のヘラナデとなっている。脚部外面のヘラナデ調整が上端から上半以内である点や、明瞭なハケ目調整を欠いている点は共通している。

SJ72の２個体の台付甕（７、８）を観察すると、胴部最大径の位置は異なるものの、口縁部が斜め上方に立ち上がっている事、口縁部と胴部の境界が明瞭な屈曲で表されている事、口縁部外面調整が横方向のヘラナデ、胴部外面が横方向のハケ目調整、胴部内面下半がヘラナデ調整されているなどの共通点が認められる。

一方、相違点としては、口縁部内面が、７では横方向のヘラナデ調整であり、８では横方向のハケ目調整である事、胴部外面下半では、７はハケ目調整であり、８はヘラナデ調整である事などがあげられる。

SJ75の２個体の台付甕（10、11）を観察すると、10では胴部最大径の位置が胴部やや下半に、11では胴部やや上半に認められ、基本的な形態が異なっている。しかし、胴部から口縁部にかけて、極端な屈曲を持たずに、なだらかに移行する事など、両者に共通する特徴も認められる。また、脚部のハケ目調整が全体に満遍なく認められない点、口縁部から胴部にかけて縦方向のハケ目調整が施されている点、口縁部内面に横方向のハケ目調整が施されている点等も共通している。

この様に、SJ65、72、75出土の各々の台付甕は、互いに他の住居跡出土の台付甕と比べた場合、住居毎に形態的特徴がまとまっており、住居間では形態的特徴が相違している。こうした形態的まとまりと形態的相違についての直接的な原因は、各々の台付甕の製作手法に遡って求める事ができる。

形態的特徴を規定する要因として考えられるのは、各々の台付甕を製作する際の、粘土の積み方である。

最も特徴的な器形を呈しているSJ65では、脚部の上に、胴下半となる開き気味の粘土帯を接合し、まず高坏状の器形を作っている。次いで、二帯の粘土帯からなる胴上半を成形し、これに口縁部を取り付けている。そしてその後に、脚部と胴下半部である高坏状の下半部分と、胴上半部と口縁部である上半部の両者を接合している。その結果、胴部の屈曲の変換点が、二つの接合部分の境界に集まり、独特の形状となっている。あたかも、高坏の上に、甕の上半部分を切り取って載せたような形態である。

SJ72では、脚部の上に粘土帯を三帯ないし四帯順次積み上げて製作している。胴部の屈曲の変換点は、二帯目と三帯目、あるいは三帯目の中に認められる。そして、二帯目と三帯目全体で胴部の屈曲を表現しており、屈曲の変換点が特定の接合箇所に偏っていない。

その結果、SJ65に比べると、胴部の屈曲の具合は緩やかである。

SJ75では、前二者と明瞭に異なった製作手法を取っている。すなわち、脚部の上に粘土紐を螺旋状に巻き上げながら胴部、口縁部を成形している。この結果、胴部の屈曲が、特定の粘土単位に偏らないために、SJ65、72に比べて緩やかで、胴部と口縁部の境界さえ不鮮明となっている。

また、SJ62－９の台付甕も、粘土紐を螺旋状に巻き上げて成形している。やはり、SJ75同様に口縁部外面には縦方向のハケ目調整が、内面には横方向のハケ目調整が施されている。ただし、脚部外面のハケ目調整が全体に及んでいる点と、脚部内面にハケ目調整が及んでいる点が、SJ75とは異なっている。

以上のように、SJ65、72、75出土の複数の台付甕は、成形手法の根本的な違いに立脚して、住居跡単位で形態的なまとまりをもち、一方では、住居間で形態的な相違を持っていたが、住居跡単位での成形手法の違いからは、どの様な製作過程が考えられるだろうか。

これらの住居跡から出土した遺物が、原則として当該住居居住者の使用になるものであるという前提に立てば、住居毎に型式論的な諸属性がある程度一致した台付甕を使用していた事となり、住居間では型式論的な諸属性が一致していない台付甕を使用していた事となる。

このような現象を説明する実態として、最も適切なものは、当該期の土器製作が住居毎に行われていたと考える事である。つまり、土器製作が集落内特定個人に依拠した上で、集落内に供給されているものではなく、同様に、製作工程と製作物の実体像を共有する特定の制作者集団に依拠しているわけでもない点である。

更に、型式論的諸属性が一軒の住居跡出土遺物の、台付甕の中で概ね一致しながらも、なおかつ調整の細部では異なっている点から、少なくとも台付甕に関する限り、高度な規格性が保てるほどには、製作過程が洗練されていない事も予想される。

なお、器台や高坏などの小型から中型の土器については、住居跡内においても、台付甕ほどのまとまりは見られない。今後検討を進めて行くためには、文様のない土器の諸属性を型式論的に拾い上げ、比較検討する事が必要である。　(大屋道則)

4．稲荷台遺跡古墳時代前期集落について

稲荷台遺跡の古墳時代前期集落跡は、上尾市稲荷台遺跡調査会による1977年調査、当事業団による1990・91年調査（A～C区)、そして今回報告分の1998年調査（D区）を経て、その姿が徐々に明らかになってきた。この機会に、D区に加え過去の調査にかかる成果を視野に含め、稲荷台集落の展開について現状での分析を試みたい。

集落構成について

これまでの調査範囲は大きく南北に分かれ、地形を考慮すれば、それぞれ遺跡の南限と北限を捉えているといえる。竪穴住居跡はその両端で密な分布を示しており、台地中央部分の状況は不明なものの、南北300mにわたり住居跡が連なる大規模集落跡の姿を垣間見ることができる。また、南に位置する薬師耕地前遺跡は、稲荷台集落の墓域である可能性が高い（第82図・註1)。

検出された竪穴住居跡（以下、「住居」と表記）の周壁平面形は、大小を別に、概略的には長方形基調と正方形基調に分けられる。それぞれコーナー部にやや丸みを残すものが主となる。柱穴は4本が整然と配置されるものの他、規模の大小に寄らず4本そろわない例も少なくない。炉は4辺いずれかの壁面中央付近に寄り、少数だが中央付近やコーナー付近に位置するものもある。いずれも地床炉とみられる。小型住居では確認されない例もある。貯蔵穴とみられるピットは、炉が寄る壁面の対面、炉に向って右コーナー寄りに位置する。中心軸方向は、これら屋内施設の配置から推定される。

周壁平面形と中心軸を基準に、稲荷台遺跡で検出された住居の平面形態は、概ね次の型に分類される（第83図下左)。

A1型：周壁平面形は長方形基調。炉と貯蔵穴が短辺に寄り、中心軸が長辺に平行する。すなわち奥行きが幅より大きい。

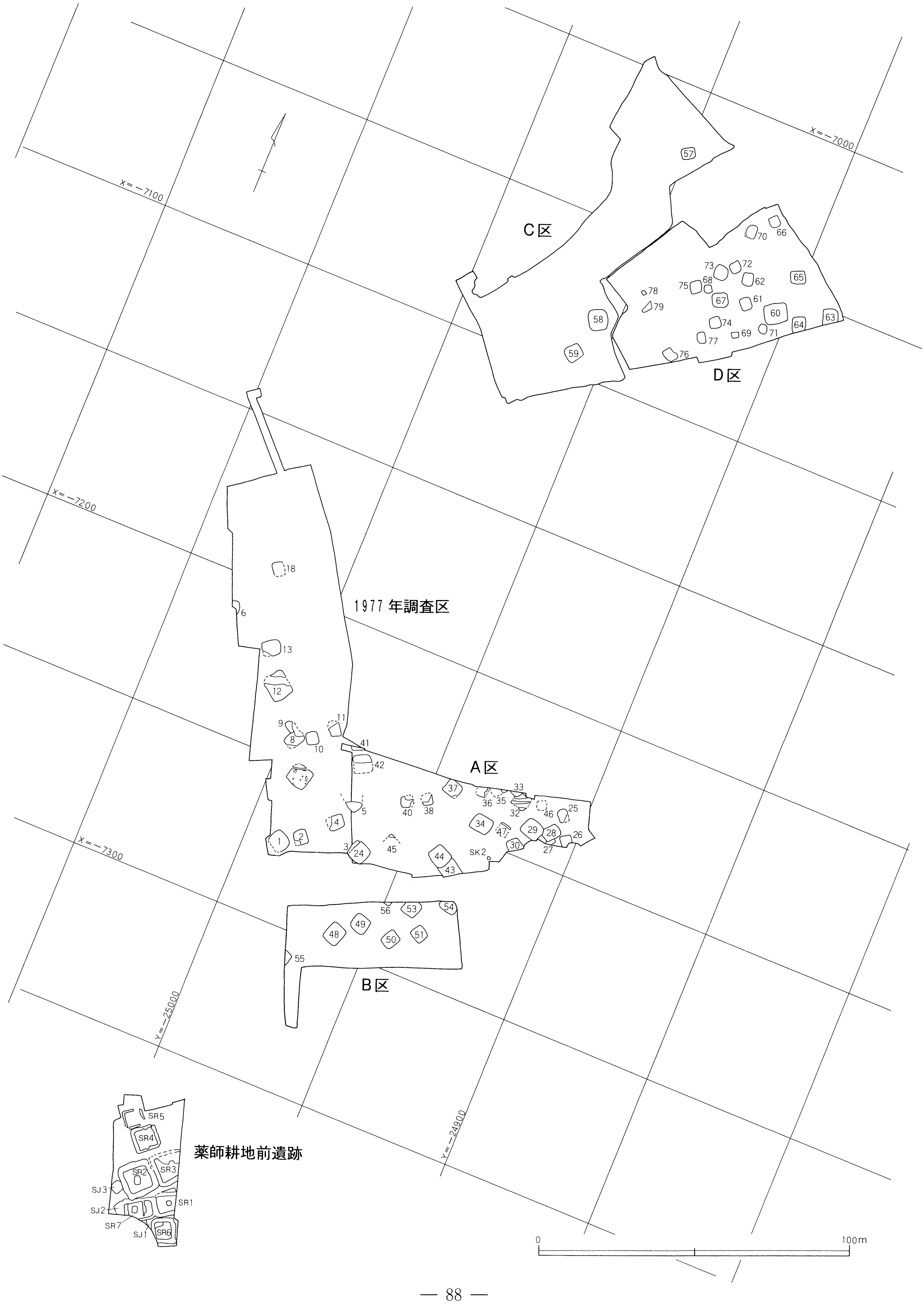
A2型：周壁平面形は長方形基調。炉と貯蔵穴が長辺に寄り、中心軸が短辺に平行する。すなわち幅が奥行きより大きい。

B型：周壁平面形が正方形基調のもの。屋内施設の有無、配置によって細分可能だが、ここでは一括しておく。中心軸方向を確定できないものも多い。

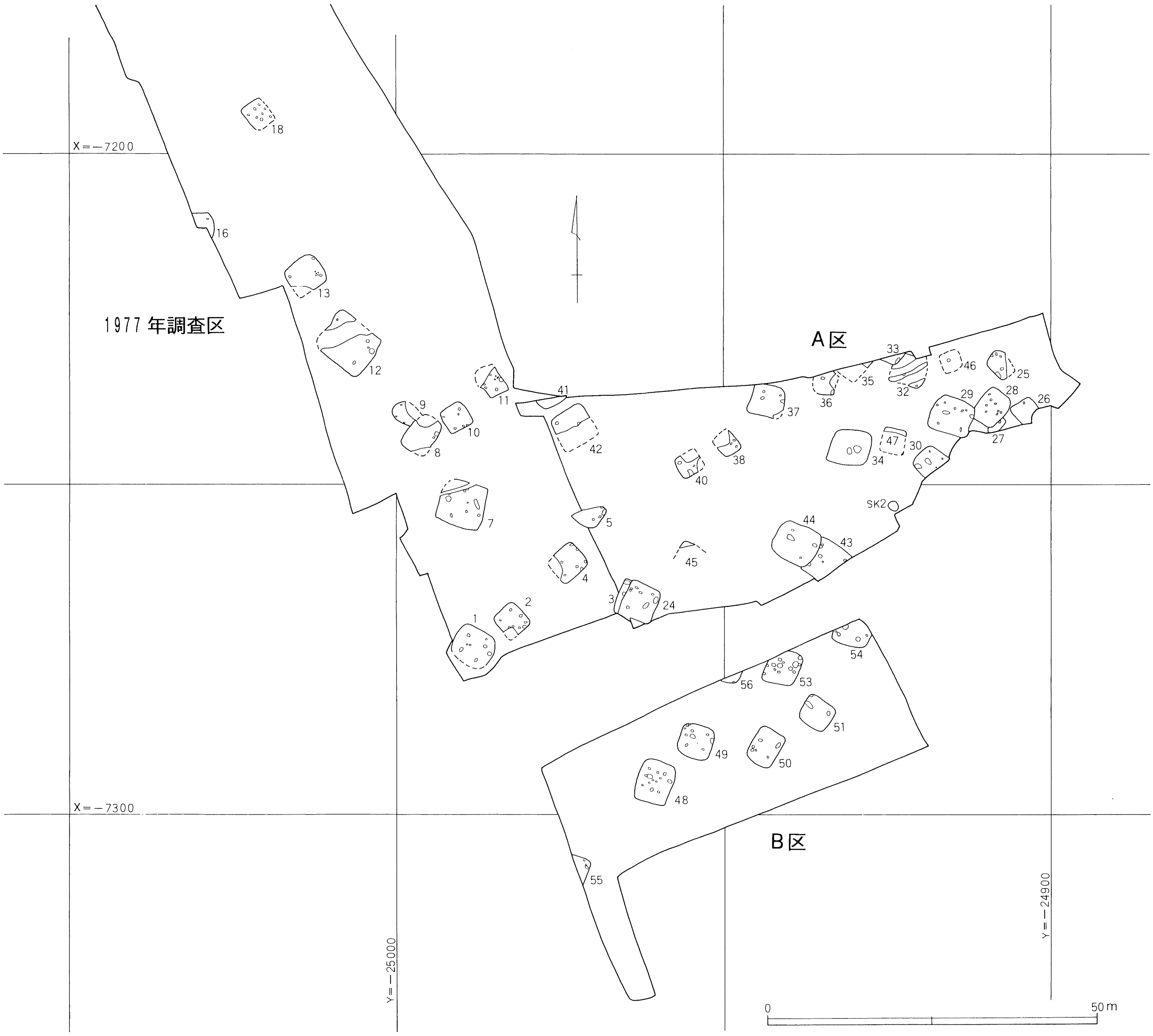
床面積をもとに平面規模の分布をみると（第84図下右・註2)、最小はSJ68で5.2m²、最大はSJ12で47.5m²である（註3)。10～25m²のものが主体となり、10～15m²の小型住居が突出している。ピークは4箇所に現れ、それぞれを中心に小（10～15m²)、中（20m²前後)、大（30m²前後)、最大（40m²以上）の4階級を認めることができる。無論、集落は完掘されておらず、より大型の住居が存在する可能性は残されている。

A1型は規模の大小にわたり認められ、相対的に大型の住居では主体となる。40m²を越える2軒はいずれもA1型である。A2型は中・小型住居に分かれる。B型は小型住居に多いが、SJ7・32・34のように30

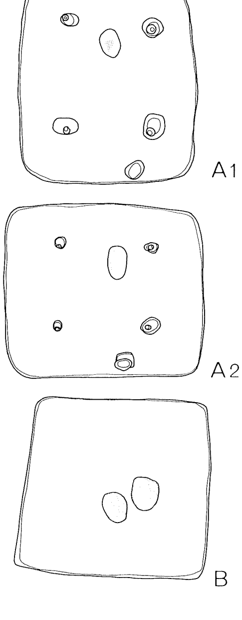
第82図　稲荷台遺跡全体図



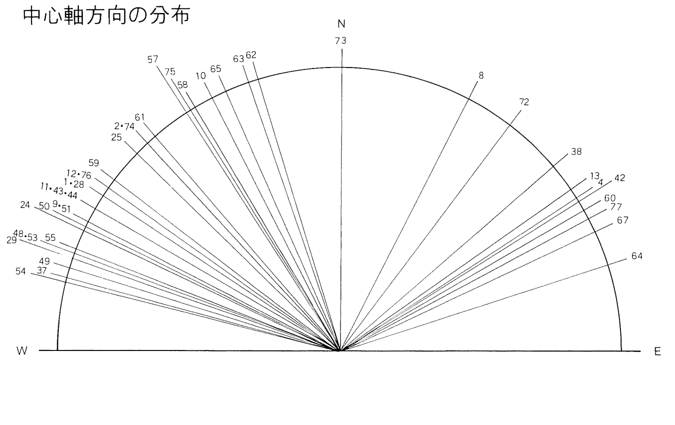
第83図　遺構分布詳細図(1)



住居の型

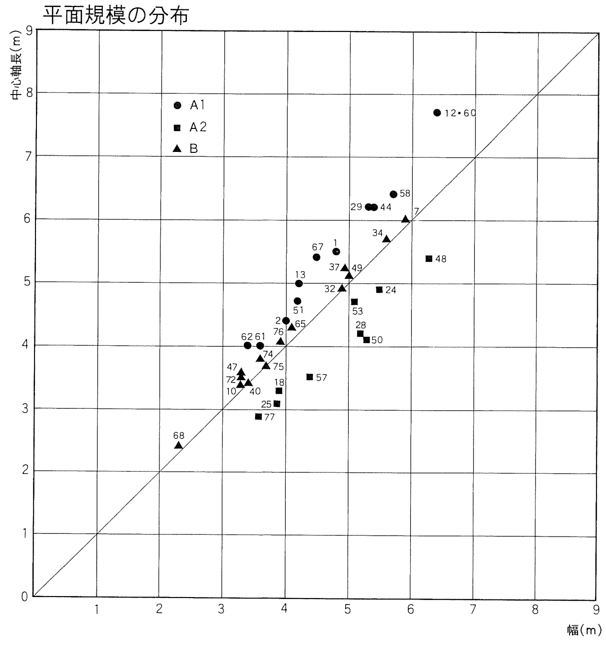


中心軸方向の分布



第84図　遺構分布詳細図(2)

平面規模の分布



床面積の分布

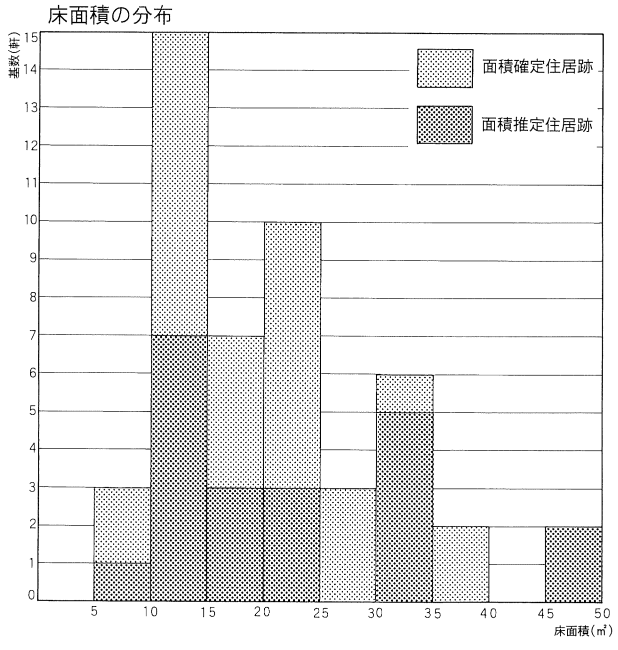


表3　住居属性一覧

遺構番号	型	軸長×幅(m)	床面積(m²)	中心軸方向	屋内遺構		遺構番号	型	軸長×幅(m)	床面積(m²)	中心軸方向	屋内遺構	
					炉	貯蔵穴						炉	貯蔵穴
1	A1	5.5×4.8	(25)	N-57° -W	○	○	46	—	—	—	—	○	—
2	A1	4.4×4.0	(16)	N-43° -W	○	○	47	B	3.5×3.3	11.5	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	48	A2	5.4×6.3	32.5	N-71° -W	○	○
4	A2？	(4.0×—)	(19)	N-57° -E	○	—	49	B	5.1×5.0	23.8	N-73° -W	○	○
5	—	(3.9×—)	—	—	—	—	50	A2	4.1×5.3	20.5	N-64° -W	○	○
7	B	6.0×5.9	(35)	—	×	×	51	A1	4.7×4.2	18.9	N-63° -W	○	○
8	A1	(—×4.0)	(20)	N-27° -E	○	○	53	A2	4.7×5.1	(23)	N-71° -W	○	○
9	—	—	—	N-63° -W	—	—	54	A1？	(5.4×—)	—	N-76° -W	○	○
10	B	3.4×3.3	10.9	N-27° -W	○	○	55	—	—	—	(N-69° -W)	—	○
11	A2？	(3.1×—)	—	N-60° -W	○	○	56	—	—	—	—	—	—
12	A1	7.7×6.4	47.5	N-55° -W	—	○	57	A2	3.5×4.4	15.0	(N-33° -W)	○	×
13	A1	5.0×4.2	(20)	(N-55° -E)	○	—	58	A1	6.4×5.7	33.5	N-31° -W	○	○
16	—	—	—	—	○	—	59	A2？	(—×5.3)	(26)	N-53° -W	○	○
18	A2？	3.9×3.3	(12)	—	×	×	60	A1	7.7×6.4	45.3	N-60° -E	○	—
24	A2	4.9×5.5	(26)	N-65° -W	○	○	61	A1	4.0×3.6	13.2	N-41° -W	○	○
25	A2？	3.1×3.9	(12)	N-46° -W	○	○	62	A1	4.0×3.4	12.6	N-17° -W	○	○
26	A2？	(3.9×—)	—	—	○	—	63	A1？	(4.4×—)	—	N-19° -W	○	○
27	B？	—	(8)	—	—	—	64	A2	—	(20)	N-72° -E	○	○
28	A2	4.2×5.2	(21)	N-57° -W	○	×	65	B	4.3×4.1	16.6	(N-24° -W)	○	×
29	A1	6.2×5.3	30.2	N-70° -W	○	○	66	B	(3.4×—)	(11)	—	×	○
30	—	(4.6×—)	—	—	○	○	67	A1	5.4×4.5	21.8	N-65° -E	○	○
32	B	4.9×4.8	(23)	—	○	○	68	B	2.4×2.3	5.2	—	×	—
33	—	—	—	—	—	○	69	—	(2.5×—)	—	—	○	—
34	B	5.7×5.6	31.6	—	○	×	70	—	(4.1×—)	(15)	—	○	×
35	—	—	—	—	×	×	71	—	(2.7×—)	(7)	—	○	×
36	B	(3.1×—)	(10)	—	○	○	72	B	3.4×3.3	10.8	N-37° -E	○	○
37	B	5.2×4.9	(24)	N-75° -W	○	○	73	B?	(4.8×4.5)	(19)	N-0° -E	○	○
38	A2	(3.1×—)	(11)	N-49° -E	○	○	74	B	3.8×3.6	12.3	N-43° -W	○	×
40	B	3.4×3.4	(12)	—	—	○	75	B	3.7×3.7	12.8	N-32° -W	×	○
41	—	—	—	—	—	—	76	B	4.1×3.9	(16)	(N-55° -W)	○	×
42	A2？	(5.8×—)	(33)	(N-58° -E)	○	—	77	A2？	2.9×3.6	(10)	N-62° -E	○	○
43	A1	(—×5.6)	(36)	N-60° -W	○	—	78	—	—	—	—	—	—
44	A1	6.2×5.4	31.6	N-60° -W	○	○	79	—	—	—	—	—	—
45	—	—	—	—	—	—							

m²を越える一群がある（第84図下左）。

床面は、貼床の有無と掘り方の形状によって分類が可能だが、資料が充分でなく状況は不明瞭である。構造不明なものも多いが、敢えて大まかに状況を整理しておく。以下の例がある。

①素掘りのもの（貼床なし）：SJ32・34

②中央を高く残し、周囲を掘り窪めるもの：SJ24・25・29・37・43・44

③中央と壁際を高く残し、その間を掘り窪めるもの：SJ30・49～53

④壁際を高く残し、中央にかけて内側を掘り窪めるもの：SJ63・64・74

⑤その他、中央もしくは周囲の一部を掘り窪めるもの：SJ26・36・38・40

⑥平坦な掘り方で全面に貼床するもの：SJ58

なお、②～⑤については、貼床が全面に及ぶ場合と

高まり部分がむき出しになる場合がありうるが、ここでは区別していない。

1977年調査区については不明であるが、以上の分布状況を確認すると、A区は①〜③、⑤が混在し、B区は③が多く、C区は⑥、D区は貼床不明瞭とされるものが多い中④が確認されている。空間的なまとまりがおぼろげながらうかがえる。

中心軸方向は、知りうる限りでは北西指向が優勢である（第83図下右）。B区とA・1977年調査区南辺部では、西〜北西に集中する傾向が顕著で（SJ1・11・12・28・29・43・44・SJ48〜55）、C区とD区の一部の住居は北西〜北を指向する（SJ57・61〜63・65・74・75）。一方D区では東〜北東指向もまとまりをもっており（SJ60・64・67・77）、A・1977年調査区にも少数存在する。

焼失住居と報告されたものはSJ 1・12・48・55・60・62・66・67・72・75の10軒で、他にSJ30で可能性が認められている。総件数に対して割合は高くないが、D区の6軒（SJ60・62・66・67・72・75）は、分布がまとまりつつ重複せず、その配置からは同時被火災住居群である可能性がうかがえる。1977年調査区とA区にかけて分布する3軒（SJ 1・48・55）も、分布範囲からは単一の群としてのまとまりは否定しきれない。最大のSJ12はそれらに対しやや孤立的位置を占める。

遺構の重複は、計画的拡張と見られる1例を含め6例ある。新旧関係は次のとおりである。

・SJ 3（古）−SJ24（新）
・SJ 9（古）−SJ 8（新）
・SJ27（古）−SJ28（中）−SJ29（新）
・SJ33（古）−SJ32（新）
・SJ44（古）−SJ43（新）
・SJ32a（古）−同b(新)（拡張）

ところでB区48・49・51・53では、南東コーナー付近の床面上に小礫の集中が認められた。貯蔵穴と付近のコーナー部の間に小礫が集中する事例は、大宮台地では弥生時代後期の住居でもしばしば報告されている。屋内祭祀等何らかの目的にかかわる施設とみられるが、弥生時代以来の伝統的行為が、古墳時代前期の稲荷台集落にも引き継がれていたといえる（註4）。

D区出土土器について

稲荷台遺跡出土の古式土師器については、既にA〜C区を報告した書上元博により分類が行われている（書上1994）。周辺の同時期資料を見渡し、より包括的な分類編成の中に稲荷台集落の土器を位置付ける課題は残されていると思われるが、ここでそれに挑む準備はできていない。また単一遺跡に視野を限って新たな分類を行うことは、いらぬ混乱を招くだけで不毛だろう。

よって、ここでは必要に応じ書上分類を援用して状況を記述するに留め、分類については曖昧な姿勢に終始することを許されたい。

他日を期して新分類に臨むつもりである。

Ⅰ．壺　類

＜壺＞後期弥生土器以来の折返し口縁は、端部の粘土帯が幅広になる一方、同じく複合口縁は粘土帯の立ち上がりがあいまいになり、両者の違いは必ずしも明瞭でない（註5）。折返し口縁壺は各区を通じて少ない。D区ではSJ62−6、大型のSJ72−10がある。後者の折返し部分は幅狭く、シャープな端面をもつ。掲載図では側面の凹部が強調されたため沈線をもつか突帯を重ねるようにも見えるが、平坦な凹面である。口縁部が胴部に先んじて無文化している点、やや内湾気味に立ち上がる点に注目すれば、在来的な折返し口縁壺としては異質である。内湾折返し口縁をもつ例として、庄和町尾ヶ崎遺跡SJK10−1、蓮田市ささら遺跡SJ19−1などがある。

複合口縁壺は、SJ75−7がある。縄文と赤彩による伝統的装飾壺の系譜上にある。入念なつくりではあるが、複合部がほとんど起き上がらず、頸部からほぼ直線的に開く点、弥生土器の複合口縁に通有な棒状浮文を欠く点ではむしろ折返し口縁壺に近い。SJ43−1、SJ38−1のように、棒状浮文列が全周する例は

ない。

単純口縁壺は、屈曲する頸部から口縁部が直線的に立ち上がるSJ72－1、SJ76－1、く字状の頸部から外反するSJ75－6、同じく内湾するSJ65－4、SJ77－1がある。壺2DにあたるSJ65－4、SJ77－1は器壁の薄い精製品で、東海地方西部の内湾口縁壺に関連するものである。口縁部の形状は不明だが、頸部に断面三角形の突帯が廻るSJ77－4も同様だろう。

SJ67－2は、いわゆる「パレス壺」である。床上2cmから出土した破片資料で、SJ77出土の破片と接合した。後者の出土状況は不明である。内湾気味の口縁部内面に断面三角形の突帯が巡り、口縁端部との間には、摩滅がひどく詳細不明だが羽状刺突文が配される。視覚的印象だが、乳白色できめの細かい胎土からみて在地産でないことは確実だろう。東海地方西部産の搬入品である可能性が高い。口縁部のみだが、浅井和宏分類F類（浅井1986）に相当する。元屋敷式期古段階、廻間編年廻間II式期（赤塚1990）の所産とみておきたい。

＜小型壺＞口径10cm・器高15cm未満の壺である（註6）。折返し口縁のSJ60－1は、口縁部直下に2個1組の小孔をもつ。ほかに単純口縁のSJ75－4、SJ67－1、口縁部が短くつくりが雑なSJ68－1、口縁部を欠くSJ62－5がある。

＜広口壺＞折返し口縁のSJ67－1は、後期弥生土器以来の系譜上にある。下加南遺跡SJ7－5は柱状脚高杯とともに出土しており、古墳時代前期にかけて連綿と続く形式である。単純口縁のSJ65－12は、扁球状の胴部に注目すれば岩槻市木曽良遺跡環濠－15に関連が見出せる。口縁部を欠くSJ62－8、SJ65－11も扁球状の胴部である。やはり単純口縁のSJ72－5は、成形、調整ともにシャープで、く字口縁の平底甕に通じる。平底甕主体地域との関連を確認する必要があるだろう。

2．甕　類

＜甕＞台付甕が主体であり、平底甕の確実な例は見あたらない。口縁端部にキザミメをもつ例としてSJ62－3・4があるが全体では少ない。頸部はく字状屈折に近いものが多いが、内面に鋭角的な稜をもつものは少ない。SJ75－10・11のように、緩やかに屈曲する例もある。器形、調整は、全体的傾向よりむしろ住居単位に個性が認められ、SJ75では口縁部にかけてハケメ仕上げで、球形胴とイチジク形胴が共存する。SJ72－7・8では胴部ハケメ・口縁部ナデ仕上げである。際立っているのはSJ65－13～16で、整形工程の境界とみられる胴部下位に稜をもち、底部が臍状に突出して脚部と接合するため、脚上部に中実なくびれ部ができる。そして外面ナデ仕上げである。岩槻市諏訪山遺跡SJ8・9などが近いように見えるが、接合部のみ注目すれば尾ヶ崎遺跡SJK10－19・20、大宮市吉野原遺跡SJ15－10などに類似の特徴を見出せる。いずれにしてもSJ65の個性にとどまるものではないだろう。

SJ77－5は胴部の膨らみが少なく、やや長胴になるとみられる。

＜小型甕＞器高10cm前後の台付甕で、SJ75－5がある。遺跡内の類例としてはSJ1－1、SJ38－4があるが、本例は台付甕の相似形といえる。法量からみて甕本来の用途とは別の存在意義を認めるべきだろう。SJ38－4、尾ヶ崎遺跡SJK6－2が赤彩されていることからも、祭祀に関連するとみられる。

3．高杯類

＜高杯＞記述にあたっては、書上分類に従い、その名称を用いる。以下のとおりである。

1A：杯部下端に明瞭な段をもつ（有稜高杯）

1B：杯類下部に微かな段をもつ

1C：杯部内湾気味に開き、段をもたない

1D：半球状の深い杯部をもつ

また報文からは、高杯類と器台類脚部の透孔について正確な個数が読み取れない。ここで補足しておく。

透孔3個：SJ74－3

透孔4個：SJ65－8、SJ68－2

1AはSJ65－9がある。つくりはやや雑だが、杯

部の稜は明確で、脚部は下半が大きく開き、元屋敷式系高杯としては、廻間7期前後の様相をうかがうことができる。なお本例も杯・脚接合部付近に中実な括れ部があり、先述した一括出土の台付甕に共通する成形である。

1BはSJ74－5、1CはSJ62－2がある。1Dと判別できるものは出土していない。

<開脚高杯>従来「小型高杯」と呼称されてきた、脚部底径が杯部口径を凌ぐ小型低脚の高杯を、加納俊介の分類に従い「開脚高杯」とする（加納1999）。小型精製土器群に含まれ、近畿あるいは東海地方西部との関連が問題視される器種である。

D区では、僅かにSJ64－1にその可能性がある。

<低脚高杯>開脚高杯に対し、杯部口径が脚部底径を上回る小型低脚の高杯である。やはり加納分類による。山陰地方東部の「低脚杯形土器」との類似が指摘されているSJ34－1が好例となる。

D区では、脚部のみのSJ74－6がある。裾部を肥厚させ、その上端にキザミメを施す意匠は、東京湾沿岸地域の後期弥生土器の高杯脚部に連なるものだろう。大宮市三崎台遺跡SJ19－9は縄文が施され、より本来的な装飾を留めている。

4．器台類

<小型器台>書上分類に従い、その名称を用いる。以下のとおりである。

1A：内湾する深い器受部をもつ

1B：内湾気味に開く浅い皿状の器受部をもつ

1C：直線的に開く漏斗状の器受部をもつ

1D：漏斗状に開いた後、口縁先端が緩い段をもってやや立ち上がる器受部をもつ

1E：下端に稜をもって立ち上がる器受部をもつ

1F：下端に稜をもって外反する器受部をもつ

1G：横に開き、段をもって外反する器受部をもつ

高杯類同様、透孔の個数を補足しておく。

透孔なし：SJ60－3

透孔1個：SJ64－4

透孔3個：SJ61－3、SJ62－1、SJ68－4

透孔4個：SJ65－6・7、SJ68－4

なおSJ64－4は、透孔が貫通していない。凹部中央が突出し、竹管状工具による刺突の状況を好く残している。

D区では、1AはSJ65－5・7、1BはSJ65－6、SJ61－3、SJ64－4、1CはSJ60－2・3、1EはSJ62－1、SJ72－2の例がある。1F、1Gは出土していない。

SJ62－1は受部端面のつくりが丁寧で、受部を縁取る面が強調される側面観を意識した仕上げである。端面下端には沈線が巡っており、下辺の輪郭を浮き立たせている。野田市三ツ堀遺跡SJ1例など、端面を上下に拡張し、壺口縁のごとく装飾する型式に連なるものとみなしたい。遡れば東海地方西部の器台に関連が求められるだろう。

赤彩とミガキによって丁寧に仕上げられたものが多い中で、SJ60－2・3は脚部に繊細なハケメを残し、受・脚部は穿孔されない。

<装飾器台>SJ55－6が好例であるが、D区では出土していない。

5．鉢　類

<鉢>書上分類に従い、その名称を用いる。

A：最大径を口縁部にもつ浅鉢

B：やや膨らむ胴部と短く開く口縁部をもつ深鉢

C：逆台形の胴部をもつ小型鉢。手捏ね成形のものも含まれる。

AはSJ75－1、SJ65－2、BはSJ75－2、CはSJ74－1、SJ79－1がある。他に、Bの胴部で口縁部が開かないSJ60－4などがある。

<小型丸底鉢>SJ65－1がある。遺跡内では確実な例の初見だろう。小さな扁球状の胴部から口縁部は大きく開き、口径は器高の2倍に達する。焼成は良好だが調整は荒く、精製土器としての意識は認められない。

6．甑　類

<甑>D区では出土していない。

7．小型土器類

筒型の胴部に短い口縁部をもつSJ72－1がある。

小型壺 SJ29－3、SJ44－6のミニチュアといえる。類例に SJ13－1がある。

集落の展開と編年的位置付け

これまで見てきた遺構と遺物の様相をふまえ、土器編年案をにらみつつ、稲荷台集落の展開を整理してみたい。

まず、既に提示されている書上編年の内容を確認しておく。書上は、日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム「東日本における古墳出現過程の再検討」における編年案（日本考古学協会新潟大会実行委員会1993）に基づき以下の３段階区分を設定し、そこへ稲荷台集落出土土器を位置づけた（書上1994）。

第１段階：土器組成への小型器台型土器の参入に象徴される段階。布留０式以前。（前）；廻間II式前半（１・２）段階併行、（中）；廻間III式後半（３・４）段階併行（後）；廻間III式前半（１・２）段階併行

第２段階：畿内系の定型化した小型丸底壺・小型丸底鉢の参入に象徴される段階。布留１式併行。

第３段階：「柱状脚部高杯」、「無透孔屈折脚高杯」等と呼ばれる高杯の参入に象徴される段階。

具体的な言及としては、SJ58出土土器には、廻間II式３段階～III式１段階にあたる搬入品とみられる元屋敷式系有稜高杯が含まれることから、SJ58床面出土土器を第１段階（中）ないし（後）に、一方 SJ 7では高杯の柱状脚が出土していることから、第3段階に降る可能性が指摘された。その間に連なり、SJ10・11・18・28・33は器台１Ｆから第１段階（後）に、SJ48は、器台１Ｇと長胴の甕から第２段階に位置づけられた。そして「稲荷台遺跡の集落は第１段階の（中）～（後）の土器群を伴う住居を中心とするが、第２段階にも継続して営まれていた可能性が大きく、また、第７号住居跡のように柱状脚部高坏を持つ第３段階に近いと思われるものも存在する」と結論づけた。

個々の遺物の位置づけについては若干の異論を抱いているが、この展開の流れは、Ｄ区資料が追加された今回にあっても基本的には変わらないと思われる。もっとも、第１段階（中）・（後）から第２段階に至る連なりを階梯として整理することは容易とは思えないが、ともあれこの間、集落は中絶を挟まず連続的に展開したように見える。

まず最古段階だが、搬入品とみられる有稜高杯を根拠とする SJ58出土土器の位置づけは動かないだろう。在来的な弥生高杯の系譜に連なる高杯が出土した SJ59とともに、あらためてＣ区住居群を稲荷台集落の最古段階に位置づけたい。

それらに継続するとみられるのはＤ区の被火災住居群（SJ60・62・66・67・72・75）である。やや孤立的な SJ66はさておき、少なくとも残る５軒は、その配置からみて同時焼失した住居群である可能性が高い。これらは単位集団に対応するとみられ、以下、この遺構単位を単位住居群と呼ぶ（石坂1993・1999）。同時被火災住居から単位住居群の住居配列が良好に見出された例として、富士宮市月の輪平遺跡における分析（渡井・加納1982）がある。また、大宮台地地域では、上尾市尾山台遺跡など、被火災住居が大規模に分布する例が知られている（第85図）。被火災住居群即同時被火災と安直に決め付けることはできないが、同時被火災住居群の把握は、集落を構成する単位住居群の具体的あり方を析出する有効な手がかりである。ところで本例の場合、径40ｍほどの範囲の中で、大型の SJ60がやや離れた位置に在り、それと中心軸方向を同じにする中型の SJ67を取り巻いて小型住居（SJ62・72・75）が分布する状況は、単位住居群の具体像を示しているといえるだろう。調査区限界に寄った SJ66が別の群に属するとすれば、SJ60を中心に、より大きな群が展開した可能性も残されている。出土土器については、稲荷台集落にあって積極的に新しいと見るべき要素は認められない。第１段階の中に位置づけておきたい。小片ではあるが、搬入品とみられるパレス壺が出土している点も、Ｃ区住居群との関連をうかがわせる。

1977年調査区からＢ区にかけても被火災住居は分布する。それらのうち相互に近接する SJ48・55は、やはり同一単位住居群の一部だろう。SJ 1がこれに

加わる可能性もある。ところで、SJ48出土土器群を、器台と長胴の甕から第２段階の代表的存在とみなすことはできるだろうか。SJ48の甕は、より以前から存在する長胴甕の系譜にのるもので、型式としての新相を示すものではないと思われる。器台 SJ48－16・17にしても、１Ｇ類として括られた他遺跡の諸例とは別ける必要を感じる。結論的にいえば、SJ48出土土器群に第１段階に溯る可能性を認め、これら被火災住居群を、Ｄ区被火災住居群に連なるか略同時期とみる。

再びＤ区にもどる。Ｄ区では、被火災住居群を除いた住居群を被火災住居群の後に位置づける。件数は倍増し、複数の単位住居群で構成されるとみられるが、分布は均等で、強調するつもりはないが同時存在も物理的には不可能ではない。中・小型住居のみである点から、SJ60に対応する大型住居の存在をＤ区南側調査範囲外に求め、それを中心に複数の単位住居群が展開する絵柄も、想像は許されるだろう。SJ65からは豊富な一括資料がもたらされ、そこには小型丸底鉢が含まれる。被火災住居群を除き SJ65を含むＤ区住居群は、第２段階にかかる可能性が高い。

北半部の展開は以上だが、引き続き南半部の状況をまとめてみたい。南半部の集落構成で特徴的なのは、Ｂ区を中心にＡ区南辺部にかけて展開する住居群（SJ 3・24・43・44・49～51・53・54・56）である。中型のＡ１・２型住居を主体とし、中心軸方向を概ね共有する。すなわち入り口を南東方向にとり整然とした配列をとっている。被火災住居群として分離させた３軒もこの基本構成に含まれるが、SJ48が SJ49と近接する点を重視し、被火災住居群が時間的に先行するとみなしておく。この住居群の中心的存在は、SJ43・44と推定される。この２軒は、重複するが（SJ44先行）中心軸を共有しており、ほぼ同じ位置に、規模を拡大しつつ建て替えられたとみられる。この２軒に対応して、住居群が２期に細分される可能性はあるだろう。

なおこれらＢ区を中心に展開する群については、Ａ２型住居が目立つ点に当初注目したが、Ａ２型住居の意味付けに作業が及ばなかったため、ここでは話題にできなかった。今後を期して再考したい。

Ａ区は、その東半を中心に遺構の近接、重複が顕著で、立地からも集落の中心域により近いとみられる。３期以上の変遷が見込まれ、それは第１期（後）から第２期にわたる。具体的な細分案を示さねばならないが、ここでは見合わせたい。一部はＢ区住居群にも関連するだろうが、SJ32・34のように、正方形基調がより明確な住居の配列もあり、また異なる景観が重複しているように見える。

最新段階については、これまで注目されてきたSJ7を含め、1977年調査区南部で弧状の配列をとるSJ2・7・10・11がそれにあたると考えたい。脚部径が受部径を大きく上回る器台などを手がかりとした。

以上を通観すると、第１段階（中）～(後）にあたる現状における最古段階は集落北部に認められ、直後から分布域は南に向けて拡大し、第２段階以前から南北にわたり展開する。最終段階は集落南部に認められる。

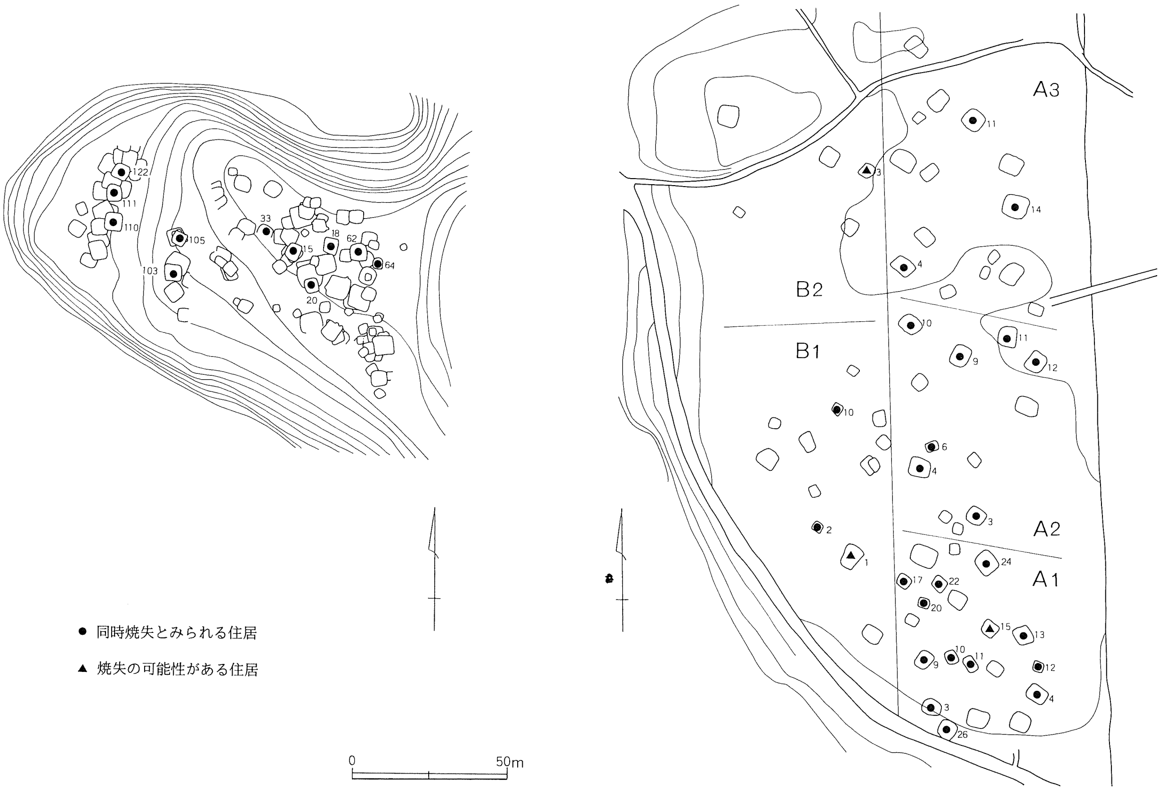
付　言

これまで稲荷台集落の展開について雑駁な見通しを述べてみた。当初のもくろみでは、遺構の配列と土器編年の視点から単位住居群を浮かびたたせ、集落展開をより具体的に描き出すはずであった。それに向けて遺構に関するデータは一通り整理したが、土器については、周辺遺跡を見渡した上での視点を用意できなかったため、集落展開の骨組みとなる土器編年案は、ほとんど不発に終わってしまった。このため、集落展開の描写は、ほとんど遺構に引っ張られる内容となり、薬師耕地前遺跡墳墓群との関連についても積み残す結果となった。

またＤ区出土資料に限っても、袋詰めされた破片資料については実見していないものが多く、詳細な基礎データを整理することなく終わってしまったことは残念である。

土器編年に関しては、書上編年の骨子である３段階

第85図　同時焼失住居の配列



編年に、大宮台地地域の実状を反映させつつ具体像をあたえることを目標としていた。それに関連して２、３付言しておく。

稲荷台遺跡に先行する状況は、吉野原遺跡に認められる。器台、有稜高杯、開脚高杯が組成に加わっている一方、弥生時代以来の大型装飾壺が健在で、また器台SJ４－１は受部に縄文装飾されるという、新旧要素が織り交ざる状況である。吉野原遺跡出土土器群は、大宮台地地域における第１段階（中）以前の標準的資料とみなしうる。

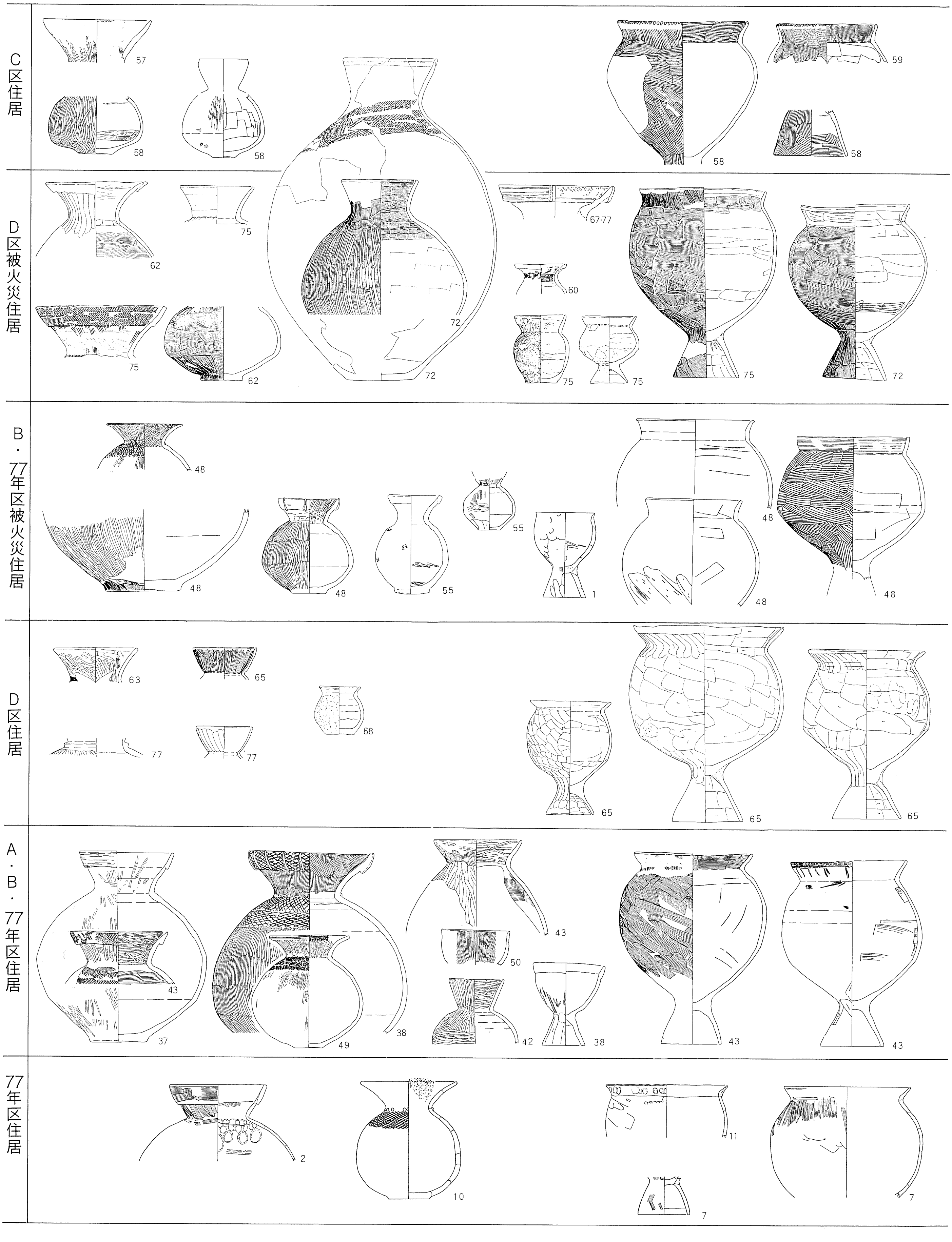
第２段階に関わるが、大宮台地地域において小型丸底鉢の影が意外に薄い状況は、筆者も以前から気に留めていた（古墳時代土器研究会1997）。小型精製土器群の定着は、当地域においては画期的といえるほど明確ではなかったようにみえる。稲荷台遺跡では口縁部有段の小型鉢は見当たらず、小型丸底鉢の確実な例はSJ65－１のみである。そのSJ65－１もつくりは粗雑で精製品とは言い難いことは先述した。地域的な事情を反映しているとみなされる。集落の主体的時期を第１段階（後）～第２段階としながらも、その枠内での整理が付きかねたことは、第２段階の把握があいまいであることが一因となっている。

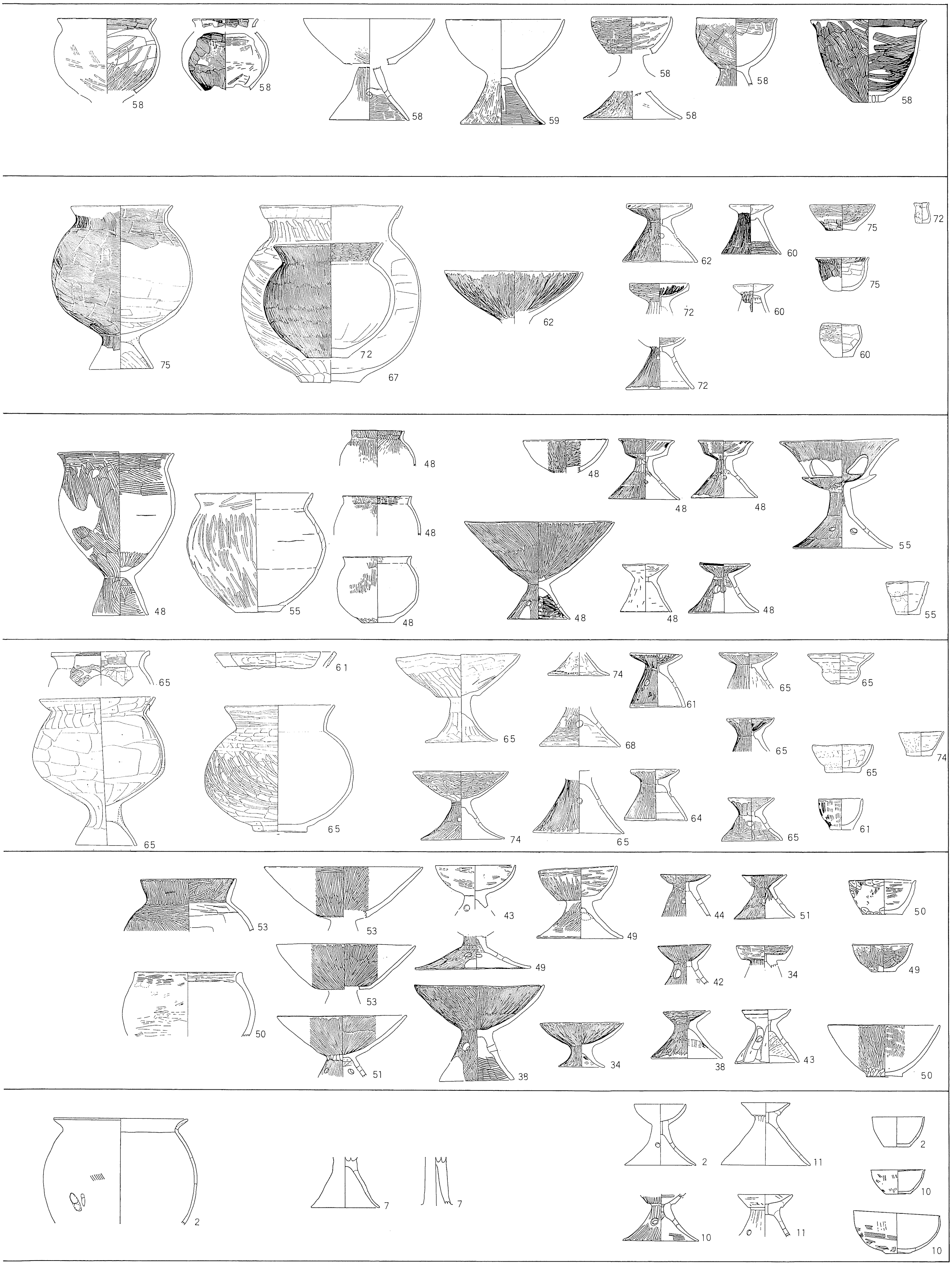
一方、荒川対岸の比企丘陵東部台地地域には、当該時期の標識遺跡である五領集落が出現する。それが小型精製土器群や布留式系甕を伴うことは広く知られているが、対岸地域のそのような状況と対照すれば、大宮台地地域には異なる様式が存在すること、そしてそれらを、五領遺跡を標識とする五領式の概念で理解することは困難であることを、稲荷台遺跡出土土器を通してあらためて認識させられる。

（註１）第79図は、当事業団報告第139集第４・５図をもとに作成した。薬師耕地前遺跡の遺構名称は、当事業団で使用している略号で表記した。すなわち「方形周溝墓」は「ＳＲ」となる。

（註２）住居跡の規模については、遺構図の下端で表される、壁溝を含む床面の広さに基づいた。そのため、

第86図　稲荷台集落の土器群




58
58
58
59
58
58
58
58
75
72
67
62
62
60
72
60
72
75
75
60
72
48
48
55
48
48
48
48
48
48
48
55
55
65
61
65
65
74
68
74
65
61
64
65
65
65
65
65
65
61
74
53
53
53
50
51
43
49
38
49
34
44
42
38
51
34
43
50
49
50
2
7
7
2
10
11
11
2
10
10

各報告書に掲載された数値より小さい場合が多い。

（註３）床面積10㎡に満たず、しばしば炉も確認されない遺構を住居跡とみなすことには異論もある。そこに通常の住居と性格を異にする施設が多く含まれる可能性は高いだろう。しかし、それらに対し10㎡を超える遺構が同一の性格を共有するとは限らない。大型住居の性格が議論の対象となってきたのもその一端を示している。ここでは性格の吟味を見送り、とりあえず大小によらず、人間が活動した屋内空間とみなしうるものを住居として扱う。

（註４）この事例報告がＢ区の住居に集中することから、当初、弥生時代の伝統的行為を継承する単位集団の存在を思い浮かべた。しかし、調査にあたった書上元博の教示によれば、この遺構を検出するには、意識的な注意を以って臨む必要があるらしい。他の調査区の住居について有無の判断が報告されていない以上、Ｂ区における限定的事例として注目することは危険だろう。なお、古墳時代前期住居における同様な遺構は、八王子市神谷原遺跡でも確認されている。

（註５）書上分類では、「折返し口縁壺」は器種として独立していない。確かに稲荷台遺跡での存在感は薄いのだが、ここでは弥生土器からの係累を重視し、複合口縁壺とは分けた。複合口縁壺１Ｃ類、１Ｄ類の一部が相当するだろう。折返し部分幅狭な典型例は１Ｅ類 SJ55－１があるが、ここでは「小型壺」として、壺とは別種とみなす。

（註６）ここでいう小型壺は、書上分類では壺に含まれる。書上分類「小型壺」は小型丸底土器に類する土器とミニチュア土器を含む。ここでは前者を小型丸底鉢、後者を小型土器として、別類に属させた。

（石坂俊郎）

引用文献

赤塚次郎　1990「考察」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター

浅井和宏　1986「〈宮廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』第３回東海埋蔵文化財研究会

石坂俊郎　1993「大宮台地の弥生ムラ—集落形態と住居形態の素描—」『史観』第128冊

石坂俊郎　1999「弥生時代後期の遺構、遺物について」『下野田本村遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第255集

加納俊介　1999「古式土師器の構造論的研究序説」『三河考古』第12号

書上元博　1994「Ⅶ.発掘調査の成果と課題」『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集

古墳時代土器研究会　1997『土器が語る－関東古墳時代の黎明－』

渡井一信・加納俊介　1982「Ⅳ　２、３の問題」『月の輪遺跡群Ⅲ』富士宮市教育委員会

村田健二他　1998「木曾良遺跡の研究（１）」『研究紀要』第14号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺跡発掘調査報告書

上尾市教育委員会　1978『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第４集

上尾市教育委員会　1996『尾山台』上尾市史編さん調査報告書第10集

上尾市稲荷台遺跡調査会　1979『上尾市稲荷台遺跡』

大宮市遺跡調査会　1986『吉野原遺跡・下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊３

大宮市遺跡調査会　1996『三崎台遺跡』大宮市遺跡調査会報告第56集

埼玉県遺跡調査会　1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山遺跡・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査報告第８集

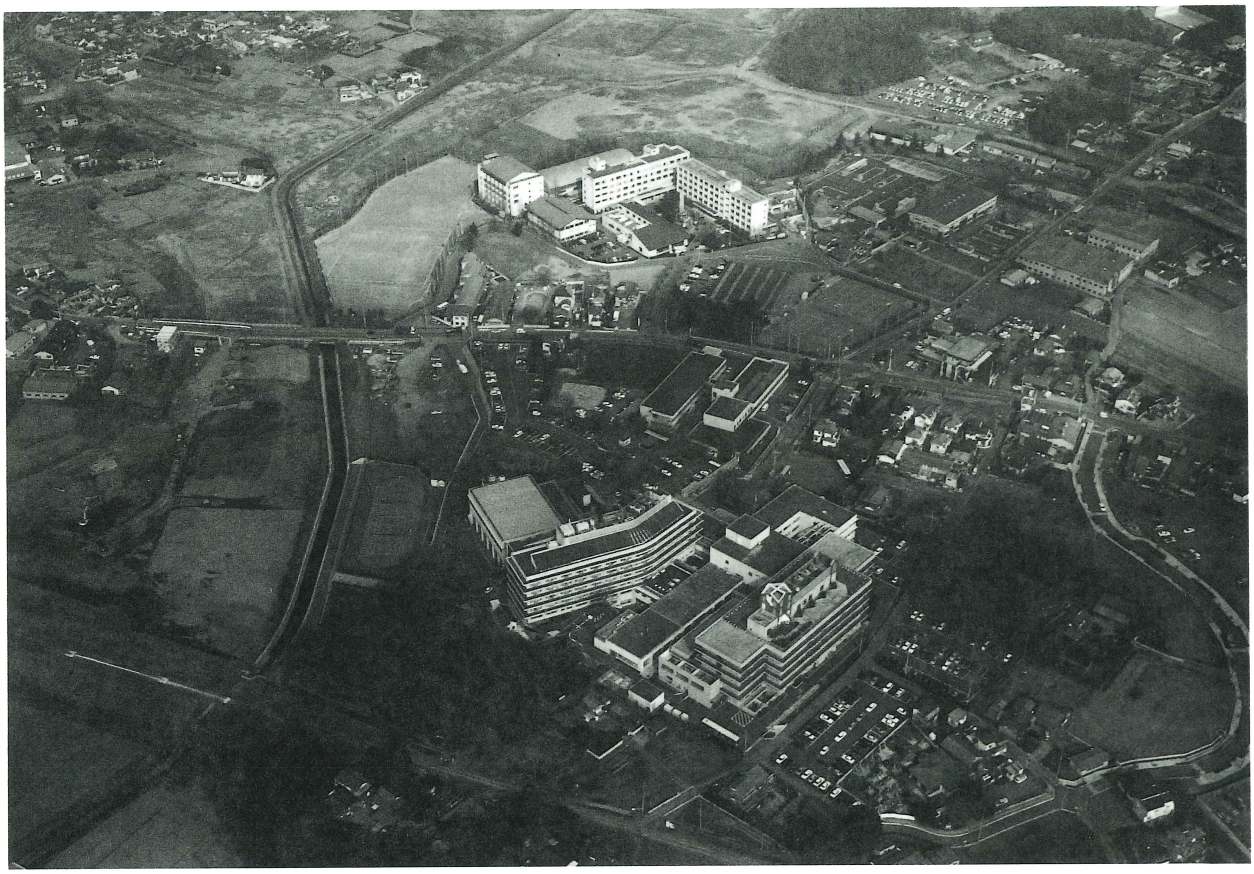
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集

下津谷達男他　1962『野田市三ツ堀遺跡』

庄和町尾ヶ崎遺跡調査会　1984『尾ヶ崎遺跡　—縄文・古墳時代集落跡の調査—』

写 真 図 版



稲荷台遺跡　調査区全景

稲荷台遺跡　調査区全景

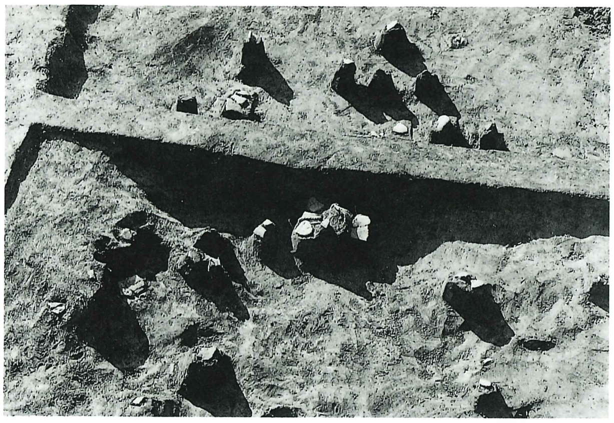
第Ｉ・２号竪穴状遺構

第５号土壙遺物出土状況

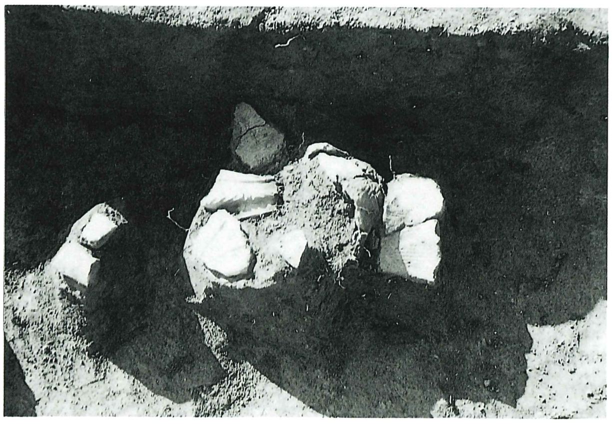
第８・10・11・12・13・14号土壙

第23号土壙

第Ｉ号炉穴群



第Ｉ号炉穴群遺物出土状況

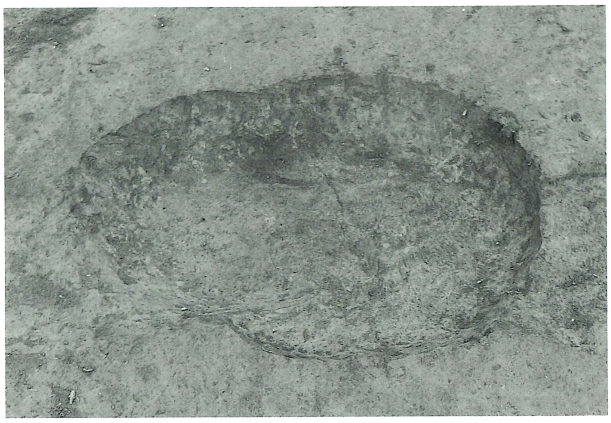


第Ｉ号炉穴群出土遺物

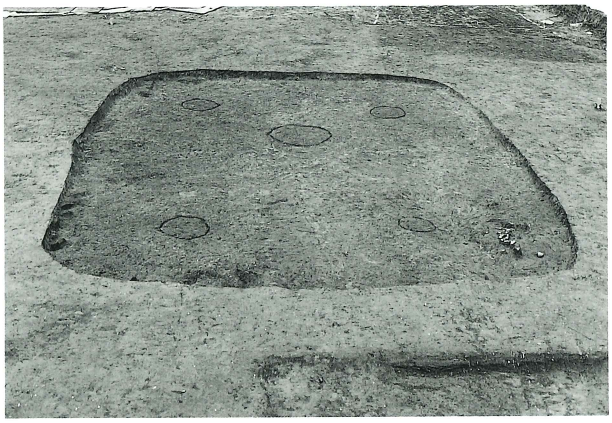
第２号炉穴群

第 3 号炉穴群

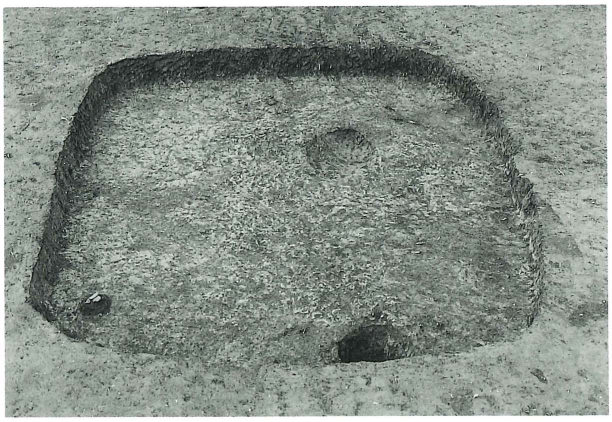
第 4 号炉穴群


第 6 号炉穴

ピット群


第60号住居跡

第60号住居跡遺物出土状況


第61号住居跡

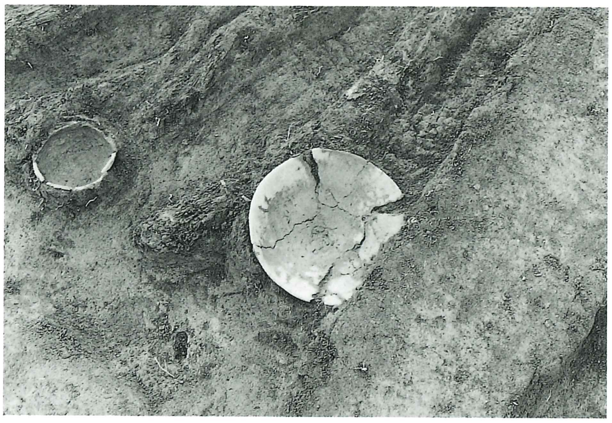
第61号住居跡出土遺物

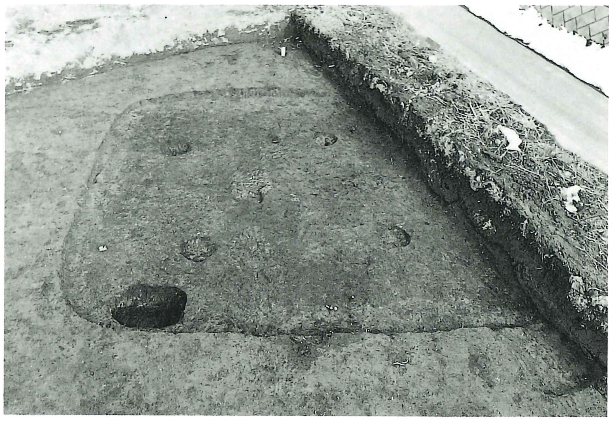
第62号住居跡

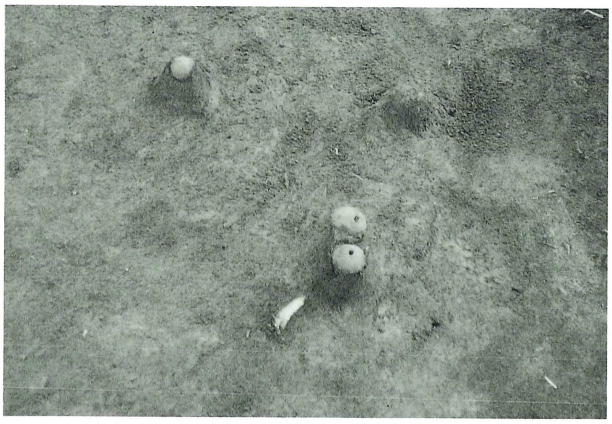
第62号住居跡遺物出土状況

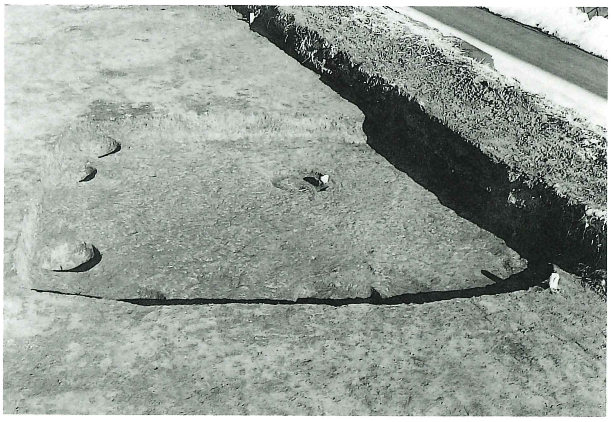
第62号住居跡出土遺物

第62号住居跡出土遺物

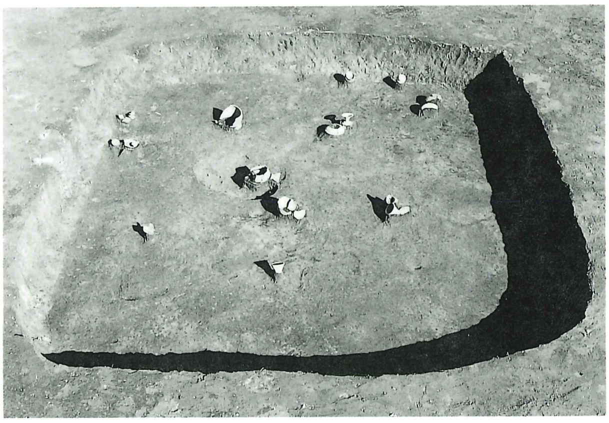

第62号住居跡出土遺物


第63号住居跡


第63号住居跡出土遺物

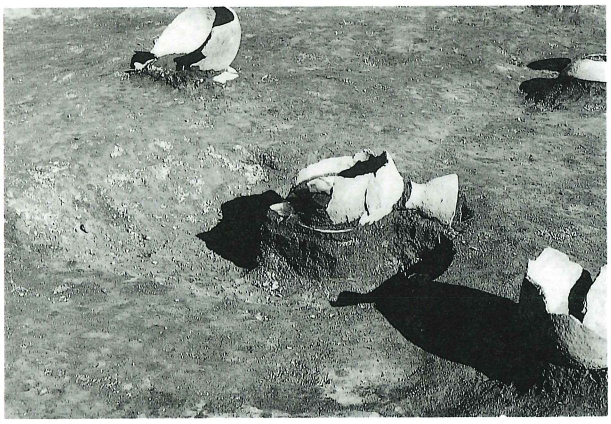

第64号住居跡

第65号住居跡



第65号住居跡遺物出土状況

第65号住居跡出土遺物

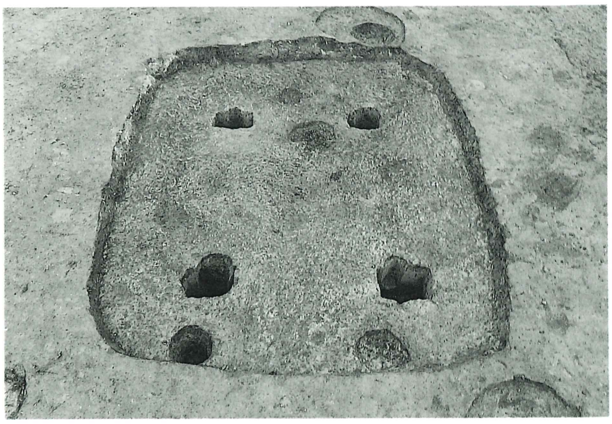


第65号住居跡出土遺物

第65号住居跡出土遺物

第66号住居跡

第66号住居跡遺物出土状況

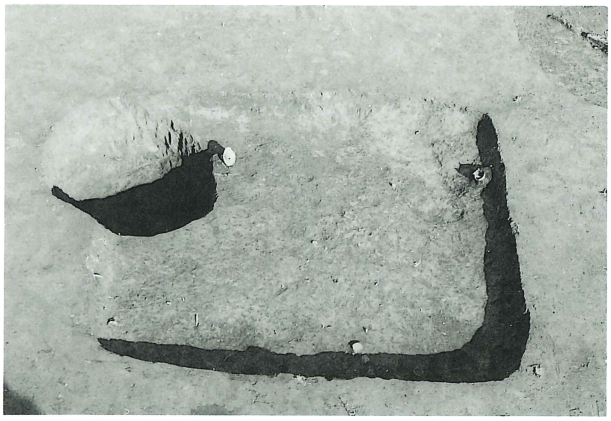


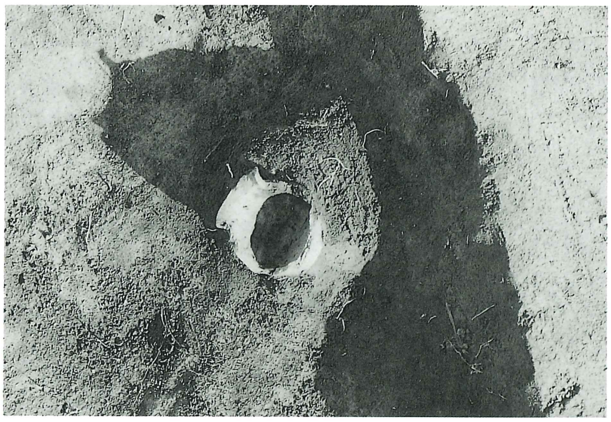
第67号住居跡

第67号住居跡遺物出土状況

第67号住居跡炭化材出土状況

第67号住居跡柱穴断面

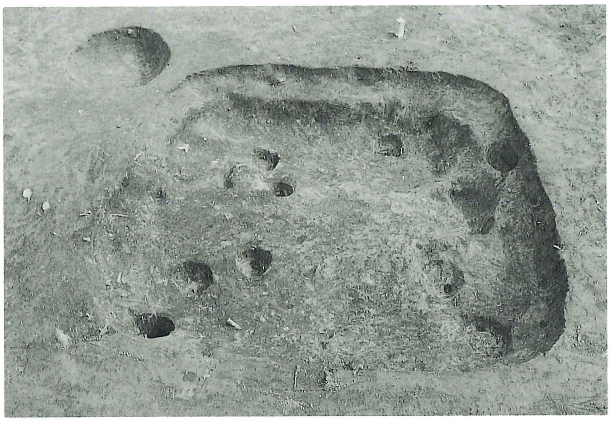

第68号住居跡


第68号住居跡出土遺物

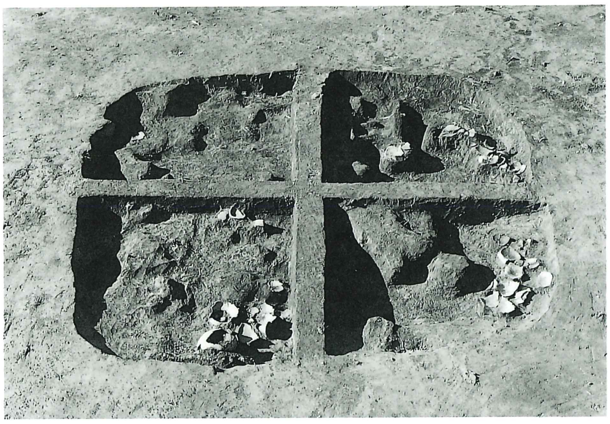
第69号住居跡

第70号住居跡

第71号住居跡



第72号住居跡

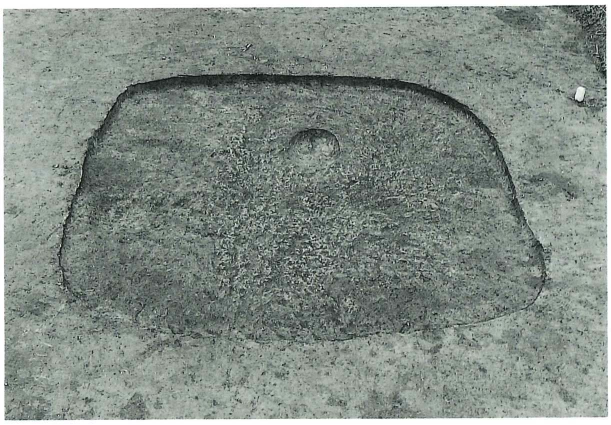


第72号住居跡遺物出土状況

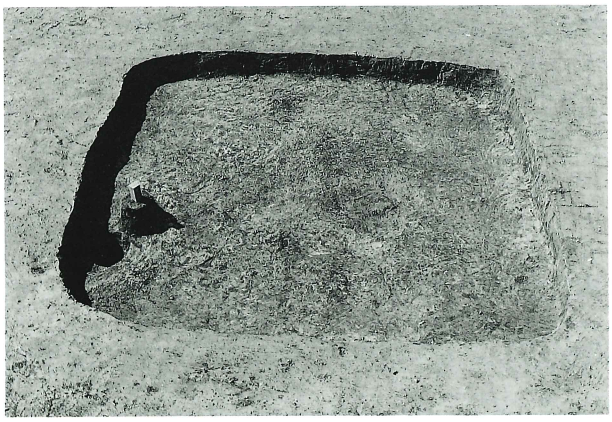
第72号住居跡出土遺物

第72号住居跡出土遺物

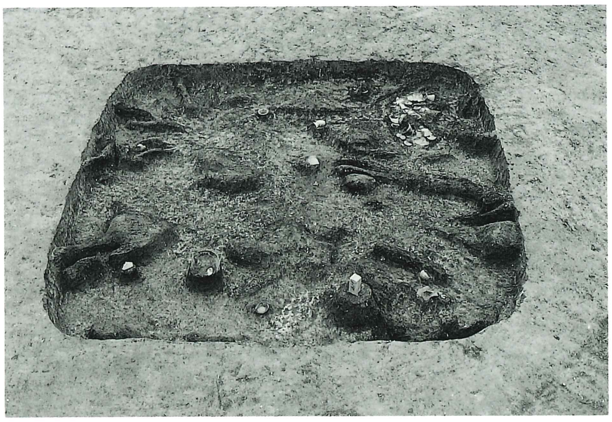
第73号住居跡



第74号住居跡



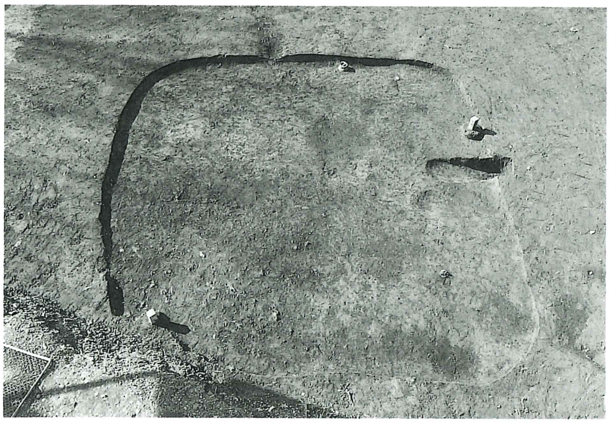
第75号住居跡



第75号住居跡遺物出土状況

第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡出土遺物


第76号住居跡

第77号住居跡

第 I 号溝跡

第 2 号溝跡

第 3 号溝跡

第 4 号溝跡

第Ｉ号竪穴状遺構出土遺物 表

第Ｉ号竪穴状遺構出土遺物 裏

第 2 号竪穴状遺構出土遺物 表

第 2 号竪穴状遺構出土遺物 裏

第 4 号土壙出土遺物 表

第 4 号土壙出土遺物 裏

第 5 号土壙出土遺物 表

第 5 号土壙出土遺物 裏

第12・13号土壙出土遺物 表

第12・13号土壙出土遺物 裏

第1号土壙出土遺物

第23号土壙出土遺物

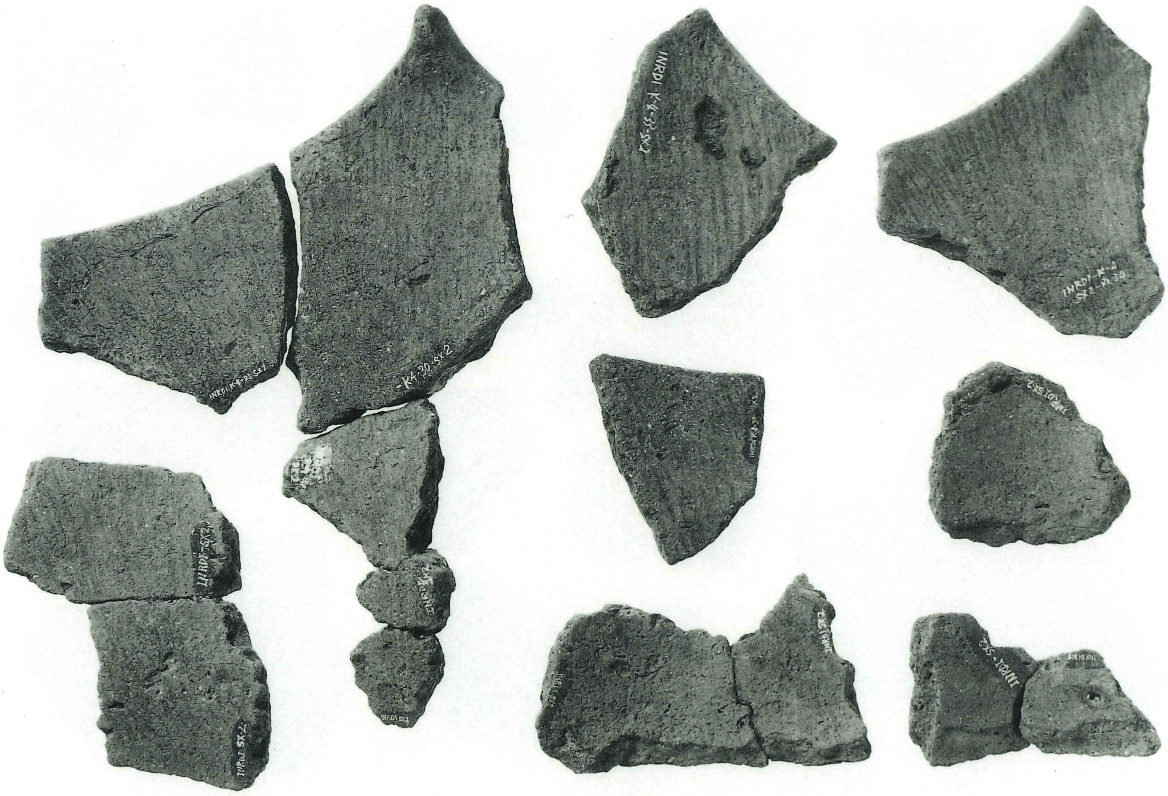
第１号炉穴群出土遺物（1/2）表

第１号炉穴群出土遺物（1/2）裏

第 I 号炉穴群出土遺物（2/2）表

第 I 号炉穴群出土遺物（2/2）裏

第 2 号炉穴群出土遺物（1/2）表



第 2 号炉穴群出土遺物（1/2）裏

第 2 号炉穴群出土遺物（2/2）表

第 2 号炉穴群出土遺物（2/2）裏

第３号炉穴群出土遺物（1/2）表

第３号炉穴群出土遺物（1/2）裏

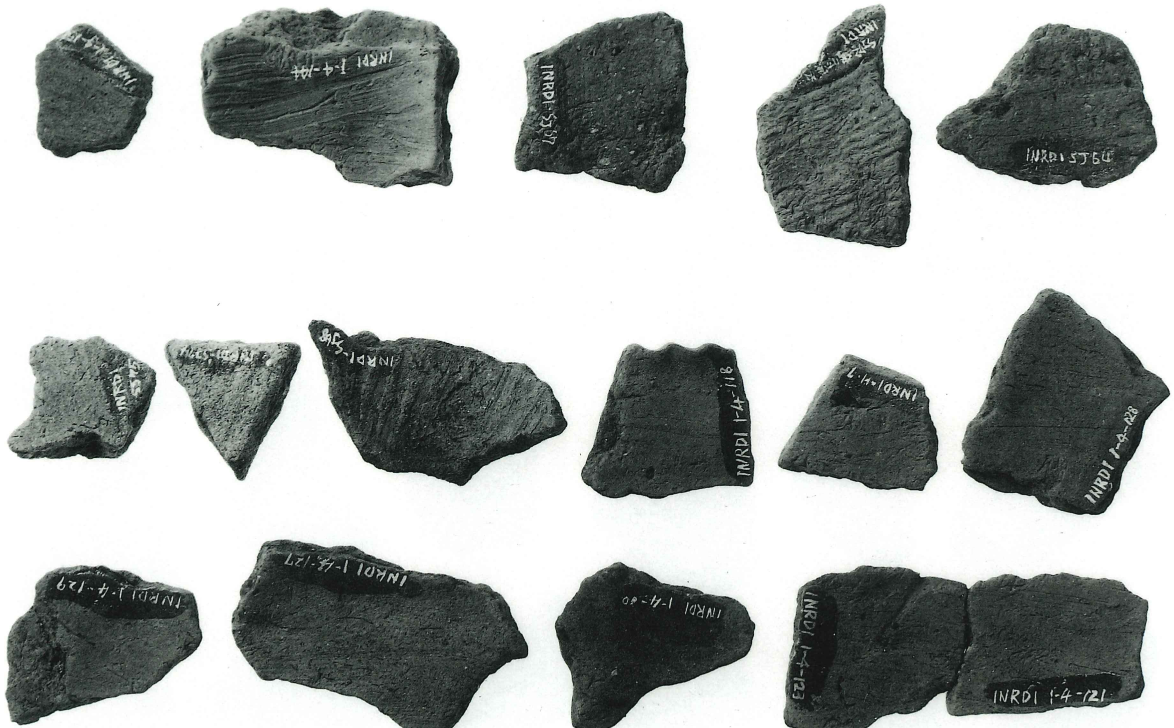
第 3 号炉穴群出土遺物（2/2）表

第 3 号炉穴群出土遺物（2/2）裏

遺構外出土遺物（1/9）表

遺構外出土遺物（1/9）裏

遺構外出土遺物（2/9）表



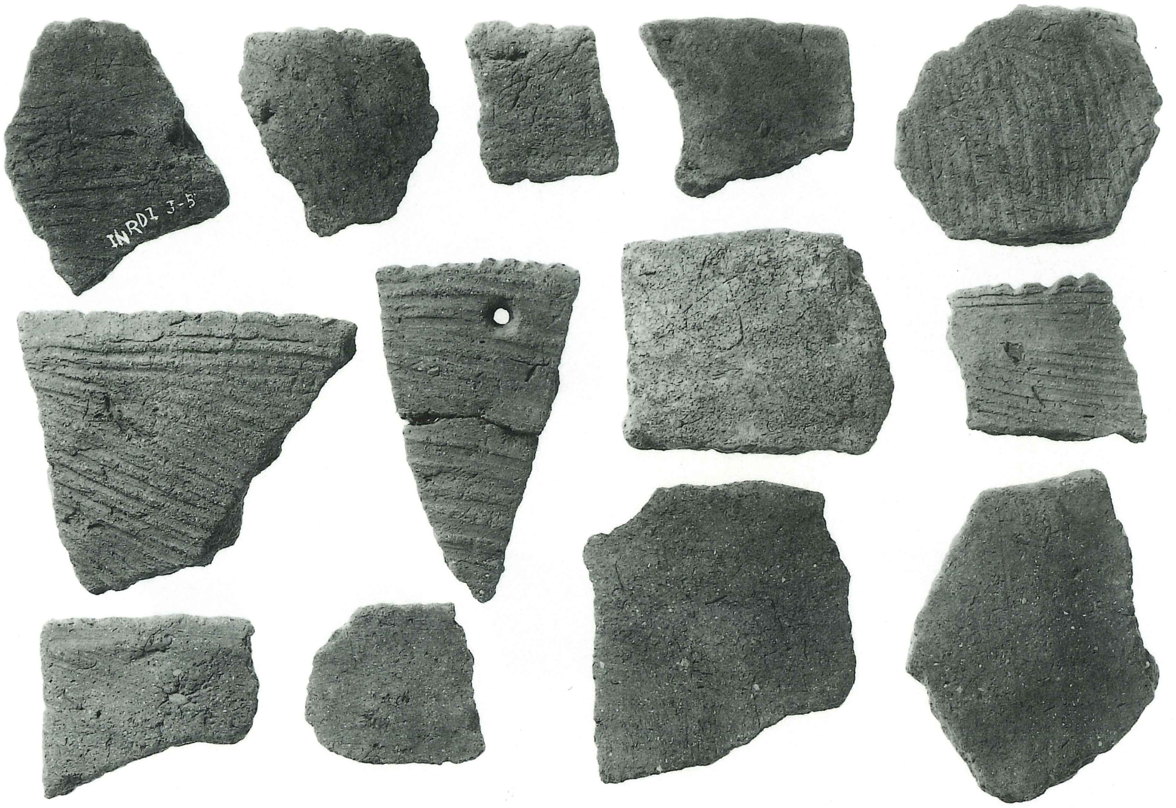
遺構外出土遺物（2/9）裏

遺構外出土遺物（3/9）表

遺構外出土遺物（3/9）裏

遺構外出土遺物（4/9）表

遺構外出土遺物（4/9）裏



遺構外出土遺物（5/9）表

遺構外出土遺物（5/9）裏

遺構外出土遺物（6/9）

遺構外出土遺物（7/9）

遺構外出土遺物（8/9）

遺構外出土遺物（9/9）

第62号住居跡－ 9

第65号住居跡－13

第65号住居跡－14

第65号住居跡－15

第65号住居跡－16

第67号住居跡－ 7

第72号住居跡－ 7

第72号住居跡－ 8

第72号住居跡－10

第75号住居跡－ 5

第75号住居跡－10

第75号住居跡－11

第60号住居跡－ 3

第61号住居跡－ 3

第62号住居跡－ 1

第62号住居跡－ 2

第62号住居跡－ 5

第62号住居跡－ 6

第65号住居跡－ 6

第65号住居跡－ 7

第65号住居跡－ 8

第65号住居跡－ 9

第65号住居跡－11

第65号住居跡－12

第67号住居跡－２

第68号住居跡－１

第68号住居跡－２

第72号住居跡－２

第72号住居跡－４

第72号住居跡－５

第72号住居跡－6

第72号住居跡－9

第74号住居跡－5

第75号住居跡－4

第75号住居跡－7

第77号住居跡－5

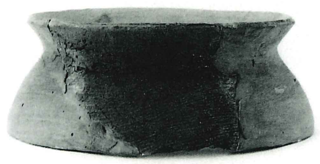
第60号住居跡－ 4

第61号住居跡－ 1

第62号住居跡－ 3

第62号住居跡－ 8

第63号住居跡－ 1


第64号住居跡－ 3

第64号住居跡－ 4

第64号住居跡－ 5

第64号住居跡－ 6

第65号住居跡－ 1

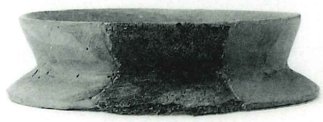
第65号住居跡－ 2

第65号住居跡－ 3

第65号住居跡－17

第65号住居跡－18

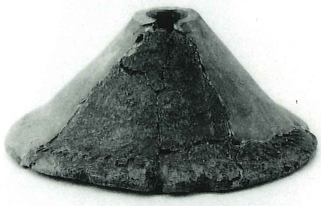
第65号住居跡－19



第70号住居跡－1

第72号住居跡－1

第74号住居跡－1



第74号住居跡－7

第75号住居跡－2

第75号住居跡－3

第75号住居跡－6

第76号住居跡－1

第77号住居跡－3

報告書抄録

ふりがな	いなりだい
書名	稲荷台
副書名	埼玉県総合リハビリテーションセンター増設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第239集
編著者名	大野道則　石坂俊郎　金子直行　上野真由美
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1　　TEL　0493-39-3955
発行年月日	西暦2000（平成12）年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いなりだいいせき 稲荷台遺跡	さいたまけんあげおし 埼玉県上尾市 にしかいづか 大字西貝塚 148-1	11219	066	35°56′05″	139°33′23″	19980101 ～ 19980331	2800	病院建設等

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷台遺跡		旧石器時代 縄文時代 古墳時代 中世～近世	 竪穴状遺構　2 土壙　18 炉穴　9群 住居跡　20 溝跡　8	石器 縄文土器、石器 土師器、土玉	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第239集

上尾市

稲　荷　台

埼玉県総合リハビリテーションセンター増設工事用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年３月16日　印刷
平成12年３月25日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台４丁目４番地１
電話　0493(39)3955

印刷／望月印刷株式会社